成田市久米砦遺跡

― 一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書4 ―

令和5年2月

千葉県教育委員会

成田市久米砦遺跡

— 一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書4 —

(3) SI-002 出土遺物

(3) SI-012 出土遺物

(3) SI-019 出土遺物

(3) SI-019 出土 石製紡錘車

序　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第42集として、一般国道464号北千葉道路事業に伴って実施した成田市久米砦遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査では、縄文時代の陥穴や、古墳時代の竪穴住居跡などからなる集落跡などが検出されました。すでに調査報告第31集、35集として報告しました成田市関戸谷津之台遺跡、同市関戸関ノ台遺跡などの調査成果を含め、当地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和５年２月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長　金井　一喜

凡　例

1　本書は、千葉県県土整備部北千葉道路建設事務所による一般国道464号北千葉道路事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

　久米砦遺跡　成田市久米宮作１９４ほか　（遺跡コード211-100）

3　千葉県県土整備部の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が平成29・30年度に発掘調査を実施し、令和元年度～４年度に整理作業を実施した。

4　調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第１章第１節に記載した。

5　本書の執筆は、第２章第２節・第３章２節の縄文時代の遺物についてを文化財主事　小澤 政彦、第２章第４節の出土人骨についての所見を文化財主事　村松 裕南、その他の部分を文化財主事　武田 芳雅が担当し、編集は武田・主任上席文化財主事　蜂屋 孝之が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部道路整備課、同北千葉道路建設事務所、成田市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位は全て座標北である。

8　土器観察表及び本文中に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2007年版』に基づいている。

9　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

　第１図　成田市発行　1/2,500　成田市都市計画図を編集

　第３図　参謀本部陸軍測量局作成　1/25,000　迅速測図「成田」を編集

　第４図　国土地理院発行　1/25,000　地形図「成田」を編集

10　図版１の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和45年撮影のものを使用した。

11　各表中の（　）は推定数値、＜　＞は現存数値を表わす。

12　遺構や遺物の図面に使用したスクリーントーンの用例は次のとおりである。繊維を含む縄文土器については断面に黒丸を付している。挿図中の「K」は撹乱の略である。

本文目次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１　調査に至る経緯と経過…… 1
　　２　調査の方法と概要…… 2
　第２節　遺跡の位置と環境…… 4
　　１　遺跡の位置と地形…… 4
　　２　周辺の遺跡…… 6
第２章　久米砦遺跡（１・２）の成果…… 16
　第１節　調査区の概要…… 16
　第２節　縄文時代の遺物…… 18
　　１　遺構外出土の遺物…… 18
　第３節　古墳時代・古代の遺構と遺物…… 22
　　１　竪穴住居跡…… 22
　　２　土坑…… 58
　　３　遺構外出土の遺物…… 59
　第４節　中世以降の遺構と遺物…… 66
　　１　遺構…… 66
　　２　遺物…… 72
第３章　久米砦遺跡（３）の成果…… 73
　第１節　調査区の概要…… 73
　第２節　縄文時代の遺構と遺物…… 75
　　１　遺構…… 75
　　２　遺物…… 76
　第３節　古墳時代の遺構と遺物…… 79
　　１　竪穴住居跡…… 79
　　２　土坑…… 118
　　３　遺構外出土の遺物…… 121
　第４節　中・近世の遺構と遺物…… 129
　　１　溝跡…… 129
　　２　台地整形区画…… 131
第４章　総括…… 133
　第１節　縄文時代…… 133
　第２節　古墳時代…… 133
　　１　概要…… 133
　　２　出土遺物と集落の時期区分…… 134
　　３　集落の変遷についての概観…… 141
　第３節　中・近世…… 141

挿図目次

第１図　上層確認調査及び下層確認調査状況……3
第２図　本調査区……5
第３図　遺跡の位置(迅速測図)……7
第４図　周辺の遺跡……9
第５図　(1・2)調査区内遺構分布……17
第６図　(1・2)遺構外出土の遺物(１)……19
第７図　(1・2)遺構外出土の遺物(２)……20
第８図　(1・2)SI-001(１)……23
第９図　(1・2)SI-001(２)……24
第10図　(1・2)SI-002(１)……25
第11図　(1・2)SI-002(２)……26
第12図　(1・2)SI-003(１)……27
第13図　(1・2)SI-003(２)……28
第14図　(1・2)SI-004(１)……29
第15図　(1・2)SI-004(２)……30
第16図　(1・2)SI-005……31
第17図　(1・2)SI-006(１)……32
第18図　(1・2)SI-006(２)……33
第19図　(1・2)SI-007……34
第20図　(1・2)SI-008・009(１)……35
第21図　(1・2)SI-008・009(２)……36
第22図　(1・2)SI-008・009(３)……37
第23図　(1・2)SI-010(１)……37
第24図　(1・2)SI-010(２)……38
第25図　(1・2)SI-011(１)……39
第26図　(1・2)SI-011(２)……40
第27図　(1・2)SI-012……41
第28図　(1・2)SI-013(１)……42
第29図　(1・2)SI-013(２)……43
第30図　(1・2)SI-014(１)……44
第31図　(1・2)SI-014(２)……45
第32図　(1・2)SI-015(１)……45
第33図　(1・2)SI-015(２)……46
第34図　(1・2)SI-015(３)……47
第35図　(1・2)SI-016(１)……48
第36図　(1・2)SI-016(２)……49
第37図　(1・2)SI-017(１)……49
第38図　(1・2)SI-017(２)……50
第39図　(1・2)SI-018……51
第40図　(1・2)SI-019……52
第41図　(1・2)SI-020(１)……53
第42図　(1・2)SI-020(２)……54
第43図　(1・2)SI-021(１)……54
第44図　(1・2)SI-021(２)……55
第45図　(1・2)SI-022(１)……55
第46図　(1・2)SI-022(２)……56
第47図　(1・2)SI-023(１)……56
第48図　(1・2)SI-023(２)……57
第49図　(1・2)SI-024(１)……57
第50図　(1・2)SI-024(２)……58
第51図　(1・2)SK-003……58
第52図　(1・2)SK-004……59
第53図　(1・2)遺構外出土の遺物……59
第54図　(1・2)SK-001(１)……69
第55図　(1・2)SK-001(２)……70
第56図　(1・2)SK-002……71
第57図　(1・2)遺構外出土の遺物……72
第58図　(3)調査区内遺構分布……74
第59図　(3)SK-004……75
第60図　(3)SK-006……76
第61図　(3)SK-007……76
第62図　(3)遺構外出土の遺物……77
第63図　(3)SI-001(１)……79
第64図　(3)SI-001(２)……80
第65図　(3)SI-002(１)……81
第66図　(3)SI-002(２)……82
第67図　(3)SI-002(３)……83
第68図　(3)SI-002(４)……84
第69図　(3)SI-002(５)……85
第70図　(3)SI-003(１)……86
第71図　(3)SI-003(２)……87
第72図　(3)SI-004(１)……88
第73図　(3)SI-004(２)……89

第74図　(3) SI-005(1)…… 89
第75図　(3) SI-005(2)…… 90
第76図　(3) SI-006…… 91
第77図　(3) SI-007…… 92
第78図　(3) SI-008…… 93
第79図　(3) SI-009…… 94
第80図　(3) SI-010…… 95
第81図　(3) SI-011(1)…… 96
第82図　(3) SI-011(2)…… 97
第83図　(3) SI-012(1)…… 98
第84図　(3) SI-012(2)…… 99
第85図　(3) SI-012(3)…… 100
第86図　(3) SI-013…… 101
第87図　(3) SI-014(1)…… 103
第88図　(3) SI-014(2)…… 104
第89図　(3) SI-014(3)…… 105
第90図　(3) SI-015…… 106
第91図　(3) SI-016(1)…… 107
第92図　(3) SI-016(2)…… 108
第93図　(3) SI-017(1)…… 108
第94図　(3) SI-017(2)…… 109
第95図　(3) SI-018(1)…… 109
第96図　(3) SI-018(2)…… 110
第97図　(3) SI-019(1)…… 111
第98図　(3) SI-019(2)…… 112
第99図　(3) SI-019(3)…… 113
第100図　(3) SI-019(4)…… 114
第101図　(3) SI-020…… 115
第102図　(3) SI-021(1)…… 116
第103図　(3) SI-021(2)…… 117
第104図　(3) SI-022…… 117
第105図　(3) SI-023…… 118
第106図　(3) SK-002…… 119
第107図　(3) SK-003…… 120
第108図　(3) SK-005…… 120
第109図　(3) 遺構外出土の遺物…… 121
第110図　(3) SD-001(1)…… 129
第111図　(3) SD-001(2)…… 130
第112図　(3) SD-002…… 130
第113図　(3) SD-003…… 131
第114図　(3) SX-001…… 132
第115図　竪穴住居跡の重複関係…… 135
第116図　土師器集成図(1)…… 137
第117図　土師器集成図(2)…… 138
第118図　土師器集成図(3)…… 139
第119図　須恵器集成図…… 140
第120図　遺構配置図(Ⅰ期)…… 142
第121図　遺構配置図(Ⅱ期)…… 142
第122図　遺構配置図(Ⅲ期)…… 143

表目次

第1表　周辺の遺跡概要一覧表…… 13
第2表　竪穴住居跡一覧表…… 16
第3表　土坑一覧表…… 17
第4表　縄文時代土器観察表…… 21
第5表　縄文時代土器片円盤表…… 21
第6表　縄文時代石器属性表…… 21
第7表　古墳時代土器観察表…… 60
第8表　古墳時代土製品観察表…… 66
第9表　古墳時代石製品観察表…… 66
第10表　古墳時代鉄製品観察表…… 66
第11表　歯観察表…… 67
第12表　人骨残存表…… 68
第13表　人骨歯冠計測値…… 68
第14表　SK-001出土土器観察表…… 71
第15表　銭貨観察表…… 71
第16表　遺構外出土土器観察表…… 72
第17表　竪穴住居跡一覧表…… 73
第18表　土坑・竪穴状遺構一覧表…… 75
第19表　溝一覧表…… 75
第20表　縄文時代土器観察表…… 78

第21表　古墳時代土器観察表…… 122
第22表　古墳時代土製品観察表…… 128
第23表　古墳時代石製品観察表…… 128
第24表　遺構外出土土器観察表…… 132
第25表　中・近世銭貨観察表…… 132

図版目次

巻頭図版１　(3)SI−002・SI−012出土遺物
巻頭図版２　(3)SI−019出土遺物・石製紡錘車
図版１　久米砦遺跡航空写真
図版２　遺構(1・2)SI−001
図版３　遺構(1・2)SI−002
図版４　遺構(1・2)SI−003
図版５　遺構(1・2)SI−004・SI−005・SI−006～SI−008・SI−010
図版６　遺構(1・2)SI−006～SI−009
図版７　遺構(1・2)SI−009・SI−011
図版８　遺構(1・2)SI−011・SI−012
図版９　遺構(1・2)SI−012～SI−014
図版10　遺構(1・2)SI−014～SI−016
図版11　遺構(1・2)SI−016～SI−019・SI−021・SI−022・SI−022B
図版12　遺構(1・2)SI−023・SI−024・SK−001
図版13　遺構(1・2)SK−001～SK−003・4F−86付近・(3)SK−004・SK−006
図版14　遺構(3)SK−007・SI−001
図版15　遺構(3)SI−001・SI−002
図版16　遺構(3)SI−002・SI−003
図版17　遺構(3)SI−003・SI−004
図版18　遺構(3)SI−004・SI−005
図版19　遺構(3)SI−006～SI−008・SK−002
図版20　遺構(3)SI−008～SI−012
図版21　遺構(3)SI−012・SI−013
図版22　遺構(3)SI−014～SI−017
図版23　遺構(3)SI−018・SI−019
図版24　遺構(3)SI−019～SI−023・SK−001・SK−003・SK−005
図版25　遺構(3)SD−001・SD−002・SX−001
図版26　遺物(1・2)遺構外出土(1)
図版27　遺物(1・2)遺構外出土(2)・(3)遺構外出土
図版28　遺物(1・2)SI−001・SI−002
図版29　遺物(1・2)SI−002・SI−003
図版30　遺物(1・2)SI−003～SI−006
図版31　遺物(1・2)SI−006～SI−008・009
図版32　遺物(1・2)SI−008・SI−009～SI−013
図版33　遺物(1・2)SI−013～SI−015
図版34　遺物(1・2)SI−016～SI−019
図版35　遺物(1・2)SI−019～SI−024
図版36　遺物(1・2)SI−024・古墳遺構外・SI−001・SI−003～SI−008・009
図版37　遺物(1・2)SI−010～SI−018
図版38　遺物(1・2)SI−019・SI−020・SI−022～SI−024・SK−001・中・近世遺構外
図版39　遺物(3)SI−001・SI−002
図版40　遺物(3)SI−002
図版41　遺物(3)SI−002～SI−004
図版42　遺物(3)SI−005～SI−011
図版43　遺物(3)SI−011・SI−012
図版44　遺物(3)SI−012～SI−014
図版45　遺物(3)SI−014
図版46　遺物(3)SI−014
図版47　遺物(3)SI−014・SI−016～SI−019
図版48　遺物(3)SI−019
図版49　遺物(3)SI−019～SI−022・SK−002
図版50　遺物(3)SK−002・SK−003・SD−001・古墳遺構外・SI−002・SI−003・SI−006・SI−012・SI−014・SI−017・SI−018
図版51　遺物(3)SI−019・SI−021・SK−002・SK−003・SD−001・SX−001・中・近世参考

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯と経過（第１・２図）

一般国道464号北千葉道路は、東京外かく環状道路から千葉ニュータウンを経て成田国際空港を結ぶ全長約43㎞の幹線道路として事業が進められている。このうち印西市から成田市までの区間（延長約13.5㎞）については、成田新高速鉄道の新線建設区間と並行しており、一体的に整備を進めていくことが計画された。本区間の整備により首都圏北部や県西地域と成田国際空港間のアクセスの強化が図れるとともに、沿線地域の活性化、物流の効率化、救急医療・防災機能の強化などが期待されている[註1]。

本区間の整備事業の実施に先立って、平成16年９月に事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が、千葉県県土整備部道路計画課長から千葉県教育委員会に提出された。千葉県教育委員会では現地踏査等の結果を踏まえ、平成16年11月に事業地内には埋蔵文化財の包蔵地６か所が所在する旨の回答を行った。この回答に基づき、埋蔵文化財の取扱いについて千葉県県土整備部、千葉県教育委員会、成田市教育委員会の関係諸機関による協議を行った結果、事業の性格上、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。このうち、千葉県が施工する国道408号（成田市押畑）から国道295号（成田市大山）までの区間に所在する関戸谷津之台遺跡・関戸関ノ台遺跡・久米砦遺跡の３遺跡については、県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

今回報告する久米砦遺跡は平成29・30年度に発掘調査を実施し、令和元年度～４年度に整理作業を実施した。各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は次のとおりである。

○平成29年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課
文化財課長　萩原 恭一　　副課長　島立 桂　　発掘調査班長　山田 貴久
担当者　上席文化財主事　土屋 潤一郎　文化財主事　館 祐樹
実施期間　平成29年10月１日～平成30年２月27日
内容　調査対象面積39,722㎡　確認調査　上層1,024㎡ 下層０㎡　本調査　上層740㎡ 下層０㎡

○平成30年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課
文化財課長　古泉 弘志　　副課長　加納 実　　発掘調査班長　山田 貴久
担当者　上席文化財主事　土屋 潤一郎
実施期間　平成30年９月３日～平成30年10月17日　久米砦遺跡（２）
内容　調査対象面積1,800㎡　確認調査　上層０㎡ 下層12㎡　本調査　上層1,060㎡ 下層０㎡
実施期間　平成30年10月18日～平成31年２月26日　久米砦遺跡（３）
内容　調査対象面積5,300㎡　確認調査　上層０㎡ 下層104㎡　本調査　上層5,300㎡ 下層０㎡

○令和元年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長　大森 けい子　　副課長　高梨 俊夫　　発掘調査班長　大内 千年

担当者　主任上席文化財主事　金丸 誠

実施期間　令和元年７月１日～８月31日、令和２年１月７日～２月28日

内容　水洗・注記～記録整理・分類・接合の一部

○令和２年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長　田中 文昭　　副課長　高梨 俊夫　　発掘調査班長　大内 千年

担当者　主任上席文化財主事　金丸 誠

実施期間　令和２年６月１日～10月30日、令和３年２月１日～２月26日

内容　記録整理・分類・接合の一部～実測トレースの一部

○令和３年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長　田中 文昭　　副課長　高梨 俊夫　　発掘調査班長　吉野 健一

担当者　主任上席文化財主事　落合 章雄　　文化財主事　武田 芳雅(千葉市教育委員会)

小澤 政彦　　村松 裕南

実施期間　令和３年９月１日～12月24日、令和４年１月５日～１月31日

内容　実測トレースの一部～原稿執筆の一部

○令和４年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長　金井 一喜　　副課長　四柳 隆　　発掘調査班長　黒沢 崇

担当者　主任上席文化財主事　蜂屋 孝之

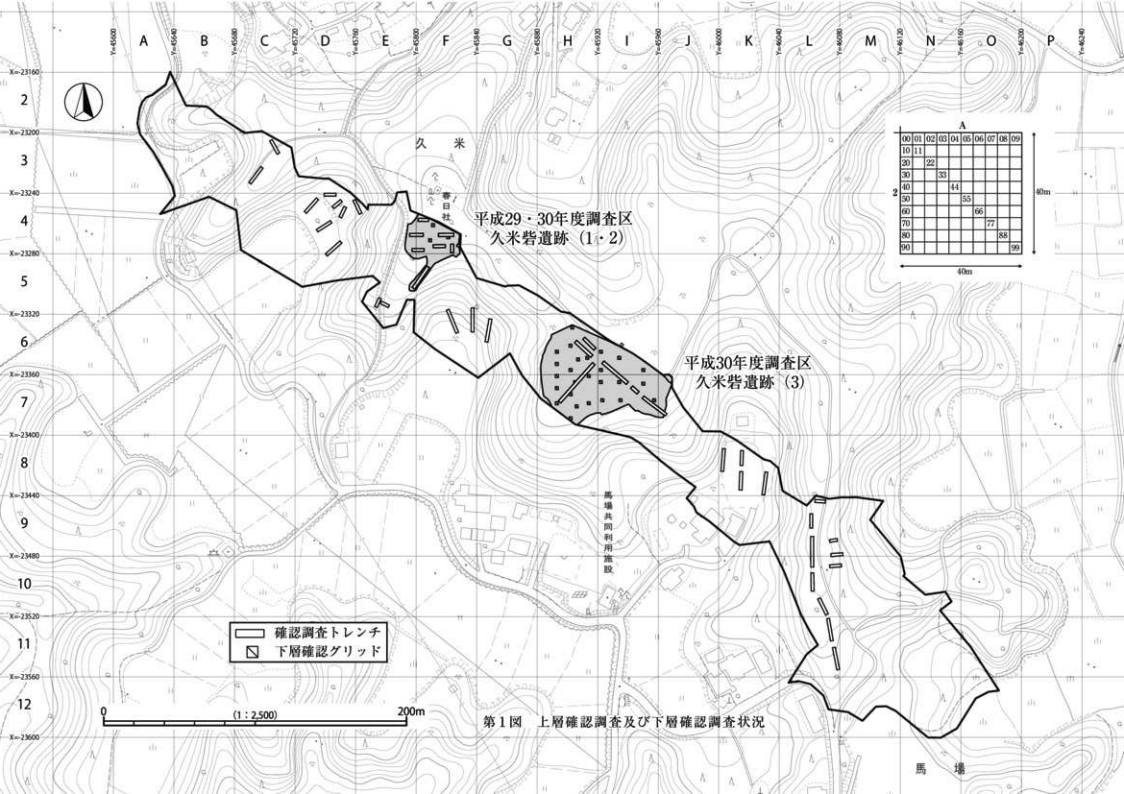
実施期間　令和４年６月１日～令和４年８月31日

内容　原稿執筆の一部・編集～報告書刊行

２　調査の方法と概要（第１・２図）

発掘調査に当たっては、今回の発掘調査対象地全体を網羅するように日本測地系（第Ⅸ座標系）の公共座標に基づくグリッド設定を行った。グリッドの基準はX=-23,120、Y=44,760を起点として40m×40mの方眼網を設定し、大グリッドとした。名称は北から南へ１・２、西から東へA・Bとした。大グリッドは更に４m×４mの小グリッドに100分割し、北西隅を00、南東隅を99とした。大グリッドと小グリッドを組み合わせて、1A-01や2B-00などと呼称した。

上層の確認調査は事業範囲に対して２m幅のトレンチ41本を設定して実施した（第１図）。この結果、調査範囲西側の枝尾根上で中世の骨蔵器を収めた土坑１基が、東側の２つの枝尾根上からは古墳時代から古



第1図　上層確認調査及び下層確認調査状況

代の竪穴住居跡20軒以上が検出された。遺構が確認された主に２つの枝尾根上を本調査範囲とし、遺構精査・記録作成・写真撮影・遺物取り上げなどの諸作業を実施した。下層の確認調査は、上層の確認調査において立川ローム層が確認されていた尾根上を中心に、２ｍ×２ｍの確認グリッドを26か所設定して調査を実施した。いずれのグリッドからも遺構・遺物は検出されなかったため、確認調査をもって終了とした。記録作成のうち全体図と遺構平面図の実測図面は平板測量で行った。写真撮影はフィルムカメラ（120㎜モノクロ、35㎜カラーリバーサル）及びデジタルカメラ（RAW＋JPEGデータ）により実施した。上層調査にあたり、小支谷を挟んだ二つの枝尾根上の調査区は、遺跡名に調査次数を付し、平成29年度および30年度９月～10月に調査を実施した西側の調査区を「久米砦遺跡（１）・（２）」（以後本報告中では（1・2）と表記する）、平成30年度に調査を実施した東側の調査区を「久米砦遺跡（３）」とした。遺構の記載については、遺構種類ごとに記号を付け竪穴住居跡はSI、掘立柱建物跡はSB、土坑はSK、溝はSD、その他はSXとし、先頭に調査区名を付し遺構種別記号ごとの３桁の通し番号を合わせて、「(1・2) SI-001」の形で遺構番号を表記するものとした。

整理作業は、出土遺物の水洗・注記作業を行った後、遺物の種別・器種分類を行ってから接合・復元作業を実施した後、実測・拓本作業を行った。出土遺物の写真撮影は、デジタルカメラで行った。発掘調査で作成した図面・写真などの記録整理を行った後、挿図・写真図版原図を作成し、それらをもとにデジタル編集によるトレースや写真補正などを行い、挿図・写真図版を作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、報告書刊行に至った。

第２節　遺跡の位置と環境

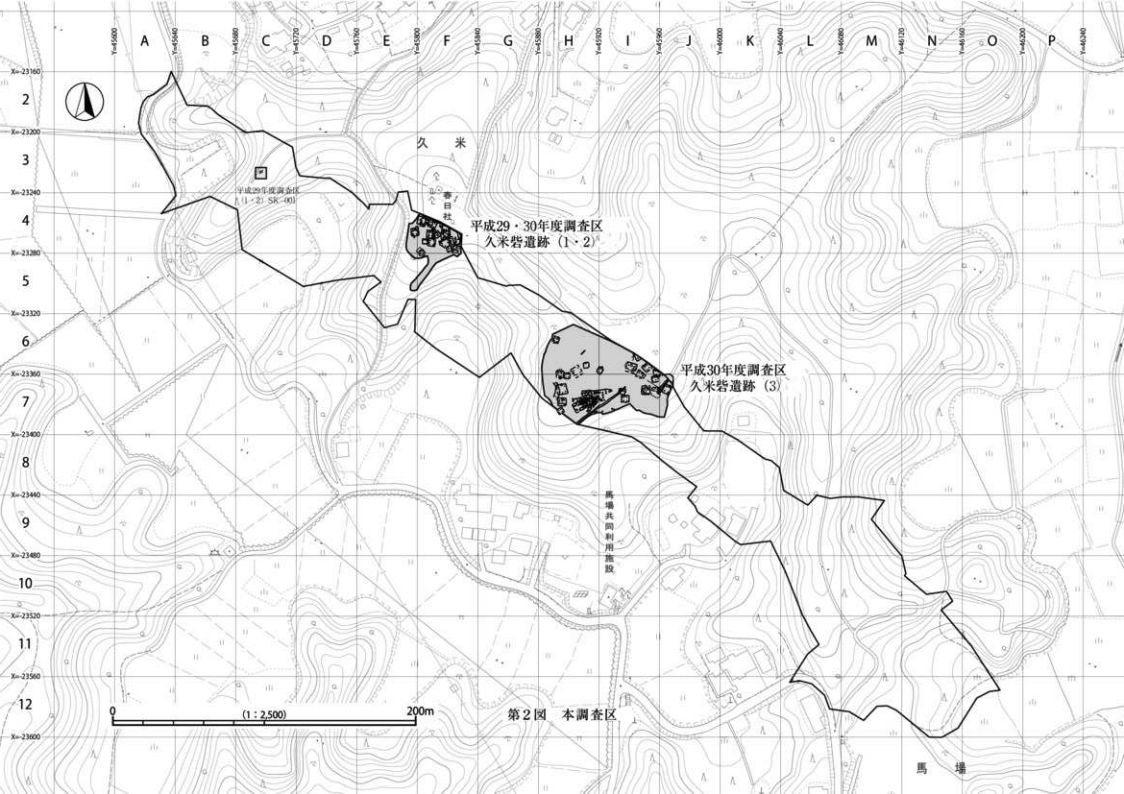
１　遺跡の位置と地形（第１～３図、図版１）

本遺跡が所在する成田市は、千葉県の北部に位置する中核都市である。2006（平成18）年に隣接する２町と合併し、かつての市域を拡大して現在に至っている。地理的には、市の北は利根川を挟んで茨城県と接し、周辺は香取市、芝山町、富里市、印旛郡酒々井町、印西市など３市２町と接している。

成田市域は、海成砂層の下総層群を基盤層とする房総半島の北部域にあって、古東京湾の浅海底が隆起した海岸平野の一部をなしている。下総層群の地層は、土地改変がしやすいこともあって、1970年代以降は、成田国際空港の建設や成田ニュータウンの宅地造成、内陸工業団地の造成、さらには印旛沼の干拓、両総用水の整備などによる土地改変が大規模かつ広域に行われてきた地域で、1960年代以降の地理的景観は大きな変化を遂げ、その改変は今後も進むものと考えられる。

遺跡が立地する台地の層準は、洪積世に堆積した下総層群の金剛地層などが下部層を構成し、木下層などの成田層群が上部層を構成している。また、さらにその上には関東ローム層と呼ばれる下末吉ローム層・武蔵野ローム層・立川ローム層などの火山灰層が堆積している。本遺跡が立地する台地の地形は、標高38mのほぼ独立した島状の地形を呈し、谷底との比高は30m以上となっており、傾斜８～15度の急傾斜地が多いことも上流域の特徴の一つと言える。台地北側には利根川に合流する根木名川の支流の一つである尾羽根川が流れ、東西はさらにその支流による開析で急峻な地形が形成されている。台地上面は、小支谷が深く入り込んで平坦面の少ない地形となっている。

当台地の北側を流れる尾羽根川の低地は、現在水田となっており、水田面の標高は約５ｍと低く、内陸の谷奥部としてはかなり低い標高である。このあたりの傾斜は３度未満の非常に平坦な低地の状況を呈し


久米
寺
日
社
平成29年度調査区
1（1・2）SK-001
平成29・30年度調査区
久米砦遺跡（1・2）
平成30年度調査区
久米砦遺跡（3）
馬場共同利用施設
0
(1：2,500)
200m
馬場

第２図　本調査区

ており、印旛沼低地とともに地形的特徴の一つと言えるだろう。約6,000年前の有楽町海進（縄文海進）のピークには、このあたりまで海水面が到達していたと考えられる。海進が海退に転じた後は泥炭の堆積が進み、現水田の土壌直下まで泥炭の厚い堆積となっている。徳川幕府による利根川の東遷事業までは、いわゆる「香取海」が、内海として広く水をたたえており、本遺跡周辺も古代・中世までその水域の影響下にあった可能性が高い。「成田市中世城郭址調査報告書」（成田市中世城郭址調査団　1983）では、本台地を「久米砦址」として記載しており、南側斜面などには腰郭や土塁などを類推させる地形が認められるものの、伝承・記録などはなく、今回の調査区域内でも砦跡の確たる裏付けとなる遺構・遺物の検出には至っていない。

2　周辺の遺跡（第４図・第１表）

本遺跡（１）の周辺では、成田ニュータウン造成事業をはじめとして、東関東自動車道路、成田国際空港予定地及び関連事業に伴う大規模な発掘調査が行われ、その調査成果については既に報告書が刊行されている。ここでは時代ごとに主な周辺遺跡について記述し、各遺跡の概要は第１表を参照されたい。

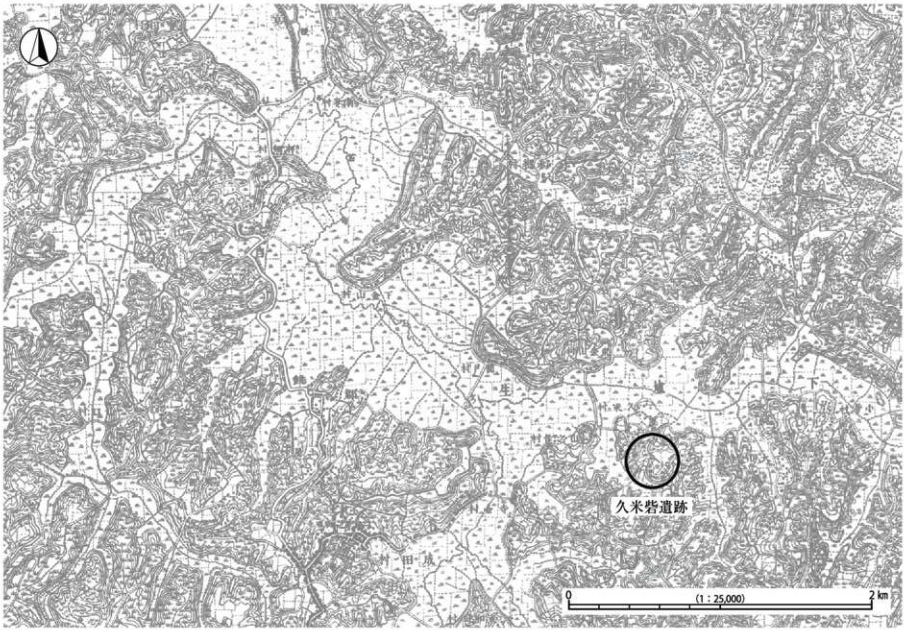
旧石器時代　旧石器時代の遺跡としては成田国際空港予定地内の遺跡群が特筆される[注2]。取香和田戸遺跡（空港№60遺跡）はⅡc層～Ⅶ層から４つの文化層（15ブロック）、東峰御幸畑東遺跡（空港№62遺跡）はⅢ層～Ⅸ層から６つの文化層（46ブロック）、十余三稲荷峰遺跡（空港№67遺跡）は信州産黒曜石を主体とする細石刃石器群が検出されているなど22遺跡から多くの石器群が検出されている。これらの遺跡群は、利根川に向かって北に流れる根木名川の支流である取香川と九十九里平野を経て太平洋に向かって南に流れる高谷川との分水嶺となっている台地上に位置している。

縄文時代　早期の遺跡は、成田国際空港予定地内遺跡群で竪穴住居跡を中心とした集落が複数検出されている。木の根拓美遺跡（空港№６遺跡）は竪穴住居跡８軒、東峰御幸畑西遺跡（空港№61遺跡）は竪穴住居跡３軒・炉穴14基・陥穴16基、十余三稲荷峰遺跡（空港№67遺跡）は竪穴住居跡18軒・炉穴109基・陥穴153基などが検出されている。木の根拓美遺跡（空港№６遺跡）は県指定文化財に指定された早期の最も古い時期の土偶が出土したことでも注目される[注3]。取香川の中流域では、関戸関ノ台遺跡（２）で陥穴11基、馬場扇ノ作遺跡（29）は陥穴４基が検出されている。印旛沼東岸及び印旛沼に注ぐ江川流域では、松崎外小代内小代遺跡（４）で竪穴住居跡１軒・土坑６基・陥穴19基、橋賀台Ⅱ遺跡（93）・橋賀台Ⅰ遺跡（94）では竪穴住居跡13軒・炉穴３基、上人塚遺跡（97）では竪穴住居跡７軒・炉穴15基など集落跡が検出されている。

前期は明確な遺構が検出された遺跡は極めて少なく、印旛沼東岸の松崎外小代内小代遺跡（４）で竪穴住居跡１軒、江川流域の橋賀台Ⅱ遺跡（93）で竪穴住居跡２軒が検出されているだけである。

中期は遺跡数が増加し、流域ごとに複数の集落跡が検出されている。取香川右岸の台地上にある野毛平木戸下向山遺跡（17）では竪穴住居跡41軒・土坑42基、隣接する野毛平植出遺跡（18）では竪穴住居跡１軒・土坑１基が検出され、対岸に位置する長田雉子ヶ原遺跡などからも竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが複数検出されている[注3]。印旛沼東岸の松崎名代遺跡（59）では竪穴住居跡４軒と中期～晩期の土坑126基が検出されている。小橋川流域では、郷部南台遺跡（72）で竪穴住居跡６軒と中期～後期の土坑200基、囲護台遺跡群（105）で竪穴住居跡46軒と中期～後期の土坑600基以上が検出されている。

後期・晩期は遺跡数が減少する。根木名川流域では、最奥部の台地上の小菅法華塚遺跡（37）で後期の竪穴住居跡５軒・柄鏡型住居跡２軒・土坑10基、中流域の土屋殿台(貝塚)遺跡（69）では後期の竪穴住居跡23軒・土坑125基が検出されている。印旛沼東岸では、松崎鳥内遺跡（58）で竪穴住居跡１軒・土坑33基・陥穴２基、



第３図　遺跡の位置（迅速測図）

八代玉作(Loc.39)遺跡(75)で後期～晩期の竪穴住居跡６軒が検出されている。

弥生時代　関戸関ノ台遺跡(２)の周辺地域は、櫛描き文や口縁部～胴部に斜縄文などを施す北関東系の土器群が多く見られる。根木名川と取香川との合流域では、関戸関ノ台遺跡(２)で竪穴住居跡３軒、関戸谷津之台遺跡(３)で昭和55年調査分を合わせて中期～後期の竪穴住居跡71軒が検出されている。やや奥まった上流域の東和田城遺跡(33)では竪穴住居跡10軒以上、最奥部の小菅法華塚遺跡(37)では後期の竪穴住居跡３軒が検出されている。根木名川支流の小橋川の流域と印旛沼東岸地域でも中期～後期の集落が多数見られる。

小橋川流域では、宝田八反目遺跡(47)で弥生時代中期～古墳時代中期の竪穴住居跡115軒以上、松崎白子遺跡(55)や押畑(子の神)城(64)・押畑広台遺跡(66)では中期や後期の竪穴住居跡などが検出されている。松崎白子遺跡の北約３kmの利根川を臨む台地上にある南羽鳥遺跡群では、中期の竪穴住居跡・方形周溝墓・土器棺墓と後期の竪穴住居跡・土器棺墓などで構成される集落跡が検出されている[註4]。

印旛沼東岸地域では、外子代(Loc.40)遺跡(73)で後期の竪穴住居跡15軒、八代玉作(Loc.39)遺跡(75)で中期の竪穴住居跡２軒が検出されているが、全体としては散発的である。印旛沼南岸地域の鹿島川流域では、中期後半の環濠集落と方形周溝墓群で構成される佐倉市六崎大崎台遺跡[註5]や後期の集落である佐倉市江原台遺跡[註6]など各時期を代表する遺跡が所在している。

古墳時代　河川流域ごとの遺跡数が増加し、特に後期から始まる集落遺跡の増加が顕著である。根木名川中・上流域と取香川流域では、関戸関ノ台遺跡(２)・関戸谷津之台遺跡(３)・東和田城遺跡(33)・小菅法華塚遺跡(37)で弥生時代～後期まで集落が続くが、関戸谷津之台遺跡では中期に古墳が作られるようになり、小規模な集落へと変わっていく。野毛平高台遺跡(21)では前期から始まる集落で前期～中期の竪穴住居跡12軒、後期の竪穴住居跡17軒・土坑30基が検出されている。小菅大山遺跡群Ⅰ(26)では後期から集落が始まると思われる。小橋川流域では、根木名川との合流部付近にある宝田八反目遺跡(47)や松崎白子遺跡(55)・押畑(子の神)城(64)などが弥生時代から続く集落であるが、存続期間は前期又は中期までで、後期には続かないと思われる。

上流域では、石橋台２遺跡(90)は弥生時代から続く集落であるが、後期の竪穴住居跡65軒が検出され、この時期が主体となると思われる。石塚(Loc.20)遺跡(86)と印旛沼東岸の外子代(Loc.40)遺跡(73)・八代玉作(Loc.39)遺跡(75)も弥生時代～前期又は中期まで続く集落であるが、前二者は玉作工房跡、後者は石製模造品工房跡を伴うもので、ほかの集落とは性格をやや異にするものと思われる。後期になると小橋川流域では、郷部加定地遺跡(71)や囲護台遺跡群(105)は新たに集落が現れ、郷部加定地遺跡で後期～奈良時代の竪穴住居跡336軒・土坑376基、囲護台遺跡群では竪穴住居跡236軒・鍛冶工房跡１軒・大形土坑２基などが検出され、奈良・平安時代まで集落として継続している。

印旛沼東岸地域では、松崎外小代内小代遺跡(４)や松崎山ノ台遺跡(５)・松崎遠原遺跡(60)などで後期から集落が現れる。松崎外小代内小代遺跡では竪穴住居跡45軒、松崎山ノ台遺跡では竪穴住居跡23軒、松崎遠原遺跡は竪穴住居跡12軒などが検出されており、いずれの遺跡も台地の一部の調査であることから、本来は囲護台遺跡群に匹敵する規模の集落であると思われる。

古墳については、小橋川と印旛沼に注ぐ江川の分水嶺に沿って築造されている公津原古墳群(74)がこの地域を代表する古墳群である[註7]。八代台古墳群、天王・船塚古墳群、瓢塚古墳群の３つの古墳群からなり、総数で前方後円墳６基・円墳88基・方墳34基で構成される。４世紀前半～７世紀末まで造営され、その中

第４図　周辺の遺跡（1：25,000）

でも6世紀～7世紀に築造されたものが多く、周辺地域における後期の集落遺跡の増加と軌を一にする。天王・船塚古墳群の南東部には公津原埴輪生産遺跡(113)があり、県内で2か所しか見つかっていない埴輪窯跡1基と竪穴状遺構4軒が検出されている。本遺跡の北東側の広い範囲に野毛平古墳群(11)があり、5世紀～7世紀の前方後円墳や円墳などが調査されている。関戸谷津之台遺跡でも円墳8基が検出され、取香川右岸の台地上ある古墳などとともに野毛平古墳群の一部を構成していたと考えられる。

奈良・平安時代　根木名川と取香川流域では、本遺跡久米砦遺跡(1)・関戸谷津之台遺跡(3)・野毛平高台遺跡(21)・小菅大山道跡群Ⅰ(26)・東和田城遺跡(33)・小菅法華塚遺跡(37)などで古墳時代後期から集落が続き、野毛平木戸下向山遺跡(17)や野毛平植出遺跡(18)では新たに集落が作られるようになる。

小橋川中・上流域では、郷部加定地遺跡(71)や郷部南台遺跡(72)・戸崎Ⅳ(Loc.33A･B)遺跡(80)・雷土(Loc.37)遺跡(84)・石橋台2遺跡(90)・中台遺跡(101)・囲護台遺跡群(105)などの古墳時代後期から続く集落遺跡を中心にして、さらに、郷部松ノ下(Loc.16･17)遺跡(99)や加良部(Loc.15)遺跡(100)・南囲護台遺跡(106)など新たな集落がその周辺に現れる。囲護台遺跡群では奈良時代の竪穴住居跡226軒、平安時代の竪穴住居跡118軒・掘立柱建物跡37棟などが検出されており、古墳時代後期から連綿と続く中心的な集落と考えられる。南囲護台遺跡では部分的な発掘調査であるが、その成果から集落が台地全域に広がると考えられる。加良部(Loc.15)遺跡は竪穴住居跡66軒・掘立柱建物跡16棟など多くの遺構が検出されており、その中の掘立柱建物跡の一つは四面廂を持ち、村落内寺院の可能性が考えられる。

印旛沼東岸地域では、松崎外小代内小代遺跡(4)や松崎烏内遺跡(58)・松崎名代遺跡(59)・松崎遠原遺跡(60)などで古墳時代後期から引き続き集落が形成されている。松崎外小代内小代遺跡では竪穴住居跡3軒・掘立柱建物跡15棟・竪穴状遺構11基など、松崎烏内遺跡では昭和58年に行われた調査で竪穴住居跡26軒・掘立柱建物跡1棟・土坑51基が検出されており、いずれの遺跡ともに更なる遺構の広がりが想定される。

中・近世　城館跡は根木名川とその支流の取香川流域の台地上に見られ、右岸には北から一の陣屋遺跡(44)・下金山城(19)・関戸谷津之台遺跡(3)、左岸には本遺跡久米砦遺跡(1)・寺台城跡(32)・小菅城(27)が所在し、寺台城跡の南側対岸には東和田城遺跡(33)が所在する。小橋川との合流地点には押畑(子の神)城(64)、それより南側のやや奥まった台地上には土屋殿台(貝塚)遺跡(69)が所在する。部分的な発掘調査のためその全容が不明な遺跡が多いが、東和田城遺跡は全域を発掘調査した数少ない遺跡である。城跡は南北約450m・東西約250mの範囲に及び、郭3か所とそれらに伴う掘立柱建物跡や地下式土坑・土坑・柵列など多数の遺構が検出されている。出土遺物などから16世紀後半の時期を中心とする戦国後期の「番城」であり、成田市では最大規模の城跡として位置付けられている[注8]。

台地整形区画などの屋敷跡と思われる遺跡としては、関戸関ノ台遺跡(2)・松崎外小代内小代遺跡(4)・松崎烏内遺跡(58)・松崎名代遺跡(59)・郷部加定地遺跡(71)などがあげられる。郷部加定地遺跡を除く4遺跡は、いずれも地下式坑や土坑・柵列・溝などを伴う台地整形区画が検出されている。墓域としては、赤荻屋下遺跡(9)や赤荻馬場遺跡(20)・小菅離山遺跡(36)・吉倉遺跡群Ⅱ(39)・松ノ木台遺跡(111)などで塚の存在が確認され、野毛平高台遺跡(21)では火葬墓・土坑墓10基が検出されている。

注

注１　千葉県県土整備部北千葉道路建設事務所発行「北千葉道路パンフレット」を参考にした。

注２　（財）千葉県文化財センター　1981『木の根-成田市木の根№５、№６遺跡発掘調査報告書-』
（財）千葉県文化財センター　1994『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』調査報告第244集
（財）千葉県文化財センター　2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ』調査報告第385集
（財）千葉県文化財センター　2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ』調査報告第483集
（財）千葉県文化財センター　2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩ』調査報告第485集
千葉県　2000『千葉県の歴史　資料編　考古１（旧石器・縄文時代）』

注３　（財）印旛郡市文化財センター　1989『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）』発掘調査報告書第31集

注４　（財）印旛郡市文化財センター　1997『南羽鳥遺跡群Ⅱ』発掘調査報告書第133集
（財）印旛郡市文化財センター　2000『南羽鳥遺跡群Ⅳ』発掘調査報告書第156集

注５　佐倉市大崎台Ｂ地区遺跡調査会　1985～1987『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』『同Ⅱ』『同Ⅲ』

注６　江原台第1遺跡発掘調査団　『江原台』1979

注７　千葉県教育委員会　1998『千葉県重要古墳群測量調査報告書-成田市公津原古墳群-』
千葉県　2003『千葉県の歴史 資料編 考古２（弥生・古墳時代）』

注８　千葉県教育委員会　1995『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ-旧下総国地域-』
千葉県　1998『千葉県の歴史 資料編 中世１ 考古資料』

参考文献

文１　成田史談会　1956『成田史談』創刊号
文２　成田史談会　1959『成田史談』第5号
文３　成田史談会　1960『成田市の古墳群』
文４　栗本佳弘　1969『成田市東和田遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
文５　成田市教育委員会　1971『成田市の文化財』第２輯
文６　成田市教育委員会　1973『成田市中岡護台遺跡発掘調査報告』成田市遺跡調査報告第１集
文７　成田市教育委員会　1974『成田市の文化財』第５輯
文８　寺村光晴　雄山閣　1974『下総国の玉作遺跡』
文９　千葉県企業庁　1975『公津原』
文10　日吉倉遺跡調査団　1975『遺跡日吉倉』
文11　成田市教育委員会　1977『成田市の文化財』第７・８輯
文12　成田市教育委員会　1978『成田市の文化財』第９輯
文13　成田市教育委員会　1979『成田市の文化財』第10輯
文14　（財）千葉県文化財センター　1979『千葉県文化財センター研究紀要4』
文15　成田市教育委員会　1980『成田市の文化財』第11集
文16　（財）千葉県文化財センター　1980『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
文17　（財）千葉県文化財センター　1981『公津原Ⅱ』
文18　（財）千葉県文化財センター　1983『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ（関戸遺跡）』
文19　成田市中世城郭址調査団　1983『成田市中世城郭址調査報告書』　成田市史編さん室
文20　奈和同人会　1984『千葉県成田市殿台遺跡の調査』『奈和』第22号　藤下昌信ほか
文21　成田市郷部北遺跡調査会　1984『成田市郷部北遺跡群調査概要（加定地・殿台遺跡）』
文22　（財）千葉県文化財センター　1985『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-成田地区-』
文23　成田市松崎・大袋遺跡調査会　1985『成田市松崎白子、大袋台畑・塔之下遺跡発掘調査報告書』
文24　（財）千葉県文化財センター　1985『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
文25　成田市　1986『成田市史　中世・近世編』
文26　（財）千葉県文化財センター　1987『成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告書　山口雷土遺跡』
文27　（財）千葉県印旛郡市文化財センター　1988『千葉県成田市押畑の神城跡発掘調査報告書』発掘調査報告書第24集
文28　（財）千葉県印旛郡市文化財センター　1990『囲護台遺跡発掘調査報告書』発掘調査報告書第34集
文29　成田市囲護台遺跡発掘調査団　1990『成田都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
文30　成田市教育委員会　1990『平成元年度成田市内遺跡群発掘調査報告書』

文31　(財) 千葉県文化財センター　1990『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』調査報告第177集
文32　(財) 印旛郡市文化財センター　1990『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)』
発掘調査報告書第32集
文33　(財) 印旛郡市文化財センター　1991『財団法人印旛郡市文化財センター年報7-平成2年度-』
文34　成田市教育委員会　1991『平成2年度　成田市内遺跡群発掘調査報告書』
文35　成田市下金山城調査会　1992『成田市下金山城跡発掘調査報告書』
文36　(財) 印旛郡市文化財センター　1992『財団法人印旛郡市文化財センター年報8-平成3年度-』
文37　成田市教育委員会　1993『成田市の文化財 第24集 -埋蔵文化財発掘調査報告書-』
文38　(財) 千葉県文化財センター1993『主要地方道成田安食線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
調査報告第229集
文39　成田市教育委員会　1994『平成5年度　成田市内遺跡発掘調査報告書』
文40　(財) 千葉県文化財センター　1994『千葉県文化財センター 研究紀要15』
文41　成田市教育委員会　1995『埋蔵文化財調査報告書2』
文42　(財) 印旛郡市文化財センター　1995『小菅法華塚Ⅰ・Ⅱ遺跡』発掘調査報告書第92集
文43　(財) 印旛郡市文化財センター　1996『南囲溝台遺跡(第1地点)』発掘調査報告書第106集
文44　成田市教育委員会　1996『平成7年度　成田市内遺跡群発掘調査報告書』
文45　(財) 千葉県文化財センター　1996『成田市松崎遠原遺跡』　調査報告第282集
文46　成田市郷部北遺跡調査会　1997『成田市郷部北遺跡発掘調査報告書　第1分冊　第2分冊』
文47　千葉県教育委員会　1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)-東葛飾・印旛地区(改訂版)-』
文48　(財) 印旛郡市文化財センター　1997『財団法人印旛郡市文化財センター年報12-平成7年度-』
文49　千葉県　1998『千葉県の歴史　資料編　考古3(奈良・平安時代)』
文50　(財) 印旛郡市文化財センター　1998『北囲溝台遺跡』発掘調査報告書第137集
文51　(財) 印旛郡市文化財センター　1998『馬場扇作遺跡』発掘調査報告書第139集
文52　(財) 印旛郡市文化財センター　1998『南囲溝台遺跡(第2地点)』発掘調査報告書第142集
文53　(財) 印旛郡市文化財センター　2001『大生城跡・関戸砦跡』発掘調査報告書第182集
文54　成田市教育委員会　2001『平成12年度成田市内遺跡発掘調査報告書』
文55　(財) 印旛郡市文化財センター　2002『下金山城跡』発掘調査報告書第197集
文56　(財) 印旛郡市文化財センター　2004『南囲溝台遺跡(第4地点)』発掘調査報告書第218集
文57　富里市　2005『松ノ木台遺跡発掘調査報告書』富里市文化財報告書第3集
文58　(財) 印旛郡市文化財センター　2006『南囲溝台遺跡(第3地点)』発掘調査報告書第235集
文59　千葉県教育振興財団　2007『成田市押畑広台遺跡』調査報告第569集
文60　成田市教育委員会　2008『平成19年度成田市内遺跡発掘調査報告書』
文61　(財) 印旛郡市文化財センター　2008『成田市東和田城跡』発掘調査報告書第267集
文62　千葉県教育振興財団　2009『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書1』調査報告第618集
文63　成田市教育委員会　2009『平成20年度成田市内遺跡発掘調査報告書』
文64　千葉県教育振興財団　2011『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書5』調査報告第659集
文65　成田市教育委員会　2011『平成22年度成田市内遺跡発掘調査報告書』
文66　(財) 印旛郡市文化財センター　2012『南囲溝台遺跡(第7地点)』発掘調査報告書第309集
文67　成田市教育委員会　2013『平成24年度成田市内遺跡発掘調査報告書』
文68　(公財) 印旛郡市文化財センター　2013『郷部南台遺跡』発掘調査報告書第322集
文69　(公財) 印旛郡市文化財センター　2013『松崎名代遺跡』発掘調査報告書第327集
文70　(公財) 印旛郡市文化財センター　2016『寺台城跡(第1・2・3・4・5次)』発掘調査報告書第348集
文71　成田市教育委員会　2016『平成27年度成田市内遺跡発掘調査報告書』
文72　(公財) 千葉県教育振興財団　2016『成田ニュータウンの遺跡展 鹿沼に栄えた文化 津原再発見』図録
文73　千葉県教育庁教育振興部文化財課　2018『平成30年度千葉県の博物館・文化財行政』
文74　千葉県教育委員会　2019『成田市関戸谷津之台遺跡』埋蔵文化財調査報告第31集
文75　千葉県教育庁教育振興部文化財課　2019『平成31年度千葉県の博物館・文化財行政』
文76　千葉県教育委員会　2021『成田市関戸関ノ台遺跡』埋蔵文化財調査報告第35集

第1表　周辺の遺跡概要一覧表

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	文献
1	久米砦遺跡		③陥穴3基		②③中期~後期竪穴45軒・土坑2基	②③奈良竪穴2軒	①腰曲輪、土塁、空堀、櫓台、土橋 ②③台地整形区画1か所、掘立9棟、土坑墓1基等	①文25②文73 ③文75
2	関戸関ノ台遺跡	①Ⅵ層~Ⅶ層1ブロック7点(石核・剥片)	①陥穴11基	①後期竪穴3軒	①中期~後期竪穴14軒・土坑3基・溝1条 ②中期土坑1基	①平安竪穴2軒・土坑11基 ②平安土坑1基	①台地整形区画2か所、土地整形3基、掘立1棟、竪穴状11基、地下式坑2基、土坑墓1基、土坑31基、ピット群7か所、溝1条	①本報告書 ②文53
3	関戸谷津之台遺跡	④Ⅸc層1ブロック2点(剥片)	②④早期~晩期土器片・石器少量	②④中期後半~後期竪穴71軒	②④前期竪穴10軒、中期竪穴3軒・溝1条、後期竪穴2軒、後期古墳8基 ③中期末~後期初土坑1基	②④平安竪穴5軒・溝1条 ③平安土坑1基	①郭、腰曲輪、空堀、堀底道 ②④竪穴状1基、土坑2基、溝1条、板碑片 ③腰曲輪4か所	①文25②文18 ③文53④文74
4	松崎外小代内小代遺跡	①Ⅶ層1ブロック183点(石核・敲石・剥片)、Ⅶ~Ⅸ層1ブロック8点(石核・剥片)	①早期竪穴1軒・土坑6基・陥穴19基、前期竪穴1軒 ②炉穴2基　④竪穴1軒		①後期竪穴45軒	①掘立15棟、竪穴状11基、井戸3基、土坑9基 ④竪穴3軒	①地下式坑16基、土坑墓1基、土坑56基、溝10条、柵列7列、ピット群7か所、台地整形1か所、焼土遺構1基 ③溝1条	①文64②文65 ③文67④文71
5	松崎山ノ台遺跡	①単独出土(Ⅳ~Ⅴ層・Ⅶ層)2か所、Ⅲ層2ブロック12点(尖頭器・楔形石器・掻器・剥片)、Ⅸ層1ブロック7点(削器・楔形石器・剥片)		①後期竪穴2軒	①後期~終末期竪穴23軒、方墳1基			①文62
6	西和泉香取台遺跡					土師器		○文47
7	赤荻前原遺跡		後期(加曽利B・安行1)土器			平安土師器		○文47
8	赤荻西向遺跡		後期(加曽利B・安行1)土器		土師器			○文47
9	赤荻屋下遺跡						近世塚	○文47
10	赤荻清水台遺跡		後期(加曽利B・安行1)土器		土師器			○文47
11	野毛平古墳群				①浅間台古墳：円墳1基(7世紀) ②浅間台古墳001号跡：円墳1基(5世紀) ③前方後円墳(6世紀後~末) ④円墳3基(後期)	④溝3条		①文2・文14 ②文16③文22 ④文22
12	赤荻谷ノ田遺跡		前期(黒浜)土器					○文47
13	野毛平泉台Ⅱ遺跡					平安土師器		○文47
14	野毛平泉台Ⅰ遺跡		中期(加曽利EⅣ)土器		土師器	土師器		○文47
15	野毛平上之内遺跡		中期~後期(加曽利EⅠ~BⅡ)土器					○文47
16	野毛平東方遺跡					土師器		○文47
17	野毛平木戸下向山遺跡	⑤Ⅲ~Ⅳ層1点(ナイフ形石器)、Ⅶ~Ⅸ層2点(剥片)	②中期加曽利EⅢ~EⅣ期竪穴28軒・土坑38基 ③中期阿玉台期竪穴1軒・土坑1基 ⑦中期竪穴12軒・土坑13基、縄文~平安ピット群数百基			①平安竪穴18軒、土坑1基、溝1条 ②平安竪穴17軒・掘立9棟・土坑7基 ③平安竪穴18軒・掘立7棟・土坑2基 ④土坑2基 ⑤奈良竪穴2軒・方形周溝1基 ⑥竪穴25軒・土坑89基、平安掘立1棟・鍛冶工房1基 ⑦竪穴89軒、掘立6棟、土坑72基、溝1条、平安土器廃棄場1か所 ⑧平安竪穴8軒・土坑8基・掘立1棟・製鉄関連遺構1か所	①時期不明土坑7基、溝1条 ②掘立1棟・溝2条・柵列1基、時期不明土坑61基 ③土坑1基、時期不明土坑3基 ④近世塚2基 ⑦溝1条、柵列3条 ⑧炭焼窯	①文31②文32 ③文32④文39 ⑤文22⑥文33 ⑦文33⑧文36
18	野毛平植出遺跡		②中期竪穴1軒・土坑1基		①後期古墳1基・周溝状遺構1基	①平安竪穴16軒・掘立17棟・土坑4基 ②竪穴13軒・土坑26基、土器廃棄場1か所		①文32②文33
19	下金山城					①平安土坑1基	①土塁1条、薬研堀1条、堀底道1条 ②郭、腰曲輪10か所	①文35②文55
20	赤荻馬場遺跡						近世塚	○文47
21	野毛平高台遺跡				①前期~中期竪穴12軒、後期17軒、後期以降土坑30基、時期不明竪穴15軒	①平安竪穴5軒	①火葬墓・土坑墓10基	①文16
22	野毛平浅間遺跡				①中期竪穴1軒		①道路跡1条	①文16
23	東方低地遺跡		早期~前期(茅山~諸磯)土器		土師器			○文47
24	取香川低地A遺跡		①前期(関山)土器			①平安土坑2基(「石井」「山井」「大井」「仲井」墨書杯水辺に係る祭祀遺構)		①文7 文13 文41
25	久米(貝塚)遺跡		前期・後期土器					○文1 文15
26	小菅大山遺跡群1				①後期竪穴25軒・土坑5基、時期不明竪穴33軒	①掘立5棟、竪穴15軒(奈良10、平安5)、平安土坑1基	①溝2条、近世塚1基・土坑1基、時期不明土坑30基	①文22
27	小菅城						①郭、堀2条(中世)	①文22
28	大山御所台遺跡					平安土師器		○文47
29	馬場堀ノ作遺跡		①早期陥穴4基			①竪穴19軒、掘立4棟、土坑5基	①台地整形区画1か所	①文44　文51
30	山ノ作笹山遺跡					平安土師器		○文47
31	馬場大場佐間遺跡		後期(加曽利BⅠ・Ⅱ)土器					○文47
32	寺台城跡					①土坑1基	①平場4か所、土塁2基、堀1条、ピット列1条、粘土採掘穴3基、土坑1基、台地整形2か所、斜面部造成1か所、溝1条	○文19①文70
33	東和田城遺跡		②土坑3基 ⑤陥穴1基	②竪穴4棟 ③竪穴36軒(弥生中期~古墳後期)	②竪穴26軒、土坑6基 ⑤中期竪穴2軒	①奈良土師器 ②竪穴3軒・時期不明1軒、土坑11基、溝1条	①カワラケ ②掘立2棟、土坑30基・時期不明8基、地下式坑9基、溝8条、土塁1条 ③掘立4棟、地下式坑1基、土坑86基、柵列2条、道路2条、溝8条 ④台地整形1か所、溝1条、土坑1基 ⑤台地整形1か所、土坑11基、小ピット11基、溝4条	○文19①文34 ②文33③文36 ④文61⑤文48

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	文献
34	吉倉下口遺跡		早期(井草・夏島)土器					○文47
35	吉倉六本山遺跡					土師器		○文47
36	小菅離山遺跡					平安土師器	近世塚	○文47
37	小菅法華塚遺跡		①竪穴7軒(早期1・中期1・後期5)、後期柄鏡形住居2軒、土坑10基	①後期竪穴3軒	①竪穴15軒(前期3・後期～奈良12)	①平安竪穴2軒、掘立3棟、時期不明竪穴11軒・土坑66基		①文42
38	駒井野天神後遺跡					平安土師器		○文47
39	吉倉遺跡群Ⅱ		後期(堀之内・加曽利BⅡ)土器			土師器	近世塚	○文47
40	吉倉遺跡群		中・後期(加曽利E・B)土器		土師器			○文47
41	久米野古墳群				円墳6基			○文3
42	東和田遺跡群Ⅱ		土器			土師器・須恵器		○文47
43	東和田遺跡群		前期(黒浜・諸磯B)土器			土師器		○文4
44	一の陣屋遺跡						館跡・郭	○文19
45	新妻大久保遺跡				土師器		①土坑墓	○文47①文15
46	新妻(貝塚)遺跡		早期(茅山)土器					○文15
47	宝田八反目遺跡			①中期～古墳中期竪穴60軒以上 ②中期～古墳中期竪穴55軒以上	①古墳1基 ②円墳3基			①文30②文34
48	宝田下栗山低地遺跡					土師器・須恵器		○文47
49	宝田八反目(貝塚)遺跡		後期(加曽利B・安行1)土器					○文15
50	宝田関ノ台Ⅱ遺跡				土師器			○文47
51	宝田関ノ台Ⅰ遺跡				土師器			○文47
52	宝田横穴							○文47
53	宝田山越(貝塚)遺跡		中期(阿玉台・加曽利EⅡ)土器					○文15
54	宝田遺跡群Ⅰ				土師器	土師器		○文47
55	松崎白子遺跡		①早期炉穴1基	①中期末竪穴2軒	①前期竪穴2軒	①平安竪穴4軒・土坑2基		①文23
56	松崎市ノ坪遺跡					平安土師器		○文47
57	松崎讃岐遺跡				土師器			○文47
58	松崎烏内遺跡		①後期(堀之内)竪穴1軒・土坑33基・陥穴2基 ②早期～後期土器 ③陥穴1基		①後期(7世紀代)竪穴4軒	①竪穴26軒、掘立1棟、土坑51基 ②平安土坑1基、確認時期不明竪穴25軒・土坑5基・溝2条・掘立数基、土師器・須恵器 ③竪穴2軒 ④竪穴1軒、ピット多数	①台地整形1か所、竪穴状2基、溝8条 ②近世陶器・土器 ③地下式坑3基、土坑4基、溝3条 ④中世粘土貼土坑2基、土坑2基	①文24②文37 ③文38④文67
59	松崎名代遺跡		①中期土坑2基 ②中期(阿玉台・加曽利E)竪穴4軒、中期～後期土坑85基、中期～晩期土坑41基		②後期竪穴2軒・土坑2基	②竪穴4軒、土坑3基	①中世土坑5基・粘土貼土坑1基・ピット20基以上 ②台地整形2か所、地下式坑2基、土坑2基(製鉄関連1)、溝8条	①文63②文69
60	松崎遠原遺跡	①Ⅳ～Ⅴ層1点(ナイフ形石器)	②炉跡1基		①後期(7世紀中～)竪穴12軒	①奈良竪穴3軒、平安竪穴1軒 ②奈良竪穴3軒・溝1条	②中世柱穴8基・土坑4基	①文38②文45
61	下福田君作遺跡		①竪穴5軒		①祭祀跡1か所		①近世塚1基	①文38
62	大竹遺跡群Ⅲ				土師器			○文47
63	小橋川低地遺跡		後期(加曽利B・安行1)土器					○文47
64	押畑(子の神)城			①中期後半竪穴1軒・方形周溝墓1基、後期竪穴1軒	①前期竪穴3軒・土坑1基		①中世土塁1基	○文19①文27
65	宝田・押畑古墳群				前方後円墳1基、円墳9基			○文47
66	押畑広台遺跡			①後期竪穴2軒	①後期(6世紀)竪穴3軒	①竪穴3軒	①土坑1基、土坑列1条、土坑墓7基、ピット群1基、溝7条	①文59
67	山口古墳群				円墳4基			○文47
68	山口天神台宮田遺跡				土師器			○文47
69	土屋殿台(貝塚)遺跡		①後～晩期竪穴23軒・土坑125基・遺物包含層1か所		①中～後期竪穴25軒		①中世曲輪・掘立2棟・溝8条	①文5 文20 文21 文46 文49
70	郷部立野遺跡				①後期竪穴2軒・土坑1基			①文21 文46 文49
71	郷部加定地遺跡		①竪穴16軒、炉穴9基、土坑多数(縄文～平安514基)		①後期～奈良竪穴336軒・土坑376基	①平安土坑20基	①中世掘立7棟・土坑26基・井戸1基・柵列4基・溝24条	①文11 文12 文21 文46 文49
72	郷部南台遺跡		①中期竪穴6軒、中～後期土坑約200基 ②中期土坑8基 ③竪穴5軒、土坑10基		①後期竪穴約50軒	②竪穴13軒・掘立1棟		①文21 文46 文49 ②文68 ③文71
73	外子代(Loc.40)遺跡			②後期竪穴15軒	①円墳3基 ②前期竪穴22軒・玉作工房8軒	②竪穴37軒・掘立6棟		①文9 ②文17 文49 文72
74	公津原古墳群				①瓢塚古墳群33基(円墳18・方墳15) ②天王・船塚古墳群20基(帆立貝1・円墳11・方墳8) ③八千代台古墳群6基(円墳3・方墳3)		②近世塚1基、土坑2基	①～③文9

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	文献
75	八代玉作(Loc.39)遺跡		①後期～晩期(堀之内～姥山)竪穴6軒	①中期末竪穴2軒	①前期竪穴9軒・玉作工房7軒			①文17　文72
76	八代玉作遺跡				①中期竪穴3軒・玉作工房3軒			①文8
77	八代花内遺跡				土師器	土師器		○文47
78	後原(Loc.34)遺跡					土師器、須恵器		○文47
79	八代時田遺跡				土師器	土師器		○文47
80	戸崎Ⅳ(Loc.33A・B)遺跡				①後期竪穴7軒	①竪穴6軒		①文17
81	戸崎1・Ⅱ遺跡					①竪穴5軒		①文17
82	引地(Loc.29)遺跡				①後期竪穴9軒	①竪穴14軒、掘立1棟	①近世竪穴状1基	①文17
83	多代台遺跡		早期(茅山)土器			土師器		○文47
84	雷土(Loc.37)遺跡	①Ⅲ層5ブロック9点(ナイフ形石器・削器・敲石・剥片)	①竪穴2軒、陥穴12基、土坑15基、炉穴4基		①後期竪穴2軒	①竪穴11軒	①近世土坑4基	①文26
85	新山遺跡		土器			土師器		○文47
86	石塚(Loc.20)遺跡			②中期末～竪穴5軒	①円墳2基、方墳2基 ②中期竪穴4軒・石製模造品工房9軒	②竪穴54軒、掘立9棟、製鉄関連遺構10基、溝6条		①文9 ②文17　文49 文72
87	米野一本松遺跡				後期土師器			○文47
88	米野屋敷裏遺跡		早期(茅山)土器		後期土師器			○文47
89	米野中台遺跡				①中期方形周溝1基	①奈良竪穴1軒、平安竪穴2軒・掘立2棟		①文37
90	石橋台2遺跡		①早期(茅山下層)炉穴1基	①竪穴4軒(北関東系)	①前期～中期竪穴5軒、後期竪穴65軒	①平安竪穴7軒 ②平安竪穴4軒		①文9 ②文17
91	石橋台1遺跡		①中期(加曽利E)土器			①土師器		①文9
92	犢賀台Ⅲ遺跡		①前期土器			①平安土師器		①文9
93	犢賀台Ⅱ遺跡		①竪穴14軒(早期田戸下層12・前期諸磯1・浮島1)、早期炉穴1基					①文9
94	犢賀台1遺跡		①早期(茅山下層)竪穴1軒・炉穴2基		①中期竪穴2軒、後期竪穴2軒			①文9
95	向台遺跡	①遺物集中地点(Ⅲ層)1か所51点(彫器1・削器6・剥片22・石核2等)			①前期竪穴18軒・方形周溝2基、V字溝1条			①文9　文17
96	西中学校遺跡					平安土師器		○文47
97	上人塚遺跡		①早期(茅山式)竪穴7軒・炉穴15基			①平安竪穴4軒		①文9
98	金塚遺跡					①竪穴1軒		①文9
99	郷部松ノ下(Loc.16・17)遺跡				①方墳(後期末)1基	②竪穴68軒、竪穴状1基、土坑1基		①文9 ②文17　文49
100	加良部(Loc.15)遺跡					①竪穴66軒、掘立16棟(9世紀中四面廂建物1棟)、溝1条、土坑多数		①文17　文49 文72
101	中台遺跡				①後期竪穴50軒	①竪穴93軒、掘立6棟		①文17
102	新山Ⅱ(Loc.7)遺跡		①中期(加曽利EⅢ)竪穴1軒			①竪穴8軒、ピット状遺構1基		①文9
103	新山Ⅰ(Loc.1)遺跡		①炉穴1基			①奈良竪穴21軒		①文9
104	加良部台(Loc.2)遺跡					竪穴、土師器、須恵器		○文47
105	囲護台遺跡群		①中期(加曽利EⅣ)竪穴3軒・土坑5基 ②中期(加曽利E末)竪穴41軒、中期末竪穴状6基、早期炉穴1基、中期後～後期初陥穴7基・土坑644基 ③中期(加曽利EⅣ)竪穴2軒・土坑6基 ④陥穴1基		②後期竪穴200軒・土坑1基 ③後期竪穴6軒 ④後期竪穴30軒・鍛冶工房1基・大型土坑2基・土坑11基	①奈良竪穴2軒 ②奈良竪穴226軒、平安竪穴118軒・掘立37棟・土坑2基　時期不明竪穴88軒 ③奈良竪穴5軒、平安竪穴8軒 ④竪穴15軒、掘立7棟、台地整形区画1か所、井戸1基、土坑15基 ⑤竪穴1軒 ⑥奈良竪穴1軒	②柵列3条 ④溝10条、土坑19基	①文6②文29 ③文28④文50 ⑤文60⑥文63
106	南囲護台遺跡		①土坑4基 ④土坑1基 ⑤中期土坑2基			①奈良竪穴8軒、平安竪穴2軒・掘立5棟 ②奈良竪穴5軒、平安竪穴3軒・掘立1棟 ③奈良竪穴1軒 ④奈良竪穴1軒、溝1条 ⑤竪穴17軒、掘立7棟、土坑31基 ⑥竪穴2軒、溝1条 ⑦奈良竪穴1軒 ⑧竪穴13軒、掘立5棟、土坑2基 ⑨平安竪穴1軒	⑤溝3条、土坑2基	①文43②文52 ③文54④文56 ⑤文58⑥文60 ⑦文65⑧文66 ⑨文67
107	台方下下平遺跡				土師器	土師器		○文47
108	台方下平遺跡				土師器	土師器		○文47
109	不動ヶ岡大田遺跡		前期(黒浜)土器		土師器	土師器		○文47
110	不動ヶ岡橋田遺跡		前期(黒浜)土器			土師器		○文47
111	松ノ木台遺跡 <富里市>				①後期(7世紀後)方墳1基 ②後期竪穴5軒・土坑4基・溝3条	①平安竪穴1軒・土坑3基	①近世塚1基	①文10　②文57
112	日吉倉、五斗蒔遺跡 <富里市>		土器					○文47
113	公津原埴輪生産遺跡				①中期(5世紀後半)埴輪窯跡1基・竪穴遺構4軒			①文9　文40

第２章　久米砦遺跡（１・２）の成果

第１節　調査区の概要（第５図、第２・３表）

今回の発掘調査は、遺跡の所在する樹枝状の台地から、間に小支谷を挟んで南北に延びる２つの支尾根上を対象として本調査を実施している。それぞれの調査区に対して調査次数を付して「久米砦遺跡（１・２）」「久米砦遺跡（３）」として報告するものとし、本章「久米砦遺跡（１・２）」は西側の調査区にあたっている。

本調査区における出土遺物としては、縄文時代前期～後期・古墳時代後期・奈良時代・近世までが認められるが、検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡23軒・土坑２基、中世の地下式坑１基である。また、これらの遺構が検出された支尾根から、さらに西側に隣り合う別の支尾根上からは、人骨を伴う近世の土壙墓１基が検出されている。

縄文時代の遺物は、前期中葉の黒浜式から前期後葉の諸磯b式、中期初頭の土器及び後期中葉の加曽利B式土器などが出土している。また、石器としては局部磨製の五角形鏃、打製石斧・磨製石斧、磨石類、スタンプ形石器等が出土している。

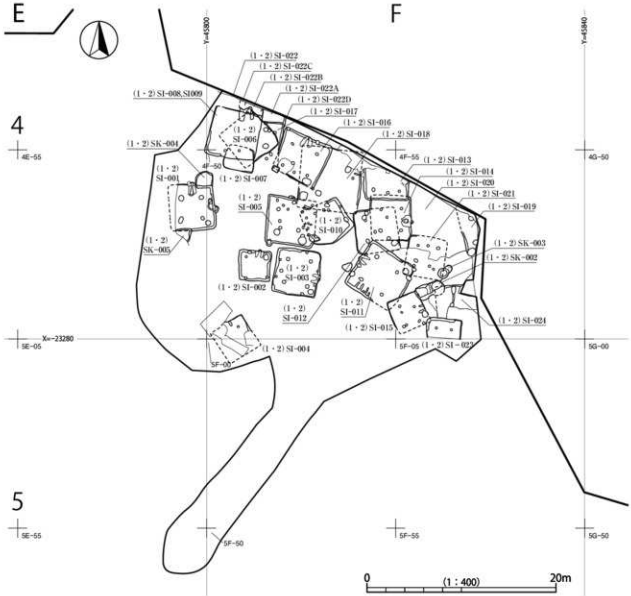
古墳時代の遺構は、支尾根の付け根部分の平坦面に寄っており、５世紀末から６世紀後半までの遺構が検出されている。竪穴住居跡等の遺構群は北側調査区外、現在の春日神社の方向にも展開するものと推定される。

近世の土壙墓は、単独で確認調査トレンチ内から検出された、成人の火葬人骨と六文銭、骨蔵器が出土している。

第２表　竪穴住居跡一覧表

（　）推定値　＜　＞現存値　単位：主軸・幅m　床面積㎡

遺構番号	位　置	主軸方向	主軸	幅	床面積	炉・カマド	貯蔵穴	壁溝	時　期	備　考
1・2 SI-001	4E・59・69・79	N－5°－W	4.80	(4.70)	(20.10)	北・東	南東隅	北東隅	6世紀初頭	カマド北（東）・東 旧1
1・2 SI-002	4F・70・71・80・81	N－3°－E	3.20	3.40	9.19	北	北東隅	ほぼ全周	6世紀初頭	
1・2 SI-003	4F・71 ～ 73・81 ～ 83	N－100°－E	4.70	4.80	20.97	東	南東隅	半周	6世紀前半	
1・2 SI-004	4F・90・91、5F・09・01	N－33°－W	(3.80)	(3.80)	(13.50)	北西	なし	なし	6世紀中葉	
1・2 SI-005	4F・61・62・71・72	N－97°－E	5.00	(5.20)	(24.23)	北	南東隅	全周？	6世紀前半	
1・2 SI-006	4F・31・40・41・50・51	N－38°－W	(4.55)	(4.70)	(20.26)	不明	南東	なし	6世紀中葉	1・2 SI-008・017と重複　008より新
1・2 SI-007	4F・40・41・50・51	N－78°－W	3.25	(2.55)	0.22	－	－	－	6世紀初頭	竪穴状遺構か
1・2 SI-008	4F・30・40・41・50・51	N－11°－E	5.18	5.23	24.55	北	なし	一部	6世紀中葉	
1・2 SI-010	4F・62・63・72・73	N－114°－W	(4.50)	(4.20)	(16.24)	南西	南隅	一部	6世紀中葉	1・2 SI-010と重複　本遺構が新
1・2 SI-011	4F・74・75・83 ～ 85・94	N－58°－W	5.84	5.50	29.03	北西	東隅	全周？	6世紀初頭	1・2 SI-012より新
1・2 SI-012	4F・63・64・73 ～ 75	N－7°－W	(4.60)	4.54	－	北	南東隅	なし	6世紀前半	1・2 SI-014より旧
1・2 SI-013	4F・54・55・64・65	N－1°－E	<3.46>	4.74	－	中央	不明	ほぼ全周	6世紀中葉	掘人口ピット南壁
1・2 SI-014	4F・64・65・74・75	N－92°－E	4.30	(4.66)	－	東	なし	なし	6世紀前半	1・2 SI-013より旧
1・2 SI-015	4F・84・85・94・95	N－67°－E	3.64	(3.62)	(12.35)	北東	北東	なし	6世紀前半	
1・2 SI-016	4F41 ～ 43・51 ～ 53・62	N－27°－E	4.64	5.42	22.58	北東	南隅	全周？	6世紀前半	1・2 SI-018より新
1・2 SI-017	4F・41・42・51・52	N－11°－E	<2.90>	<2.20>	－	不明	不明	全周？	6世紀前半	
1・2 SI-018	4F・42・43・52 ～ 54・62 ～ 64	N－6°－E	(6.60)	6.54	(40.90)	なし	南西	一部	5世紀末	1・2 SI-016より旧
1・2 SI-019	4F・66・67・76・77	N－12°－W	<4.80>	<1.66>	－	不明	南西	なし	6世紀後半	
1・2 SI-020	4F・55・65・66	－	－	－	－	－	－	－	5世紀末～6世紀初頭	
1・2 SI-021	4F・75・76・85・86	N－9°－E	(4.30)	(4.10)	(16.00)	不明	なし	なし	6世紀初頭	
1・2 SI-022A	4F・31・41・42	－	－	<2.26>	0.30	－	－	－	6世紀初頭	D→A→C→B
1・2 SI-022B	4F・31	－	－	<1.90>	0.30	－	－	－	6世紀初頭	〃
1・2 SI-022C	4F・30・31・40・41	－	－	<2.54>	0.35	－	－	－	6世紀初頭	〃
1・2 SI-022D	4F・41・42	－	－	<2.46>	0.30	－	－	－	6世紀初頭	〃
1・2 SI-023	4F・95・96、5F・05・06	N－5°－E	<2.14>	－	－	不明	不明	一部	6世紀初頭	
1・2 SI-024	4F・86・87・96・97	N－5°－W	<3.70>	<4.30>	－	不明	不明	なし		



第５図　(1・2) 調査区内遺構分布

第３表　土坑一覧表

遺構番号	種　別	位　置	長(主)軸方向	計測値：m　<　>現存値			時　期	備　考
				長軸	短軸	深さ		
(1・2) SK-001	土坑墓	3C-63・64	N-87°-E	1.58	1.10	1.60	近世	土壇と蔵骨器
(1・2) SK-002A	土坑	4F-85	N-63°-E	1.60	1.56	1.53	中・近世	SK-002Bと重複　新旧不明
(1・2) SK-002B	土坑	4F-85・86	N-63°-E	1.18	(1.56)	1.20	中・近世	SK-002Aと重複　新旧不明
(1・2) SK-003	土坑	4F-86	N-48°-E	1.68	1.08	0.48	中・近世	北東に浅い張り出し部
(1・2) SK-004	土坑	4E-59	－	1.80	<1.54>	0.32		SI-001より旧
(1・2) SK-005	土坑	4E-79	－	<1.56>	<1.40>	0.36		SI-001より深い　新旧不明

第２節　縄文時代の遺物

１　遺構外出土の遺物

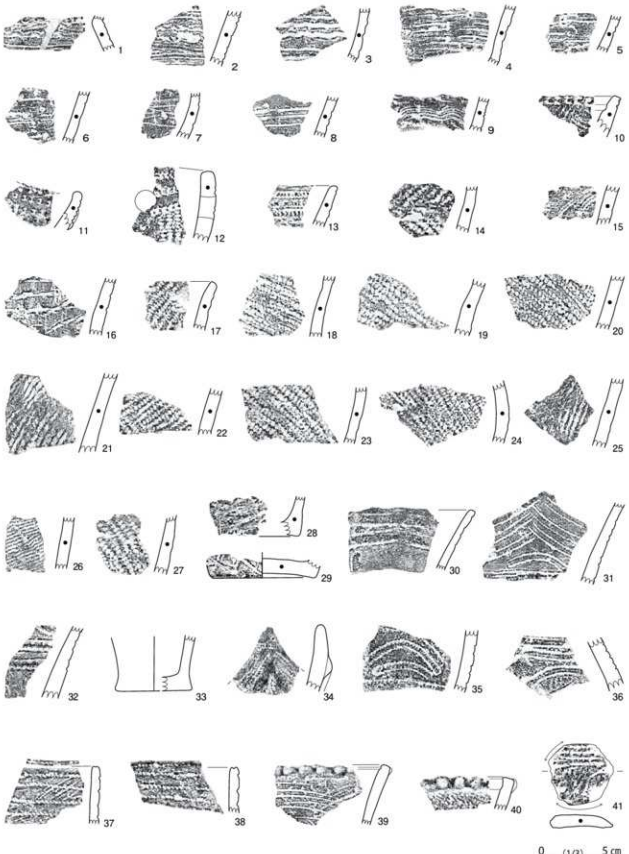
土器（第６図、第４・５表、図版26）

本地点では、縄文前期中葉の黒浜式から後期中葉の加曽利Ｂ式までの土器が出土している。出土土器の大半は、黒浜式であり、次いで前期後葉の土器が多く、後期の土器の出土はわずかである。また本地点は、古墳時代から奈良・平安時代の土地利用が活発であり、土器片の多くがこの時期の竪穴の覆土から出土している。そのため著しく摩耗した土器も多い。

１～29は前期中葉の黒浜式である。いずれも胎土に繊維が認められる。１～９は沈線による文様を持つものである。１・２は同一個体である。１は頸部、２は胴部の破片である。半截竹管による平行沈線と結節波状文が施される。他の個体と異なり、胎土にやや粒径の大きい白色粒子を多く含み、内面は丁寧に磨かれ平滑である。３は単沈線による結節波状文が施される。４～６は半截竹管による並行沈線と、沈線の端部に刺突が施されるものである。７・８は横方向に浅い沈線が引かれている。９は櫛歯状工具による波状文が施される。10～12はいずれも口縁部破片で、半截竹管による刺突文が施される土器である。10は口縁直下に刺突文が施され、その下から縄文が施されていると考えられるが、器面が摩耗しているため判然としない。11は口縁部が隆線で区画され、区画内に３条の刺突文が施される。12は刺突文とLRの単節縄文が施される。一部欠損する補修孔が認められる。14～27は縄文のみが施されるものである。14は単節RL/LRの羽状縄文が施される。15は附加条第２種の縄文が施されている。16は附加条縄文が施される。17は口縁部破片でLRの単節縄文が施される。22はLRの単節縄文を縦横に施される。18～20・23・24・27はRLの単節縄文、21・25・26はLの無節縄文が施される。28・29は底部破片である。28は表裏に条痕が認められる。29は細い沈線で格子目状の文様が施されている。30～33は前期後葉の浮島式である。30は幅広の半截竹管による結節沈線が施される。31は半截竹管による平行沈線で弧状の文様が施される。破片の下端部には同様の工具による押引文が認められる。32は半截竹管による押引文が施される。33は底部が張出すものである。外面には削ったような調整痕が認められる。34～36は前期後葉の諸磯ｂ式である。34は波状口縁の波頂部にあたる部分で、隆線と半截竹管による刺突文が施されている。35は半截竹管による押引きの弧線文が施される。36は地文を縄文とし、半截竹管による平行沈線による文様が認められる。37・38は前期末葉から中期初頭の土器で、同一個体と考えられる。口縁部破片でいずれも口唇部と口縁部にLの撚糸圧痕文が施される。39・40は後期中葉加曽利B式の組織文土器である。39は組織文直下から弧状の条線が施される。40は組織文直下にLRの単節縄文が施されている。41は土器片円盤と判断した。黒浜式土器を転用したもので、半截竹管による押引文が施されている。胎土には繊維が認められる。

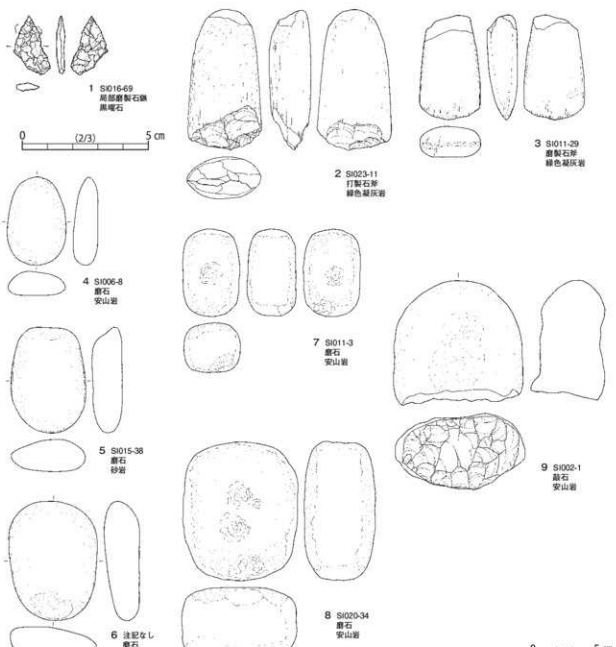
石器（第７図、第６表、図版27）

本地点では、19点の石器が出土した。内訳は、石鏃１点、打製石斧１点、磨製石斧１点、磨石類７点、剥片８点、加工痕のある礫１点である。このうち９点を図示した。１は黒曜石製の凹基無茎の局部磨製五角形鏃である。片脚部を欠損し、もう一方の脚部も先端部が欠損している。体部から基部にかけての一部が磨かれている。形態と局部磨製が施されることから、早期中葉のものと考えられる。２は、緑色凝灰岩製の磨製石斧を打製石斧に転用したものである。敲打により刃部が作出されている。敲打痕は基部にも認められる。３は緑色凝灰岩製の定角式磨製石斧である。基部を欠損する。刃部は使用に伴うつぶれが認められる。４～８は磨石類である。磨石類の分類については、橋本勝雄の分類（橋本2019）を参考に行った。４



第６図　(１・２)遺構外出土の遺物(１)

～６は摩耗痕と敲打痕が認められる磨石Ⅲ類である。４・６は安山岩、５は砂岩を石材として用いている。６は４つに割れていたものが接合した。７・８は摩耗痕と敲打痕と凹み痕が認められる磨石類Ⅳ類である。いずれも安山岩を石材として用いている。９はⅣ類に分類される磨石類を敲石に転用したものである。底面は周囲から敲打され、平坦に整形されている。



第７図　(1・2) 遺構外出土の遺物（２）

第４表　縄文時代土器観察表

遺構	挿図番号	型　式	器　種	文　様	胎　土	備　考
(1・2)遺構外	第６図－１	黒浜式	深鉢	半截竹管による平行沈線、結節波状文	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－２	黒浜式	深鉢	半截竹管による平行沈線、結節波状文	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	内面調整丁寧
	第６図－３	黒浜式	深鉢	沈線による結節波状文	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－４	黒浜式	深鉢	半截竹管による平行沈線、沈線端部に刺突	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－５	黒浜式	深鉢	半截竹管による平行沈線、沈線端部に刺突	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－６	黒浜式	深鉢	半截竹管による平行沈線、沈線端部に刺突	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－７	黒浜式	深鉢	横位、斜位の沈線	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－８	黒浜式	深鉢	横位の沈線	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－９	黒浜式	深鉢	櫛歯状工具による波状文	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－10	黒浜式	深鉢	縄文、半截竹管による刺突文	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－11	黒浜式	深鉢	隆線で区画、区画内に半截竹管による刺突文	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－12	黒浜式	深鉢	単節縄文LR→半截竹管による刺突文	礫層、白色粒子、黒色粒子	補修孔あり
	第６図－13	黒浜式	深鉢	半截竹管による連続刺突文	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－14	黒浜式	深鉢	RL／LRの羽状縄文	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－15	黒浜式	深鉢	附加条第2種の縄文	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－16	黒浜式	深鉢	附加条縄文	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－17	黒浜式	深鉢	単節縄文RL	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－18	黒浜式	深鉢	単節縄文LR	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－19	黒浜式	深鉢	単節縄文RL	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－20	黒浜式	深鉢	単節縄文RL	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－21	黒浜式	深鉢	無節縄文L	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－22	黒浜式	深鉢	単節縄文LR	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－23	黒浜式	深鉢	単節縄文RL	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－24	黒浜式	深鉢	単節縄文RL	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－25	黒浜式	深鉢	無節縄文L	礫層、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－26	黒浜式	深鉢	無節縄文L	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－27	黒浜式	深鉢	単節縄文LR	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－28	黒浜式	深鉢	器面の内外に条痕	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－29	黒浜式	深鉢	細い沈線で格子目状の文様	礫層、白色粒子、黒色粒子	
	第６図－30	浮島式	深鉢	半截竹管による結節沈線	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－31	浮島式	深鉢	半截竹管による弧状文、押引文	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－32	浮島式	深鉢	半截竹管による押引文	白色粒子、黒色粒子	
	第６図－33	浮島式	深鉢	無文、ケズリによる調整	白色粒子、黒色粒子	
	第６図－34	諸磯b	深鉢	隆線→半截竹管による押引文	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－35	諸磯b	深鉢	半截竹管による押引文	白色粒子、黒色粒子	
	第６図－36	諸磯b	深鉢	縄文→半截竹管による平行沈線	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－37	前期末葉から中期初頭	深鉢	縄文→無節縄文Lの押捺	白色粒子、黒色粒子	
	第６図－38	前期末葉から中期初頭	深鉢	無節縄文Lの押捺	白色粒子、黒色粒子	
	第６図－39	加曽利B	深鉢	隆線→指頭押捺、弧状の沈線、内面に1条の沈線	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第６図－40	加曽利B	深鉢	単節縄文LR→隆線→指頭押捺、内面に1条の筋ナデ	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	

第５表　縄文時代土器片円盤表

遺構番号	挿図番号	種　類	型　式	文　様	法量：mm　g				備　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
(1・2)遺構外	第６図－41	土器片円盤	黒浜式	半截竹管による押引文	48.2	49.5	10.6	24.62	

第６表　縄文時代石器属性表

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種　類	石　材	法量：mm　g				備　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
(1・2)SI-016	第７図－１	69	石錐	黒曜石	23.0	14.0	3.0	0.75	
(1・2)SI-023	第７図－２	11	打製石斧	緑色凝灰岩	110.1	58.2	32.9	336.99	
(1・2)SI-011	第７図－３	29	磨製石斧	緑色凝灰岩	82.4	48.0	24.1	173.46	
(1・2)SI-006	第７図－４	8	磨石	安山岩	69.1	46.3	19.4	98.11	
(1・2)SI-015	第７図－５	38	磨石	砂岩	83.1	58.6	24.2	193.25	
－	第７図－６	－	磨石	安山岩	93.9	70.0	25.4	256.37	
(1・2)SI-011	第７図－７	3	磨石	安山岩	69.0	45.0	38.9	203.97	
(1・2)SI-020	第７図－８	34	磨石	安山岩	109.0	90.0	55.5	855.10	
(1・2)SI-002	第７図－９	1	敲石	安山岩	95.8	99.6	59.6	748.08	

第３節　古墳時代・古代の遺構と遺物

本調査区では、竪穴住居跡23軒、土坑１基を検出した。竪穴住居跡は調査範囲の北側、支尾根と台地付け根部分にあたる平坦面に集中して確認された。竪穴住居跡の主な時期は５世紀末から６世紀の後半である。後述する東側の調査区である久米砦遺跡(3)では、竪穴住居跡がそれぞれ単独で検出されているのに対し、本調査区においては重複するものが多く、最大で５軒の切り合い関係が捉えられた。

１　竪穴住居跡

(1・2) SI-001（第８・９図、第２・７～９表、図版２・28・36）

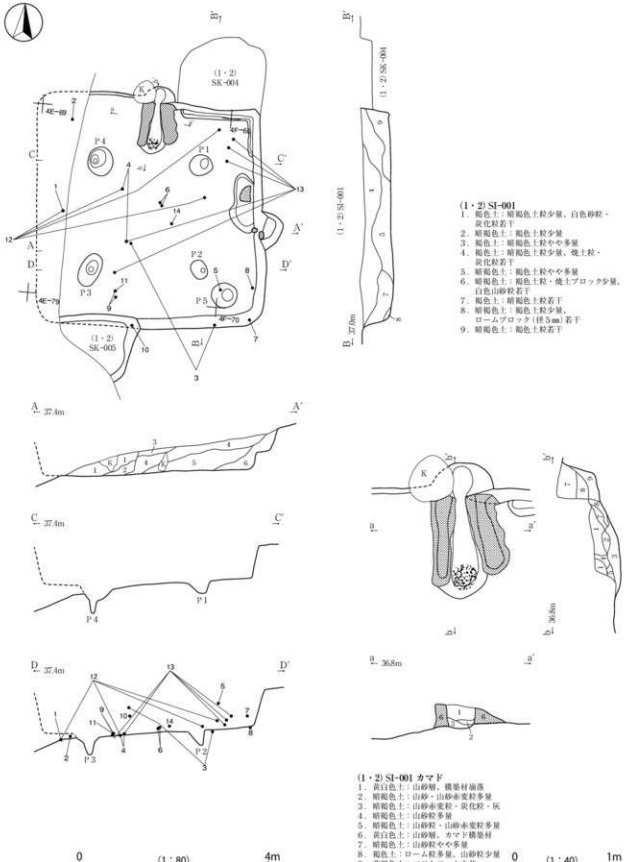
4E-59・69・79・4F-50・60・70グリッドに所在する。覆土は東から西にかけての地形の傾斜によって削平を受けており、西壁は確認できなかった。北東側で(1・2) SK-004と重複し、本竪穴のほうが新しい。また、南西側で(1・2) SK-005と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は方形と推測され、主軸方向はN-5°-Wである。規模は主軸長4.8m、推定幅4.7mで、確認面からの深さは0.72mである。

カマドは北壁中央部に付設されている。袖は構築材に黄白色の山砂が用いられており、壁から約90cmが遺存する。火床部は壁から約60cm離れて浅く窪み、底面は被熱して赤化している。煙道は北壁を約30cm掘り込んでいる。壁溝は幅25cm・深さ２cmで、北側隅でのみ確認された。

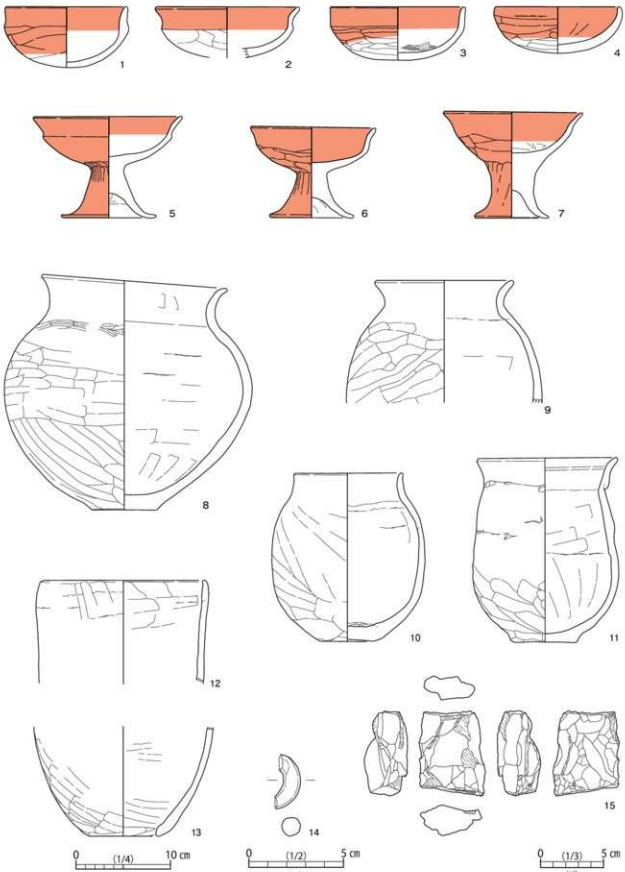
ピットは５基を検出した。P1～P4は主柱穴である。P1は径60cm・深さ44cm、P2は径36cm・深さ40cm、P3は長径72cm・短径40cm・深さ35cm、P4は径60cm・深さ46cmである。南東隅に位置するP5は、径50cm・深さ54cmで貯蔵穴と推定される。

床面上および覆土中から出土した遺物のうち15点を図示した。１～４は土師器坏である。いずれも内外面上半部が赤彩されている。１は口縁部がわずかに外反し、器高が高い。２は口縁部が外反し、体部との間に稜を作る。３は口縁部が上方へ立ち上がり、やや器高が高い。４は口縁部がわずかに内湾する椀形の坏である。５～７は土師器高坏である。いずれも内外面ともに赤彩が施されているが、被熱により器面が荒れ調整ともに不明瞭である。５は口縁部が外反し坏部底体部との間に稜をもつ。脚部はやや低く、裾部が広がる。６は南東隅の床面上からほぼ完形で出土した。口縁部が外傾し、坏部底体部との間に弱い稜を作る。脚部は低い。７は坏部が稜を持たずに外傾し、口唇部がわずかに外反する。脚部はやや高く、下部がわずかに屈曲して広がる。８～11は土師器甕である。９は床面上から出土した。８は口縁部がゆるやかに外反し、胴部はほぼ球状である。９は口縁部が屈曲して外傾し、胴部は下半が欠損しているが、最大径を上半にもつ長球状を呈するものと推定される。10は口縁部が肩部から直立して短く立ち上がり、胴部は最大径を下半にもつが、膨らみが弱い。内面に炭化物の付着が見られた。11は小型で胴部は最大径を下半にもつ。調整は粗く、器面に輪積み痕跡を残している。12・13は甑である。器面、胎土ともに類似しており、同一個体の可能性がある。12は上半部である。口縁部はほぼ直立する。13は下半部である。外面は斜位のヘラケズリ、内面はヘラケズリの後、ヘラナデが施される。14は両端を欠損した土製の勾玉である。15は石製品の石材に用いられた滑石の残核と推定される。両端部には金属による切断の痕跡とも考えられる擦痕がみられる。

本遺構の時期は、床面上から出土した遺物の特徴から６世紀初頭と推測される。



第8図　(1・2)SI-001(1)

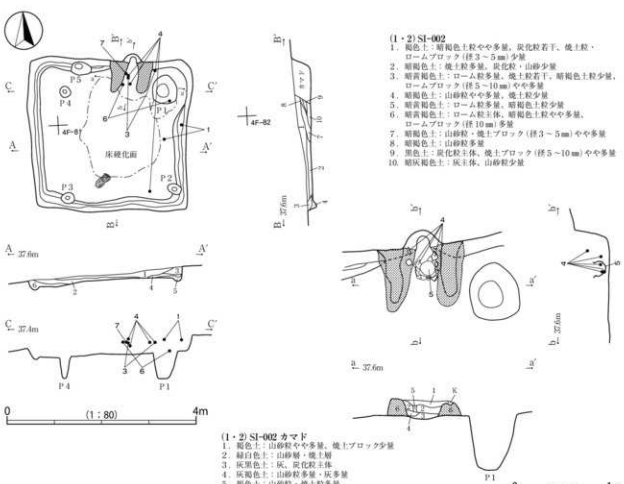


第9図　(1・2)SI-001(2)

(1・2) SI−002（第10・11図、第２・７表、図版３・28・29）

4F−70・71・80・81グリッドに所在する。(1・2) SI−003・005・010に近接するが、重複はなく単独で検出された。平面形は方形で、主軸方向はN−３°−Eである。規模は主軸長3.2m、幅3.4mで、確認面から床面までの深さは0.2mである。カマドは北壁のやや東よりに付設されている。袖は構築材に緑白色の山砂が用いられており、壁から約70cmが遺存している。火床部の窪みは浅く、底面の被熱痕跡も弱い。燃焼部中央からは４・５の甕・坩、７のミニチュア土器が出土した。所謂カマド祭祀に関連するものとも考えられようか。壁溝は幅20cm ～ 30cm・深さ約４cmでカマド燃焼部後方および北東隅を除き全周している。ピットは５基を検出した。竪穴が小規模であり、主柱穴も明確ではない。P1は径56cm・深さ56cmで、配置から貯蔵穴の可能性がある。P2は長径30cm・短径20cm・深さ44cm、P3は径22cm・深さ16cm、P4は径22cm・深さ38cm、P5は長径40cm・短径29cm・深さ35cmである。P2・３・５は壁柱穴とも考えられる。床面はカマドの焚き口前方にあたるP1からP4の内側が硬化しており、床面上からは炭化材および焼土が少量検出された。

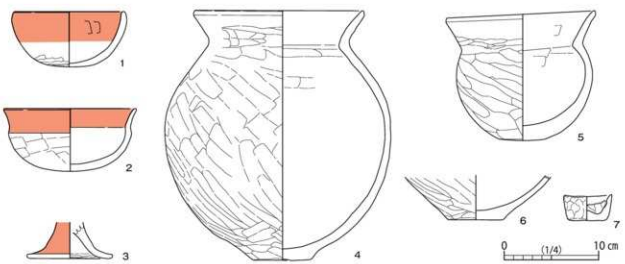
遺物は７点を図示した。１・２は土師器坏である。１は器高の高い椀形の坏である。口縁部はわずかに内湾する。器面の調整は粗く、内外面に赤彩の痕跡がある。２は口縁部が外反し、体部との間に稜を作る。器高が高く、口縁部内外面が明瞭に赤彩されている。３は土師器高坏の脚部である。脚高は低く、裾部が



第10図　(1・2) SI−002（１）

やや広がる。外面が赤彩されている。4～6は土師器甕である。4・5はカマド内から重なって出土した。4は口縁部が「く」の字状に屈曲して外傾し、胴部は球状である。5は小型の甕で、口縁部は頸部で屈曲して外傾する。口縁部に対して胴部が小さい。6は底部破片である。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。7はカマド内から出土した手捏ねによるミニチュア土器である。

本遺構の時期は、出土遺物から5世紀末～6世紀初頭と推定される。



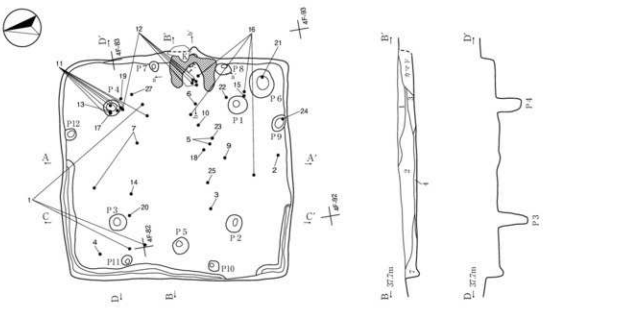
第11図　(1・2)SI-002(2)

(1・2) SI-003(第12・13図、第2・7・9表、図版4・29・30・36)

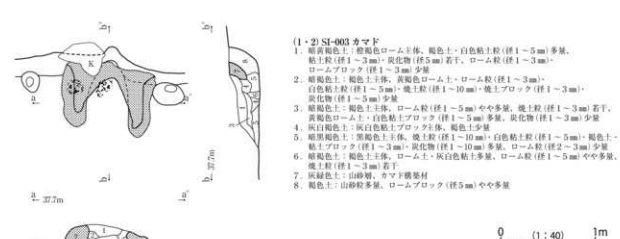
4F-71～73・81～83グリッドに所在する。(1・2)SI-002・005・010と近接するが重複はなく、単独で検出された。平面形は方形で、主軸方向はN-100°-Eである。規模は主軸長4.7m、幅4.8mで、確認面からの深さは0.36mである。カマドは東壁中央部よりやや南壁よりに付設されている。袖は構築材に灰緑色の山砂を用いており、壁から60cm程度が遺存している。煙道付近では燃焼部の天井が崩落しておらず、煙道入り口も形状を保っていた。火床部の窪みは浅く、底面は被熱により赤化している。壁溝は幅18cm～28cm・深さ7cmほどで、西側をほぼ半周する形で検出された。ピットは11基を検出した。P1～P4が主柱穴にあたる。P1は径40cm・深さ62cm、P2は径38cm・深さ51cm、P3は径36cm・深さ78cm、P4は径36cm・深さ49cmである。P5は径30cm・深さ67cm、カマドに対面する壁付近主軸上で検出された。入り口施設と考えられる。南東隅で検出されたP6は長軸径60cm・短軸径50cm・深さ53cm貯蔵穴と推定される。P7～P12は主軸左右対称の位置に配される小規模なピットで、壁柱穴と考えられる。

覆土および床面上から多量の遺物が出土した。このうち28点を図示した。1～8は土師器坏である。1～6は内外面が赤彩されている。1・2は口縁部が外反し体部との間に弱い稜を作る。1は器高が高く平底である。3は口径に対して器高の高い坏である。口縁部は体部より高く外傾する。体部との間に小さく段状の稜を有する。4は椀形の坏である。内外面ともにヘラナデ調整されている。5は口縁部と体部の間に境がなく、口縁がわずかに内湾する半球形の坏である。6～8は須恵器模倣坏である。6は小型の坏で、口縁部が短く内傾する。7は外面に段状の稜を作り口縁部が内傾する。内外面ともにヘラナデが施され、黒色処理されている。8は内外面ともに調整が粗く輪積みの痕跡を残している。9は土師器高坏の脚部で

ある。脚高は低く裾がやや広がる。杯部内外面の遺存部分には赤彩が認められる。10～21は土師器甕である。10は口縁部が上部で短く外反し、胴部は肩が大きく張る。胴部外面は縦位から斜位のヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。11～13は口縁部が外反し、胴部が最大径を上半にもつ卵球状となる甕である。11･13は外面は縦位のヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。12はカマド内から出土した小型の甕である。外面にヘラケズリの後、横位のヘラナデによる調整が施される。14は口縁部が短く内傾する小ぶりの甕である。15は口縁部が小さく外反し、胴部は膨らみが弱い。16は小型の甕あるいは鉢である。外面はヘラケ



(1・2) SI-003
1．褐色土：暗褐色土・ロームブロック（径3～5㎝）少量、焼土ブロック若干
2．暗褐色土：褐色土多量、ロームブロック（径5㎝）やや多量、
焼土粒・炭化物少量
3．暗褐色土：ロームブロック（径2～3㎝）・炭化物やや多量
4．褐色土：ローム粒・ロームブロック（径3～5㎝）多量
5．褐色土：ローム粒・ロームブロック（径3～5㎝）多量
6．褐色土：ローム粒・ロームブロック（径2～3㎝）多量
7．褐色土：ローム粒・ロームブロック（径2～3㎝）多量、暗褐色土少量
8．暗黄褐色土：ローム粒・ロームブロック（径5～10㎝）多量

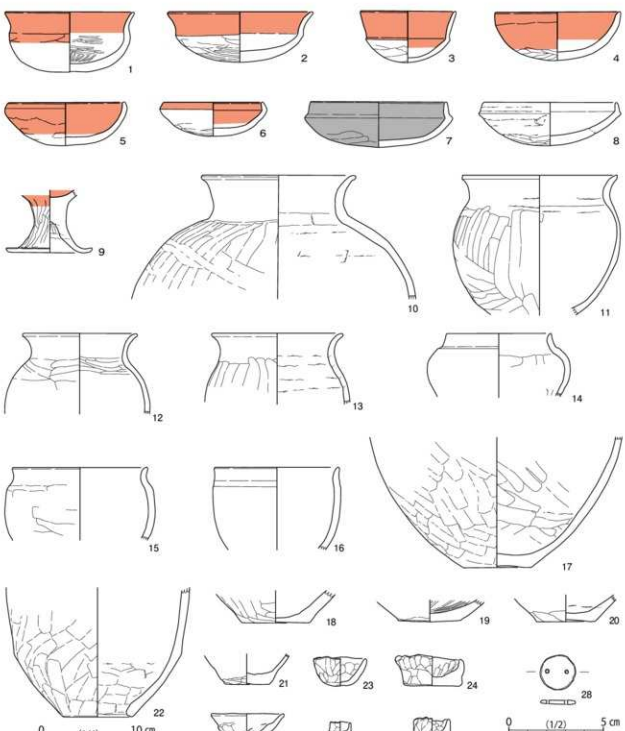


(1・2) SI-003 カマド
1．黄褐色土：橙褐色ローム主体、褐色土・白色粘土粒（径1～5㎜）多量、
粘土粒（径1～3㎜）・炭化物（径5㎜）若干、ローム粒（径1～3㎜）・
ロームブロック（径1～3㎝）少量
2．暗褐色土：褐色土主体、黄褐色ローム土・ローム粒（径1～3㎜）・
白色粘土粒（径1～5㎜）・焼土粒（径1～10㎜）・焼土ブロック（径1～3㎝）・
炭化物（径1～5㎜）少量
3．暗褐色土：褐色土主体、ローム粒（径1～5㎜）やや多量、焼土粒（径1～3㎜）若干、
黄褐色ローム土・白色粘土ブロック（径1～5㎝）多量、炭化物（径1～3㎝）少量
4．灰白褐色土：灰白色粘土ブロック主体、褐色土少量
5．暗黒褐色土：黒褐色土主体、焼土粒（径1～10㎜）・白色粘土粒（径1～5㎜）・褐色土・
粘土ブロック（径1～3㎝）・炭化物（径1～10㎜）多量、ローム粒（径2～3㎜）少量
6．暗褐色土：褐色土主体、ローム土・灰白色粘土多量、ローム粒（径1～5㎝）やや多量、
焼土粒（径1～3㎜）若干
7．灰緑色土：山砂層、カマド構築材
8．褐色土：山砂粒多量、ロームブロック（径5㎝）やや多量

第12図　(1・2) SI-003 (1)

ズリの後ヘラナデ、内面はヘラナデが施される。17は甕の胴部下半から底部である。内面はヘラナデ調整されている。18～21は底部破片である。いずれもヘラケズリにより整形される。22は甑の下半部である。内外面ともヘラナデ調整されている。23～27はミニチュア土器である。いずれも手捏ねで整形されており、指頭痕を残している。28は鏡形の石製模造品である。

床面上から出土した4・5ほか主体となる遺物の年代から、本遺構の時期は6世紀前半と推定される。



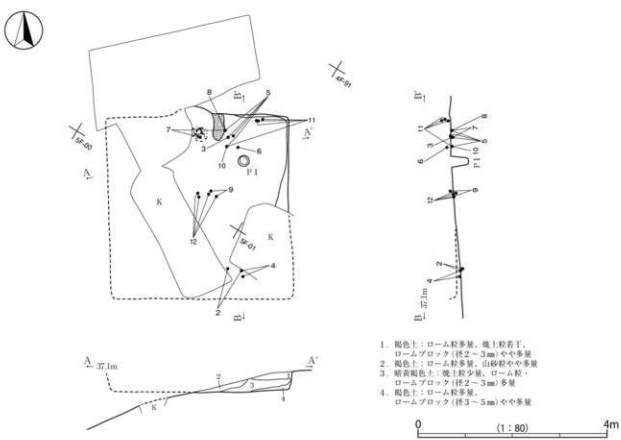
第13図　(1・2)SI-003(2)

(1・2) SI−004（第14・15図、第２・７表、図版５・30・36）

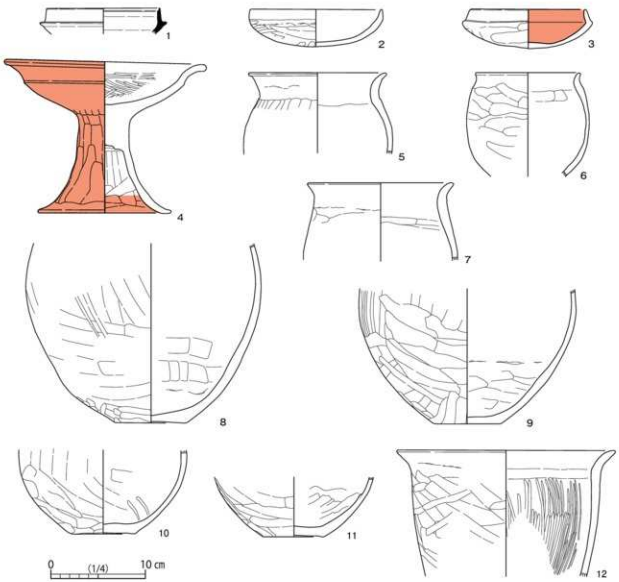
4F−90・91、5F−00・01グリッドに所在する。地形の傾斜による削平および撹乱を受けており、北東隅の４分の１ほどが検出された。平面形は方形と推測され、主軸方向はN−33°−Wである。推定規模は１辺約3.8mで、確認面からの深さは0.4mである。カマドは北壁に付設されており、被熱した火床面および袖の右基部のみが検出された。検出されたピットはP1の１基のみである。主柱穴と考えられ、径22cm・深さ36cmである。

遺物はカマドから東側にあたる床面上から特に集中して出土しており、12点を図示した。１は覆土中から出土した須恵器坏の破片である。TK10型式に比定されようか。２・３は土師器坏である。２はやや扁平な椀形の坏である。外面はヘラケズリの後ナデ、内面はミガキが施される。３は須恵器模倣坏である。口縁部は体部との間に稜を作って内傾する。内面はミガキが施され、赤彩が認められる。４は土師器高坏である。口縁部は大きく外反し坏部との間に明確な稜を成している。脚高は高く、脚部は「ハ」の字に開く。内外面に丁寧なミガキが施され、外面と脚部内面底部が赤彩、坏部内面が黒色処理される。５～11は土師器甕である。５は口縁部が外反し、胴部は縦位のヘラケズリにより整形される。６は小型の甕あるいは鉢である。内外面にヘラナデ調整が施される。７は口縁部が上部で短く外反する。８～11は胴部から底部である。ヘラケズリにより整形される。12は甑である。口縁部は屈曲して外傾し、内面に縦位のミガキが施されている。

本遺構の時期は、床面上から出土した遺物の年代から６世紀前半から中葉と推定される。



第14図　(1・2) SI−004（１）



第15図　(1・2)SI-004(2)

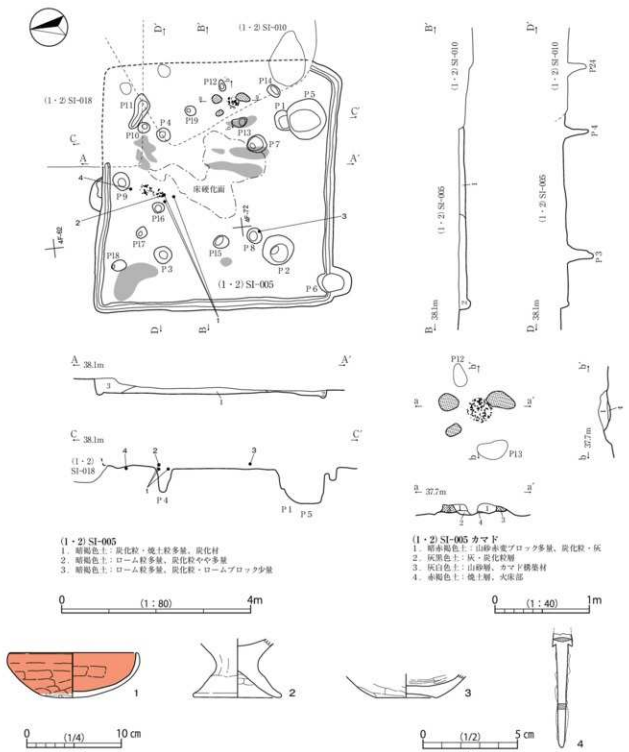
(1・2) SI-005(第16図、第2・7・10表、図版5・30・36)

4F-61・62・71・72 グリッドに所在する。上面は大きく削平を受けており、床面付近のみが検出された。北東側で(1・2)SI-010・018と重複する。本遺構は(1・2)SI-010より古く、(1・2)SI-018より新しい。平面形は方形で、主軸方向はN-97°-Eである。規模は推定主軸長5.2m、幅5.2mで、確認面からの深さは0.2mである。カマドは東側に敷設されていたものと思われる。SI-010の掘り方により削平を受けており、袖の一部と火床部の痕跡が確認できた。袖は灰白色の山砂を構築材としている。壁溝は残存部を全周しており、幅18cm～25cmで深さは平均8cm程度である。ピットは18基を検出した。P1～P4が主柱穴にあたるものと考えられる。P1は残存径45cm・深さ40cm、P2は径72cm・深さ50cm、P3は径40cm・深さ53cm、P4は径30cm・深さ40cmである。P5は貯蔵穴と推定され、径90cm・深さ64cmである。床面はカマドの推定される焚き口付近が硬化しており、床面上および覆土中からは炭化材、炭化物粒、焼土粒が多く検出された。

覆土が浅く、帰属が明確な遺物は少ないが、床面上で出土した4点を図示した。1は椀形の土師器坏で

ある。内外面ともにヘラナデにより調整され、赤彩が施される。2は土師器高坏の脚部である。下部は「ハ」の字に開き、脚高は低い。3は甕の底部である。ヘラケズリにより整形されている。4は床面上から出土した鉄鎌の柄部である。

本遺構の時期は、重複関係および出土遺物から6世紀前半と推定される。

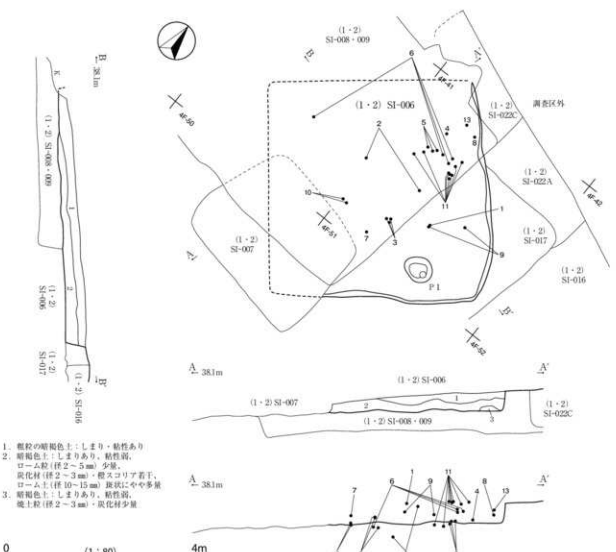


第16図　(1・2) SI-005

(1・2) SI−006（第17・18図、第２・７・８表、図版５・６・30・31・36）

4F−31・40・41・50・51 グリッドに所在する。(1・2) SI−007・008・009・017・022と重複し、(1・2) SI−008・009・017の覆土を掘り込んで床面を構築している。上面は西から東にかけての傾斜による削平を受けており、北西壁と南西壁は検出できなかった。新旧関係は、本遺構が(1・2) SI−007より古く、(1・2) SI−008・009・017・022より新しい。平面形は方形と推測される。確認できた東壁の方位から、主軸方向はN−38°−Wと考えられる。推定規模は１辺が4.5m～4.7mで、確認面からの深さは0.4mである。壁溝は確認されなかった。ピットは１基を検出した。床面上での位置関係から主柱穴と推定され、長径60cm・短径48cm・深さ76cmである。

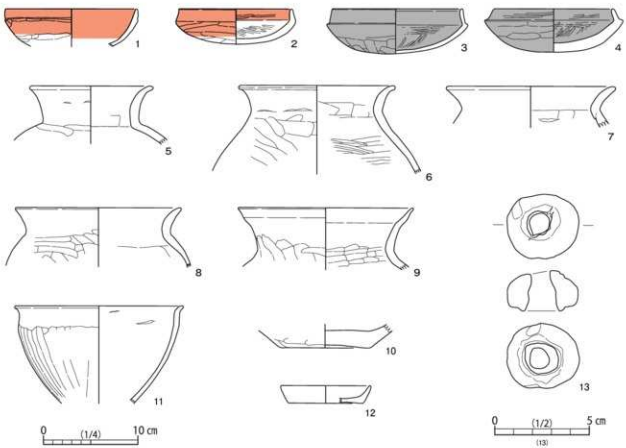
遺物は13点を図示した。１～４は土師器坏である。１・２は覆土中からの出土で、内外面が赤彩されている。１は椀形の坏で、２は口縁部が小さく内傾する。３・４は床面付近から出土した須恵器模倣坏で、口縁部は体部との間に段状の稜を作り内傾する。内外面ともにミガキが施され、黒色処理されている。５～10は土師器甕である。５は口縁部が頸部から直上に立ち上がり上部で短く外反する。６は口縁部が外



第17図　(1・2) SI−006（１）

反し、胴部の膨らみが弱い。7～9は「く」の字状に屈曲する口縁部破片である。9は口縁部上部が横位のナデにより、やや角度を変えて外反する。また外面にススの付着が認められる。10は底部破片である。11は甕あるいは甑である。12は覆土中から出土した近世の灯明皿で、混入したものと考えられる。13は土玉である。

本遺構の時期は、重複関係と床面上の出土遺物から6世紀中葉と推定される。



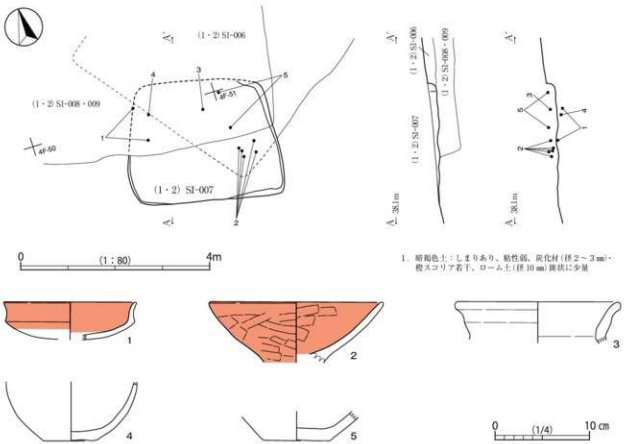
第18図　(1・2) SI-006 (2)

(1・2) SI-007 (第19図、第2・7表、図版5・6・31・36)

4F-40·41·50·51グリッドに所在する。上面が削平を受けており、底面付近のみが検出された。北側で(1·2) SI-006・008・009と重複し、本遺構のほうが新しい。平面形は長方形を呈し、南壁から長軸方位はN-78°-Wと捉えられるが、規模は主長軸3.25m、推定短軸2.55mと小規模で、底面からも柱穴等は確認できなかった。遺構の性質としては、竪穴住居跡にはあたらない可能性が高い。確認面からの深さは0.22mである。

遺物は5点を図示した。1は土師器坏である。口縁部高が体部より高く、体部との間に陵を作って外反する。器面は摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、内外面に赤彩の痕跡がある。2は土師器高坏である。陵を持たずに外傾する坏部で、内外面ともにヘラナデによる調整が施され、赤彩されている。3～5は土師器甕である。3は口縁部破片である。器面は横位のナデにより調整されている。4は甕の胴部から底部である。器面の摩耗が著しく調整は不明である。二次的な被熱によるものとも考えられる。5は底部破片である。ヘラナデによる調整が施される。

本遺構の時期は、重複関係から6世紀中葉以降と推定される。



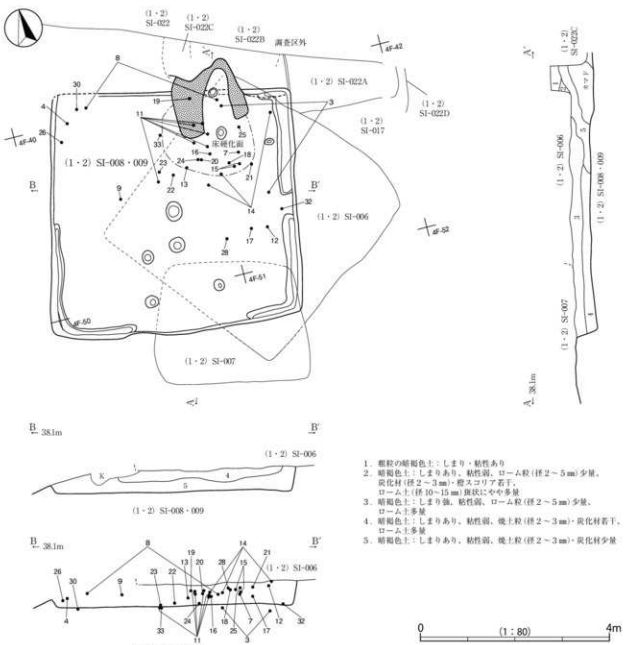
第19図　(1・2) SI-007

(1・2) SI-008・009（第20～22図、第２・７・８表、図版５～７・31・32・36）

4F-30・40・41・50・51 グリッドに所在する。東側で(1・2) SI-006・007・022と重複し、覆土が掘り込まれており、本遺構のほうが古い。SI-008・SI-009の二つの遺構として調査したが、カマドおよび床面の状況から１軒の竪穴住居跡と捉えられる。平面形は方形で、主軸方向はＮ-11°-Ｅである。規模は主軸長5.18m、幅5.23mで、確認面からの深さは0.48mである。カマドは北壁の北東隅寄りに付設されている。袖は壁から80cmほどが依存しているが、火床面の痕跡は明瞭ではない。壁溝は幅10cm ～ 25cm・深さ平均約９cmで、南側の両隅および北東隅で確認された。床面はカマドの焚き口前面の１m×２mの範囲が硬化している。床面上で確認されたピットは径20cm ～ 30cm・深さ30cm ～ 50cmで、いずれも性格は不明である。

覆土中、特にカマド周囲から多くの遺物が出土しており、このうち36点を図示した。１～10は土師器坏である。１～３は椀形の坏である。１はやや器高が高く外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。２は器面の摩耗により不明瞭ではあるが、内面にミガキが施され、内外面に赤彩の痕跡が認められる。３は口縁部がやや内傾し、口唇部に細かな欠損がめぐる。４はいわゆる比企型の坏である。口縁は断面Ｓ字状に屈曲し丸底である。口縁部外面および内面が赤彩されている。５は口縁部が体部との間に明瞭な稜を作って外傾する。器面はミガキが施されている。６～８は須恵器模倣坏である。いずれも内面にミガキが施されており、６・７には赤彩、８は黒色処理が認められる。９は扁平な丸底の坏である。内外面に黒色

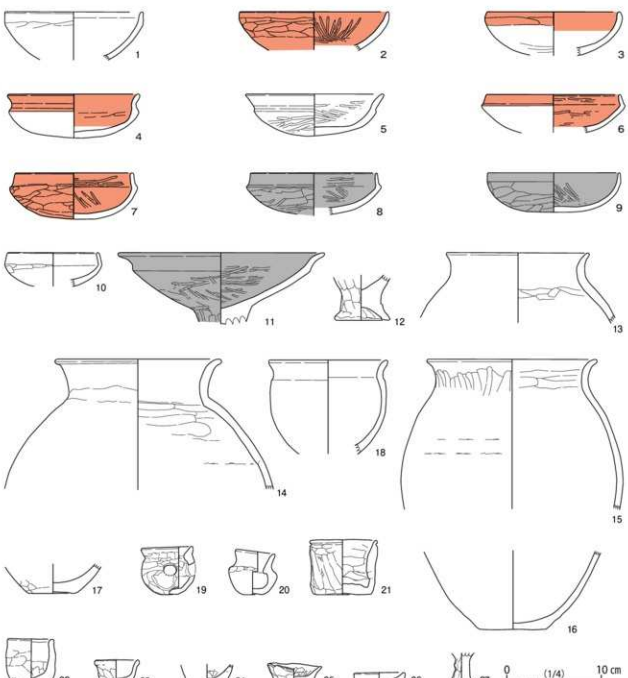
処理の痕跡がある。10は口縁部が内傾する小型の坏である。11・12は土師器高坏である。11は坏部から接脚部で、口縁部は体部との間に稜を持って外反する。内外面にミガキが施され、黒色処理される。12は脚部の破片である。脚高は低く下部が小さく広がる。13～17は土師器甕である。13・15は口縁部が緩やかに外反する。14は口縁部が肩部で屈曲して立ち上がり、上方が小さく外反する。15・16は器面・胎土が類似しており同一個体と考えられる。２次的な被熱を受け器面が剥落している。17は底部破片である。18は土師器甕あるいは鉢である。器面の摩耗が著しい。19～27はミニチュア土器である。カマド焚き口の前方で多く出土した。19・20は壺あるいは甕形である。19は胴部に焼成前の穿孔があり、孔の周囲に意図的とも見れる欠損が認められる。器面はヘラケズリにより整形される。20は手捏ねによる整形の後、器面を



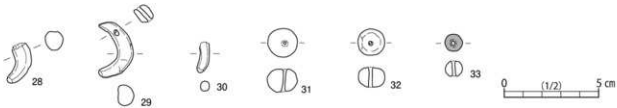
第20図　(1・2) SI-008・009 (1)

丁寧にナデ調整している。21 ～ 25は手捏ねによる鉢形で、器面に指頭痕を多く残す。26は横位の指ナデにより整形されている。27は高坏形の脚部と思われる。28 ～ 30は土製勾玉である。31 ～ 33は土玉である。全体的に平滑に仕上げられている。33は表面が黒色を呈している。

本遺構の時期は、重複関係および床面付近の遺物の年代から６世紀前半～中葉と推定される。



第21図　(1・2) SI-008・009(２)

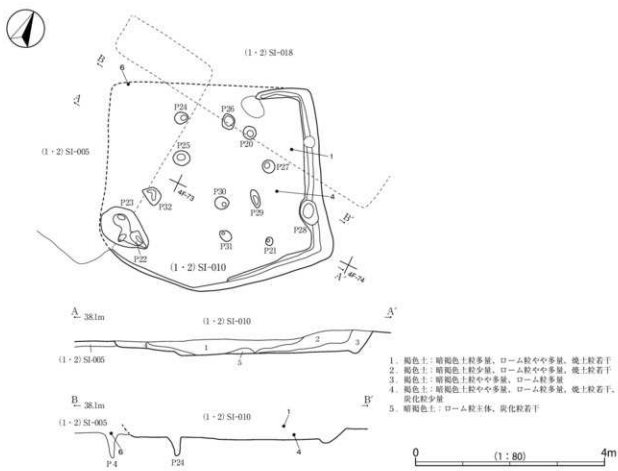


第22図　(1・2) SI-008・009(3)

(1・2) SI-010（第23・24図、第2・7～9表、図版5・32・37）

4F-62・63・72・73グリッドに所在する。西側で(1・2) SI-005・018と重複し本遺構の方が新しい。平面形は不整方形と推定される。東壁の方位から主軸方向はN-24°-Wと考えられる。規模は推定主軸長4.5m、推定幅4.2mで、確認面からの深さは0.48mである。壁溝は東側を半周する形で確認された。幅20cm～38cmで、深さは約10cmである。床面上からは14基のピットが確認されたが、いずれも柱穴といえる規模、配置ではない。

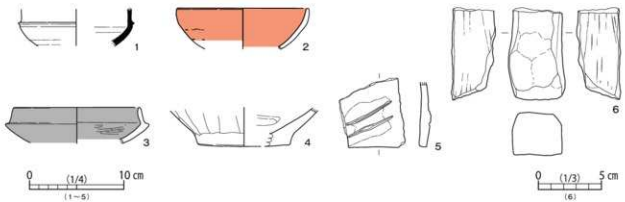
出土遺物はいずれも小片ではあるが6点を図示した。1は覆土中から出土した須恵器坏の破片である。MT15型式に比定される。2は椀形の坏である。内外面は赤彩されている。3は須恵器模倣坏である。内面にミガキ、器面には黒色処理が認められる。4は甕の底部破片である。ヘラケズリにより整形されている。



第23図　(1・2) SI-010(1)

5は甕の胴部破片を用いた転用砥石である。6は砂岩製の砥石である。

本遺構の時期は、重複関係から6世紀中葉と推定される。



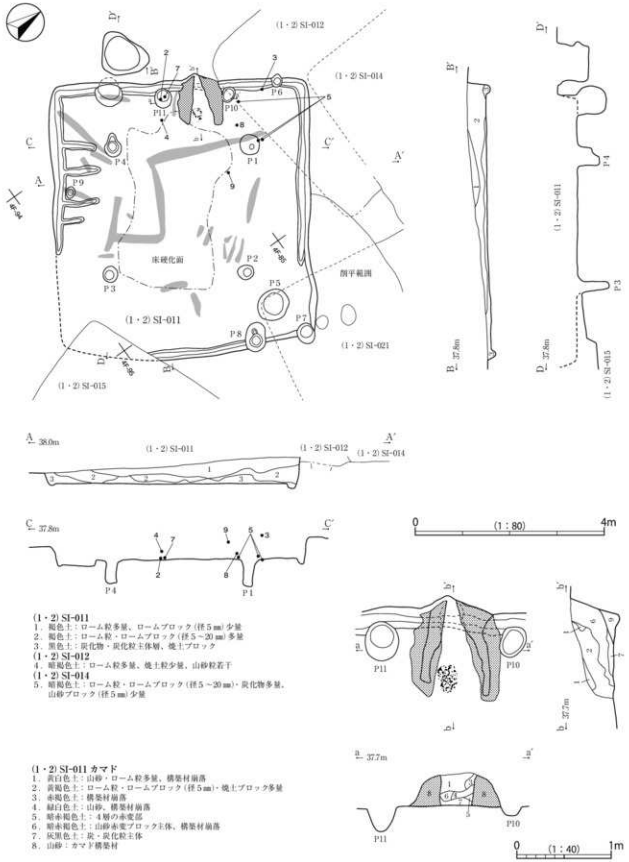
第24図　(1・2)SI-010(2)

(1・2) SI-011(第25・26図、第2・7・8表、図版7・8・32・37)

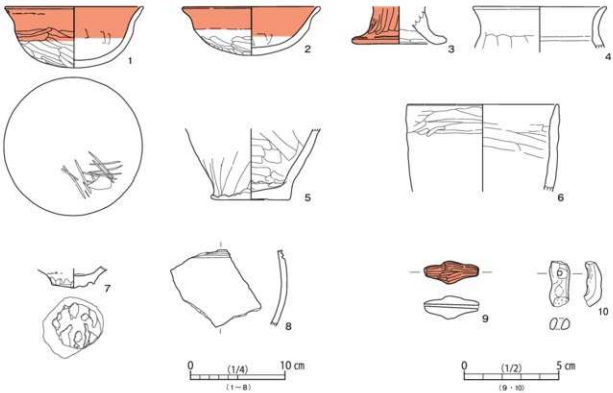
4F-74・75・83～85・94グリッドに所在する。北東側から南東側にかけて(1・2)SI-012・015・021と重複し、本竪穴のほうが古い。平面形は方形で、主軸方向はN-58°-Wである。規模は主軸長5.84m、幅5.5mで、確認面からの深さは0.56mである。カマドは北西壁のほぼ中央に付設されている。袖は黄白色から緑灰色の山砂を構築材とし、壁から約90cmが遺存する。煙道の張り出しはわずかで、北西壁を約15cm掘りこんでいる。火床面は被熱箇所が円形に赤化するが、窪みは浅い。壁溝は東側隅を除き残存部分を全周している。また、カマド袖を除去した際、カマド下部にも続いていることが確認された。壁溝の深さは平均6cmである。南西壁側の壁溝に直行する形で4条の間仕切り溝が検出された。4条が並行し長さは50cm～70cmで、深さは50cmほどである。ピットは11基を検出した。P1～P4は主柱穴である。P1は径88cm・深さ54cm、P2は径31cm・深さ53cm、P3は径32cm・深さ50cm、P4は径34cm・深さ47cmである。東隅のP5は貯蔵穴と考えられ、径64cm・深さ69cmである。その他のピットは壁柱穴と考えれられる。P10・P11についてはカマドの両脇に所在し、何らかの付帯施設の可能性もある。床面は主柱穴の内側が広く硬化している。床面上には炭化物・焼土が堆積し、炭化材も多く検出された。火災を受け焼失した建物と推測される。

遺物は10点を図示した。1・2は器高が高い土師器坏である。内外面上半部が赤彩されている。1は内面にススの付着がみられ、また底面は砥石として転用されている。3は土師器高坏の脚部である。ヘラケズリにより整形され、外面が赤彩されている。4・5は土師器甕である。4は緩やかに外反する口縁部の破片で、5はヘラケズリが施された底部である。6は甑である。器面は粗いナデによる調整が施されている。7は甕の底部である。底面は棒状の工具の痕跡が残り、調整はみられない。8は土器片を転用した砥石である。9は土玉である。表面は平滑に仕上げられている。10は勾玉と思われる土製品である。整形は粗い。

本遺構の時期は、床面上の出土遺物および重複関係から6世紀初頭と推定される。



第25図　(1・2) SI-011 (1)



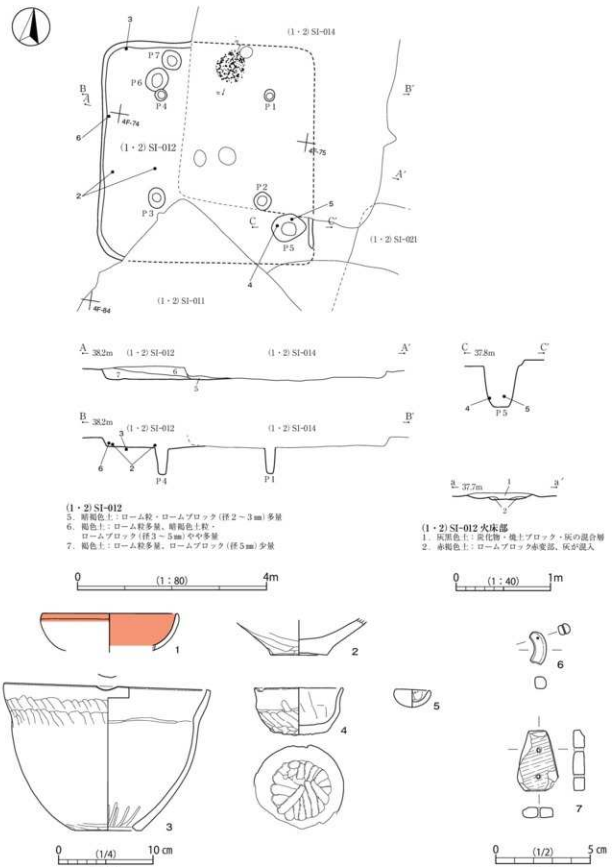
第26図　(1・2) SI-011(2)

(1・2) SI-012（第27図、第2・7～9表、図版8・9・32・37）

4F-63・64・73～75グリッドに所在する。上面は大きく削平されており、床面付近が検出された。東側の大部分が(1・2) SI-011・014と重複している。本遺構は(1・2) SI-011より新しく、(1・2) SI-014より古い。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-7°-Wである。規模は主軸長推定4.6m、幅4.54mで、確認面からの深さは0.28mである。カマドは火床面の痕跡から北壁に付設されていたものと考えられる。火床面は浅く皿状に窪み、底面は被熱により赤化している。壁溝は確認できなかった。ピットは7基を検出した。P1～P4が主柱穴と考えられる。P1は径24cm・深さ47cm、P2は径44cm・深さ35cm、P3は径48cm・深さ42cm、P4は径24cm・深さ52cmである。南東隅に位置するP5は長径72cm・短径59cm・深さ85cmで、貯蔵穴と推定される。P6・P7の性格は不明である。

遺物は7点を図示した。1は土師器坏の破片である。器面が摩耗しており調整等は明瞭ではないが、内外面に赤彩の痕跡が認められる。2は土師器甕の底部である。ヘラケズリにより整形される。3は甑である。北西隅から完形で出土した。口径に対する器高が低く、口縁部に焼成前に付けられたわずかな凹みがある。外面はヘラケズリの後ナデによる調整、内面は従位のミガキが施されている。4は特殊な器形を呈する土師器である。底面には棒状工具により粘土を切り離した痕が顕著に残り、上半部は横位のナデにより丁寧に整形されている。内面にススが付着しており、口唇部には意図的な欠損がみられる。5はミニチュア土器である。器面はヘラナデによって整えられ、被熱している。6は土製の勾玉である。7は石製模造品である。平面は方形で2か所の穿孔がある。

本遺構の時期は、重複関係から6世紀前半と推定される。



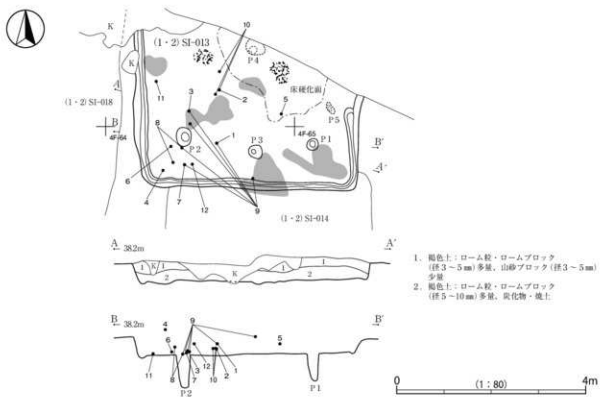
第27図　(1・2) SI-012

(1・2) SI-013（第28・29図、第２・７・８表、図版９・32・33・37）

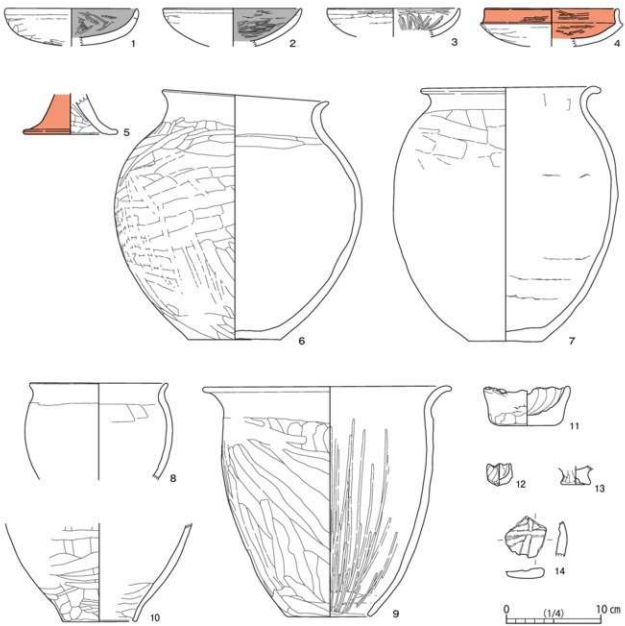
4F-54・55・64・65グリッドに所在する。調査区の北端で検出され、遺構の北半分は調査外に伸びる。南側で(1・2) SI-014と重複し、本遺構のほうが新しい。平面形は方形と推定され、西壁の方位から主軸方向はN－1°－Eと考えられる。規模は推定主軸長3.46m、幅4.74mで、確認面からの深さは0.6mである。カマドは調査区外の北壁に付設されていたものと考えられる。壁溝は残存部をほぼ全周している。ピットは床面下を含む４基を検出した。P1・２は主柱穴にあたると考えられる。P1は径22cm・深さ57cm、P2は長径40cm・短径30cm・深さ73cmである。P3は径30cm・深さ29cmで入口施設と考えられる。P4は硬化面下で検出された。径48cm・深さ23cmである。床面は中央部が硬化しており、床面上からは炭化物や焼土塊が多く検出された。

遺物は14点を図示した。１～４は土師器坏である。いずれも扁平で、内面にミガキが施されている。１～３は椀形、４は須恵器模倣坏である。１・２は黒色処理の痕跡が認められる。４は内外面が赤彩されている。５は土師器高坏の脚部である。脚高は低く、裾はハの字状に開く。外面が赤彩されている。６～８は土師器甕である。６は口縁部が外反し、胴部は球状を呈する。器面は粗いヘラケズリにより整形される。７は口縁部が大きく外反し、胴部は最大径を胴部上半に持ち卵球状となる。８はやや小型で口縁部が外反する。９・10は甑である。９は口縁部は外反し、外面はヘラケズリ、内面は従位のミガキが施されている。10は粗いヘラケズリにより整形されている。11～13は手捏ねによるミニチュア土器である。11は内面に指頭による放射状の調整が施されている。12は被熱し器面が変色している。13は高坏を模倣したミニチュア土器の脚部と考えられる。14は土師器甕の胴部破片を用いた土器転用砥石である。

本遺構の時期は、出土遺物と重複関係から６世紀中葉と推定される。



第28図　(1・2) SI-013(１)



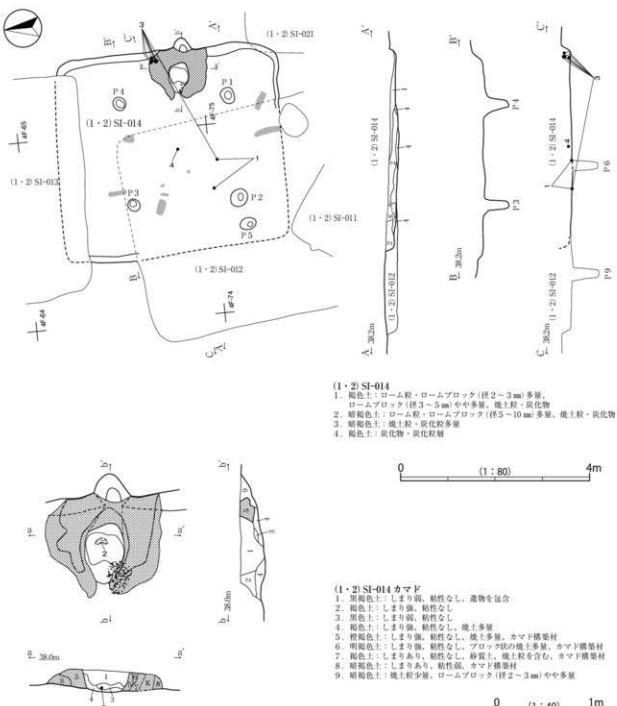
第29図　(1・2) SI-013 (2)

(1・2) SI-014 (第30・31図、第2・7・9表、図版9・10・33・37)

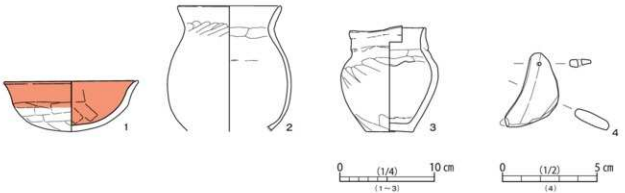
4F-64・65・74・75グリッドに所在する。上面は大きく削平されており、床面近くが検出された。(1・2) SI-012・013重複し、本遺構の方が新しい。南東隅で(1・2) SI-021と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は方形で、主軸方向はN-92°-Eである。規模は主軸長4.3m、推定幅4.66mで、確認面からの深さは0.24mである。カマドは東壁中央に付設されている。袖は暗褐色から橙褐色土を構築材とし壁から約1mが遺存している。火床面は浅く皿状に窪み、2の甕土師器甕が出土した。煙道は東壁を約30cm掘り込んでいる。壁溝は確認されなかった。ピットは5基を検出した。P1～P4は主柱穴にあたる。P1は径36cm・深さ56cm、P2は径38cm・深さ40cm、P3は径29cm・深さ52cm、P4は径30cm・深さ43cmである。床面上では炭化物が多く検出された。

遺物は４点を図示した。１は土師器坏である。丸底で口縁部は外反し、器面はナデにより調整され、外面上半部と内面が赤彩されている。２は土師器甕である。やや小型で口縁部は「く」の字に屈曲する。被熱しており調整は不明瞭である。３はカマド袖付近から出土した小型の甕である。頸部に輪積み痕を残し、口縁部は直立する。内外面ともにヘラナデによる調整が施される。４は石製模造品である。

本遺構の時期は、出土遺物と重複関係から６世紀前半と推定される。



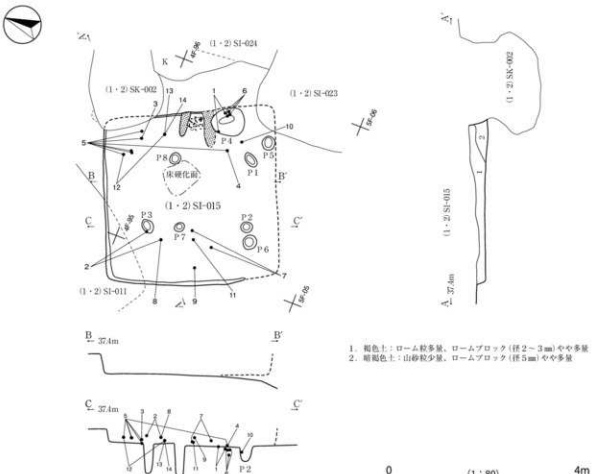
第30図　(1・2)SI-014(1)



第31図　(1・2)SI-014(2)

(1・2) SI-015（第32～34図、第2・7～9表、図版10・33・37）

4F-84・85・94・95グリッドに所在する。上面は北から南へ向かっての傾斜により削平を受けており、南壁は検出できなかった。(1・2) SI-011・023、(1・2) SK-002と重複する。本遺構は(1・2) SI-011より新しく、(1・2) SK-002より古い。(1・2) SI-023との新旧関係は不明である。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-67°-Eである。推定規模は1辺約3.6mで、確認面からの深さは0.28mである。カマドは東

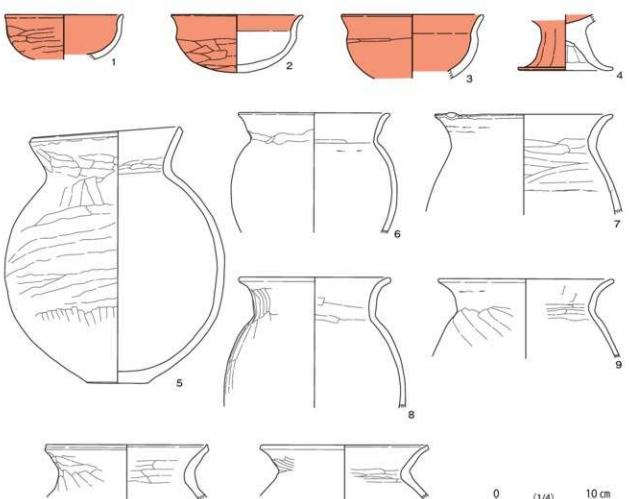


第32図　(1・2)SI-015(1)

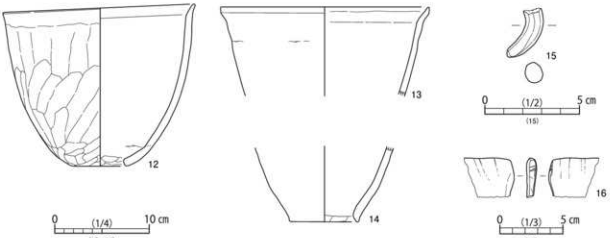
壁中央に付設されている。袖は壁面から76cm、底面から高さ15cmが遺存している。ピットは8基を検出した。竪穴の規模が小さく、床面上での位置関係からも主柱穴は明確ではない。南東隅よりに位置するP4は長径70cm・短径59cm・深さ36cmで貯蔵穴と推定される。床面は中央部がわずかに硬化している。

遺物は16点を図示した。1～3は土師器坏である。1は口縁部がほぼ直立しわずかに外反する。2・3は口縁部が外反する。3点とも丸底で器高が高く、内外面に赤彩が施されている。4は土師器高坏である。脚高は低く、裾部は「ハ」の字状に開く。外面および坏部内面が赤彩されている。5～11は土師器甕である。5はほぼ完形で、口縁部は「く」の字に屈曲して外傾し、胴部は球状を呈する。6・7は屈曲する口縁部から胴部にかけての破片で、6はP4から出土した。7は口唇部に指頭による凹みが付けられている。8は頸部がほぼ直立し上部で外反する。胴部の膨らみは弱く、従位のヘラケズリにより整形されている。9は口縁部が外反する。10･11は口唇部端部を上方に摘まみ上げる口縁部の破片である。12～14は甑である。12は胴部から口縁部にかけて境がなく、外面はヘラケズリによる整形、内面はヘラナデによる調整が施される。13・14は器面の特徴から、同一個体とも考えられる。15は土製勾玉である。16は砥石である。

本遺構の時期は、出土遺物および重複関係6世紀初頭～前半と推定される。



第33図　(1・2)SI-015(2)



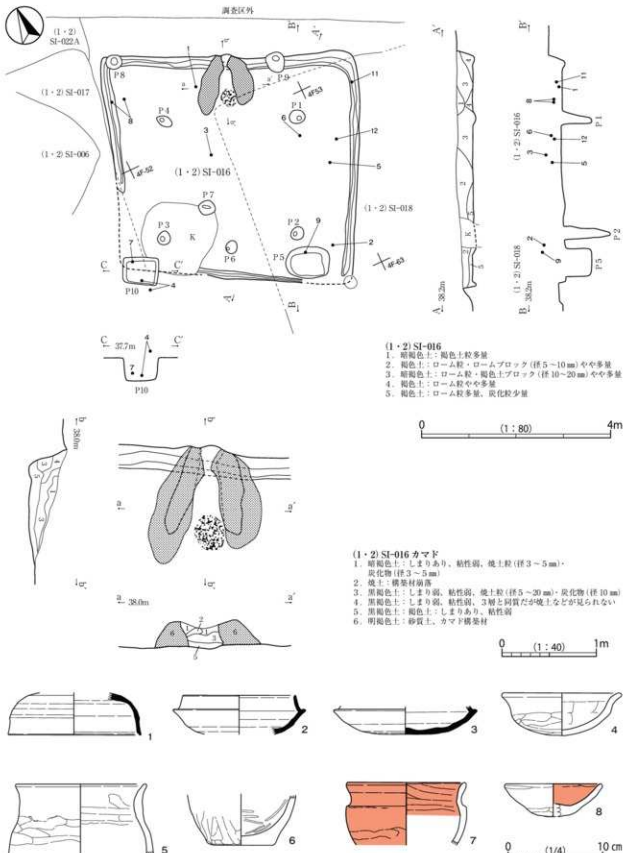
第34図　(1・2) SI-015(3)

(1・2) SI-016（第35・36図、第2・7～10表、図版10・11・34・37）

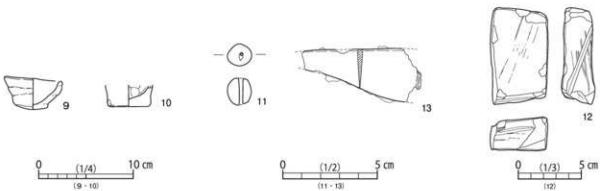
4F41～43・51～53・62グリッドに所在する。西側で(1・2) SI-017、東側で(1・2) SI-018と重複し、本遺構のほうが新しい。平面形は不整方形で、主軸方向はN-27°-Eである。規模は主軸長4.64m、幅5.42mで、確認面からの深さは0.35mである。カマドは北東壁の中央に設けられている。袖は明褐色砂質土を構築材として用い、壁から約120cmが遺存している。火床面は浅く皿状に窪み、奥壁付近が被熱により赤化している。煙道の張り出しはわずかである。壁溝は幅15cm～30cm・深さ4cm～8cmで検出部分を全周しており、カマド袖を除去した下部からも確認された。ピットは10基を検出した。主柱穴はP1～P4と考えられる。P1は径30cm・深さ57cm、P2は径28cm・深さ96cm、P3は径30cm・深さ43cm、P4は長径38cm・深さ46cmである。北東隅に位置し平面が方形を呈するP5は貯蔵穴と考えられ、長軸90cm・短軸68cm・深さ55cmである。P6は径25cm・深さ42cmで入口施設と推定される。P8・P9は壁柱穴である。P10は本遺構内の施設として調査したが、位置関係から重複する別な竪穴住居跡の貯蔵穴と考えられる。長軸76cm・短軸56cm・深さ47cmの方形を呈する。

遺物は13点を図示した。1は須恵器坏蓋である。MT15型式に比定される。2・3は須恵器坏身である。2はTK10、3はTK43型式に比定されようか。4は土師器坏である。丸底で口縁部が外反し、内外面に刷の混入痕が複数認められる。5・6は土師器甕である。5は緩やかに外反する口縁部から胴部の破片である。6は底部である。外面はヘラケズリによる整形、内面はヘラナデが施される。7は小型の土師器甕である。口縁部から肩部にかけて断面S字状に屈曲し、内外面が赤彩されている。8はミニチュア土器または小型の坏である。器面はヘラナデによる調整が施され、内面は赤彩されている。9・10は手捏ねによるミニチュア土器である。器面に輪積み痕、指頭痕を残している。11は土玉である。表面は平滑に整えられている。12は砂岩製の砥石である。13は鉄製鎌である。4・7については、P10内から出土しており、本遺構に帰属しないものと考えられる。

本遺構の時期は、重複関係および出土遺物の特徴から6世紀前半と推定される。



第35図　(1・2) SI-016 (1)

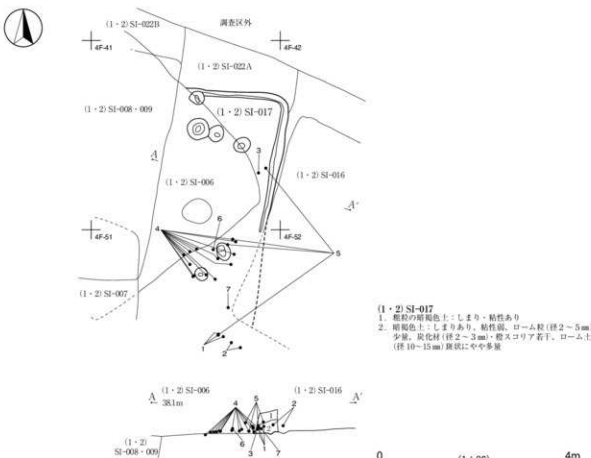


第36図　(1・2)SI-016(2)

(1・2) SI-017(第37・38図、第2・7表、図版11・34・37)

4F-41・42・51・52グリッドに所在する。(1・2) SI-006・008-009・016・022と重複し大部分が失われており、北東隅部分の床面付近のみが検出された。(1・2) SI-006・008-009・016より本遺構の方が古いが、(1・2) SI-022との新旧関係は明確にできなかった。平面形は方形と推定される。残存する東壁の方位はN-11°-Eである。残存規模は南北2.9m、東西2.2mで、確認面からの深さは0.25mである。壁溝は確認されなかった。

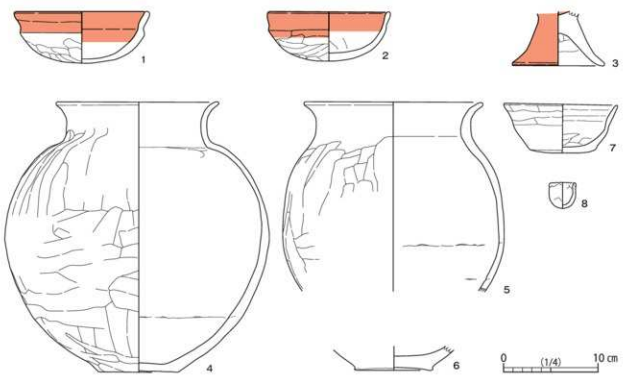
本遺構に帰属するとみられるピットは8基を検出したが、いずれも性格は不明である。



第37図　(1・2)SI-017(1)

遺物は８点を図示した。１・２は土師器坏である。２点ともに内外面上半部が赤彩されている。１は口縁部が体部との間に稜を作り外反する。２は口縁部がほぼ直立する。３は土師器高坏の脚部である。脚高は低く「ハ」の字状に開く。外面および坏部底面に赤彩が認められる。４～６は土師器甕である。４はほぼ完形で、口縁部は肩部から直立して上方で外反し、胴部は球状を呈する。５は口縁部が外反し胴部の膨らみは弱い。６は底部破片である。ヘラケズリにより整形される。７は小型の鉢である。器面はヘラケズリの後ナデにより調整されており、口縁部外面は被熱により変色している。８は手捏ねによるミニチュア土器である。

本遺構の時期は、主に重複関係から６世紀前半と推定される。



第38図　(1・2)SI-017(２)

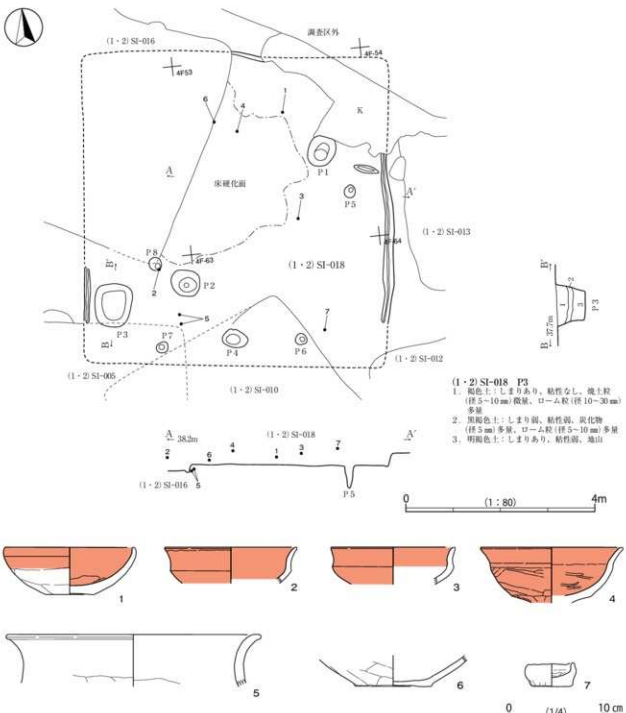
(1・2) SI-018（第39図、第２・７表、図版11・34・37）

4F-42・43・52～54・62～64グリッドに所在する。(1・2) SI-005・010・012・016・022と重複し、本遺構の方が古い。また上面は大きく削平されており、中央部の床面付近のみが検出された。平面形は方形と推定され、残存する東壁の方位から主軸方位はN-6°-Eと考えられる。規模は推定主軸長6.6m、幅6.54mで、確認面からの深さは0.23mである。壁溝は東壁および西壁の一部で確認された。幅15cm～20cm・深さ平均３cmである。ピットは８基を検出した。主柱穴等の性格は不明であるが、P1は径62cm・深さ67cm、P2は径60cm・深さ51cmで柱穴と推定される。P3は貯蔵穴と考えられ、長軸90cm・短軸70cm・深さ61cmで方形を呈する。床面はP1・P2間のやや北西に寄った範囲が硬化している。

遺物は７点を図示した。１～３は土師器坏である。１は口縁部と体部に境を持たず、底部はヘラケズリによる平底である。２・３は体部との間に稜を持って外反する口縁部の破片で、内外面が赤彩されている。

4は土師器高坏の坏部である。口縁部は外傾し下部は半球状となる。5・6は土師器甕である。5は外反する口縁部の破片である。6は底部破片でヘラケズリにより整形される。7は手捏ねによるミニチュア土器である。

本遺構の時期は、主に重複関係から5世紀末～6世紀初頭と推定される。



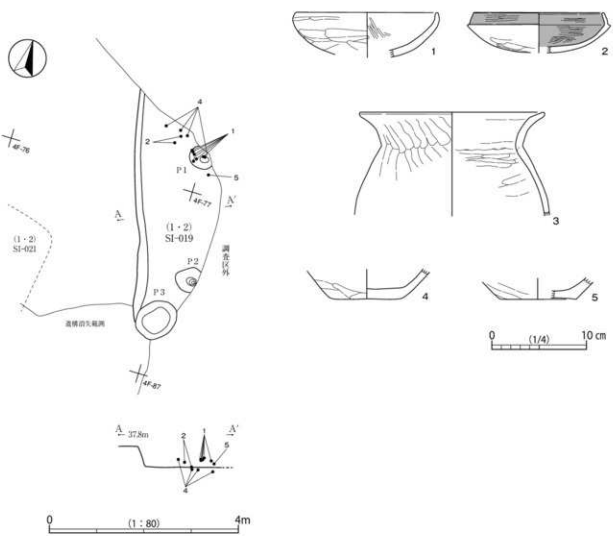
第39図　(1・2) SI-018

(1・2) SI-019 (第40図、第２・７表、図版11・34・35・38)

4F-66・67・76・77グリッドに所在する。調査区の北東隅で西壁側の一部のみが検出された。(1・2) SI-020と重複し本竪穴のほうが新しい。残存する西壁の方位はN-12°-Wである。規模は残存南北長4.8m、残存幅1.66mで、確認面からの深さは0.45mである。ピットは３基を検出した。P1は径52cm・深さ43cm、P2は径56cm・深さ50cmで位置関係、形状から主柱穴にあたるものと考えられる。P3は径82cm・深さ17cmの落ち込みで、性格は不明である。

遺物は５点を図示した。１・２は土師器坏である。１は口縁部が小さく内傾する丸底の坏である。２はやや扁平な須恵器模倣坏で、内面および外面口縁部が黒色処理されている。３～５は土師器甕である。３は屈曲して外反する口縁部から肩部の破片である。外面はヘラケズリにより整形されている。４・５は底部破片である。

本遺構の時期は、出土遺物の特徴から６世紀後半と推定される。



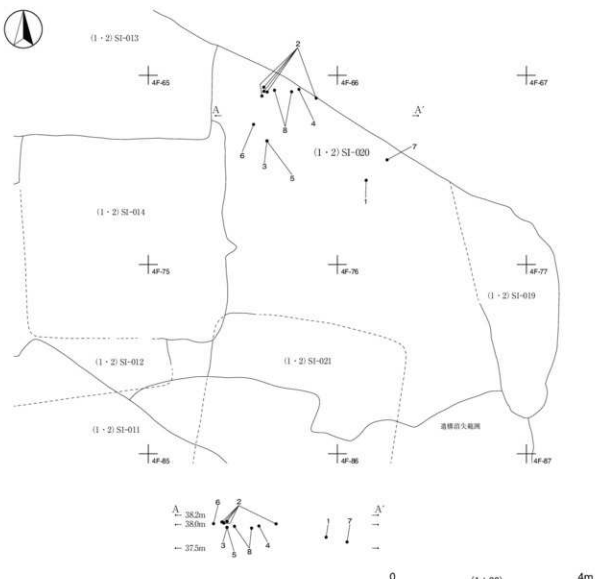
第40図　(1・2) SI-019

(1・2) SI-020（第41・42図、第２・７・８表、図版35・38）

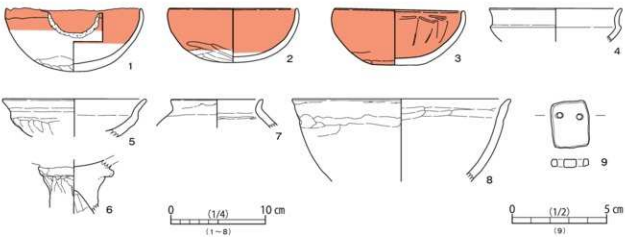
4F-55・65・66グリッドに所在する。(1・2) SI-013・014・019・021と重複し本竪穴の方が古い。周囲で複数重複する竪穴住居跡の中で、最も古い段階に位置づけられると考えられる。上面の遺構により大部分が失われており床面のみが確認された。そのほか遺構の詳細は不明である。

遺物は９点を図示した。１～４は土師器坏である。１～３は椀形で器高が高く、内外面が赤彩されている。５・６は土師器高坏で、器面の特徴から同一個体と考えられる。７は小型の甕である。頸部から口縁部が短く外傾する。８は下部が失われているが甑と考えられる。口縁部に対して器高が低い。９は土製品である。方形で２つの焼成前の穿孔がある。

本遺構の時期は、５世紀後半～末と推定される。



第41図　(1・2) SI-020（１）

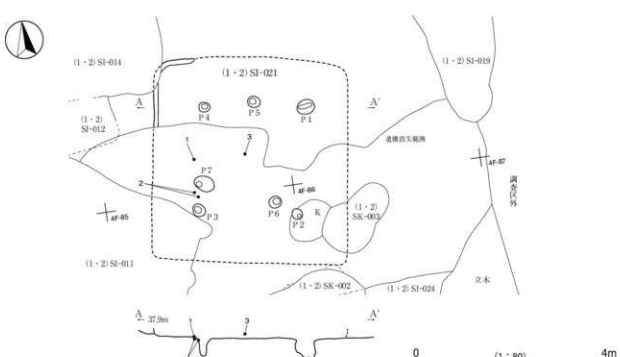


第42図　(1・2) SI-020 (2)

(1・2) SI-021 (第43・44図、第2・7表、図版11・35)

4F-75・76・85・86グリッドに所在する。北から南にかけての地形傾斜により削平を受けており、北西壁の一部と北側の床面のみが検出された。(1・2) SI-014・020・(1・2) SK-003と重複する。本遺構は(1・2) SI-020より新しく、(1・2) SK-003より古い。(1・2) SI-014との新旧関係は不明である。平面形はピットの配置から一辺が4.1m程度の方形になるものと推定される。確認面からの深さは25cmである。西壁の方位はN-9°-Eである。本遺構に帰属するとみられるピットは7基を検出した。P1～P4は主柱穴と考えられる。P1は径42cm・深さ40cm、P2は径20cm・深さ11cm、P3は径24cm・深さ18cm、P4は径24cm・深さ39cmである。

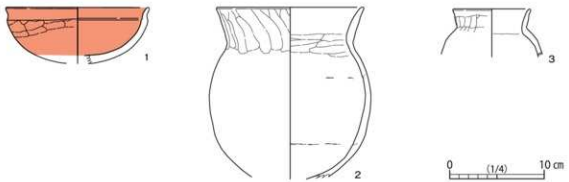
遺物は3点を図示した。1は土師器坏である。丸底でやや器高が高く、口縁部は小さく外反する。内外



第43図　(1・2) SI-021 (1)

面が赤彩されている。２・３は小型の土師器甕である。

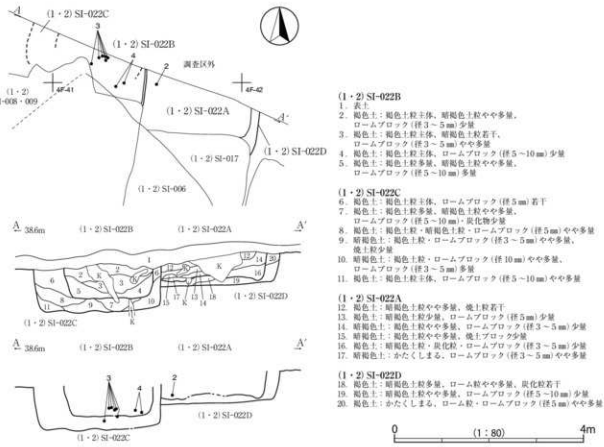
本遺構の時期は、重複関係および出土遺物から６世紀初頭と推定される。



第44図　(１・２)SI-021(２)

(１・２) SI-022（第45・46図、第２・７表、図版11・35・38）

4F-31・41・42グリッドに所在する。調査区の北壁断面で４軒の竪穴が重複する遺構として確認された。それぞれをＡ～Ｄの符号をつけて表し、重複関係は古い方から順にＤ＜Ａ＜Ｃ＜Ｂとなる。また(１・２) SI-006・008・009・017と重複する。新旧関係は不明確ではあるが、本遺構が最も古い時期のものであると考えられる。平面的な形態は大部分が把握できず、遺構の性質として竪穴住居跡にあたらないものが含ま

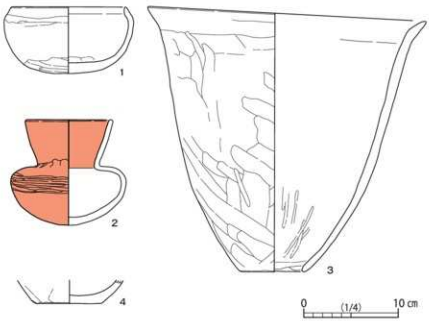


第45図　(１・２)SI-022(１)

れている可能性がある。

遺物は4点を図示した。1は土師器鉢である。丸底で口縁部は内傾する。2は土師器坩である。胴部は扁平で、器面は横位のミガキが施され赤彩されている。3は甕である。口縁部が外反し外面はヘラケズリ、内面に縦位のミガキが施されている。4は甕の底部である。

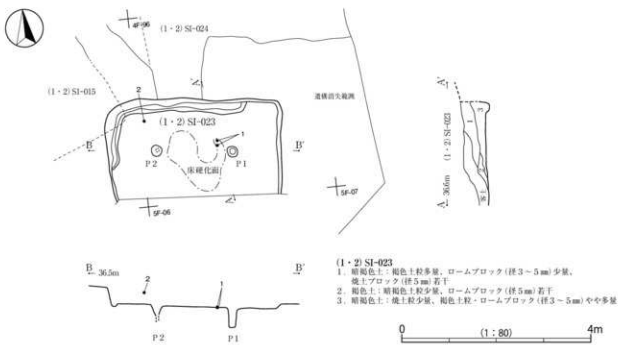
本遺構の時期は、出土遺物および重複関係から5世紀後半～末と推定される。



第46図　(1・2)SI-022(2)

(1・2) SI-023（第47・48図、第2・7・9表、図版12・35・38）

4F-95・96、5F-05・06グリッドに所在する。地形の傾斜により大きく削平を受けており、北側部分のみを検出した。(1・2) SI-024と重複し、本遺構のほうが新しい。平面形は方形で、東壁の方位はN-5°-Eであるが、検出された残存部からはカマド・入口施設が確認されておらず、主軸方位は不明である。規



第47図　(1・2)SI-023(1)

模は残存南北長2.14m・幅3.68mで、確認面からの深さは48cmである。北西隅壁で幅26cm・深さ3cmの壁溝が確認された。検出した2基のピットは主柱穴と考えられる。P1は径20cm・深さ56cm、P2は径24cm・深さ10cmである。P1・P2間の床面が硬化している。

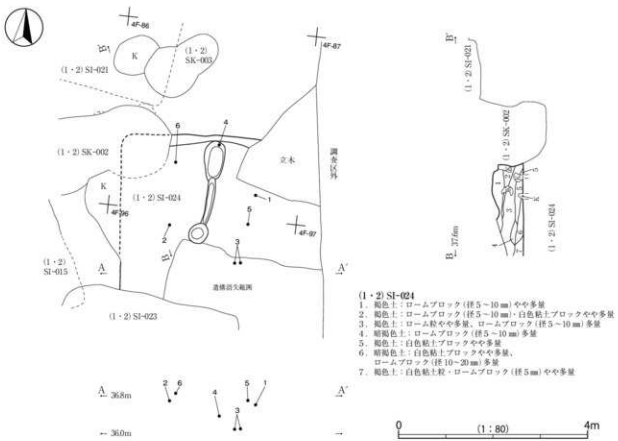
遺物は3点を図示した。1は土師器坏である。口唇部に赤彩の痕跡が認められる。2は甕の底部破片である。3は砂岩製の砥石である。

本遺構の時期は、出土遺物および重複関係から6世紀初頭と推定される。

第48図　(1・2) SI-023 (2)

(1・2) SI-024 (第49・50図、第2・7表、図版12・35・36・38)

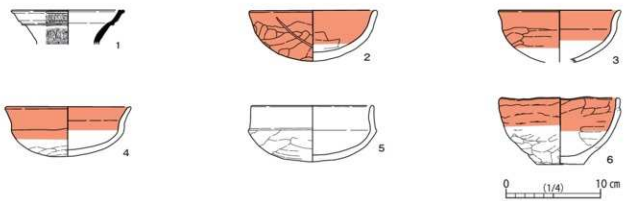
4F-86・87・96・97グリッドに所在する。調査区の東隅、南北にかけての傾斜面沿いで、北壁および床面の一部が確認された。(1・2) SI-023および中世の地下式坑(1・2) SK-002と重複する。残存する北壁の方位はN-95°-Wである。残存規模は南北3.7m・東西4.3mである。



第49図　(1・2) SI-024 (1)

遺物は６点を図示した。床面等の大部分が失われており、いずれも帰属は明確ではない。１は須恵器である。器面に櫛描き波状文を施している。TK47型式に比定されようか。２～５は土師器坏である。２～４・６は内外面に赤彩されている。６は土師器鉢である。

図示した遺物は、５世紀後半から６世紀前半のものと考えられるが、本竪穴に伴う可能性は低いことから遺構の時期は不明である。



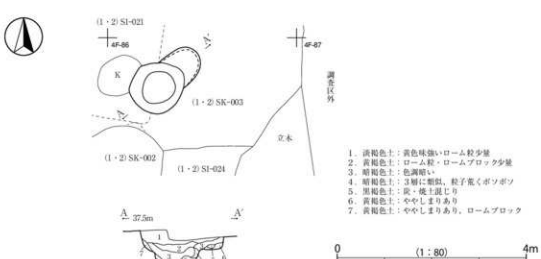
第50図　(1・2) SI-024 (２)

２　土坑

(1・2) SK-003 (第51図、第３表、図版13)

4F-86グリッドに位置する。遺構の性格は不明である。(1・2) SI-021と重複し、本遺構のほうが新しい。平面形は楕円形で、長軸方位はN-48°-Eである。規模は長軸1.68m・短軸1.08m・深さ0.48mである。覆土に焼土・炭化物が含まれる。

遺物は出土しなかったことから、本遺構の時期は不明である。



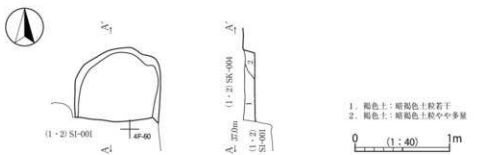
第51図　(1・2) SK-003

(1・2) SK-004 (第52図、第３表、図版13)

4E-59・4F-50グリッドに位置する。遺構の性格は不明である。(1・2) SI-001と重複し、本遺構のほうが古い。重複により南側が失われている。平面形は不整な楕円形で、規模は南北残存1.54m・東西1.80m・深さ0.32mである。

遺物は出土しなかった。

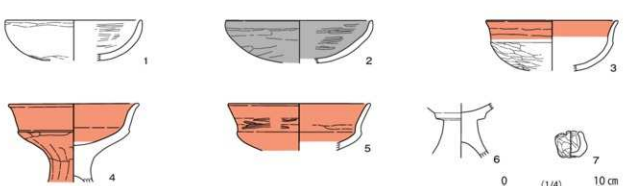
本遺構は重複関係から古墳時代のものと推定されるが、詳細な時期は不明である。



第52図　(1・2) SK-004

3　遺構外出土の遺物 (第53図、第７表、図版36)

本調査区におけるグリッド一括または遺構に伴わない古墳時代の出土遺物の内、特徴的なもの７点を図示した。１～３は土師器坏である。１・２はやや扁平な椀形の坏で、外面はヘラナデの後、口縁部を横位のナデにより調整され、内面はミガキが施される。１は内面に煤の付着が認められる。時期は６世紀後半と考えられる。３はやや器高が高く、口縁部が外反する。被熱により器面が荒れ明瞭ではないが、外面はヘラケズリの後、口縁部に横位のナデによる調整を施し、赤彩されている。時期は６世紀初頭～前半に比定される。４～６は土師器高坏である。いずれも時期は６世紀前半と考えられる。４は坏部から接脚部である。口縁部が大きく、坏部下位に明確な稜を成して外傾する。器面は被熱により荒れるが、ヘラナデにより調整され、内外面ともに赤彩されている。５は坏部である。口縁部が大きく、坏部中位でS字状に屈曲して外傾する。６は接脚部である。坏部下端に段を有している。７は手捏ねによるミニチュア土器である。



第53図　(1・2) 遺構外出土の遺物

第7表　古墳時代土器観察表

（　）推定値　<　>現存値

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(1・2)SI-001	第10図-1	土師器	坏	口径 12.7 底径 - 器高 6.4	80%	白色・赤色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-001	第10図-2	土師器	坏	口径 (15.0) 底径 - 器高 <5.3>	25%	白色砂粒・小石	内面 明褐色(7.5YR5/8) 外面 橙色(7.5YR6/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-001	第10図-3	土師器	坏	口径 14 底径 - 器高 5.7	95%	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-001	第10図-4	土師器	坏	口径 13.1 底径 - 器高 4.9	70%	白色・赤色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-001	第10図-5	土師器	高坏	口径 (15.6) 底径 (9.9) 器高 10.7	60%	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-001	第10図-6	土師器	高坏	口径 13.0 底径 8.5 器高 9.7	90%	白色砂粒	内面 明黄橙色(10YR7/6) 外面 明黄橙色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-001	第10図-7	土師器	高坏	口径 14.5 底径 7.7 器高 11.3	90%	白色砂粒	内面 明黄橙色(10YR7/6) 外面 明黄橙色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-001	第10図-8	土師器	甕	口径 19.4 底径 7.0 器高 24.9	80%	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-001	第10図-9	土師器	甕	口径 (14.4) 底径 - 器高 <12.9>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・小石	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-001	第10図-10	土師器	甕	口径 (11.2) 底径 5.7 器高 17.9	55%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-001	第10図-11	土師器	甕	口径 14.6 底径 6.5 器高 19.4	90%	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/8) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-001	第10図-12	土師器	甑	口径 17.0 底径 - 器高 <10.9>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	13と同一個体
(1・2)SI-001	第10図-13	土師器	甑	口径 - 底径 7.2 器高 <11.5>	胴部中位～底部	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラ削り	
(1・2)SI-002	第11図-1	土師器	坏	口径 (11.4) 底径 - 器高 5.9	30%	砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-002	第11図-2	土師器	坏	口径 (13.6) 底径 - 器高 6.6	30%	石英粒	内面 明褐色(10YR6/6) 外面 明褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-002	第11図-3	土師器	高坏	口径 - 底径 (9.8) 器高 <3.8>	10%	砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 明褐色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ	外面赤彩
(1・2)SI-002	第11図-4	土師器	甕	口径 (17.6) 底径 6.1 器高 26.4	80%	砂粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-002	第11図-5	土師器	甕	口径 15.5 底径 4.8 器高 13.4	90%	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-002	第11図-6	土師器	甕	口径 - 底径 5.8 器高 <4.7>	20%	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(1・2)SI-002	第11図-7	土師器	ミニチュア	口径 (4.8) 底径 3.5 器高 2.7	70%	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ	
(1・2)SI-003	第13図-1	土師器	坏	口径 13.5 底径 4.0 器高 6.3	40%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-003	第13図-2	土師器	坏	口径 15.1 底径 - 器高 5.6	75%	白色砂粒・雲母	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 褐色(7.5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-003	第13図-3	土師器	坏	口径 (10.0) 底径 - 器高 5.4	60%	白色砂粒・雲母	内面 明赤褐色(2.5YR5/6) 外面 明赤褐色(2.5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-003	第13図-4	土師器	坏	口径 12.9 底径 - 器高 5.1	95%	白色砂粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-003	第13図-5	土師器	坏	口径 12.1 底径 - 器高 4.5	80%	黒色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-003	第13図-6	土師器	坏	口径 10.4 底径 - 器高 3.6	65%	白色砂粒・雲母	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-003	第13図-7	土師器	坏	口径 14.1 底径 - 器高 4.8	40%	白色・黒色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	黒色処理
(1・2)SI-003	第13図-8	土師器	坏	口径 (13.8) 底径 - 器高 4.6	70%	白色・黒色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/8) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-003	第13図-9	土師器	高坏	口径 - 底径 9.1 器高 <6.5>	20%	白色砂粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 赤褐色 (5YR 4/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-003	第13図-10	土師器	甕	口径 (16.0) 底径 - 器高 <13.0>	30%	白色砂粒・石英粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-11	土師器	甕	口径 16.4 底径 - 器高 <14.8>	80%	白色砂粒・雲母・小石	内面 橙色(5YR6/8) 外面 明赤褐色(5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-12	土師器	甕	口径 12.0 底径 - 器高 <8.5>	口縁部～胴部中位	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-13	土師器	甕	口径 (13.6) 底径 - 器高 <7.5>	口縁部～胴部上位	砂粒・雲母	内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 明褐色(7.5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-14	土師器	鉢	口径 (11.0) 底径 - 器高 <6.7>	口縁部～体部中位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-15	土師器	甕	口径 (14.0) 底径 - 器高 <17.7>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-16	土師器	甕	口径 (13.0) 底径 - 器高 <8.7>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・雲母	内面 褐色(7.5YR4/6) 外面 褐色(7.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(1・2)SI-003	第13図-17	土師器	甕	口径 - 底径 7.2 器高 <13.8>	20%	白色砂粒・石英粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ヘラ削り	㉒と同一個体
(1・2)SI-003	第13図-18	土師器	甕	口径 - 底径 (7.1) 器高 <3.8>	胴部下位～底部	白色砂粒・雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-19	土師器	甕	口径 - 底径 6.6 器高 <2.4>	胴部下位～底部	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ	
(1・2)SI-003	第13図-20	土師器	甕	口径 - 底径 6.2 器高 <2.8>	胴部下位～底部	砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-21	土師器	甕	口径 - 底径 4.7 器高 <3.2>	胴部下位～底部	小石	内面 黒色(10YR2/1) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-22	土師器	甑	口径 - 底径 (7.2) 器高 <13.7>	30%	白色砂粒・小石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-003	第13図-23	土師器	ミニチュア	口径 5.3 底径 - 器高 3.1	95%	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1・2)SI-003	第13図-24	土師器	ミニチュア	口径 6.6 底径 5.6 器高 3.2	80%	白色砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-003	第13図-25	土師器	ミニチュア	口径 (7.6) 底径 - 器高 <2.8>	60%	赤色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1・2)SI-003	第13図-26	土師器	ミニチュア	口径 2.0 底径 1.8 器高 2.0	100%	黒色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1・2)SI-003	第13図-27	土師器	ミニチュア	口径 3.9 底径 3.5 器高 2.7	100%	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/8) 外面 橙色(7.5YR6/8) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1・2)SI-004	第15図-1	須恵器	坏	口径 (12.0) 底径 - 器高 <2.7>	口縁部～体部中位	白色砂粒	内面 灰色(N4/) 外面 灰色(N4/) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1・2)SI-004	第15図-2	土師器	坏	口径 13.8 底径 - 器高 4.0	75%	砂粒・雲母	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-004	第15図-3	土師器	坏	口径 12.1 底径 - 器高 4.1	95%	砂粒・雲母	内面 赤褐色 (5YR4/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内面赤彩
(1・2)SI-004	第15図-4	土師器	高坏	口径 20.9 底径 13.8 器高 16.3	85%	白色・赤色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ ヘラ削り 外面 ナデ ミガキ ヘラ削り	脚内外面赤彩
(1・2)SI-004	第15図-5	土師器	甕	口径 14.4 底径 - 器高 <8.5>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・雲母	内面 赤褐色 (5YR4/6) 外面 赤褐色 (5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-004	第15図-6	土師器	甕	口径 底径 - 器高 <11.0>	30%	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(5YR3/1) 外面 赤褐色 (5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-004	第15図-7	土師器	甕	口径 (15.1) 底径 - 器高 <8.3>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・雲母	内面 褐灰色 (5YR4/1) 外面 赤褐色 (2.5YR4/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-004	第15図-8	土師器	甕	口径 - 底径 7.4 器高 <18.9>	70%	赤色砂粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明赤褐色 (5YR5/8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-004	第15図-9	土師器	甕	口径 - 底径 (7.0) 器高 <14.3>	30%	白色赤色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(1・2)SI-004	第15図-10	土師器	甕	口径 - 底径 6.9 器高 <8.9>	30%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(1・2)SI-004	第15図-11	土師器	甕	口径 - 底径 6.5 器高 <6.3>	10%	白色・赤色砂粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-004	第15図-12	土師器	甑	口径 (23.0) 底径 - 器高 <13.3>	30%	白色砂粒・雲母	内面 褐色(7.5YR4/6) 外面 明褐色(7.5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-005	第16図-1	土師器	坏	口径 (13.4) 底径 - 器高 4.8	60%	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-005	第16図-2	土師器	高坏	口径 - 底径 (9.1) 器高 <6.2>	30%	白色砂粒	内面 明褐色(7.5YR5/8) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-005	第16図-3	土師器	甕	口径 - 底径 (6.4) 器高 <2.5>	胴部下位～底部	白色・赤色砂粒	内面 明赤褐色(2.5YR5/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI006	第18図-1	土師器	坏	口径 (13.7) 底径 - 器高 <4.0>	13%	白色砂粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ミガキ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI006	第18図-2	土師器	坏	口径 11.7 底径 - 器高 3.7	70%	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ ヘラナデ 外面 ナデ ミガキ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI006	第18図-3	土師器	坏	口径 (13.6) 底径 - 器高 4.7	80%	赤色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面黒色処理
(1・2)SI006	第18図-4	土師器	坏	口径 (12.5) 底径 - 器高 4.6	50%	石英粒・雲母	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ミガキ ヘラナデ	内外面黒色処理
(1・2)SI006	第18図-5	土師器	壺	口径 14.0 底径 - 器高 <6.8>	10%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI006	第18図-6	土師器	甕	口径 (16.8) 底径 - 器高 <9.8>	口縁部～胴部上位	白色・赤色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI006	第18図-7	土師器	甕	口径 (14.0) 底径 - 器高 <3.6>	口縁部～胴部上位	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI006	第18図-8	土師器	甕	口径 (15.0) 底径 - 器高 <5.7>	口縁部～胴部上位	白色砂粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI006	第18図-9	土師器	甕	口径 (16.4) 底径 - 器高 <5.7>	口縁部～胴部上位	砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI006	第18図-10	土師器	甕	口径 - 底径 6.9 器高 <1.8>	胴部下位～底部	白色砂粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(1・2)SI006	第18図-11	土師器	甑	口径 24.3 底径 － 器高 <14.2>	70%	砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI006	第18図-12	土師器	かわらけ	口径 (7.7) 底径 (6.4) 器高 1.5	25%	白色・黒色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/8) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1・2)SI-007	第19図-1	土師器	坏	口径 (13.0) 底径 － 器高 <4.0>	25%	白色・赤色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/8) 外面 橙色(7.5YR6/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-007	第19図-2	土師器	高坏	口径 18.3 底径 － 器高 <6.4>	30%	白色砂粒・石英粒・小石	内面 赤褐色 (5YR5/6) 外面 赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-007	第19図-3	土師器	甕	口径 (17.2) 底径 － 器高 <4.3>	口縁部～頸部	白色砂粒・小石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-007	第19図-4	土師器	甕	口径 － 底径 5.8 器高 <6.2>	胴部下位～底部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 不明 外面 不明	
(1・2)SI-007	第19図-5	土師器	甕	口径 － 底径 6.9 器高 <3.1>	胴部下位～底部	白色砂粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 赤褐色 (5YR5/4) 焼成 良好	内面 不明 外面 ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-1	土師器	坏	口径 (14.4) 底径 － 器高 <5.0>	35%	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-008・009	第21図-2	土師器	坏	口径 15.6 底径 － 器高 <4.1>	口縁部～体部中位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-008・009	第21図-3	土師器	坏	口径 (14.0) 底径 － 器高 <4.7>	45%	白色砂粒	内面 橙色 (5YR7/6) 外面 橙色 (5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-008・009	第21図-4	土師器	坏	口径 13.6 底径 － 器高 4.6	70%	白色砂粒・雲母・小石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-008・009	第21図-5	土師器	坏	口径 14.5 底径 － 器高 4.4	70%	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/3) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/3) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ミガキ	
(1・2)SI-008・009	第21図-6	土師器	坏	口径 (14.0) 底径 － 器高 <4.0>	口縁部～体部中位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-008・009	第21図-7	土師器	坏	口径 (12.2) 底径 － 器高 4.9	70%	雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ミガキ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-008・009	第21図-8	土師器	坏	口径 (12.4) 底径 － 器高 <4.5>	50%	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR4/6) 外面 にぶい橙色 (5YR3/7) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ミガキ	内外面黒色処理
(1・2)SI-008・009	第21図-9	土師器	坏	口径 (13.8) 底径 － 器高 4.2	65%	雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面黒色処理
(1・2)SI-008・009	第21図-10	土師器	坏	口径 (9.4) 底径 － 器高 <3.5>	40%	雲母	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ミガキ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-11	土師器	高坏	口径 21.6 底径 － 器高 <7.3>	40%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 外面 灰褐色(7.5YR5/2) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ ヘラナデ 外面 ナデ ミガキ ヘラナデ	内外面黒色処理
(1・2)SI-008・009	第21図-12	土師器	高坏	口径 － 底径 (4.7) 器高 <4.6>	30%	白色・黒色砂粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-13	土師器	甕	口径 (14.8) 底径 － 器高 <7.4>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色 (5YR7/4) 外面 橙色 (5YR6/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-14	土師器	甕	口径 17.3 底径 － 器高 <13.7>	口縁部～胴部上位	白色砂粒	内面 橙色(5YR6/8) 外面 にぶい橙色 (5YR7/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-008・009	第21図-15	土師器	甕	口径 (17.6) 底径 － 器高 <15.8>	30%	白色砂粒・石英粒	内面 赤褐色 (5YR5/6) 外面 赤褐色 (5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-16	土師器	甕	口径 － 底径 7.2 器高 <8.3>	20%	白色砂粒	内面 明赤褐色 (5YR5/6) 外面 赤褐色 (5YR4/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 不明	
(1・2)SI-008・009	第21図-17	土師器	甕	口径 － 底径 4.9 器高 <3.1>	胴部下位～底部	白色砂粒・小石	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(1・2)SI-008・009	第21図-18	土師器	甕	口径 (12.4) 底径 － 器高 <9.9>	30%	白色砂粒	内面 明赤褐色(2.5YR5/8) 外面 明赤褐色(2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-19	土師器	ミニチュア	口径 5.3 底径 1.6 器高 5.1	95%	白色砂粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄褐色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	胴部に穿孔1個あり
(1・2)SI-008・009	第21図-20	土師器	ミニチュア	口径 (4.1) 底径 2.0 器高 5.6	95%	白色砂粒・雲母	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-21	土師器	ミニチュア	口径 (7.1) 底径 6.1 器高 5.8	75%	白色砂粒・雲母	内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-22	土師器	ミニチュア	口径 4.6 底径 4.0 器高 4.7	95%	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-23	土師器	ミニチュア	口径 (4.5) 底径 2.8 器高 2.7	75%	白色砂粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-24	土師器	ミニチュア	口径 (5.3) 底径 4.0 器高 2.4	60%	白色砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-25	土師器	ミニチュア	口径 5.5 底径 3.8 器高 2.3	100%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-26	土師器	小壺	口径 5.2 底径 4.6 器高 1.3	70%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-008・009	第21図-27	土師器	ミニチュア	口径 － 底径 3.0 器高 <3.4>	70%	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1・2)SI-010	第24図-1	須恵器	坏	口径 － 底径 － 器高 <3.8>	口縁部～体部中位	石英粒	内面 灰色(10YR6/1) 外面 灰色(10YR6/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ回転ヘラ削り	
(1・2)SI-010	第24図-2	土師器	坏	口径 (15.6) 底径 － 器高 <4.3>	口縁部～体部中位	砂粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(1-2)SI-010	第24図-3	土師器	坏	口径 (13.1) 底径 - 器高 <3.8>	口縁部～体部中位	赤色砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面黒色処理
(1-2)SI-010	第24図-4	土師器	甕	口径 - 底径 (9.5) 器高 <4.1>	胴部下位～底部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1-2)SI-011	第26図-1	土師器	坏	口径 14.5 底径 - 器高 6.5	90%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩・体外面付着礫石
(1-2)SI-011	第26図-2	土師器	坏	口径 14.2 底径 - 器高 5.1	40%	白色砂粒・石英粒	内面 明赤褐色 (5YR5/6) 外面 にぶい橙色(5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1-2)SI-011	第26図-3	土師器	高坏	口径 - 底径 (10.0) 器高 <4.0>	脚部中位～下位	白色砂粒	内面 明赤褐色 (5YR5/6) 外面 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	外面赤彩
(1-2)SI-011	第26図-4	土師器	甕	口径 (13.0) 底径 - 器高 <4.3>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1-2)SI-011	第26図-5	土師器	甕	口径 (15.8) 底径 - 器高 <9.2>	胴部下位～底部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ	
(1-2)SI-011	第26図-6	土師器	甕	口径 15.6 底径 - 器高 <4.1>	口縁部～体部中位	白色砂粒・石英粒・小石	内面 明赤褐色 (5YR5/6) 外面 明赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ	
(1-2)SI-011	第26図-7	土師器	甕	口径 - 底径 4.5 器高 <2.2>	胴部下位～底部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1-2)SI-012	第27図-1	土師器	坏	口径 (14.2) 底径 - 器高 <3.0>	20%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1-2)SI-012	第27図-2	土師器	甕	口径 - 底径 6.0 器高 <3.8>	胴部下位～底部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(5YR6/4) 外面 明赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(1-2)SI-012	第27図-3	土師器	甑	口径 21.9 底径 7.0 器高 15.5	98%	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(2.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	口縁部に籾殻の凹み有り
(1-2)SI-012	第27図-4	土師器	鉢	口径 9.5 底径 6.0 器高 5.1	70%	砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1-2)SI-012	第27図-5	土師器	ミニチュア	口径 (3.6) 底径 - 器高 1.9	90%	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 明赤褐色 (2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1-2)SI-013	第29図-1	土師器	坏	口径 (14.8) 底径 - 器高 <4.0>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内面黒色処理
(1-2)SI-013	第29図-2	土師器	坏	口径 (14.5) 底径 - 器高 <4.0>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り ミガキ	内面黒色処理
(1-2)SI-013	第29図-3	土師器	坏	口径 (13.8) 底径 - 器高 <3.0>	口縁部～体部下位	白色砂粒・小石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り ミガキ	
(1-2)SI-013	第29図-4	土師器	坏	口径 (14.0) 底径 - 器高 <4.0>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 明赤褐色 (5YR5/6) 外面 明赤褐色 (5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
(1-2)SI-013	第29図-5	土師器	高坏	口径 - 底径 (10.0) 器高 <4.3>	脚部中位～下位	白色砂粒	内面 明赤褐色 (5YR5/6) 外面 明赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ削り 外面 ナデ ヘラナデ	外面赤彩
(1-2)SI-013	第29図-6	土師器	甕	口径 17.3 底径 9.8 器高 26.4	95%	白色砂粒・石英粒・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 明赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1-2)SI-013	第29図-7	土師器	甕	口径 17.8 底径 7.8 器高 26.9	85%	白色砂粒・石英粒・小石	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1-2)SI-013	第29図-8	土師器	甕	口径 (14.6) 底径 - 器高 <10.2>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1-2)SI-013	第29図-9	土師器	甑	口径 21.3 底径 8.8 器高 24.4	80%	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(2.5YR6/6) 外面 橙色(2.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ ヘラ削り 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1-2)SI-013	第29図-10	土師器	甑	口径 - 底径 (7.6) 器高 <10.4>	胴部中位～底部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1-2)SI-013	第29図-11	土師器	ミニチュア	口径 8.8 底径 5.9 器高 3.8	95%	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1-2)SI-013	第29図-12	土師器	ミニチュア	口径 (2.6) 底径 - 器高 <2.3>	95%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1-2)SI-013	第29図-13	土師器	ミニチュア	口径 - 底径 3.1 器高 <2.0>	体部下位～底部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ	高坏の脚部か
(1-2)SI-014	第31図-1	土師器	坏	口径 14.0 底径 - 器高 5.3	70%	白色砂粒・石英粒・小石	内面 橙色(5YR6/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1-2)SI-014	第31図-2	土師器	甕	口径 (10.7) 底径 - 器高 <13.2>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 明赤褐色 (5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1-2)SI-014	第31図-3	土師器	甕	口径 7.9 底径 4.8 器高 11.2	90%	白色砂粒・石英粒・小石	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 赤褐色 (5YR4/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1-2)SI-015	第33図-1	土師器	坏	口径 (12.2) 底径 - 器高 <4.8>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1-2)SI-015	第33図-2	土師器	坏	口径 (13.8) 底径 - 器高 5.1	85%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1-2)SI-015	第33図-3	土師器	坏	口径 (14.8) 底径 - 器高 <6.8>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 明赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1-2)SI-015	第33図-4	土師器	高坏	口径 - 底径 10.0 器高 <5.9>	50%	白色砂粒・雲母・小石	内面 明黄褐色(10YR6/8) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1-2)SI-015	第33図-5	土師器	甕	口径 (15.5) 底径 6.3 器高 27.1	70%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 褐色(7.5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1-2)SI-015	第33図-6	土師器	甕	口径 (15.5) 底径 - 器高 <12.7>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・石英粒	内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(1－2)SI-015	第33図-7	土師器	甕	口径 (18.7) 底径 － 器高 <10.5>	口縁部～胴部中位	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1－2)SI-015	第33図-8	土師器	甕	口径 (15.4) 底径 － 器高 <13.8>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・石英粒・小石	内面 明赤褐色 (5YR5/6) 外面 明赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-015	第33図-9	土師器	甕	口径 (18.2) 底径 － 器高 <8.3>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・石英粒・小石	内面 橙色(7.5YR6/8) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1－2)SI-015	第33図-10	土師器	甕	口径 (17.0) 底径 － 器高 <5.8>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-015	第33図-11	土師器	甕	口径 (17.5) 底径 － 器高 <5.7>	口縁部～胴部上位	白色・赤色砂粒	内面 明黄褐色(10YR7/6) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1－2)SI-015	第34図-12	土師器	甑	口径 21.1 底径 5.6 器高 17.2	90%	白色・黒色砂粒	内面 赤褐色 (5YR4/8) 外面 赤褐色 (2.5YR4/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り 外面 ナデ ヘラナデ	
(1－2)SI-015	第34図-13	土師器	甑	口径 (21.8) 底径 － 器高 <9.4>	口縁部～胴部中位	小石・石英粒	内面 褐色(7.5YR4/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-015	第34図-14	土師器	甑	口径 － 底径 (7.2) 器高 <8.0>	胴部中位～底部	小石・石英粒	内面 褐色(7.5YR4/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ	第34図12同一個体
(1－2)SI-006	第35図-1	須恵器	蓋	口径 (14.0) 底径 － 器高 <4.4>	15%	砂粒	内面 灰色(N5/0) 外面 灰色(N6/0) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 回転ヘラ削り	自然釉
(1－2)SI-006	第35図-2	須恵器	坏	口径 (12.0) 底径 － 器高 <4.1>	15%	砂粒	内面 灰色(N5/0) 外面 灰色(N5/0) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	自然釉
(1－2)SI-006	第35図-3	須恵器	坏	口径 － 底径 － 器高 <2.8>	15%	砂粒	内面 灰色(N5/0) 外面 黄灰色(2.5YR5/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	自然釉
(1－2)SI-006	第35図-4	土師器	坏	口径 12.4 底径 － 器高 4.5	80%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	SI017から移動
(1－2)SI-006	第35図-5	土師器	甕	口径 (13.6) 底径 － 器高 <7.5>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-006	第35図-6	土師器	甕	口径 － 底径 6.2 器高 <5.4>	胴部中位～底部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 明黄褐色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-006	第35図-7	土師器	鉢	口径 (12.6) 底径 － 器高 <6.6>	口縁部～体部中位	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 明赤褐色 (2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1－2)SI-006	第35図-8	土師器	ミニチュア	口径 (10.0) 底径 (4.8) 器高 <3.4>	30%	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り	内面赤彩
(1－2)SI-006	第36図-9	土師器	ミニチュア	口径 (5.9) 底径 3.4 器高 <3.5>	70%	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1－2)SI-006	第36図-10	土師器	ミニチュア	口径 － 底径 (4.6) 器高 <2.3>	15%	白色砂粒・石英粒・砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ	
(1－2)SI-017	第38図-1	土師器	坏	口径 13.8 底径 － 器高 5.3	80%	白色砂粒・石英粒・小石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1－2)SI-017	第38図-2	土師器	坏	口径 12.7 底径 － 器高 5.2	100%	白色砂粒・石英粒・小石	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1－2)SI-017	第38図-3	土師器	高坏	口径 － 底径 9.6 器高 <5.7>	50%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	外面赤彩
(1－2)SI-017	第38図-4	土師器	甕	口径 (15.8) 底径 (8.5) 器高 <28.6>	60%	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-017	第38図-5	土師器	甕	口径 (18.4) 底径 － 器高 <20.1>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-017	第38図-6	土師器	甕	口径 － 底径 8.4 器高 <2.0>	胴部下位～底部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-017	第38図-7	土師器	坏	口径 11.9 底径 6.8 器高 5.2	100%	白色・赤色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-017	第38図-8	土師器	ミニチュア	口径 (2.4) 底径 (2.0) 器高 <2.6>	35%	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	体外面煤付着か
(1－2)SI-018	第39図-1	土師器	坏	口径 (13.5) 底径 (5.0) 器高 5.0	30%	雲母・砂粒	内面 明赤褐色 (5YR5/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1－2)SI-018	第39図-2	土師器	坏	口径 (14.0) 底径 － 器高 <3.8>	口縁部～体部中位	雲母・砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ	内外面赤彩
(1－2)SI-018	第39図-3	土師器	坏	口径 (14.0) 底径 － 器高 <3.9>	口縁部～体部中位	雲母・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1－2)SI-018	第39図-4	土師器	高坏	口径 (14.8) 底径 － 器高 <15.9>	口縁部～体部下位	雲母・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1－2)SI-018	第39図-5	土師器	甕	口径 (26.6) 底径 － 器高 <5.5>	口縁部～胴部	白色砂粒・石英粒	内面 明黄褐色(10YR7/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-018	第39図-6	土師器	甕	口径 － 底径 (8.1) 器高 <3.3>	胴部下位～底部	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(1－2)SI-018	第39図-7	土師器	ミニチュア	口径 4.7 底径 4.0 器高 2.4	85%	白色砂粒・雲母	内面 灰黄褐色(10YR5/2) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ	
(1－2)SI-019	第40図-1	土師器	坏	口径 15.0 底径 － 器高 <4.2>	80%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1－2)SI-019	第40図-2	土師器	坏	口径 (13.6) 底径 － 器高 <4.2>	30%	白色砂粒・石英粒	内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り ミガキ	内外面黒色処理
(1－2)SI-019	第40図-3	土師器	甕	口径 (19.3) 底径 － 器高 <11.0>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(1・2)SI-019	第40図-4	土師器	甕	口径 - 底径 (7.5) 器高 <3.2>	胴部下位～底部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(1・2)SI-019	第40図-5	土師器	甕	口径 - 底径 8.0 器高 <2.7>	胴部下位～底部	白色砂粒・小石	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-020	第42図-1	土師器	坏	口径 14.2 底径 - 器高 6.7	95%	白色砂粒・雲母・小石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-020	第42図-2	土師器	坏	口径 (13.6) 底径 - 器高 5.7	60%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-020	第42図-3	土師器	坏	口径 13.3 底径 4.8 器高 3.9	85%	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-020	第42図-4	土師器	坏	口径 (14.0) 底径 - 器高 <3.3>	口縁部～体部中位	白色砂粒・雲母	内面 明赤褐色 (5YR5/6) 外面 明赤褐色 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-020	第42図-5	土師器	高坏	口径 (15.0) 底径 - 器高 <4.0>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-020	第42図-6	土師器	高坏	口径 - 底径 - 器高 <5.7>	坏底部～脚上位	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ	⑤⑥は同一個体と思われる
(1・2)SI-020	第42図-7	土師器	甕	口径 9.4 底径 - 器高 <3.0>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい赤褐色 (5YR4/3) 外面 赤褐色 (5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-020	第42図-8	土師器	甑	口径 (22.8) 底径 - 器高 <8.7>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-021	第44図-1	土師器	坏	口径 (15.2) 底径 - 器高 <3.9>	口縁部～底部	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)SI-021	第44図-2	土師器	甕	口径 (15.6) 底径 - 器高 <18.2>	40%	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/8) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-021	第44図-3	土師器	甕	口径 (9.0) 底径 - 器高 <4.9>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)SI-022	第46図-1	土師器	坏	口径 12.0 底径 - 器高 7.0	95%	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-022	第46図-2	土師器	壺	口径 8.9 底径 - 器高 11.1	100%	白色砂粒・小石	内面 黒色(7.5YR2/1) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ミガキ	内外面赤彩
(1・2)SI-022	第46図-3	土師器	甑	口径 (22.6) 底径 6.7 器高 27.2	70%	白色砂粒	内面 橙色(5YR7/6) 外面 橙色(5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-022	第46図-4	土師器	甕	口径 - 底径 6.8 器高 <1.8>	胴部下位～底部	白色砂粒・小石	内面 橙色(5YR6/6) 外面 赤褐色 (5YR4/8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ	
(1・2)SI-023	第48図-1	土師器	坏	口径 (14.0) 底径 - 器高 <6.2>	30%	白色砂粒	内面 橙色(5YR7/6) 外面 にぶい橙色(5YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内面赤彩
(1・2)SI-023	第48図-2	土師器	甕	口径 - 底径 (7.0) 器高 <1.9>	胴部下位～底部	白色砂粒	内面 橙色(5YR7/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(1・2)SI-024	第50図-1	須恵器	甕	口径 (12.0) 底径 - 器高 <3.6>	口縁部～頸部	白色砂粒	内面 灰色(10Y5/1) 外面 灰色(10Y4/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	くし書き波状文
(1・2)SI-024	第50図-2	土師器	坏	口径 (13.3) 底径 - 器高 5.4	70%	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩 [illegible]
(1・2)SI-024	第50図-3	土師器	坏	口径 (12.2) 底径 - 器高 <5.5>	20%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(5YR7/4) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-024	第50図-4	土師器	坏	口径 13.2 底径 - 器高 5.2	70%	白色砂粒・小石	内面 橙色(5YR7/6) 外面 橙色(5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)SI-024	第50図-5	土師器	坏	口径 (12.6) 底径 - 器高 5.9	40%	白色砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1・2)SI-024	第50図-6	土師器	鉢	口径 12.2 底径 5.0 器高 7.1	95%	砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1・2)遺構外	第53図-1	土師器	坏	口径 (14.2) 底径 - 器高 <4.2>	20%	砂粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1・2)遺構外	第53図-2	土師器	坏	口径 (14.8) 底径 - 器高 <4.5>	20%	砂粒	内面 - 外面 にぶい黄橙色(10YR8/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面黒色処理
(1・2)遺構外	第53図-3	土師器	坏	口径 (13.8) 底径 - 器高 <5.3>	口縁部～体部下位	白色砂粒	内面 橙色(5YR7/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)遺構外	第53図-4	土師器	高坏	口径 (13.5) 底径 - 器高 <8.3>	40%	白色砂粒・小石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩
(1・2)遺構外	第53図-5	土師器	坏	口径 (14.6) 底径 - 器高 <5.0>	20%	砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面赤彩　砥石として使用？
(1・2)遺構外	第53図-6	土師器	高坏	口径 - 底径 - 器高 <5.7>	坏底部～脚上位	白色砂粒	内面 赤褐色 (5YR4/8) 外面 にぶい赤褐色 (5YR4/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ	
(1・2)遺構外	第53図-7	土師器	ミニチュア	口径 2.2 底径 2.0 器高 2.8	100%	白色砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	

第８表　古墳時代土製品観察表

＜　＞現存値

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	法量：mm　g					色調	備考
				最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量		
(1・2)SI-001	第９図-14	12	勾玉	＜28.5＞	9.5	9.5	－	20.0	にぶい黄橙色(10YR6/4)	
(1・2)SI-006	第18図-13	38	土錘	38.0	33.5	21.5	18.0	23.0	－	
(1・2)SI-008・009	第22図-28	214	勾玉	＜20.0＞	9.0	10.0	－	2.2	明黄褐色(10YR6/6)	
	第22図-29	D区-279	勾玉	30.0	8.0	11	3.0	3.8	にぶい橙色(7.5YR7/4)	
	第22図-30	255	勾玉	＜14.0＞	5.0	5.0	－	0.5	明褐色(7.5YR5/8)	
	第22図-31	287	土玉	12.0	16.0	－	2.0	3.1	橙色(7.5YR6/6)	
	第22図-32	270	土玉	10.0	14.0	－	2.0	2.5	橙色(7.5YR6/6)	
	第22図-33	265	土玉	8.0	9.0	－	2.0	0.7	灰褐色(7.5YR4/2)	
(1・2)SI-010	第24図-５	1	砥石	－	－	7.3	－	62.2	橙色(7.5YR7/6)	要の側部の転用
(1・2)SI-011	第26図-８	24	砥石	8.0	－	－	－	51.8	明赤褐色(5YR5/6)	要の側部の転用
	第26図-９	8	土錘	29.0	12.0	1.5	12.0	2.6	橙色(7.5YR6/6)	外面赤彩
	第26図-10	1	勾玉	＜24.0＞	10.0	7.5	5.0	21	明黄褐色(10YR6/6)	
(1・2)SI-012	第27図-６	8	勾玉	＜12.0＞	6.0	5.5	0.5	1.0	－	赤彩か？
(1・2)SI-013	第29図-14	1	砥石	－	－	－	－	13.2	にぶい褐色(7.5YR6/5)	要の側部の転用
(1・2)SI-015	第34図-15	1	勾玉	＜30.0＞	15.0	10.5	－	3.4	明黄褐色(10YR6/6)	
(1・2)SI-016	第36図-11	66	土玉	15.0	13.0	11.5	2.0	2.0	橙色(5YR6/6)	
(1・2)SI-020	第42図-９	1	土製品	25.0	20.0	4.0	3.5	3.3	橙色(7.5YR6/6)	

第９表　古墳時代石製品観察表

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	石材	法量：mm　g					備考
					最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量	
(1・2)SI-001	第９図-15	1	石製品残核	滑石	66.5	52.9	33.1	－	145.54	
(1・2)SI-003	第13図-28	－	有孔円板	滑石	18.0	18.5	2.3	2.0	1.5	
(1・2)SI-010	第24図-６	11	砥石	砂岩	73.0	45.0	34.0	－	171.53	
(1・2)SI-012	第27図-７	1	石製模造品	－	31.0	22.0	6.0	2.0	6.27	
(1・2)SI-014	第31図-４	21	石製模造品	－	39.0	19.0	5.5	2.0	7.48	
(1・2)SI-015	第34図-16	1	砥石	砂岩	31.0	39.8	8.0	－	12.5	
(1・2)SI-016	第36図-12	25	砥石	砂岩	76.5	45.5	27.0	－	131.65	
(1・2)SI-023	第48図-３	11	砥石	砂岩	42.0	67.0	30.5	－	94.32	

第10表　古墳時代鉄製品観察表

＜　＞現存値

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	法量：mm　g				備考
				最大長	最大幅	最大厚	重量	
(1・2)SI-005	第16図-４	15	鉄鏃	＜60.5＞	6.5	26.0	3.0	刀部幅9.8mm厚2.3mm
(1・2)SI-016	第36図-13	69	鎌	＜65.0＞	27.5	2.8	13.0	

第４節　中・近世の遺構と遺物

本調査区では、中世の地下式坑１基と、別の支尾根上から近世の土壙１基を検出した。上面が広く削平を受けており、中世以降の遺構の展開については不明瞭である。

１　遺構

(1・2) SK-001（第54・55図、第３・11～15表、図版12・13・38）

3C-63・64グリッドに所在する。古墳時代の集落跡が確認された支尾根から小支谷を挟んで隣り合う東側の支尾根上から単独で検出された。平面形は不整な長方形で、規模は長軸長1.18m・短軸1.1m・深さ1.6mである。

確認面近くから出土した１は美濃窯の灰釉有耳壺である。出土状況から骨蔵器として使用されたものと推定される。肩部の３カ所に紐通しを設けている。壺及び土壙の底部付近から火葬人骨が出土している。

また、2～7の寛永通宝の銅銭6枚が癒着した状態で人骨とともに出土した。

検出状況、出土遺物から近世の土壙墓であると考えられる。1は18世紀後半～19世紀前半の所産とみられるが、原位置をとどめていない可能性もある。

出土人骨についての所見

出土状況から推定して、近世の火葬骨であると考えられ、壺内と土壙内からの人骨はあわせて1体分と考えられる。一部の骨は、火葬された骨に特徴的な変形や収縮を起こし、青灰色や白色を呈し比較的高温で焼かれたと考えられ、細片化していた。一方、四肢骨は焼成度が弱かった為か比較的形を保っていた。これらの骨に、部位の重複はなく、1体分であると考えられる。

細片化した骨については、水洗し、焼成度の弱かった四肢骨については骨表皮がはがれるなど状態が良くなかったため、竹串などでクリーニングするにとどめた。

頭蓋は焼成による変形が強いため計測を行わず、歯冠については、焼成の影響を強く受けておらず残存状態が良好であったため、計測を行った。計測方法は、藤田(1949)に従った。

残存部位一覧は、第12表に示した。頭蓋は良く焼けており、白色から青灰色を呈し、固くしまり細片化していた。右側頭骨は乳様突起が残存しており、比較的大きく男性的である。顔面部は、鼻根部分を復元することができた。焼成による変形収縮が起きている可能性があるが、頭蓋骨片の歪みはあまり見られない。形態的特徴を述べると、眉間から鼻骨にかけての立ち上がりが緩やかであり、比較的鼻の低いのっぺりとした顔であったと考えられ、近世人の特徴をよく示していた。

下顎骨の右歯槽部は、大臼歯部分の骨表面に小孔がみられ歯槽閉鎖直前であった。歯の咬耗は、Broca2度で咬合面の一部に象牙質がみられる程度である。小臼歯、大臼歯ともに咬合面や歯頸部に歯石が付着している。上顎右第3大臼歯の近心面歯頸部に直径5㎜の齲蝕がみられ、下顎左第3大臼歯の咬合面中央に歯頸面に達する直径2㎜の齲蝕がみられた。下顎左第2大臼歯は、遠心頬側の第5咬頭部分が咬耗で磨滅しており、隣接する下顎左第3大臼歯も頬側面側に歯冠から歯根まで達するほどの咬耗がみられる。上顎中切歯・側切歯はシャベル状である。以下に歯式を示し、計測値を第13表に示した。全て遊離歯であった。

脊椎骨は、頸椎・胸椎・腰椎・仙骨が残存しており、腰椎では椎体関節辺縁部に強い骨棘が形成されており、加齢性の変形性脊椎症がみられる。

四肢骨は、白色から青灰色を呈し固くしまり、変形や収縮をおこしている部位と、骨表面が剥がれ黒色のモヤ状のシミがみられ腐食の進んだ部位とがあり、焼成度合いに差があると思われる。上腕骨三角筋線の発達は非常に弱く、大腿骨の粗線の発達も弱い。最大長は復元できなかった。

その他、肋骨は細片化し、肩甲骨、鎖骨は同定可能な部位が遺存せず、寛骨は一部が残存するのみである。

第11表　歯観察表

齲

M3	／	M1	P2	／	C	I2	／	I1	I2	／	／	P2	M1	／	M3
／	／	／	P2	／	C	／	／	／	／	C	P1	P2	M1	M2	M3

／損失

性別判定に有効な部位が残っていないため、性別は不明である。年齢は、上下第三大臼歯に象牙質が露出する程度の咬耗がみられ、腰椎の関節辺縁部に骨棘の形成がみられ変形性脊椎症が認められるなど加齢性変化がみられることから、この個体は壮年～熟年であると考えられる。

今回、SK-001より出土した人骨は１体分の火葬骨であり、顔面部の形態から、のっぺりとした比較的凹凸の少ない顔立ちをした、江戸時代庶民の特徴をもった成人個体であると考えられる。

参考文献

藤田恒太朗　1949「歯の計測規準について」『人類学雑誌』61(1)　pp. 27－32　日本人類学会

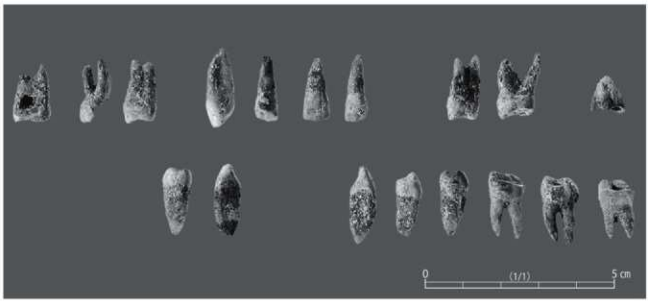
第12表　人骨残存表

遺構番号	遺物番号	部位名	備　考
(1・2) SK-001	1	不明四肢骨片	腐食作用で脆い 焼けが弱い？
	2	頭蓋（前頭骨・頭頂骨・後頭骨・側頭骨・鼻骨・涙骨・上顎骨・頬骨・蝶形骨）	よく焼ける（白色～灰色）、固く締まり、変形・収縮
		下顎骨	よく焼ける（白色～灰色）、固く締まり、変形・収縮 右M1 ～ M3歯槽部分開顎直前
		歯　(M3／M1P2／CI2／　II2／／P2M1／M3)　他歯種不明遠心頬側咬頭片１ (／／／P2／C／／　／／CP1P2M1M2M3)　他歯種不明下顎M歯根片１	保存状態は良好 下顎左M３は頬側に歯頸線超える異常咬耗
		椎骨（頸椎：縫２、弓片数点、胸椎：４、左右同一椎弓１、腰椎：２、仙椎片３）	よく焼ける（白色～灰色）、固く締まり、変形・収縮 腰椎の椎体骨縁形成強い
		寛骨片（右寛骨臼片１、腸骨稜片１）	よく焼ける（白色～灰色）、固く締まり、変形・収縮
		四肢骨 上腕骨（右：近位端、骨幹） 尺骨（右：近位骨幹、遠位骨幹）（左：骨幹、遠位端） 橈骨（右：近位骨幹）（左：骨幹～遠位端） 大腿骨（左：大腿骨頭片、大腿骨頭片、骨幹） 頚骨（右：ヒラメ筋線付近骨幹片、遠位端）	よく焼ける（白色～灰色）、固く締まり、変形・収縮
		手（右母状骨、指骨：中節骨遠位端片１、末節骨１）	よく焼ける（白色～灰色）、固く締まり、変形・収縮
	3	左頚骨骨幹	腐食作用で脆い 焼けが弱い？
	4	右大腿骨骨幹	腐食作用で脆い 焼けが弱い？
	5	右頚骨骨幹	腐食作用で脆い 焼けが弱い？
	6	左上腕骨骨幹	腐食作用で脆い 焼けが弱い？

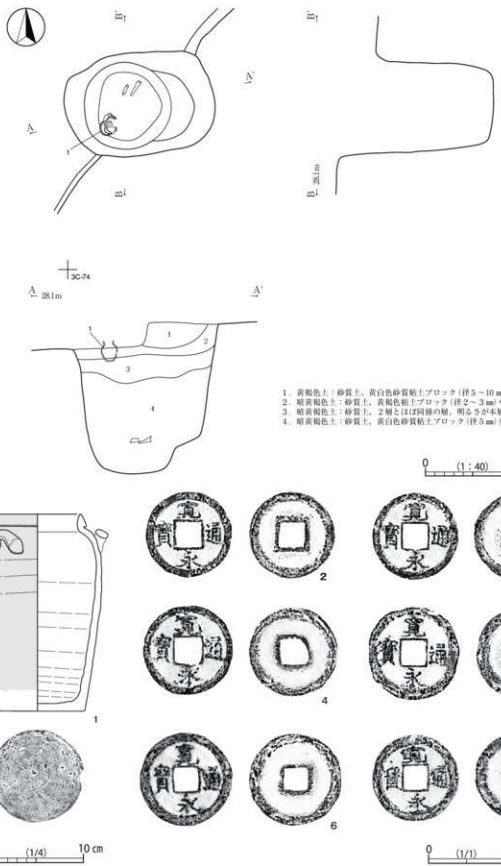
第13表　人骨歯冠計測値(mm)

遺構番号	部位	種　類	R		L		備　考
			MD	BL	MD	BL	
(1・2) SK-001	上顎	中切歯			8.45	7.52	
		側切歯	7.26	6.60	7.28	6.76	
		犬歯	8.18	9.17			
		第１小臼歯					
		第２小臼歯	6.97		7.12	10.52	
		第１大臼歯			10.29	11.88	
		第２大臼歯					
		第３大臼歯	8.27				
	下顎	中切歯					
		側切歯					
		犬歯	7.20	8.39	7.12	8.22	
		第１小臼歯			7.08	8.47	
		第２小臼歯	7.52	9.26	7.31	9.43	
		第１大臼歯			11.73	11.31	
		第２大臼歯				11.45	
		第３大臼歯					

＊ミツトヨデジタルノギスで小数点第２位まで計測



第54図　(1・2) SK-001(1)



第55図　(1・2)SK-001(2)

第14表　SK-001出土土器観察表

遺構	種図番号	種 類	器 種	法量(cm)	遺存度	胎　土	色調・焼成	技　法	備　考
(1・2)SK-001	第55図-1	陶器	尻軸有耳壺	口径　9.5 底径　9.9 器高　20.8	90%	–	内面　淡黄色(2.5Y8/3) 外面　淡黄色(2.5Y8/3) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ 回転ヘラ削り	瀬戸美濃系三耳壺

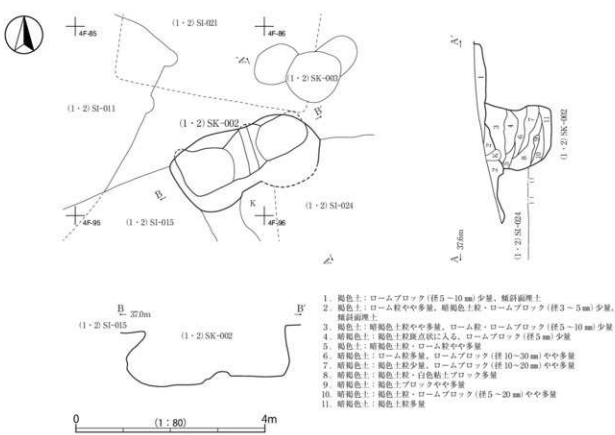
第15表　銭貨観察表

遺構	種図No.	遺物番号	銭種	外縁外径(mm)		外縁内径(mm)		内郭外径(mm)		内郭内径(mm)		外縁厚(mm)	内面厚(mm)	重量(g)	備考
				縦	横	縦	横	縦	横	縦	横				
(1・2)SK-001	第55図-2	7	寛永通寶	22.5	22.5	18.5	18.5	8.0	8.0	6.5	6.7	1.3	0.8	2.5	
	第55図-3	7	寛永通寶	22.8	22.8	19.5	19.5	7.5	7.5	6.7	6.5	0.9	0.7	2.3	
	第55図-4	7	寛永通寶	23.6	23.7	20.5	20.5	8.0	8.2	7.2	7.0	1.0	0.7	2.5	
	第55図-5	7	寛永通寶	24.5	24.5	20.0	20.0	7.5	7.3	6.5	6.5	1.3	0.8	3.3	
	第55図-6	7	寛永通寶	24.5	24.5	19.5	19.5	7.5	7.3	6.0	6.0	1.3	0.8	3.8	
	第55図-7	7	寛永通寶	23.0	23.0	18.5	18.5	7.0	7.0	6.0	6.0	1.0	0.7	1.7	

(1・2) SK-002（第56図、第３表、図版13）

4F-85・86グリッドに所在する。古墳時代の竪穴住居跡である(1・2)SI-015・(1・2)SI-024と重複する。平面形は長楕円形で、底面は長軸方向に段を有している。規模は長軸長2.78m・短軸1.56m・深さ1.53mで、長軸方位はN－63°－Eである。上面が削平されているが、形状から中世の地下式坑と考えられる。

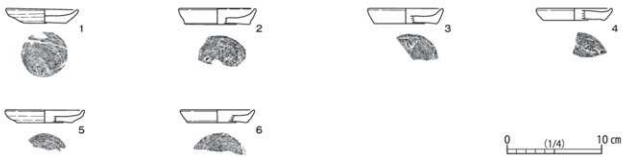
遺物は出土しなかった。



第56図　(1・2) SK-002

2　遺物（第57図、第16表、図版38）

本調査区では、溝跡３条と台地整形区画１か所が検出された。溝跡は尾根の形状に沿って、上部の平坦面と落ち際を区画する形で配されており、台地整形区画とともに、中世の砦址に関する遺構の可能性があるほか、台地上に所在する神社に由来する遺物の可能性もあるだろう。



第57図　（1・2）遺構外出土の遺物

第16表　遺構外出土土器観察表

（　）推定値

遺構	挿図番号	種 類	器 種	法量（cm）	遺存度	胎　土	色調・焼成	技　法	備　考
（1・2）遺構外	第57図−1	土師器	かわらけ	口径　7.4 底径　4.4 器高　1.5	60%	砂粒	内面　にぶい橙色（7.5YR7/4） 外面　にぶい橙色（7.5YR7/4） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	
	第57図−2	土師器	かわらけ	口径　(8.2) 底径　(5.8) 器高　1.3	10%	砂粒	内面　橙色（7.5YR7/6） 外面　橙色（7.5YR7/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	
	第57図−3	土師器	かわらけ	口径　(7.8) 底径　(6.4) 器高　1.2	20%	白色砂粒	内面　橙色（7.5YR6/6） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	
	第57図−4	土師器	かわらけ	口径　(8.0) 底径　(6.8) 器高　1.7	20%	石英粒	内面　橙色（7.5YR7/6） 外面　橙色（7.5YR7/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	
	第57図−5	土師器	かわらけ	口径　(7.8) 底径　(6.6) 器高　1.6	25%	雲母	内面　橙色（7.5YR7/6） 外面　橙色（7.5YR7/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	
	第57図−6	土師器	かわらけ	口径　(7.8) 底径　(6.2) 器高　1.3	20%	白色砂粒	内面　橙色（7.5YR6/6） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	

第３章　久米砦遺跡（３）の成果

第１節　調査区の概要（第58図、第17 ～ 19表）

本調査区は、第３章で述べた久米砦遺跡(１・２)の調査区から、小支谷を挟んで東側の支尾根上に位置している。樹枝状に広がる台地の主尾根部分に近く、久米砦遺跡(１・２)に比して平坦面となっている。

本調査区における出土遺物としては、縄文時代中期から後期、古墳時代中期末から後期、中・近世までが認められ、遺構は、縄文時代の陥穴３基、古墳時代中期末から後期の竪穴住居跡23軒・土坑２基、中世の溝状遺構３条・台地整形１カ所が検出された。

縄文時代の遺物は、主として中期末葉の加曽利E4式から後期中葉の加曽利B式までの土器片である。いずれも調査区覆土および古墳時代の竪穴住居覆土から出土している。

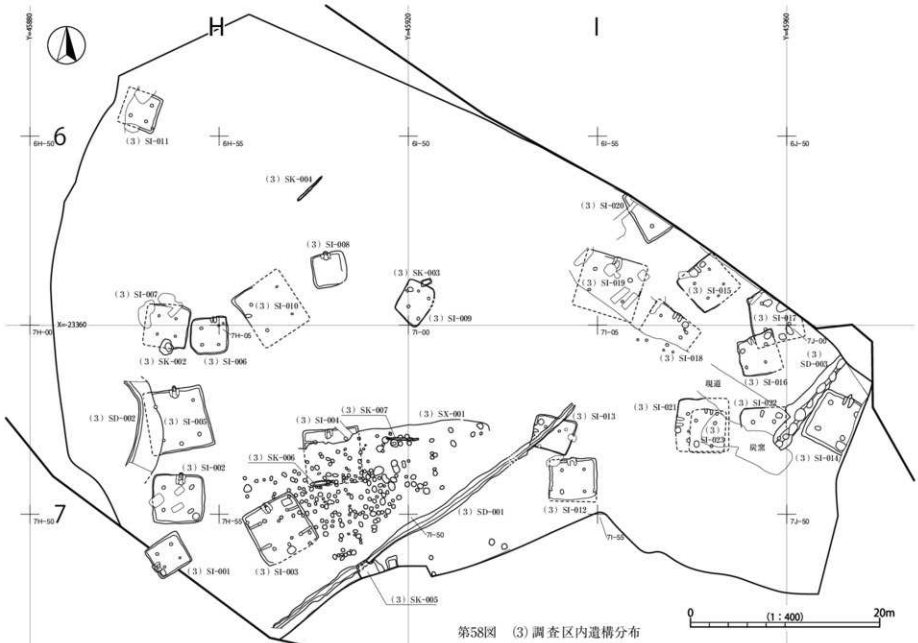
古墳時代の遺構は、全体に後世の削平をうけており検出面からの深度は浅いが、調査区全面に分布しており、主尾根側にあたる調査区の北側にも集落が広がるものと推定される。遺構の覆土が浅く詳細な時期が不明確ではあるが、遺物はいずれも５世紀末～６世紀末にかけてのもので、中心となる時期は６世紀前半と推定される。

中世以降の遺物はわずかで、主に台地成形遺構および周囲から山茶碗の破片等が出土している。溝状遺構は台地の縁辺に沿う形で３条が検出されている。また、支尾根の南東側に台地整形区画が造成されており、区画内からは多数のピット群が検出された。柵列または建物跡と考えられる。

第17表　竪穴住居跡一覧表

（　）推定値　＜　＞現存値　単位：主軸・幅m　床面積㎡

遺構番号	位　置	主軸方向	主軸	幅	床面積	炉・カマド	貯蔵穴	壁溝	時　期	備　考
(3) SI-001	7H-53・54・63・64	N－121°－W	3.86	3.70	12.78	南西	南隅	全周	5世紀末～6世紀初頭	
(3) SI-002	7H-33・34・43・44・53・54	N－1°－W	5.24	5.42	25.11	北	南東隅	一部なし	6世紀初頭	
(3) SI-003	7H-45～47・55～57・66	N－28°－W	(6.20)	6.18	(36.17)	北西	北東隅・南東	全周	6世紀後半	出入口ピット-周仕切り溝
(3) SI-004	7H-27・28・37・38・47・48	N－3°－W	(5.80)	5.90	(33.29)	北	なし	全周？	6世紀前半	周仕切り溝
(3) SI-005	7H-13・14・23・24・33・34	N－9°－W	6.56	(6.38)	(39.87)	北	なし	全周	6世紀後半～末	出入口ピット
(3) SI-006	6H-94・95、7H-04・05	N－2°－W	3.84	4.00	12.81	北	なし	なし	6世紀初頭～前半	
(3) SI-007	6H-93・94、7H-03・04	N－10°－E	4.56	(4.60)	(18.75)	なし	南	なし	5世紀末～6世紀初頭	
(3) SI-008	6H-87・88・97	N－9°－W	3.54	(3.50)	(9.91)	北	なし	一部	6世紀末	主柱穴なし
(3) SI-009	6H-89・90、6I-80・90、7I-00	N－61°－W	(3.36)	4.30	(12.66)	北西	なし	なし	不明	
(3) SI-010	6H-85・86・95～97、7H-05～07	N－123°－W	(5.70)	(6.40)	(36.48)	南西	なし	なし	6世紀中葉	
(3) SI-011	6H-32・33・42・43	N－21°－E	3.86	(3.86)	(13.68)	北	なし	全周？	6世紀後半	
(3) SI-012	7I-33・34・43・44	N－2°－W	(4.54)	4.95	(19.96)	北	なし	全周？	6世紀後半	
(3) SI-013	7J-23・24・33・34	N－77°－W	4.36	3.56	14.11	西	北隅	北側半周	6世紀中葉	
(3) SI-014	7J-10・11・20・21・30・31	N－29°－E	5.70	<4.86>	－	北東	南	全周	6世紀後半～中葉	
(3) SI-015	6I-87・88・97・98	N－42°－W	(4.84)	(4.90)	(21.86)	北西	北西	なし	不明	出入口ピット南東
(3) SI-016	7I-08・09・18・19	N－19°－W	4.30	(4.20)	(15.90)	北	北東隅	なし	6世紀後半か	
(3) SI-017	6I-99、6J-90、7I-09、7J-00	N－12°－W	(5.70)	(5.40)	－	不明	南	なし	不明	遺物8世紀代
(3) SI-018	6I-96・97、7I-06・07	N－34°－E	<3.90>	(5.60)	－	北東	北東	なし	不明	
(3) SI-019	6I-84～86・94～96	N－17°－E	(6.14)	(6.60)	(38.44)	北東	なし	一部	6世紀中葉～後半	
(3) SI-020	6I-65・66・75・76	N－28°－W	<5.70>	<3.20>	－	不明	不明	全周？	不明	
(3) SI-021	7I-17・18・27・28・37・38	N－86°－W	(5.60)	(5.60)	(30.51)	西	なし	なし	6世紀後半	(3) SI-023より旧
(3) SI-022	7I-28・29	N－2°－W	<2.4>	(4.80)	－	北	北東隅	なし	不明	カマド壁から離れる
(3) SI-023	7I-27・28・37・38	N－4°－E	(4.60)	(3.70)	(16.45)	北	なし	なし	6世紀後半	(3) SI-021より新



第58図　(3) 調査区内遺構分布

第18表　土坑・竪穴状遺構一覧表

遺構番号	種　別	位　置	長(主)軸方向	計測値：m　〈　〉現存値			時　期	備　考
				長軸	短軸	深さ		
③SK-002	貯蔵穴	7H-03		1.67	1.38	0.54	古墳時代	SI-007の張り出し貯蔵穴
③SK-003	土坑	6I-80	N-74°-E	1.14	0.60	0.29	古墳時代	SI-009と重複(新旧不明)
③SK-004	陥穴	7H-67	N-45°-E	3.67	0.28	0.77	縄文	
③SK-005	土坑	7H-68・69	N-67°-E	2.60	<1.66>	0.33	不明	SD-001と重複(新旧不明)
③SK-006	陥穴	7H-47	N-82°-E	<2.40>	<0.50>	1.40	縄文	
③SK-007	陥穴	7H-29・39、8I-20・30	N-92°-E	<3.44>	0.30	0.46	縄文	
③SK-006	袋状土坑	4F-83	−	<0.56>	<0.46>	1.01	縄文？	
③SK-007	土坑	4F-83	−	1.00	0.90	0.66	−	

第19表　溝一覧表

遺構番号	位　置	走行方向	計測値：m　〈　〉現存値			時　期	備　考
			確認長	幅	深さ		
③SD-001	7I-23・24・31～33・40～42・50・51、7H-59・67～69・76～78	N-53°-E	<397>	0.60～1.20	0.14～0.42	中世	
③SD-002	7H-12・13・22・23・32・33	−	<9.50>	1.60～2.90	0.41～0.44	中世	谷頭に沿って弧状に走る
③SD-003	7I-29・39、7J-01・10・11・20・30	N-38°-E	<11.0>	<1.0>～<2.0>	0.38～0.80	近世	底部に柱穴列　現道につながり、北側は潰状の現道につながる

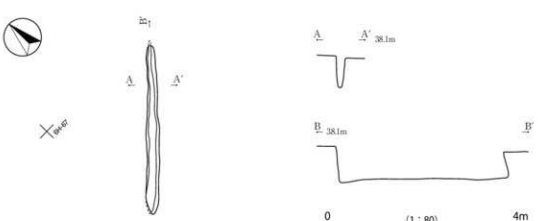
第2節　縄文時代の遺構と遺物

1　遺構

本調査区では、3基の長楕円形の土坑が検出された。いずれも遺物は出土しなかったが、形状から縄文時代の陥穴と推定される。(3)SK-005・(3)SK-006は台地の縁辺に平行する方位に長軸をとる。

(3)SK-004（第59図、第18表、図版13）

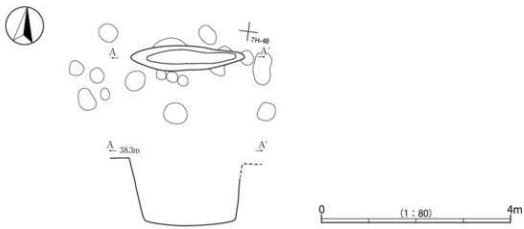
7H-67グリッドに所在する。平面形は細長い楕円形で、長軸方向はN-45°-Eである。規模は長軸3.67m・短軸0.28mで、確認面からの深さは0.77mである。



第59図　(3)SK-004

(3)SK-006（第60図、第18表、図版13）

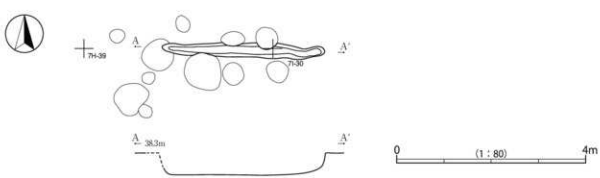
7H-47グリッドに所在する。上面は中世の台地整形遺構（3）SX-001に削平されている。平面形は楕円形で、長軸方向はN-82°-Eである。規模は長軸2.4m・短軸0.5mで、確認面からの深さは1.4mである。



第60図　(3) SK-006

(3) SK-007（第61図、第18表、図版14）

7H-29・39・7I-20・30グリッドに所在する。上面は中世の台地整形遺構（3）SX-001に削平されている。平面形は楕円形で、長軸方向はN-92°-Eである。規模は長軸3.44m・短軸0.3mで、確認面からの深さは0.46mである。



第61図　(3) SK-007

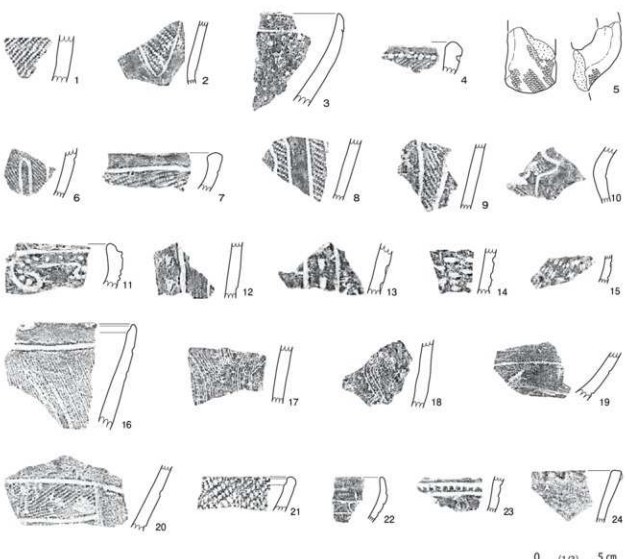
2　遺物

土器（第62図、第20表、図版27）

本地点では縄文中期末葉の加曽利E4式から後期中葉の加曽利B式までの土器が出土している。出土土器の大半は、中期末葉から後期初頭の土器であり、後期前葉から中葉の土器の出土はわずかである。本地点も（1・2）地点同様、古墳時代以降の土地利用が活発で、土器片の多くが古墳時代の竪穴の覆土から出土しているため、著しく摩耗した土器も多い。

1～5は加曽利E式終末の土器である。1はLRの単節縄文が認められる。2は胴くびれ部の破片で、対向U字文の一部と考えられる。沈線で区画された中に、LRの単節縄文が施されている。3は鉢形土器と考えられる。口縁部に細く浅い沈線が1条引かれる。4は口縁部破片で、原体不明の縄文を地文とし、浅い沈線が引かれ、沈線内に円形刺突が施される。5は両耳壺の把手である。縄文が認められるが、摩耗が著しく原体については不明である。6～13は称名寺式土器である。6～9は称名寺I式である。6は称名寺式の中でも古い段階の土器で、沈線と目の細かいLRの単節縄文で文様が施される。7は口縁部破片で、横

位の帯縄文が認められる。8・9は胴部破片で、縦位の帯縄文が施される。縄文はいずれもLRの単節縄文が使用されている。8・9は文様が縦位構成となっていることから中段階と考えられる。7も中段階と考えられるが、古段階に遡る可能性もある。10は胴くびれ部の破片で、沈線による縦位構成の文様が施されている。器面の一部に縄文が認められるが、摩耗が激しく原体は不明である。帯縄文が施される土器であるが、縄文の施文が一部に止まることから、称名寺Ⅱ式に下っているものと考えられる。11～13は称名寺Ⅱ式である。いずれも沈線間に列点文が施されている。11は横位の文様の端部が渦巻状となっている。このような文様構成と口縁部の様相から鉢形土器の可能性がある。14・15は刺突文が施される土器で、三十稲場式土器の影響を受けた土器と考えられる。15は2列一組の刺突が認められる。16～18は櫛歯状工具による条線が施される土器である。16は口縁直下に横位の沈線で区画され、その下から斜方向に条線が引かれている。口縁内面に指頭によると思われる横方向の強いナデが1条認められ、弱い稜が作出されている。これは、後期前葉から中葉にかけての深鉢に施される内面の沈線と同様の効果を果たしていると推測され、この時期のものである可能性が高い。17・18は条線を蛇行させて引かれている。こうした土器は



第62図　(3) 遺構外出土の遺物

中期後葉から後期前葉まで認められることから、明確な時期比定は難しい。19は横方向の細い沈線が２本引かれ、内面は丁寧に磨かれている。後期前葉から中葉のものと考えられる。20は沈線と目の細かいLRの単節縄文で横位の帯縄文が施される。帯縄文の幅が広いことと、帯縄文に直行するように縦位の沈線による文様が認められることから、堀之内２式と考えられる。21は口縁部破片でLRの縄文のみが施されている。内面に１条の横位の沈線が引かれていることから、堀之内２式から加曽利B式前半の時期のものと考えられる。22は加曽利B1式で、沈線とLRの単節縄文による帯縄文が施される。帯縄文を構成する沈線が、途中でクランク状に屈曲することで、帯縄文が区画される。23は胴くびれ部の破片で、２本の横位の沈線で区画され、区画内に刻みが施される。加曽利B2式に比定される。24は加曽利B式の紐線文土器と考えられる。紐線文直下には縄文が施されているが、器面全体の摩耗が激しく、原体は不明である。

石器

本地点では24点の石器が出土した。内訳は、楔形石器１点、打製石斧１点、二次加工ある剥片１点、石核１点、剥片20点であるが、図示し得るものはなかった。

参考文献

橋本勝雄2019「第3章15節石器」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15―柏市小山台遺跡B区―縄文時代以降編』千葉県教育振興財団調査報告第775集、千葉県教育振興財団

第20表　縄文時代土器観察表

遺構	挿図番号	型　式	器　種	文　様	胎　土	備　考
③遺構外	第62図－１	加曽利E終末	深鉢	単節縄文LR	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－２	加曽利E終末	深鉢	沈線で区画→区画内に単節縄文LR	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－３	加曽利E終末	鉢	横位の細い沈線	白色粒子、黒色粒子	
	第62図－４	加曽利E終末	深鉢	縄文、浅い沈線→沈線上に刺突文	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－５	加曽利E終末	両耳壺	縄文	白色粒子、黒色粒子	把手部分
	第62図－６	称名寺Ⅰ	深鉢	沈線で区画→区画外に単節縄文LR	白色粒子、黒色粒子	
	第62図－７	称名寺Ⅰ	深鉢	沈線→単節縄文LR	白色粒子、黒色粒子	
	第62図－８	称名寺Ⅰ	深鉢	沈線で区画→区画内に単節縄文LR	白色粒子、黒色粒子	
	第62図－９	称名寺Ⅰ	深鉢	沈線で区画→区画内に単節縄文LR	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－10	称名寺Ⅱ	深鉢	沈線で区画、区画内にまばらに縄文	白色粒子、黒色粒子	
	第62図－11	称名寺Ⅱ	鉢	沈線、沈線間に刺突文	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－12	称名寺Ⅱ	深鉢	沈線、沈線間に刺突文	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子、雲母片	
	第62図－13	称名寺Ⅱ	深鉢	沈線、沈線間に刺突文	白色粒子、黒色粒子	
	第62図－14	後期初頭から前葉	深鉢	刺突文	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－15	後期初頭から前葉	深鉢	2列1組の刺突文	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－16	堀之内2～加曽利B	深鉢	沈線、櫛歯状工具による条線、内面に1条の掛ナデ	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－17	中期後葉から後期前葉	深鉢	櫛歯状工具による蛇行条線	白色粒子、黒色粒子	
	第62図－18	中期後葉から後期前葉	深鉢	櫛歯状工具による蛇行条線	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－19	後期前葉から中葉	深鉢	横位の細い沈線	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	内面調整丁寧
	第62図－20	堀之内2	深鉢	沈線で区画→区画内に単節縄文LR	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－21	加曽利B	深鉢	単節縄文LR	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	
	第62図－22	加曽利B1	深鉢	沈線、単節縄文LR	白色粒子、黒色粒子	
	第62図－23	加曽利B2	深鉢	2本の横位沈線→沈線間に刻み	白色粒子、黒色粒子	
	第62図－24	加曽利B	深鉢	隆線→指頭押捺、縄文	白色粒子、赤色粒子、黒色粒子	

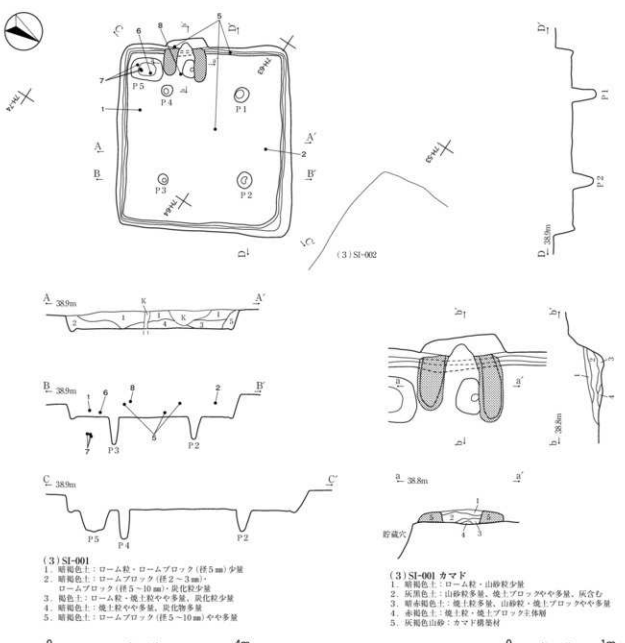
第３節　古墳時代の遺構と遺物

本調査区では、竪穴住居跡23軒、土坑２基を検出した。遺物としては８世紀代までの資料が散見されるが、竪穴住居跡の主な時期は５世紀末～６世紀後半である。前述した西側の調査区である久米砦遺跡(1･2)では、複数の重複がみられたが、(3) 調査区の竪穴住居跡はほとんどが単独で検出された。

1　竪穴住居跡

(3) SI-001（第63・64図、第17・21表、図版14・15・39）

7H-53･54･63･64グリッドに所在する。他の遺構との重複はなく、単独で検出された。平面形は方形で、主軸方向はN-121°-Wである。規模は主軸長3.86m、幅3.7mで、確認面からの深さは0.36mである。カマ

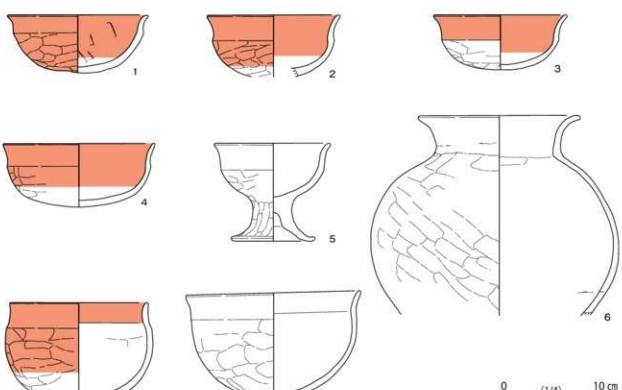


第63図　(3) SI-001（１）

ドは西壁の南側寄りに付設されている。袖は灰褐色の山砂を構築材として用い、壁から約50cmが遺存している。火床面は浅く皿状に窪み、被熱により赤化している。煙道は奥壁を約20cm掘り込んで作られている。壁溝は幅15cm ～ 30cm・深さ４cmで、カマド袖の下部を含み全周している。ピットは５基を検出した。P1 ～ P4が主柱穴にあたり、P1は径30cm・深さ50cm、P2は径38cm・深さ43cm、P3は径20cm・深さ57cm、P4は径24はcm・深さ66cmである。南西隅、カマドの右側に位置するP5は長さ60cm・幅48cm・深さ47cmの方形で、貯蔵穴と考えられる。

遺物は８点を図示した。７はP5から出土したもので、その他は覆土中からの出土である。１～４は土師器坏である。４点とも器高が高く、口縁部が外反する。４はやや扁平な形状である。器面はヘラケズリの後ナデにより調整され、内外面に赤彩が施されている。５は土師器高坏である。坏部はやや深く、脚高が低い。脚部は「ハ」の字型に開く。口縁部内面にわずかに赤彩の痕跡がみられる。６は土師器甕である。口縁部は頸部で屈曲して外反し、胴部は球状を呈する。器面は斜位のヘラケズリの後ナデにより調整されている。７・８は土師器鉢である。７は口縁部が内側に小さく屈曲して直立する。口縁部内面および外面が赤彩されている。８は口縁部が外傾し平底である。

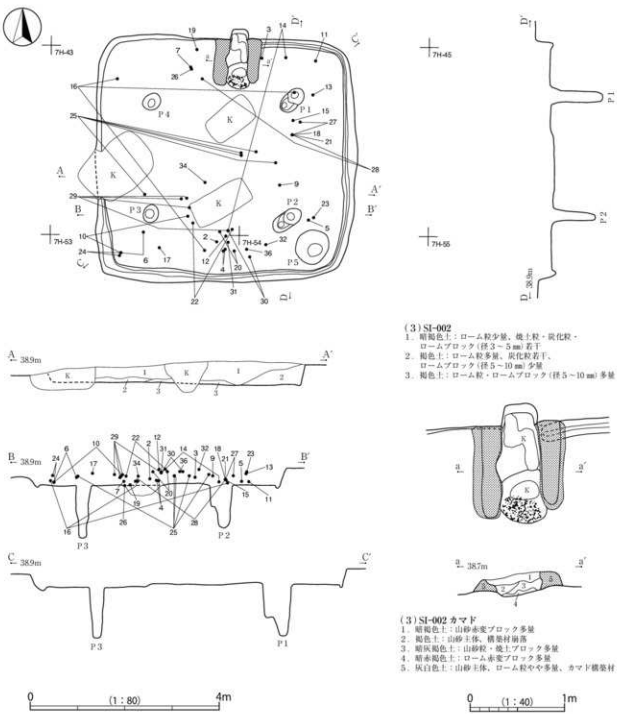
本遺構の時期は、出土遺物の特徴から５世紀末から６世紀初頭と推定される。



第64図　(3) SI-001（２）

(3) SI-002（第65～69図、第17・21・23表、図版15・16・39・40・41・50）

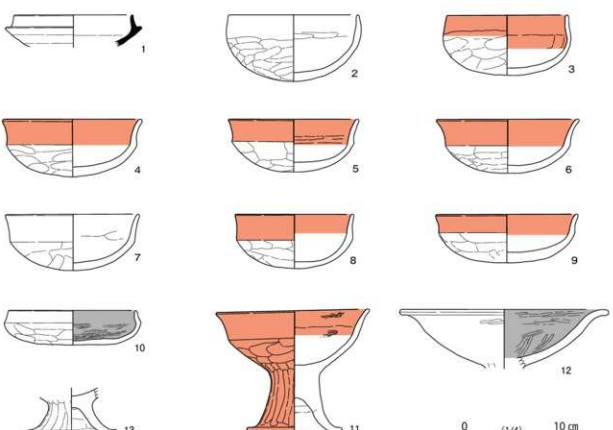
7H-33・34・43・44・53・54グリッドに所在する。他の遺構との重複はなく単独で検出された。平面形は方形で、主軸方向はN－1°－Wである。規模は主軸長5.24m、幅5.42mで、確認面からの深さは0.32mである。カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。袖は山砂を主体とする灰白色土を構築材とし、壁から約１mが遺存する。火床面は皿状に掘り窪められ、被熱により顕著に赤化している。煙道は奥壁を約20cm掘り込んで作られている。壁溝は幅15cm ～ 20cm・深さ約５cmで北西の角を除いて全周しており、



第65図　(3) SI-002（１）

右側のカマド袖下部からも確認された。ピットは５基を検出した。P1～P4が主柱穴にあたり、P1は長径70cm・短径36cm・深さ110cm、P2は長径70cm・短径32cm・深さ90cm、P3は径38cm・深さ91cm、P4は径34cm・深さ90cmである。東側に位置するP1・P2の２基は、それぞれ北東側に重複があり、建替えの痕跡とも考えられる。南東隅に位置するP5は貯蔵穴と推定され、径72cm・深さ54cmである。

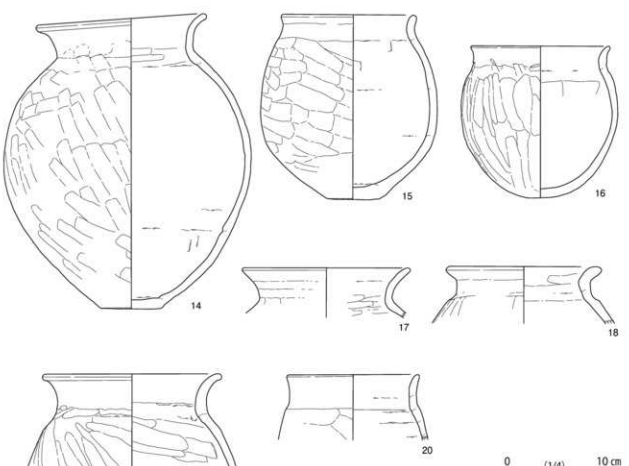
床面上および覆土中から遺物が多量に出土した。このうち36点を図示した。１は覆土中から出土した須恵器坏の破片である。TK10型式に比定されようか。２～10は土師器坏である。２は椀形で器高が高く、口縁部はほぼ直立する。３は口縁部が体部との間に境を持たずにやや内傾し、内外面上半部が赤彩されている。４～９は口縁部が体部との間に稜を作り外反する。７を除き口縁部内外面が赤彩されている。８は口縁部がやや広くほぼ直立する。９は体部に対して口縁部が短く、やや扁平である。10は須恵器坏を模倣した扁平な坏である。内面はミガキが施され、黒色処理されている。11～13は土師器高坏である。11は坏部が深く、口縁部は坏部体部との間に稜を持ち外反する。脚部は接脚部にかけてが中実で、下部は「ハ」の字形に開き、裾が小さく広がる。外面および坏部内面が赤彩されている。12は口縁部にかけて大きく外反する坏部である。内外面にミガキが施され内面に黒色処理されている。13は脚部である。脚高は低く下部は「ハ」の字形に開く。14～24は土師器甕である。14は口縁部が頸部で屈曲して外反し、胴部は長球形を呈する。器面は縦位のヘラケズリの後ナデにより調整されている。15は頸部が短く口縁部が小さく外反する小型の甕である。胴部は最大径を下半にもつ。器面は横位のヘラケズリにより整形されている。16は



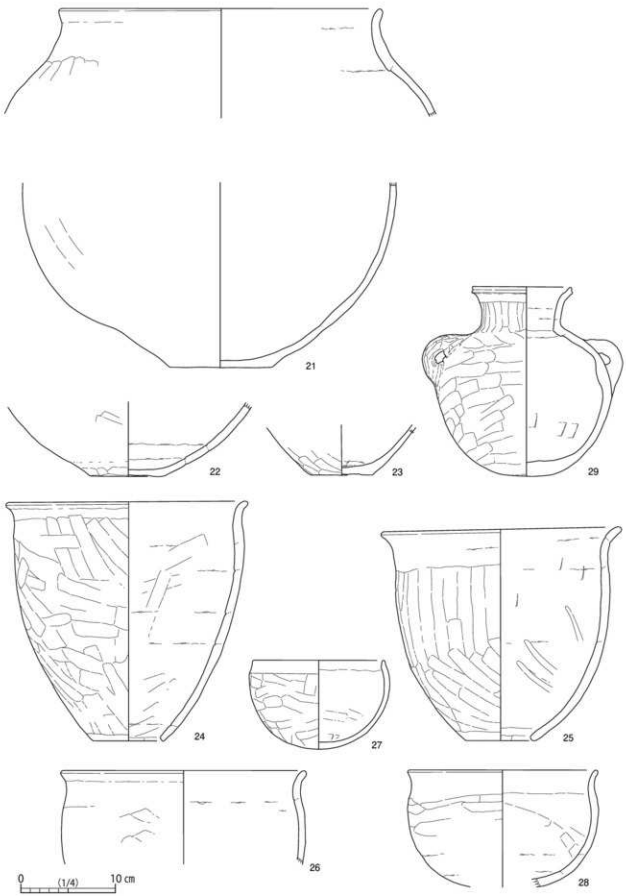
第66図　(3)SI-002(２)

口縁部が短く外反する小型の甕で、胴部は短く、ほぼ丸底である。17～21は口縁部の破片である。17は頸部で「く」の字形に屈曲する。18は頸部から直立し上部が小さく外反する。19は口縁部が外反し、20はほぼ直立する。21は大型の甕である。胎土に砂粒や石英を多く含み、器面はほぼ剥落している。22・23は底部の破片である。24～26は甑である。いずれも口縁部が小さく外反する。24は内外面を縦位から斜位のヘラケズリにより整形される。25は内面に粗いミガキが施されている。26は上半部で、器面が摩滅しており不明瞭だが斜位のヘラケズリにより整形されている。27・28は土師器鉢である。27は口縁部が内傾し丸底を呈し、底部にススが付着している。28は口縁部が外反する。29は須恵器提瓶を模倣したものとみられる土師器である。口縁部は頸部から直立して上部が外反し、口唇部を小さく摘まみ上げている。胴部はほぼ球状で、上半部両側に環状の把手を有する。30～35は手捏ねによるミニチュア土器である。30・35は壺または甕を模したもので、31～34は坏形である。32は内面に赤彩が施されている。36は石製の臼玉である。

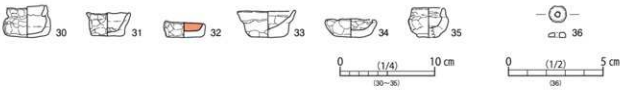
本遺構の時期は、出土遺物の特徴から6世紀初頭と推定される。



第67図　(3) SI-002 (3)



第68図　(3) SI-002 (4)



第69図　(3) SI-002 (5)

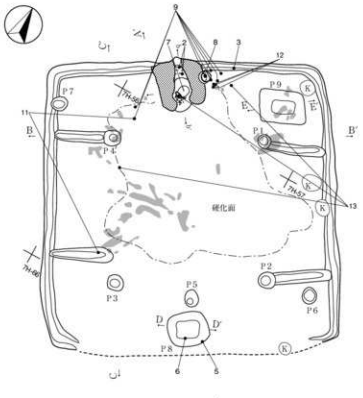
(3) SI-003 (第70・71図、第17・21・22表、図版16・17・41・50)

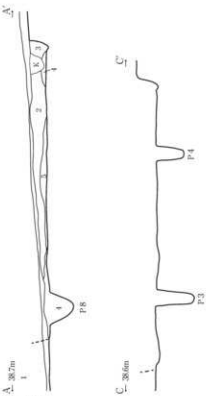
7H-45 ～ 47・55 ～ 57・66グリッドに所在する。他の遺構との重複はなく、単独で検出された。北側から南側にかけての地形傾斜により上面が削平されており、南東壁は検出できなかった。平面形は方形で、主軸方向はN-28°-Wである。規模は推定主軸長6.2m、幅6.18mで、確認面からの深さは0.21mである。カマドは北西壁の中央に付設されている。袖は山砂を主体とする暗褐色土を構築材として用い、壁から約1mが遺存する。火床面は浅く皿状に窪み、煙道側にかけての範囲が被熱により赤化している。カマド燃焼部中央からは7の甕が出土した。壁溝は幅20cm ～ 28cm・深さ約5cmで検出した部分を全周しており、カマド両袖の下部からも確認された。

ピットは9基を検出した。P1 ～ P4が主柱穴にあたり、P1は径28cm・深さ56cm、P2は径36cm・深さ63cm、P3は径36cm・深さ78cm、P4は径38cm・深さ62cmである。また、P1・P2・P4およびP3の北側から側面の壁溝にかけて、幅20cm ～ 30cm・深さ約10cmの間仕切り溝が確認された。P5は位置関係から入口施設と考えられ、径18cm・深さ17cmである。P6は径28cm・深さ72cm、P7は径30cm・深さ20cmで、いずれも性格不明である。南東壁寄り中央に位置するP8と、北側隅に位置するP9は貯蔵穴と考えられる。P8は長さ84cm・幅35cm・深さ64cm、P9は長さ98cm・幅70cm・深さ79cmである。床面はカマド焚口正面から中央部にかけてが硬化しており、床面上からは焼土ブロックおよび炭化材が検出された。

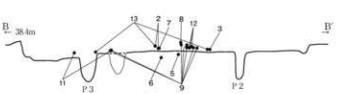
遺物はカマド内および周囲の床面から多く出土しており、このうち14点を図示した。1は覆土中から出土した須恵器坏蓋である。TK43型式に比定されようか。2 ～ 6は土師器坏である。いずれも器高が低く扁平に作られている。2・3は椀形の坏である。2はカマド燃焼部の煙道付近から出土した。3は外面に輪積みと指頭の痕跡を残している。4・5は口縁部が小さく内傾しする。内面にミガキが施され、器面は黒色処理されている。6は甕の底部にも似るが口唇部にも整形・焼成が及んでおり、特異な器形の坏として掲載した。下半はヘラケズリにより整形され、外反する口縁部は横位のナデにより器面を調整されている。7 ～ 10は土師器甕である。カマド内から出土した7は口縁部が外反し、胴部が長球状を呈する。8はカマド右袖脇から出土した口縁部が外反する甕の胴部上半部である。9は胴部が短く器高の低い小型の甕である。口縁部は頸部で屈曲して外傾する。10は底部の破片である。11・12は甑である。11は内面に縦位のミガキが施されている。カマド右袖付近の床面から出土した12は、胴部の張りが弱くほぼ直立する形状を呈する。13は土師器鉢である。口縁部は短く直立し、器面はヘラケズリの後ナデにより調整されている。14は土玉である。

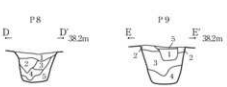
本遺構の時期は、出土遺物の特徴から6世紀後半と推定される。





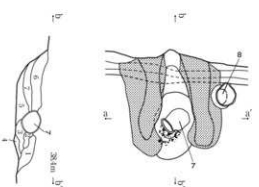
(3)SI-003
1. 暗褐色土：ロームブロック（径3～5㎜）・褐色土粒少量（台地整形埋土）
2. 暗褐色土：焼土粒・ロームブロック（径5㎜）やや多量、焼土ブロック少量、炭化材
3. 褐色土：ローム粒多量
4. 褐色土：ローム粒・ロームブロック（径3～5㎜）少量
5. 褐色土：ローム粒やや多量、焼土ブロック・炭化物





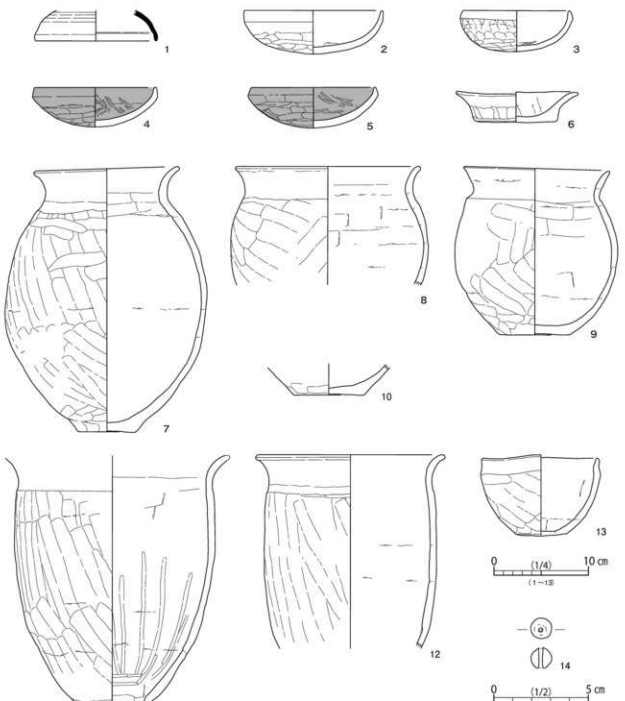
(3)SI-003　P8
1. 暗褐色土：しまりなし、焼土粒・ローム粒・炭化材やや多量
2. 明黄褐色土：しまりなし、ローム粒・焼土粒・炭化材中量
3. 暗褐色土：しまりなし、ローム粒・ロームブロック少量
4. 黒褐色土：しまりなし、炭化粒・焼土粒・ロームブロック（径10㎜）
5. 黄褐色土：しまりあり、ローム粒多量

(3)SI-003　P9
1. 暗褐色土：ロームブロック（径10～20㎜）多量
2. 褐色土：ロームブロック（径5～10㎜）やや多量
3. 褐色土：暗褐色土やや多量、ロームブロック（径5～10㎜）・ロームブロック（径10～20㎜）多量
4. 暗褐色土：ロームブロック（径5～10㎜）やや多量
5. 暗赤灰色土：焼土粒・炭化物多量



(3)SI-003 カマド
1. 暗褐色土：山砂粒多量、ロームブロック（径5～10㎜）少量
2. 暗赤褐色土：焼土粒（砂質）・山砂多量、構築材崩落
3. 暗褐色土：山砂粒多量、焼土粒やや多量
4. 暗褐色土：山砂粒多量、焼土粒・ロームブロック（径3～5㎜）少量
5. 暗褐色土：暗褐色土主体、山砂粒・焼土ブロックやや多量
6. 暗褐色土：焼土粒やや多量、ロームブロック（径2～3㎜）少量
7. 暗褐色土：焼土ブロック（径5～10㎜）多量
8. 暗褐色土：山砂主体、カマド構築材

第70図　(3)SI-003(1)



第71図　(3) SI-003(2)

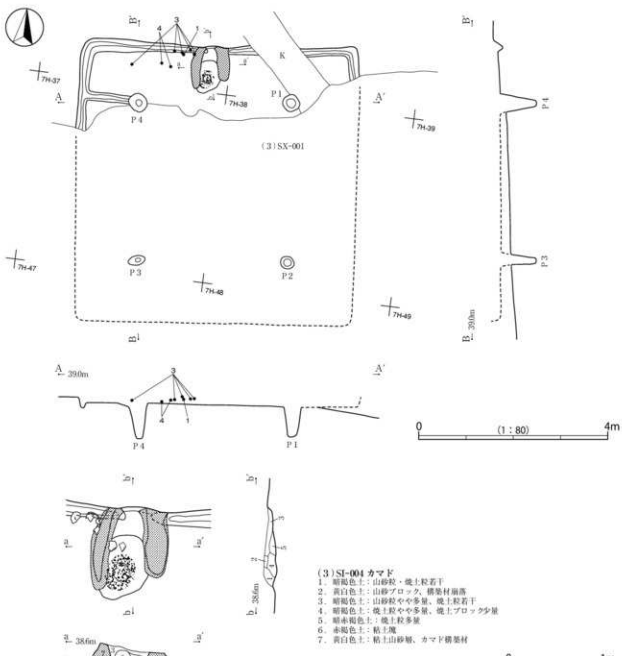
(3) SI-004（第72・73図、第17・21表、図版17・18・41）

7H-27・28・37・38・47・48グリッドに所在する。南側の大部分は地形の傾斜および中世の台地整形により失われており、カマドを含む北壁部分のみが検出された。平面形は方形と推定され、主軸方向はカマドの方位からN-3°-Wと考えられる。柱穴の位置関係から、推定規模は一辺が5.9mで、確認面からの深さは0.09mである。カマドは北壁中央に付設されている。袖は黄白色の山砂を構築材として用い、壁から約90cmが遺存する。火床面の窪みは浅く、煙道の張り出しも明瞭ではない。壁溝は幅20cm～25cm・深さ約9cmでカマドの燃焼部後方を除き残存箇所を全周している。本遺構に帰属するとみられるピットは、

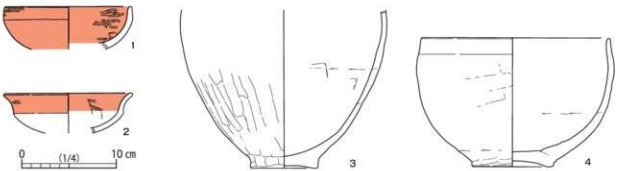
主柱穴にあたる４基を検出した。P1は径32cm・深さ20cm、P2は径28cm・深さ42cm、P3は径36cm・深さ53cm、P4は径38cm・深さ76cmである。P4から側面の壁溝にかけて幅20cm・深さ12cmの間仕切り溝が確認された。

遺物は４点を図示した。1・2は土師器坏である。１は椀形で、内外面はミガキが施され赤彩されている。２は口縁部が外反し、内外面上半部が赤彩されている。また、内面にミガキの痕跡がみられる。３は土師器甕の下半部である。器面は縦位のヘラケズリにより整形されている。４は大型の土師器鉢である。口縁部は短く直立し、器面はヘラケズリの後ナデによる調整が施される。

本遺構の時期は、６世紀前半と推定される。



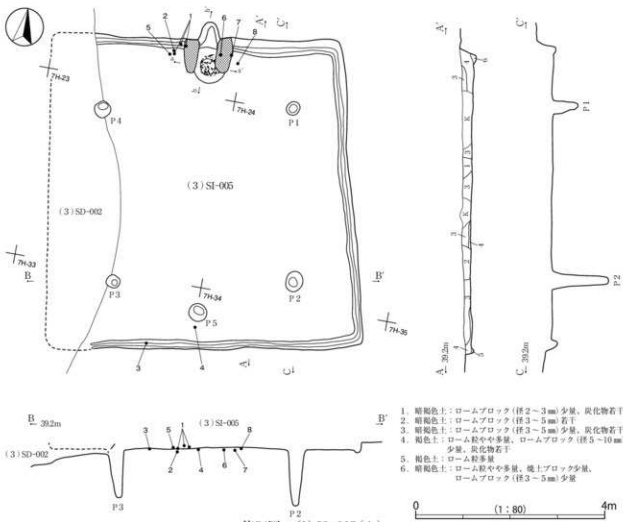
第72図　(3)SI-004(１)



第73図　(3) SI-004 (2)

(3) SI-005 (第74・75図、第17・21表、図版18・42)

7H-13・14・23・24・33・34グリッドに所在する。西側で中世以降の溝跡と考えられる (3) SD-002と重複する。平面形は方形で、主軸方向はN-9°-Wである。規模は主軸長6.56m、残存幅6.38mで、確認面からの深さは0.4mである。カマドは北壁中央に付設されている。袖は山砂を主体とする暗灰褐色土を構築材に用い、壁から70cmほどが遺存する。火床面は浅く窪み、燃焼部焚き口付近が被熱により赤化している。煙道は奥壁を30cmほど掘り込んでいる。壁溝は幅14cm ～ 32cm・深さ約6cmで、カマド燃焼部後方

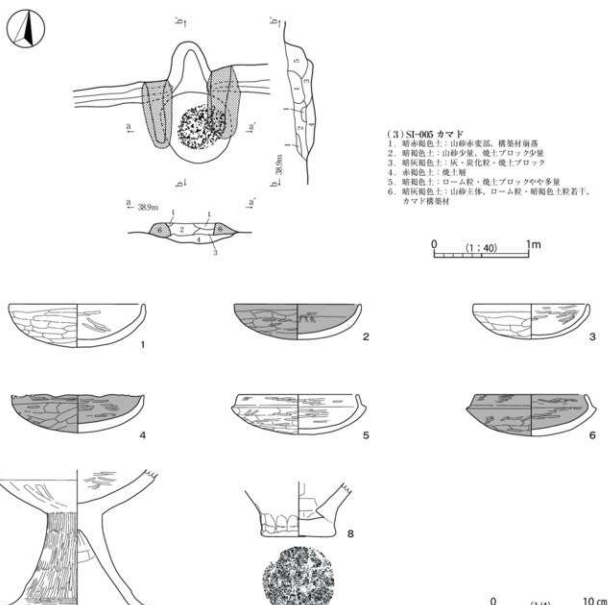


第74図　(3) SI-005 (1)

を除き残存部を全周している。また、カマド両袖の下部からも確認された。ピットは５基を検出した。P1～P4が主柱穴にあたり、P1は径30cm・深さ47cm、P2は径40cm・深さ117cm、P3は径30cm・深さ93cm、P4は径38cm・深さ37cmである。P5は径38cm・深さ43cmで入口施設と考えられる。

遺物は主にカマド内および周囲の床面から出土しており、このうち８点を図示した。１～６は土師器坏である。いずれも扁平に作られており、器面はミガキが施されている。２・４・６は内外面を黒色処理している。１～４は椀形の坏である。４は口縁部の全周を細かく欠損しており、何らかの再利用がなされたものとも考えられる。５・６は須恵器模倣坏で、口縁部が内傾する。６はカマド燃焼部から出土した。７は土師器高坏である。脚高は高く「ハ」の字に開き、裾端部は小さく稜を持って直立する。外面は丁寧なミガキが施されている。８は土師器甕の底部である。底面に木葉痕を残している。

本遺構の時期は、床面上の出土遺物の特徴から６世紀後半～末葉と推定される。



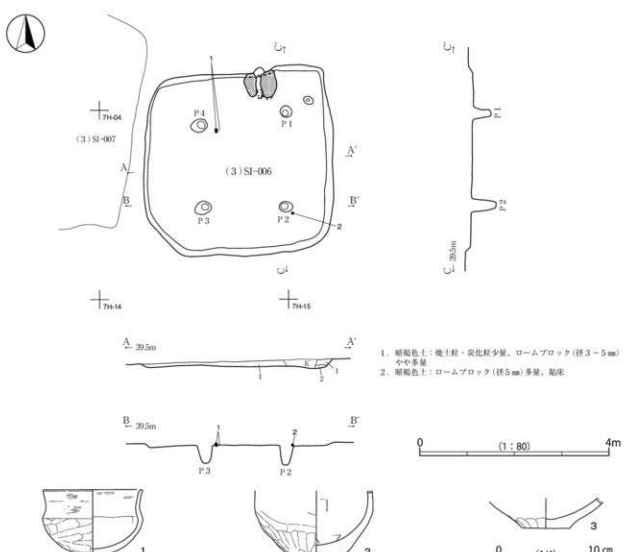
第75図　(3) SI-005（２）

(3) SI−006（第76図、第17・21表、図版19・42・50）

6H−94・95、7H−04・05グリッドに所在する。上面が削平を受けており床面付近のみが検出された。(3) SI−007と隣接するが、他の遺構との重複はない。平面形は不整方形である。主軸方向はN−2°−Wである。規模は主軸長3.84m、幅4mで、確認面からの深さは0.07mである。カマドは北壁の東寄りに付設されている。袖は壁から約50cmが遺存している。火床面の窪みは浅く、被熱の痕跡も不明瞭である。煙道は奥壁をわずかに掘り込んでいる。壁溝は確認されなかった。ピットは5基を検出した。P1 〜 P4が主柱穴にあたり、P1は径24cm・深さ50cm、P2は径28cm・深さ61cm、P3は径40cm・深さ36cm、P4は径36cm・深さ37cmである。東壁よりに位置するP5は径20cm・深さ32cmで性格は不明である。

遺物は覆土の残りが悪いことから、帰属が明らかなものは少ないが、床面付近から出土した3点を図示した。1は土師器坏である。口径に対して器高が高い。口縁部は大きく、体部から小さく屈曲して外反する。2は小型の土師器甕あるいは鉢である。平底で胴部が直立する。3は土師器甕の底部破片である。

本遺構の時期を確定しにくいが、出土遺物の特徴から6世紀初頭〜前半と推定される。



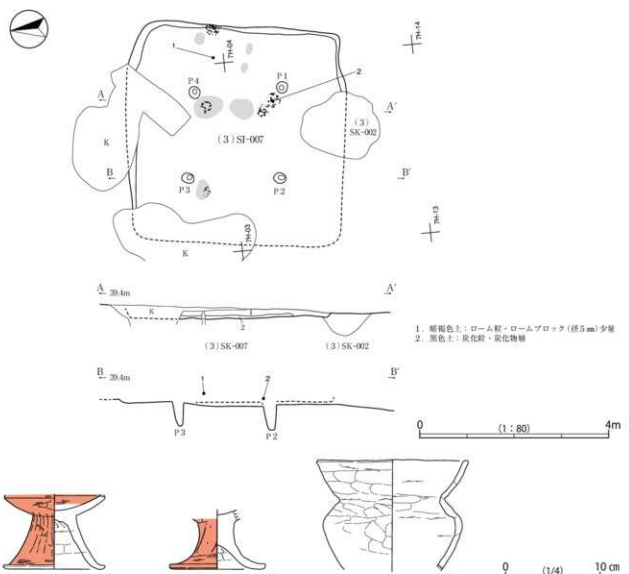
第76図　(3) SI−006

(3) SI-007（第77図、第17・21表、図版19・42）

6H-93・94、7H-03・04グリッドに所在する。上面が広く削平を受けており北東部分の床面と立ち上がりがわずかに検出された。西側で(3)SK-002と重複し、本遺構が新しい。東壁の西寄りで床面が被熱しており、周囲から焼土塊が検出された。カマドの痕跡とも考えられる。平面形は方形と推定され、東壁にカマドが付設されていたものとし、主軸方向はN-10°-Eと考えられる。規模は主軸長4.56m、幅4.6mで、確認面からの深さは0.09mである。壁溝は確認されなかった。ピットは主柱穴にあたる4基を検出した。P1は径22cm・深さ38cm、P2は径26cm・深さ50cm、P3は径24cm・深さ50cm、P4は径22cm・深さ40cmである。中央部床面上からも炭化物、焼土塊が検出されている。

遺物は3点を図示した。1・2は土師器高坏の脚部である。2点ともに脚高がやや高く、赤彩が施されている。1は坏部底部に脚部が直接貼り付けられている。2は脚部上半が直立し、接脚部が中実となっている。3は坩形の土師器である。造りは粗く、器面には輪積み痕が残る。

本遺構の時期は、出土遺物の特徴から、6世紀前半と推定される。



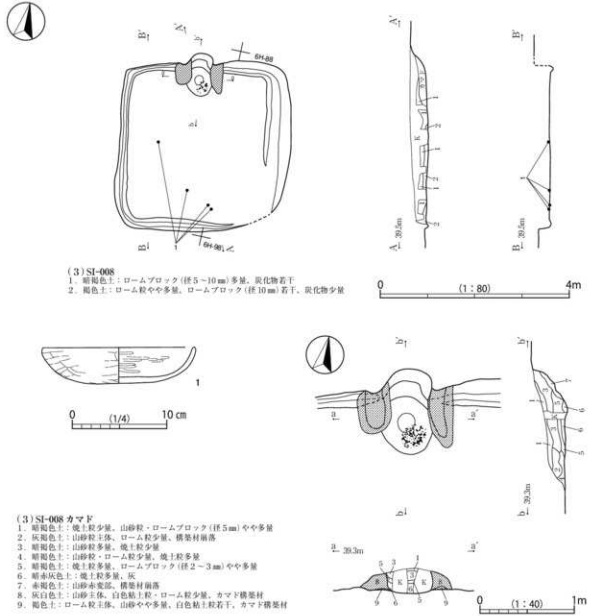
第77図　(3) SI-007

(3) SI-008 (第78図、第17・21表、図版19・20・42)

6H-87・88・97グリッドに所在する。遺構の東側にかけて上面が削平を受けている。多の遺構との重複はなく、単独で検出された。平面形は方形で、主軸方向はN-9°-Wである。壁の立ち上がりが不明瞭であるが、壁溝の外周から推定して主軸長3.54m、幅3.6mと小規模で、確認面からの深さは0.25mである。カマドは北側中央に付設されている。袖は灰白色の山砂を構築材として用い、壁から約60cmが遺存する。壁溝はカマド燃焼部後方を除き全周していたものと考えられる。床面上からピットは検出されなかった。

遺物は床面で出土した土師器坏1点を図示した。扁平で内面にミガキが施されている。

本遺構の時期は、出土土器の特徴から、6世紀末葉と推定される。



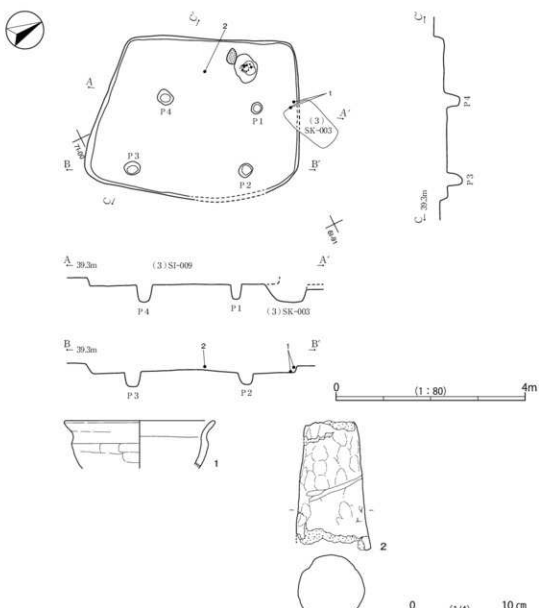
第78図　(3) SI-008

(3) SI-009（第79図、第17・21・22表、図版20・42）

6H-89・99、6I-80・90、7I-00グリッドに所在する。上面が削平を受けて覆土の大部分が失われており、床面付近のみが検出された。(3)SK-003と重複し、本遺構のほうが新しい。平面形は不整な長方形で、主軸方向はN-61°-Wである。規模は主軸長3.36m、幅4.3mで、確認面からの深さは0.2mである。北西壁脇の中央より北よりにカマドの痕跡と考えられる火床面の窪みと、袖の構築材がわずかに確認された。ピットは主柱穴と考えられる4基を検出した。P1は径20cm・深さ29cm、P2は径22cm・深さ22cm、P3は径30cm・深さ30cm、P4は径32cm・深さ34cmである。

覆土が浅く、明確に本遺構に帰属する遺物は少ないが、床面付近で出土した2点を図示した。1は土師器坏である。口縁部は屈曲して外反する。2はカマドの支脚である。表面に指頭痕を残す。

本遺構の時期は、カマドを伴っていることから、6世紀後半と推定される。



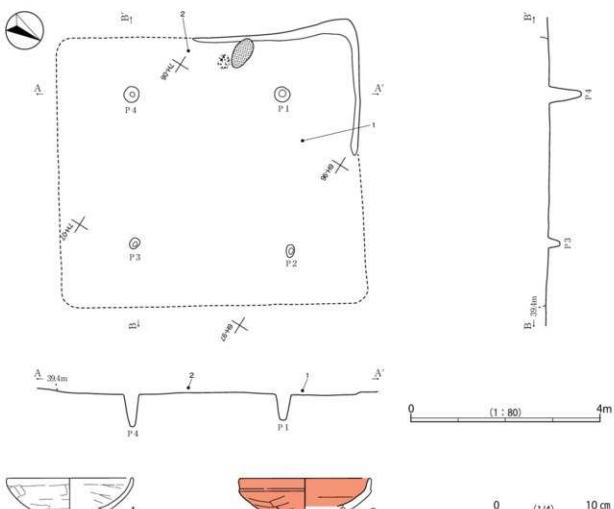
第79図　(3) SI-009

(3) SI-010（第80図、第17・21表、図版20・42）

6H-85・86・95 ～ 97、7H-05 ～ 07グリッドに所在する。上面が削平され壁面の立ち上がりおよび覆土の大部分が失われており、西側隅および床面のみが検出された。主柱穴の位置関係から平面形は１辺約6.0mの方形と推定される。確認面からの深さは0.1mである。主軸方向はN-123°-Wである。カマドは南西側に設けられている。被熱した火床面と袖の構築材の一部が検出された。ピットは主柱穴と考えられる４基を検出した。P1は径32cm・深さ46cm、P2は径30cm・深さ31cm、P3は径22cm・深さ25cm、P4は径32cm・深さ62cmである。

覆土がほぼ失われており、本遺構に帰属する遺物は少ないが、床面上から出土した２点を図示した。１・２は土師器坏である。１は椀形で、２は口縁部がわずかに屈曲して直立し、内外面が赤彩されている。

本遺構の時期は、出土遺物の特徴から、６世紀前半と推定される。



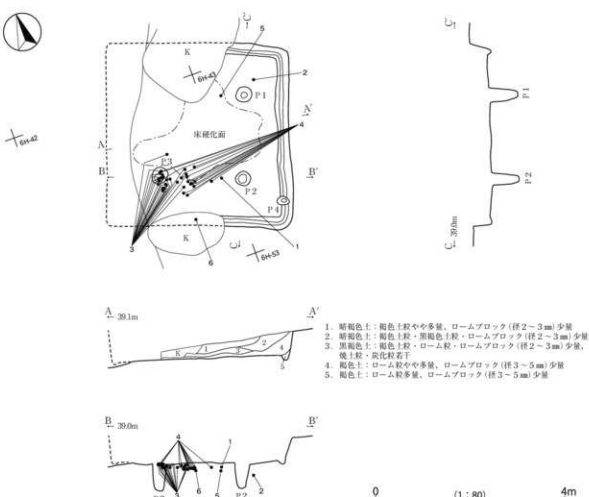
第80図　(3) SI-010

(3) SI-011（第81・82図、第17・21表、図版20・42・43）

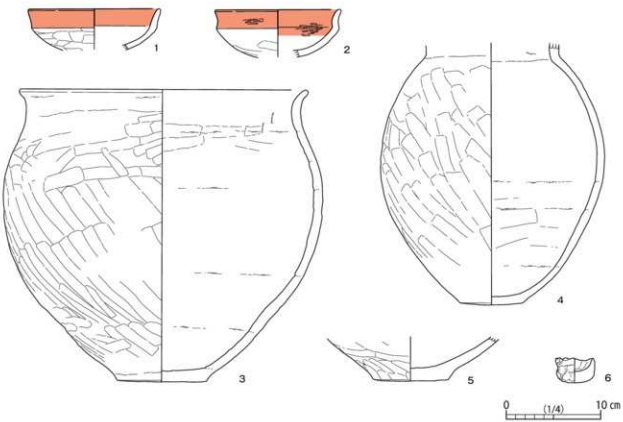
6H-32・33・42・43グリッドに所在する。地形の傾斜により西壁が削平されている。他の遺構との重複はなく、単独で検出された。平面形は方形で、残存する西壁の方位から主軸方向はN-21°-Eと推定される。推定規模は1辺が3.86mで、確認面からの深さは0.5mである。残存部からカマドは確認されなかった。壁溝は幅20cm～30cm・深さ6cmで残存部を全周している。ピットは4基を検出した。P1～P3は主柱穴である。P1は径32cm・深さ56cm、P2は径31cm・深さ55cm、P3は径37cm・深さ84cmである。P4は壁柱穴と考えられ、径28cm・深さ14cmである。

遺物は6点を図示した。1・2は土師器坏である。口縁部が外反し内外面口縁部が赤彩されている。3～5は土師器甕である。P3付近の床面上で多く出土した破片が接合した。3はほぼ完形で頸部が短く口径が広く、口縁部は外反する。4は胴部のふくらみが弱く、楕円球状を呈する。5は底部破片である。6は手捏ねによるミニチュア土器である。

本遺構の時期は、出土遺物から6世紀前半と推定される。



第81図　(3) SI-011（1）



第82図　(3) SI-011（2）

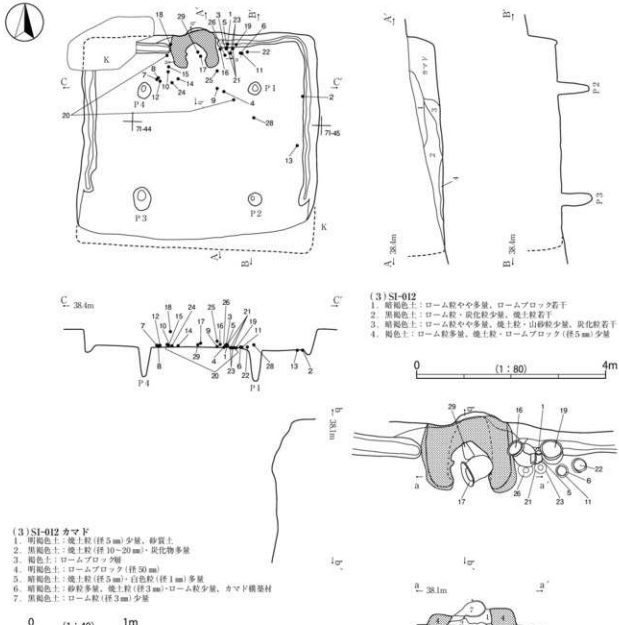
(3) SI-012（第83～85図、第17・21～23表、図版20・21・43・44・50）

71-33・34・43・44グリッドに所在する。北から南にかけての地形の傾斜により、上面が削平されており、南側は壁の立ち上がりと床面が失われている。他の遺構との重複はなく単独で検出された。平面形は方形で、主軸方向はN－2°－Wである。規模は残存主軸長4.54m、幅4.95mで、確認面からの深さは0.58mである。カマドは北壁中央に付設されている。袖は砂粒を多く含む暗褐色土をカマドの構築材として用いており、壁から約70cmが遺存している。また煙道付近は天井部が崩落せず形状を保っていた。カマド上面は平坦に作られており、側面と稜をなしている。火床面は浅く窪むが、被熱は顕著ではない。燃焼部中央から29の支脚と重なる形で17の甕が完形で出土した。壁溝は幅20cm ～ 35cm・深さ10cmほどでカマド燃焼部後方を除き、残存部を全周している。カマド袖の下部からは確認されなかった。ピットは主柱穴にあたる４基を検出した。P1は径28cm・深さ65cm、P2は径30cm・深さ59cm、P3は径48cm・深さ70cm、P4は径37cm・深さ41cmである。

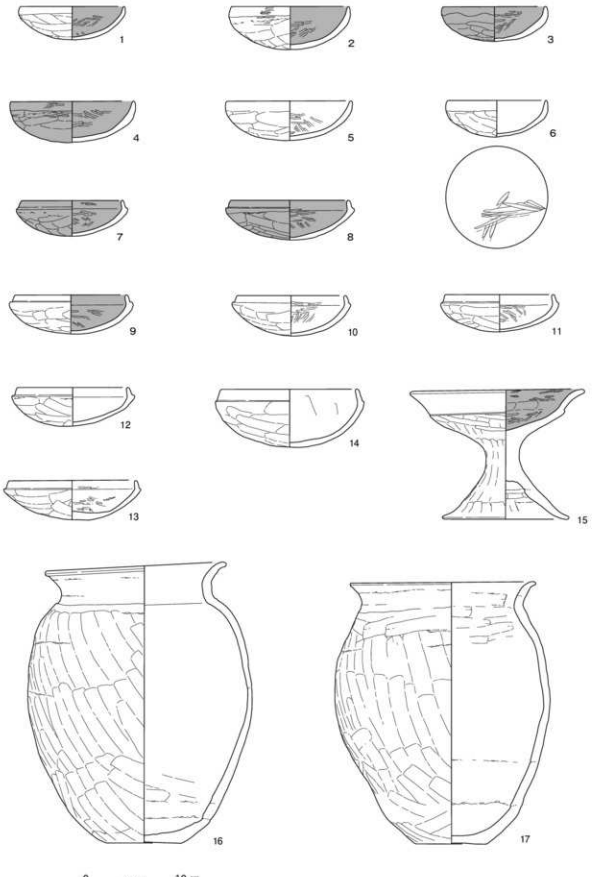
カマド周囲の床面上から多くの遺物が出土した。このうち30点を図示した。坏および鉢類も多く、所謂カマド祭祀に関わるものであるとも考えられる。１～14は土師器坏である。いずれも扁平で１～６は椀形を呈し、９～14は須恵器坏身を模倣した形状で、口縁部が内傾し体部との間に稜をなす。いずれも外面はヘラケズリにより整形されており、内面にミガキが施されているものが多い。1・2・9は内面、3・4・7・8は内外面が黒色処理されている。６は底面が砥石に転用されている。14はやや大型の坏である。６と11は口を合わせる形で重なって出土した。15は土師器高坏である。坏部は体部に稜を持ち、口縁部が大きく外反する。脚部は高く、上部が中実で下部は「ハ」の字上に開く。坏部内面は黒色処理されている。16～18は土師器甕である。16はカマド右側から19の甑と並ぶ形で、口を上にほぼ直立して出土した。口縁部は

外反し、胴部はほぼ楕円球状を呈する。17はカマド燃焼部上部に横たわる形で出土した。形状は16に類似する。18は口縁部が外反する上半部である。カマド右側から出土した。19は16と近接して出土した甑である。ほぼ完形で内面に縦位のミガキが施されている。20～26は土師器鉢である。いずれも胴の張る平底で、ヘラケズリによる整形の後、口縁部は横位のナデによる調整が施され、短く外反している。21・26はカマドの右側、16・19の甕と甑に近接して、口縁を下に伏せる状態で出土した。22・24はそれぞれカマドの右側と左側で直立する形で出土した。27・28はミニチュア土器である。27は器面に輪積み痕を残している。28は手捏ねによる成形である。29はカマド燃焼部から出土した支脚である。表面に指頭痕を残している。30は軽石製の砥石である。

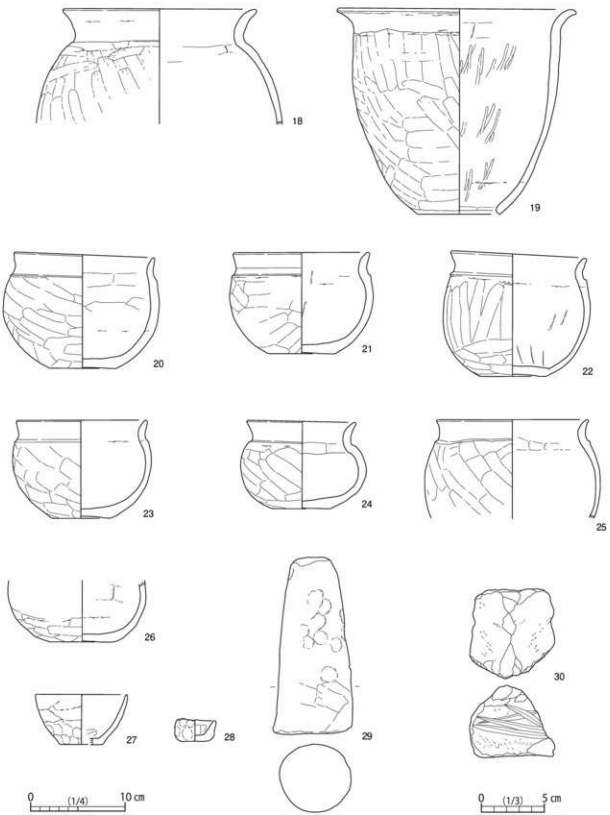
本遺構の時期は、床面上の出土遺物から6世紀後半と推定される。



第83図　(3)SI-012(1)



第84図　(3) SI-012 (2)



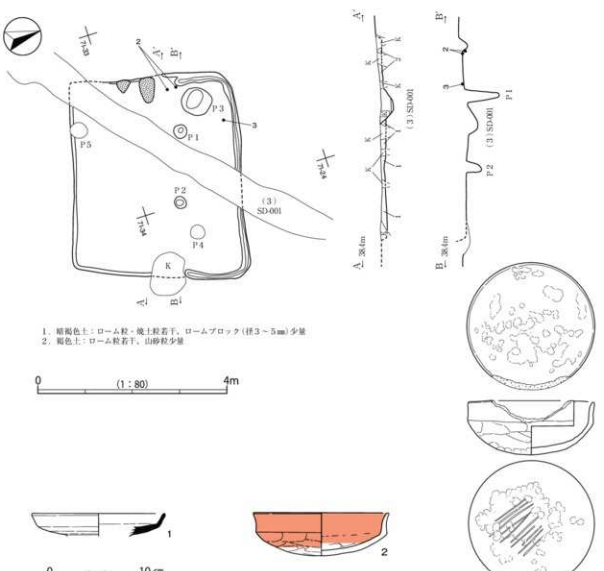
第85図　(3) SI-012 (3)

(3) SI−013（第86図、第17・21表、図版21・44）

7J−23・24・33・34グリッドに所在する。上面は大きく削平されており、中近世の溝跡（3）SD−001と重複している。平面形は主軸方向に長い長方形で、主軸方向はN−77°−Wである。規模は主軸長4.36m、幅3.56mで、確認面からの深さは0.15mである。カマドは西壁のやや南寄りに付設されている。両袖の基部のみが検出された。壁から約50cmが遺存する。壁溝は幅10cm ～ 20cm・深さ４cmほどで床面の北側を半周する形で確認された。ピットは３基を検出した。P1は径30cm・深さ70cm、P2は径26cm・深さ30cmで主柱穴にあたる。北西隅に位置するP3は径62cm・深さ88cmで貯蔵穴と考えられる。

覆土が浅く、明確に遺構に帰属する遺物は少ないが、特徴的なもの３点を図示した。１は須恵器腿の口縁部である。TK43型式に比定されようか。２・３は土師器坏である。２は口縁部がほぼ直立して小さく外反し、内外面が赤彩されている。３は砥石に転用されている。口縁部に意図的な打ち欠きがみられ、内面および外面には剥落が多数認められる。

本遺構の時期は、６世紀前半と推定される。



第86図　(3) SI−013

(3) SI-014（第87～89図、第17・21～23表、図版22・44～47・50）

7J-10・11・20・21・30・31グリッドに所在する。西側の一部が中世の溝跡である（3）SD-003と重複しており、東側は調査区外に伸びる。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-29°-Eである。規模は主軸長5.7m、残存幅4.8mで、確認面からの深さは0.7mである。カマドは北東壁に付設されている。袖は山砂を多く含む褐色土を構築材として用い、壁から90cmほどが遺存する。火床面の掘り込みは浅く、燃焼部焚き口付近が被熱により赤化するが、顕著ではない。確認された煙道は奥壁を20cmほど掘り込んでいる。壁溝は幅20cm～40cm・深さ3cmでカマド燃焼部後方を除き、残存部を全周している。ピットは5基を検出した。P1～P4は主柱穴にあたり、P1は径58cm・深さ73cm、P2は径56cm・深さ83cm、P3は径62cm・深さ70cm、P4は径50cm・深さ76cmである。南側隅に位置するP5は長さ102cm・幅80cm・深さ66cmで、貯蔵穴と考えられる。床面上からは焼土塊が多く検出された。

床面上及び覆土5層上面から多くの遺物が出土した。このうち52点を図示した。1は須恵器坏蓋である。2は須恵器坏身である。3は須恵器甕の胴部である。いずれも覆土中からの出土で、TK10～TK209型式に比定される。4～20は土師器坏である。4は器高が高く丸底で、口縁部が内傾する。内外面上半部が赤彩されている。5～9は口縁部と体部に境のない椀形の坏である。6を除き内面にミガキが施され、9は内面が黒色処理されている。10～13は口縁部が体部との間に稜を持って外反する。いずれも器高はやや高く、内面にミガキが施されている。12を除き赤彩が施されている。13は被熱により器面が剥落している。14～16は口縁部が直立かやや外傾する。16は扁平で体部に対して口縁部が広い。

17～20は口縁部が内傾する、須恵器坏身を模倣した形状である。17は口唇部全周が細かく欠損しており、底面にも敲打痕が認められる。何らかの再利用によるものと推定されようか。18は被熱により器面が失われているが、内外面に赤彩の痕跡がみられる。19は扁平で内外面が黒色処理されている。20も扁平な造りで、内外面上半部が赤彩されている。

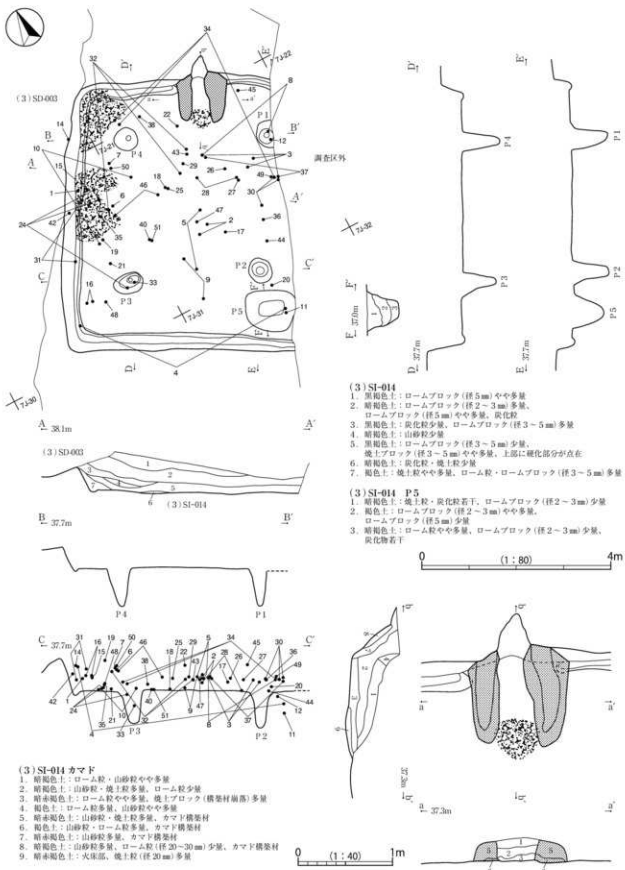
21～23は土師器高坏である。いずれも外面および坏部内面が赤彩されている。21・22は脚高が低く、接脚部付近は中実である。24～31は甕である。24は口縁部が頸部で屈曲して外反し胴部は球状を呈する。25は頸部から口縁部の立ち上がりが短く、胴部は最大径を下半にもつ特異な形状を呈する。26は口縁から胴部上位である。口縁部は頸部で屈曲して外反する。27は口縁部が外反する小型の甕で、器面が摩滅している。28は頸部がやや内傾して立ち上がり口縁部付近が外反する。29は頸部から口縁部が短くほぼ直立する小型の甕である。30・31は底部破片である。

32～34は甑である。32・34は口縁部が外反し、内面に縦位のミガキが施されている。35～39は土師器鉢である。35は胴の張る平底で、口縁部は外反する。36から39は口縁部が内傾する。36は内面にミガキが施され、38は内面が黒色処理されている。37・39は器面の摩滅が著しい。39は小型の鉢である。40は小型の坏で、口縁部に「U」字状の打ち欠きがみられる。

41～45はミニチュア土器である。41・42・45は輪積み、43・44は手捏ねによる整形である。器面はヘラ状工具により調整され、指頭痕も多く残る。46・47は土製の紡錘車である。

48～51は土玉である。表面はヘラ状工具により調整される。小型の51は装飾品と考えられる。52は砂岩製の砥石である。

本遺構の時期は、6世紀前半と推定される。

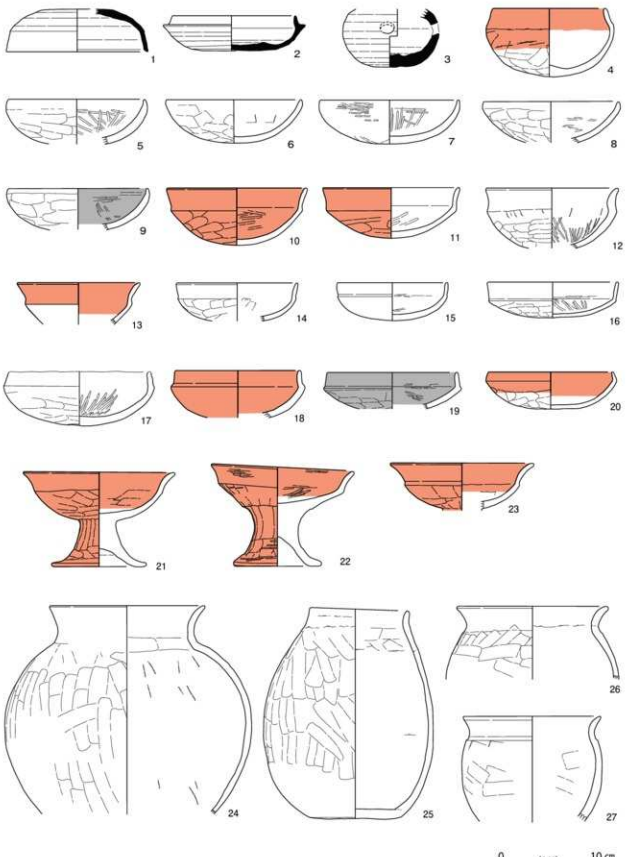


(3)SI-014
1. 黒褐色土：ロームブロック（径5㎜）やや多量
2. 暗褐色土：ロームブロック（径2～3㎜）多量、ロームブロック（径5㎜）やや多量、炭化粒
3. 黒褐色土：炭化粒多量、ロームブロック（径3～5㎜）多量
4. 暗褐色土：山砂粒少量
5. 黒褐色土：ロームブロック（径3～5㎜）少量、焼土ブロック（径3～5㎜）やや多量、上部に硬化部分が点在
6. 暗褐色土：炭化粒・焼土粒少量
7. 褐色土：焼土粒やや多量、ローム粒・ロームブロック（径3～5㎜）多量

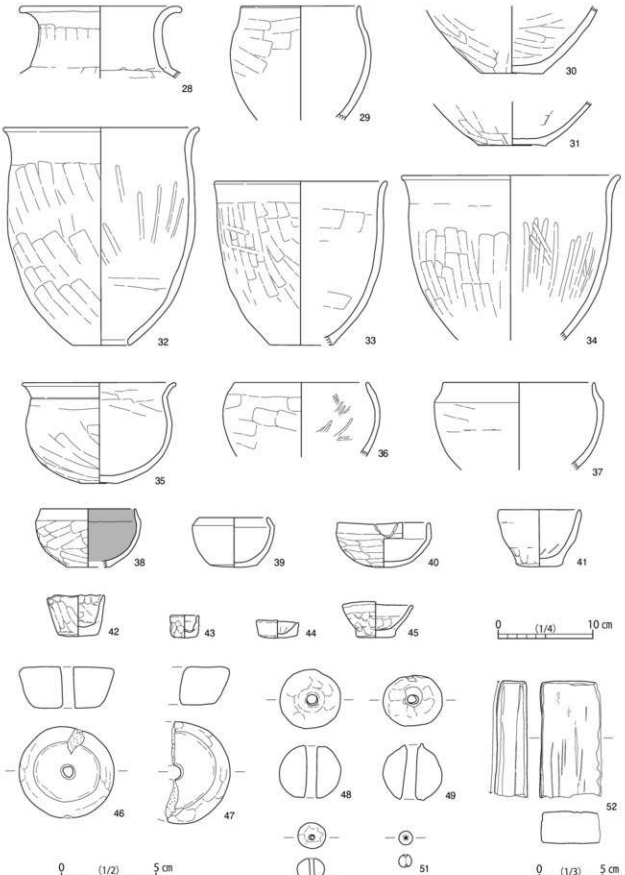
(3)SI-014　P5
1. 暗褐色土：焼土粒・炭化粒若干、ロームブロック（径2～3㎜）少量
2. 褐色土：ロームブロック（径2～3㎜）やや多量、ロームブロック（径5㎜）少量
3. 暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック（径2～3㎜）少量、炭化物若干

(3)SI-014 カマド
1. 暗褐色土：ローム粒・山砂粒やや多量
2. 暗褐色土：山砂粒・焼土粒多量、ローム粒少量
3. 暗赤褐色土：ローム粒やや多量、焼土ブロック（構築材崩落）多量
4. 褐色土：ローム粒多量、山砂粒やや多量
5. 暗赤褐色土：山砂粒・焼土粒多量、カマド構築材
6. 褐色土：山砂粒・ローム粒多量、カマド構築材
7. 暗赤褐色土：山砂粒多量、カマド構築材
8. 暗褐色土：山砂粒多量、ローム粒（径20～30㎜）少量、カマド構築材
9. 暗赤褐色土：火床部、焼土粒（径20㎜）多量

第87図　(3)SI-014(1)



第88図　(3) SI-014 (2)

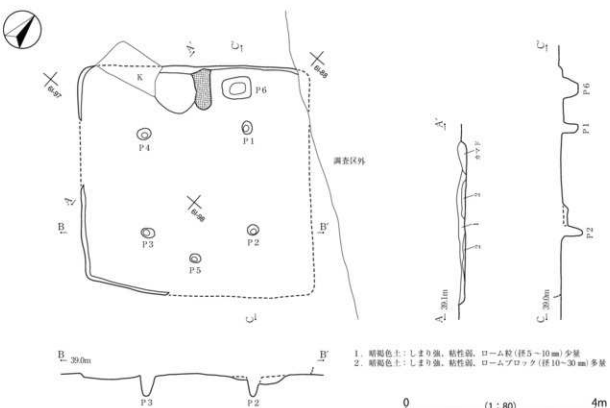


第89図　(3) SI-014 (3)

(3) SI-015（第90図、第17表、図版22）

6I-87・88・97・98グリッドに所在する。上面が削平されて覆土の大部分が失われており、床面付近のみが検出された。他の遺構との重複はない。平面形は一辺が4.9mの方形と推定され、主軸方向はN-42°-Wである。確認面からの深さは0.07mである。カマドは北西側に付設されており、右袖の基部のみがわずかに検出された。ピットは6基を検出した。P1～P4は主柱穴にあたり、P1は径28cm・深さ36cm、P2は径22cm・深さ33cm、P3は径22cm・深さ73cm、P4は径22cm・深さ44cmである。P5は径18cm・深さ19cmで入口施設と考えられる。カマド右側に位置するP6は長さ60cm・幅44cm・深さ35cmの方形で、貯蔵穴と推定される。

図示できる遺物は出土しなかったため、本遺構の時期を特定することは難しいが、カマドが存在することから、6世紀代と推定される。



第90図　(3) SI-015

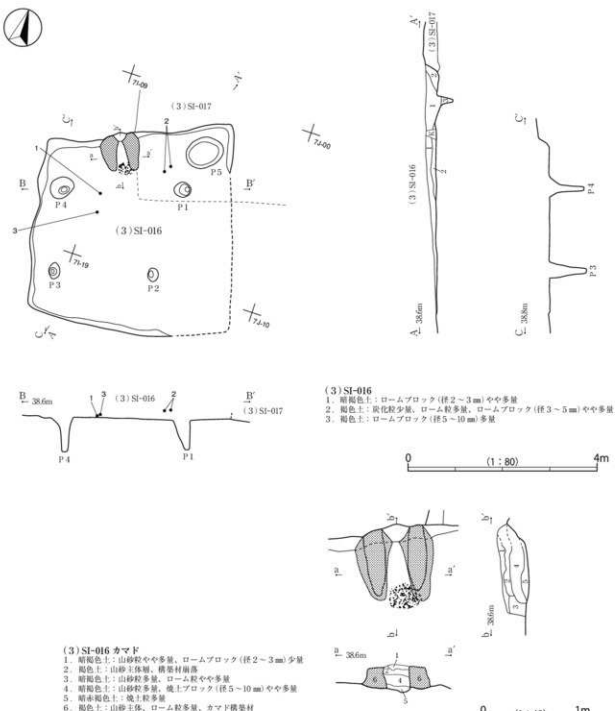
(3) SI-016（第91・92図、第17・21・22表、図版22・47）

7I-08・09・18・19グリッドに所在する。北西から南東にかけての地形の傾斜により上面が削平され、覆土の大部分と南東側の立ち上がりが失われている。北東側で(3) SI-017と重複し、本遺構のほうが新しい。平面形は不整方形で、主軸方向はN-19°-Wである。規模は主軸長4.3m、幅4.2mで、確認面からの深さは0.03mである。カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。袖は山砂を主体とする褐色土を構築材として用い、壁から約60cmが遺存する。ピットは5基を検出した。P1～P4は主柱穴にあたり、P1は径30cm・深さ43cm、P2は径28cm・深さ47cm、P3は径32cm・深さ33cm、P4は径40cm・深さ72cmである。

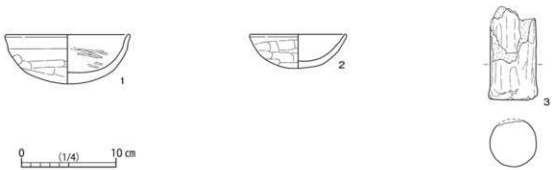
北東隅に位置するP5は径80cm・深さ36cmで貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は少ないが、このうち３点を図示した。１・２は土師器坏である。椀形を呈し、やや器高が高い。１は内面にミガキが施されている。３はカマドの支脚である。表面はヘラ状工具により整形されている。

出土遺物は６世紀前半と考えられるが、本遺構へ明確に帰属する遺物は少なく、詳細な時期は不明である。



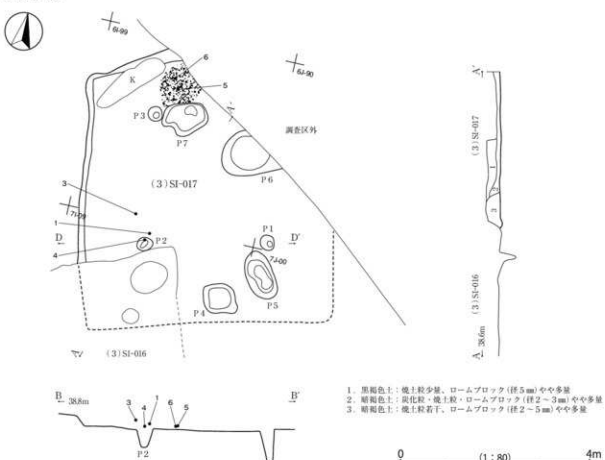
第91図　(3) SI-016（１）



第92図　(3) SI-016（2）

(3) SI-017（第93・94図、第17・21表、図版22・47・50）

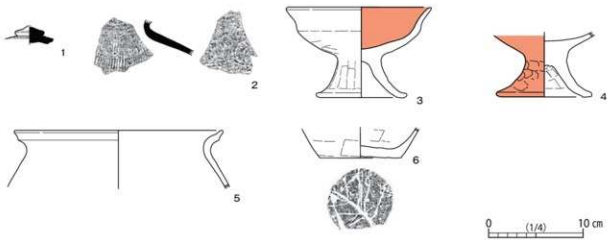
6I-99、6J-90、7I-09、7J-00グリッドに所在する。調査区北東隅に位置し、遺構の北東部分は調査区外へ延びる。北西から南東にかけての地形の傾斜により上面が削平されており、壁面の立ち上がりは西側でのみ確認された。南西側で (3) SI-017と重複し本遺構のほうが古い。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-12°-Wである。規模は一辺5.7m程と推定され、確認面からの深さは0.2mである。北壁付近に焼土が集中して検出されており、カマドの痕跡とも考えられる。ピットは7基を検出した。P1 ～ P3は主柱穴にあたり、P1は径30cm・深さ69cm、P2は径28cm・深さ39cm、P3は径30cm・深さ56cmである。主軸上南側に位置するP4は一辺60cm・深さ33cmの方形で、貯蔵穴と推定される。P5 ～ P7とした落ち込みの性質は不明である。



第93図　(3) SI-017（1）

遺物は5点を図示した。1は須恵器坏蓋の摘み部である。2は須恵器甕である。3・4は土師器高坏である。5は土師器甕の口縁部である。口唇部を上方に摘まみ上げている。6は甕の底部である。

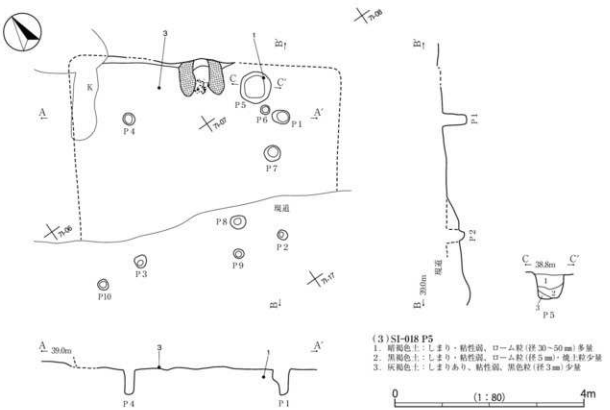
1・2・5は8世紀代の遺物ではあるが、覆土が浅く帰属は明確ではない。本遺構の時期は不明である。



第94図　(3) SI-017(2)

(3) SI-018（第95・96図、第17・21・22表、図版23・47・50）

6I-96・97、7I-06・07グリッドに所在する。上面は大きく削平され、床面のみが検出された。南西側は現道により撹乱されている。他の遺構との重複はない。柱穴の配置から平面形は方形と推定され、主軸方向はN-34°-Eである。推定規模は1辺4.9m程で、確認面からの深さは0.1mである。カマドは北東壁に付

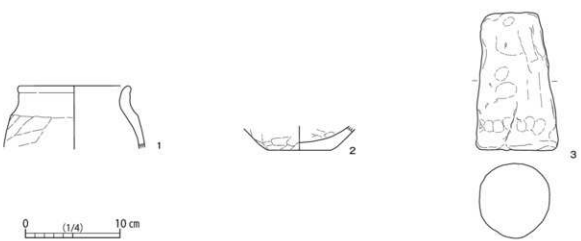


第95図　(3) SI-018(1)

設されており、両袖の基部および火床面のみが検出された。ピットは10基を検出した。P1 ～ P4は主柱穴にあたる。P1は径40cm・深さ53cm、P2は径20cm・深さ12cm、P3は径30cm・深さ28cm、P4は径22cm・深さ53cmである。カマド右袖付近に位置するP5は径60cm・深さ54cmで貯蔵穴と推定される。P6 ～ P10については性格不明である。

覆土が失われており、出土遺物はわずかである。このうち３点を図示した。１・２は土師器甕である。１は頸部から口縁部にかけて短く直立する。２は底部破片である。３はカマドの支脚である。表面はヘラ状工具により調整されており、一部に指頭痕を残す。

本遺構の時期は、６世紀代と推定される。



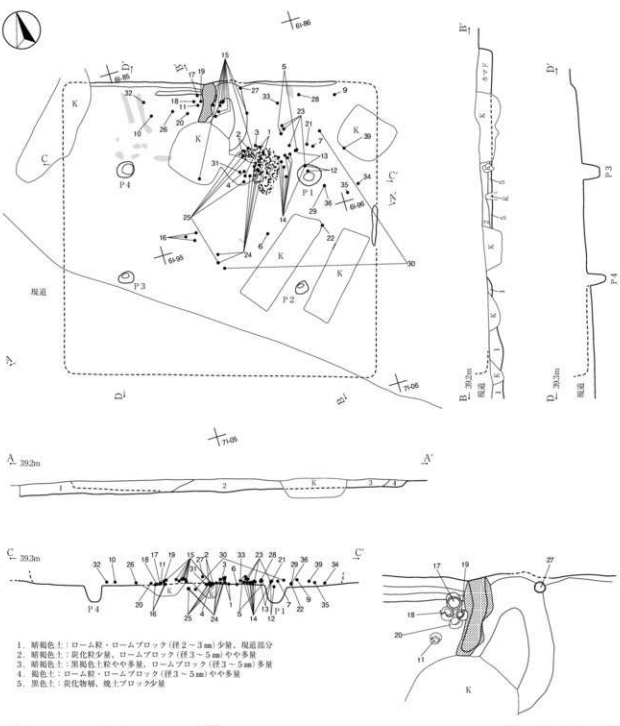
第96図　(3) SI-018（２）

(3) SI-019（第97～100図、第17・21～23表、図版23・24・47～49・51）

6I-84 ～ 86・94 ～ 96グリッドに所在する。上面は大きく削平され、覆土の大部分が失われており、床面付近のみが検出された。また南西側は現道により撹乱されている。平面形は方形と推定され。主軸方向はN-17°-Eである。推定規模は一辺が約6.1mで、確認面からの深さは0.1mである。カマドは北東壁に設けられている。左袖および燃焼部の窪みのみが検出された。袖の西側に集中する形で多くの遺物が出土した。壁溝は北東壁下、カマド西側でわずかに確認された。幅30cm・深さ3cmほどである。ピットは主柱穴にあたるP1 ～ P4の４基を検出した。P1は径50cm・深さ30cm、P2は径28cm・深さ23cm、P3は径29cm・深さ31cm、P4は径28cm・深さ40cmである。床面も複数個所で上層からの撹乱を受けているが、カマド焚口前方の床面からは炭化部および焼土が検出されている。

床面上およびカマド周囲から多くの遺物が出土した。全体に造りが粗く、器形も特異な遺物が多い。このうち40点を図示した。１～10は土師器坏である。１～５は口縁がやや内湾する椀形の坏である。いずれも内面にミガキが施され、１・４は内外面に上半部に赤彩が施される。２・３についても不明瞭ではあるが一部に赤彩の痕跡が認められる。６はやや器高が高い椀形の坏で、器面が荒れ調整は不明である。７は整形が粗く、器面に輪積痕と指頭痕が残る。口唇部上面は平滑に処理されている。８・９は口縁部が体部との間に稜を持って外反する。８は内外面上半部に赤彩が施され、９は内外面が黒色処理されている。10はやや扁平で口縁が内傾する。外面に赤彩、内面に黒色処理が施され、砥石に転用されている。11はカ

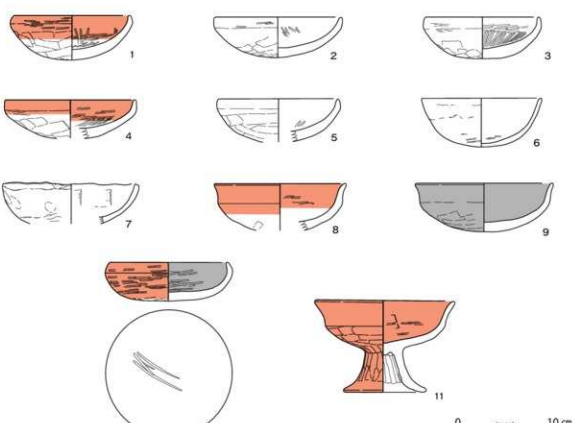
マド袖付近から出土した土師器高坏である。坏部口縁部が外反し、脚部は低く造られ、「ハ」の字状に開く。外面および坏部内面が赤彩されている。12～23は土師器甕である。12から14はやや大型の甕で、口縁部は頸部から直立し、上端が小さく開く。胴部は12・14は最大径を上位に持ち肩が張り、13はほぼ楕円球形を呈する。15は口縁部がゆるやかに外反し、胴部が楕円球状となる。16は口縁部が外反し、胴部はほぼ球状である。17～20はカマド袖脇から集中して出土した。17・18はやや小型で、頸部が短く、口縁部が外反



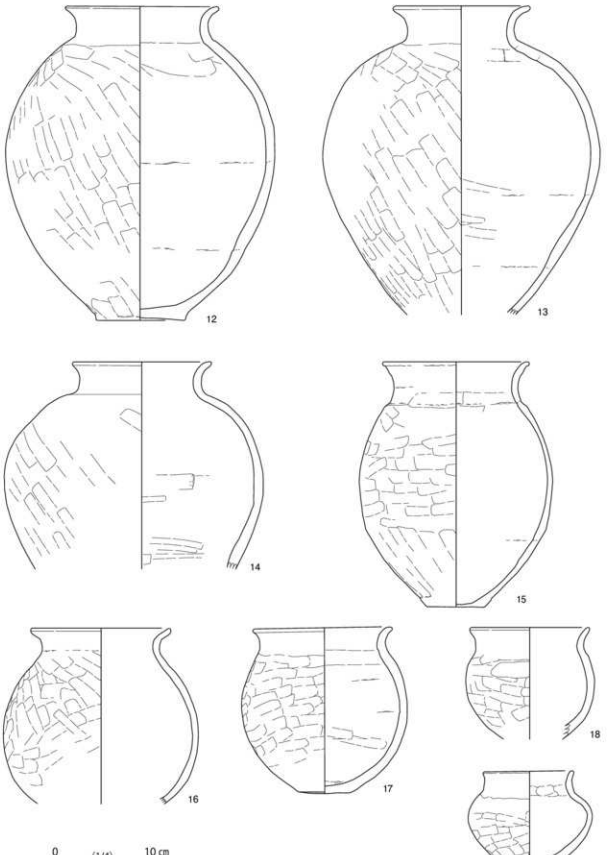
第97図　(3) SI-019（1）

する。19・20はミニチュアあるいは小型の甕で、頸部が広い小型壺のような形状を呈する。19は口縁部が小さく外反し、胴部最大を上部に持ち、平底である。20は口縁部がほぼ直立し、底部は丸底で煤が付着している。床面上から出土した21・22もこれらに類似した形状を呈する。19・21・22の底面は、ヘラケズリにより平底となっており、安定性は低い。23は胴部下半から底部にかけての破片である。24は甑である。口縁部はゆるやかに外反する。器面は特に上半部の摩耗が著しく、調整は不明瞭である。25～28は鉢である。25～27は造りが粗い。25は上半部がほぼ直立した筒状で、器面は縦位のヘラナデにより調整されるが、輪積みの痕跡が残る。26は器面に指頭痕および輪積み痕が残り、内外面が赤彩されている。27は口唇部内面にに輪積みの際の粘土紐の接合用ともとれる細かな刻みが巡る。口縁の一部に乾燥前の段階で指により摘まみ、不整なU字状の凹みがつけられており、周囲に指頭痕が多く残る。器面には輪積み痕を残しており、底面には棒状工具による切り離しの痕が認められる。28は胴部から底部である。器面が摩耗しており調整は不明瞭である。29は器種不明ではあるが、30に類するものとも考えられる。30は須恵器臆を模倣した土師器と考えられる。口唇部を小さく上方に摘まみ上げている。なお胴部に穿孔はみられない。31～37はミニチュア土器である。31はヘラケズリにより整形され、内面にミガキが施される。32は内面が黒色処理されている。34は坏形で、内外面が赤彩されている。35～37は手捏ねによる成形である。38は土玉である。表面ははヘラ状工具により調整されている。39は滑石製の紡錘車である。表裏面に放射状の、側面には鋸歯状の線刻が施されている。40は砂岩製の砥石である。

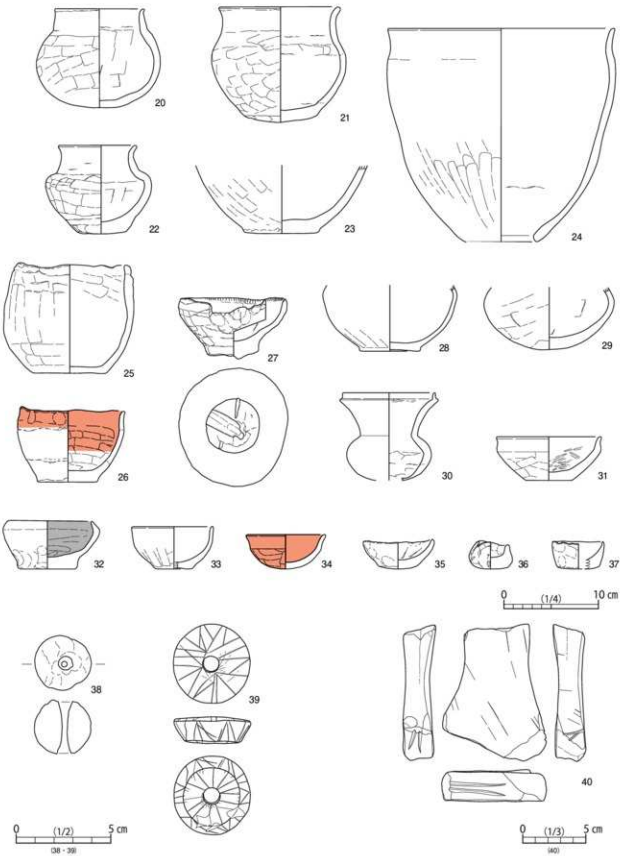
出土遺物に祭祀関連とみられる特殊なものが多いが、坏・甕の特徴から、本遺構の時期は6世紀後半と推定される。



第98図　(3) SI-019 (2)



第99図　(3)SI-019(3)



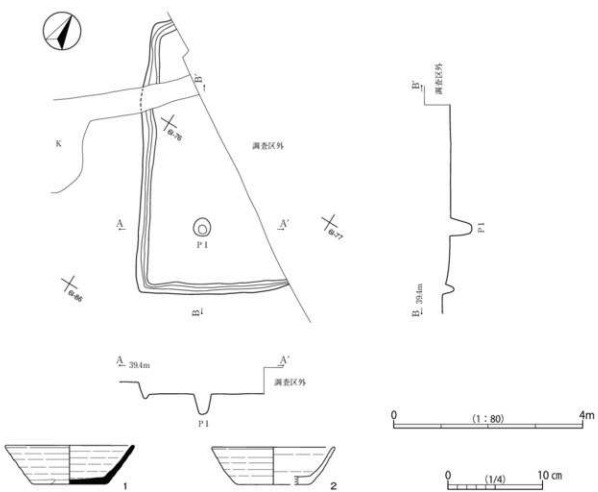
第100図　(3)SI-019(4)

(3) SI-020（第101図、第17・21表、図版24・49）

6I-65・66・75・76グリッドに所在する。調査区北端に位置し、北東側の６割程度が調査区外に延びる。平面形は方形と推定される。確認された南西壁の方位はN-28°-Wである。規模は南北長5.7m、残存幅3.2mで、確認面からの深さは0.25mである。カマドは検出されなかった。壁溝は幅20cm ～ 30cm・深さ８cmほどで、検出部分を全周している。検出されたピットはP1のみである。径36cm・深さ45cmで、主柱穴と考えられる。

遺物は２点を図示した。１は須恵器坏である。底部はヘラケズリで調整され、胎土に雲母が含まれている。２はロクロ土師器坏の破片である。

出土遺物の時期は、８世紀後半であるが、帰属が明確ではなく、本遺構の時期は不明である。



第101図　(3) SI-020

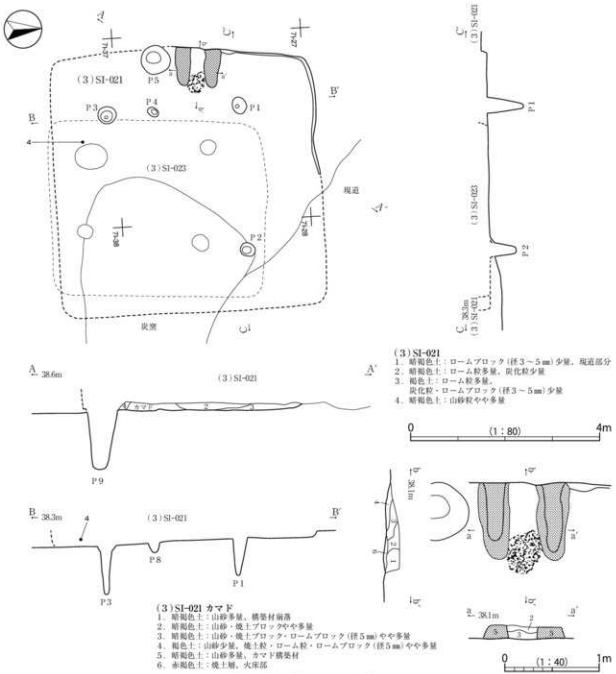
(3) SI-021（第102・103図、第17・21・23表、図版24・49・51）

7I-17・18・27・28・37・38グリッドに所在する。上面の大部分が削平され、覆土の大部分と壁の立ち上がりが失われている。東側も現道および近現代の炭窯による撹乱を受けており、北西隅および床面のみが検出された。(3) SI-023と南壁を共有して重複しており、拡張を伴う建替えとも考えられるが、新旧関係は明確ではない。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-86°-Wである。推定規模は一辺5.6mで、確認

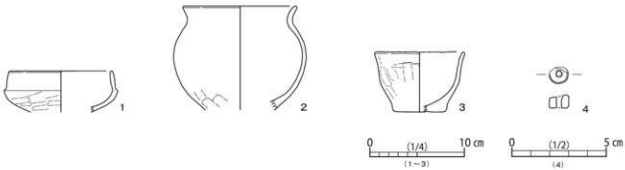
面からの深さは0.1mである。カマドは西壁に付設されており、袖は山砂を主体とする暗褐色土を構築材に用い、壁から80cmほどが遺存する。火床面は焚き口付近が被熱により赤化するが、顕著ではない。ピットは５基を検出した。P1 ～ P3が主柱穴にあたり、P1は径30cm・深さ75cm、P2は径32cm・深さ43cm、P3は径39cm・深さ101cmである。P4・P5の性格は不明である。

覆土が失われており、出土遺物は少ないが、このうち４点を図示した。１は土師器坏である。口縁部は高く、体部との間に陵を持って内傾する。２は小型の土師器甕である。口縁部は頸部で屈曲して外反する。３は小型の土師器鉢である。調整は粗く、器面に指頭痕が残る。４は臼玉である。

本遺構の時期は、カマドを伴うことから、６世紀代の可能性が高いと推定される。



第102図　(3) SI-021（１）



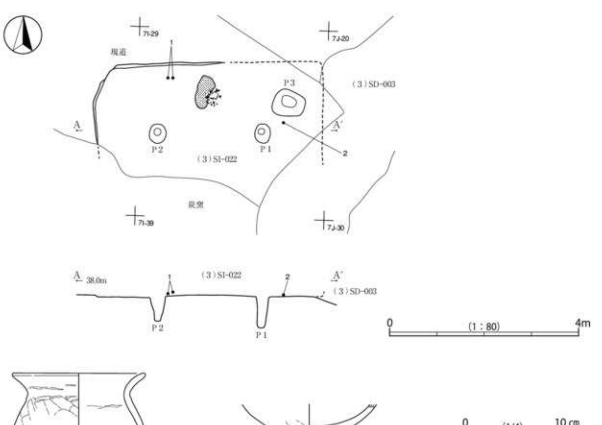
第103図　(3) SI-021(2)

(3) SI-022（第104図、第17・21表、図版24・49）

7I-28･29グリッドに所在する。近現代の炭窯および現道により大部分が撹乱され、覆土が失われており、床面の一部のみが検出された。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-2°-Wである。推定規模は1辺が4.8mで、確認面からの深さは0.12mである。カマドは北壁側中央で袖の基部と火床面の痕跡が検出された。ピットは3基を検出した。P1とP2は主柱穴にあたる。P1は径40cm・深さ59cm、P2は径40cm・深さ49cmである。P3は長さ64cm・幅28cm・深さ22cmの不整な長方形で貯蔵穴と考えられる。

遺物は土師器甕2点を図示した。1は口縁部が頸部で屈曲して外反する上部の破片である。2は底部破片である。

本遺構の時期は、カマドを伴うことなどから、6世紀代と推定される。。

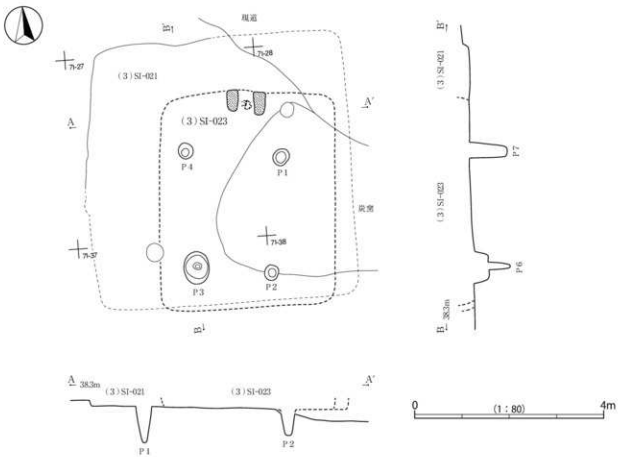


第104図　(3) SI-022

(3) SI-023（第105図、第17表、図版24）

7I-27・28・37・38グリッドに所在する。現道および近現代の炭窯により撹乱を受けている。(3) SI-023と重複する形で検出された。建替え前の段階とも考えられるが、覆土が失われており、新旧関係は明確ではない。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-4°-Eである。推定規模は一辺4.6mで、確認面からの深さは0.1m以下である。カマドは北壁側で袖と火床面の痕跡が確認された。主柱穴との位置関係から、やや東側に寄るものと考えられる。ピットは主柱穴にあたる4基を検出した。P1は径32cm・深さ98cm、P2は径30cm・深さ42cm、P3は径70cm・深さ76cm、P4は径32cm・深さ79cmである。

図示できる遺物は出土しなかったが、本遺構の時期は不明である。



第105図　(3) SI-023

2　土坑

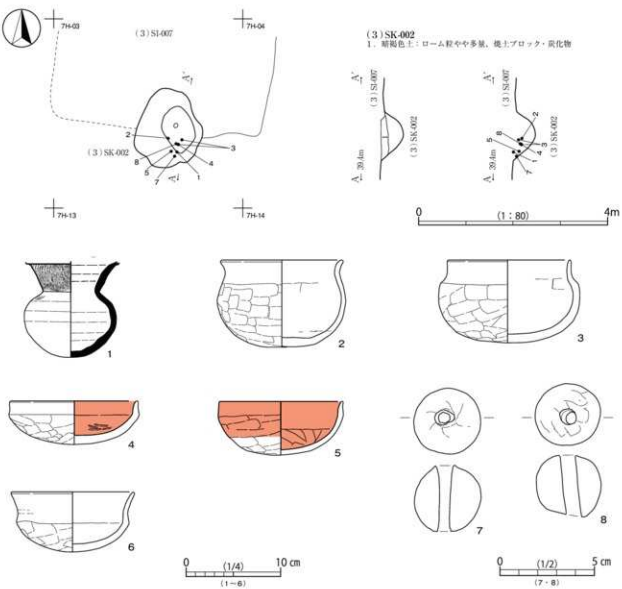
(3) SK-002（第106図、第18・21・22表、図版19・49～51）

7H-03グリッドに所在する。(3) SI-007と重複し本遺構のほうが古い。遺構としての性質は不明である。平面形は不整な円形で、規模は長軸1.67m・短軸1.38m・深さ0.54mである。

遺物は8点を図示した。1は須恵器甕である。頸部に櫛描き波状文が施される。TK47型式に比定されようか。2～6は土師器坏である。2・3は器高の高い椀形で、2は口縁が外反し、3はほぼ直立する。4はやや扁平で、口縁部はほぼ直立し、内面にミガキと赤彩が施される。5は半球形で内外面が赤彩されている。6は口縁部が外反し、体部より大きい。7・8は土玉である。やや大型で表面をヘラ状工具によ

り調整されている。

本遺構の時期は、主な出土遺物の特徴から５世紀後半～６世紀初頭と考えられる。



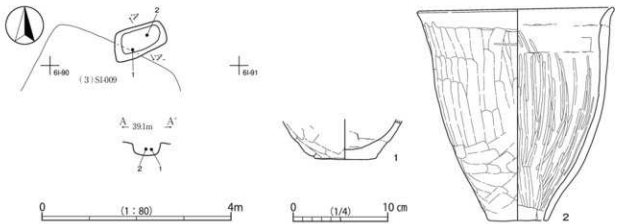
第106図　(3) SK-002

(3) SK−003（第107図、第18・21表、図版24・50・51）

6I-80グリッドに所在する。(3) SI-009と重複する。平面形は長方形で、長軸方位はN-74°-Eである。規模は長軸1.14m・短軸0.6m・深さ0.29mである。削平により確認できなかった竪穴住居跡に伴う貯蔵穴とも考えられる。

覆土中から２点の遺物が出土した。１は土師器甕の底部である。２は甑である。胴部は最大径を上半に持ち、口縁部が外反する。内面に縦位のミガキが施されている。

出土遺物の特徴から本遺構の時期は、６世紀中ば以降と推定される。



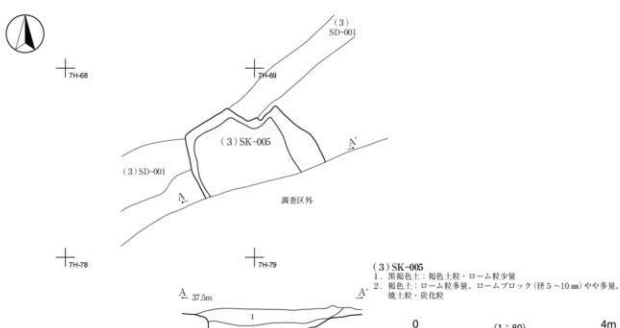
第107図　(3) SK-003

(3) SK-005（第108図、第18表、図版24）

7H-68・69グリッドに位置する。(3) SD-001と重複するが、新旧関係は不明である。南東側は、急斜面となっており、調査できなかった。平面形は不整方形あるいは長方形で、残存する北西壁の方位はN-67°-Eである。規模は長軸2.6m・残存短軸1.66m・深さ0.33mである。覆土に焼土・炭化物粒が含まれる。

図化できる遺物は出土しなかった。

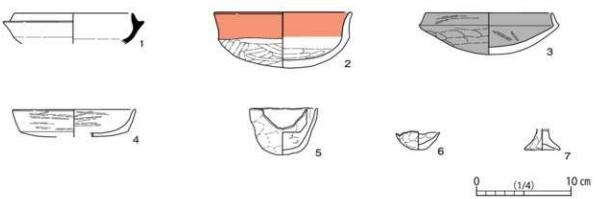
中世の溝跡と重複するが、本遺構の時期は不明である。



第108図　(3) SK-005

3　遺構外出土の遺物（第109図、第21表、図版50）

本調査区におけるグリッド一括または遺構に伴わない古墳時代の出土遺物の内、特徴的なもの７点を図示した。１は須恵器坏の破片である。TK43型式に比定されようか。２・３は土師器坏である。２は器高が高く、直立気味に外反する口縁部は体部より大きい。口縁部内外面は赤彩が施されている。時期は６世紀前半と考えられる。３は扁平で口縁部が屈曲して内傾する。内外面はミガキが施され、黒色処理されている。時期は６世紀後半に比定される。４は内外面にミガキが施されており、須恵器蓋を模倣した土師器の口縁部とも考えられる。５～７は手捏ねによるミニチュア土器である。５は器高の高い坏形で、口縁部にU字形の打ち欠きがある。６は小型の坏形、７は高坏形の脚台部分と考えられる。



第109図　(3) 遺構外出土の遺物

第21表　古墳時代土器観察表

（　）推定値　＜　＞現存値

遺構	掲図番号	種 別	器 種	法 量(cm)	遺存度	胎 土	色調・焼成	技 法	備 考
(3) SI-001	第64図 -1	土師器	坏	口径 14.7 底径 - 器高 6.2	95%	白色砂粒・雲母	内面 黒赤褐色（5YR3/6） 外面 黒色（7.5YR1.5/1）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-001	第64図 -2	土師器	坏	口径 13.05 底径 - 器高 <6.5>	25%	雲母・石英・黒色粒子	内面 橙色（7.5YR6/6） 外面 にぶい黄橙色（10YR5/4）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-001	第64図 -3	土師器	坏	口径 14.0 底径 - 器高 5.8	80%	石英・雲母	内面 黄橙色（10YR8/6） 外面 にぶい黄橙色（10YR6/4）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-001	第64図 -4	土師器	坏	口径 13.85 底径 - 器高 5.7	30%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色（10YR6/4） 外面 にぶい黄橙色（10YR6/3）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-001	第64図 -5	土師器	高坏	口径 9.2（10） 底径 8.8 器高 10.3	25%	白色砂粒・石英・雲母	内面 明褐色（2.5YR5/6） 外面 明褐色（5YR5/8）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-001	第64図 -6	土師器	壺	口径 16.8 底径 - 器高 <21.2>	口縁部～胴部下位	白色砂粒・雲母	内面 橙赤褐色（5YR3/2） 外面 にぶい赤褐色（5YR4/4）	内面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内面すす付着
(3) SI-001	第64図 -7	土師器	鉢	口径 14.6 底径 - 器高 <10.5>	口縁部～胴部下位	白色砂粒・雲母	内面 明赤褐色（5YR5/6） 外面 明赤褐色（5YR5/8）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-001	第64図 -8	土師器	壺	口径 18.2 底径 5.0 器高 11.3	70%	白色砂粒・雲母	内面 灰黄褐色（10YR5/2） 外面 にぶい黄橙色（10YR6/3）	内面 ナデ ヘラ削り 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	内外面赤彩
(3) SI-001	第64図 -1	須恵器	坏	口径 12.6 底径 - 器高 <3.4>	口縁部～胴部	緻密	内面 灰白（2.5Y8/1） 外面 灰白（2.5Y8/1）	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	
(3) SI-002	第66図 -2	土師器	坏	口径 12.8 底径 - 器高 7.1	100%	白色、黒色砂粒・石英・小石	内面 橙色（7.5YR6/6） 外面 橙色（7.5YR6/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-002	第66図 -3	土師器	坏	口径 12.8 底径 - 器高 6.3	85%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい橙色（7.5YR6/4） 外面 橙色（7.5YR6/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-002	第66図 -4	土師器	坏	口径 14.4 底径 - 器高 6	90%	白色砂粒・雲母・小石	内面 明褐色（7.5YR5/6） 外面 にぶい橙色（7.5YR6/4）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-002	第66図 -5	土師器	坏	口径 13.6 底径 - 器高 5.6	85%	白色砂粒・雲母・小石	内面 明褐色（7.5YR5/6） 外面 橙色（7.5YR6/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-002	第66図 -6	土師器	坏	口径 13.05 底径 - 器高 5.7	80%	白色砂粒・雲母	内面 赤褐色（5YR5/6） 外面 橙色（5YR6/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-002	第66図 -7	土師器	坏	口径 13.95 底径 - 器高 5.9	60%	白色砂粒・雲母・石英	内面 赤褐色（5YR5/6） 外面 赤褐色（5YR5/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-002	第66図 -8	土師器	坏	口径 12.6 底径 - 器高 5.7	25%	白色砂粒・雲母	内面 明褐色（7.5YR5/6） 外面 明褐色（7.5YR5/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-002	第66図 -9	土師器	坏	口径 13.65 底径 - 器高 5.1	40%	白色砂粒・雲母	内面 橙色（7.5YR6/6） 外面 明褐色（7.5YR5/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-002	第66図 -10	土師器	坏	口径 13.3 底径 - 器高 5.6	85%	白色砂粒・雲母	内面 赤褐色（10YR5/6） 外面 にぶい黄橙色（10YR5/4）	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内面黒色処理
(3) SI-002	第66図 -11	土師器	高坏	口径 16.0 底径 10.0 器高 12.7	90%	白色砂粒・雲母	内面 橙色　（5YR6/6） 外面 橙色　（5YR6/6）	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-002	第66図 -12	土師器	高坏	口径 (21.8) 底径 - 器高 <6.2>	坏部2/3欠～底部	白色、赤色砂粒・雲母	内面 黒色　（7.5YR2/1） 外面 明褐色　（7.5YR5/6）	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ミガキ	内面黒色処理
(3) SI-002	第66図 -13	土師器	高坏	口径 - 底径 (9.7) 器高 <4.9>	坏底部～脚部	白色砂粒・雲母・石英	内面 橙色　（7.5YR6/6） 外面 明褐色（7.5YR5/6）	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-002	第67図 -14	土師器	壺	口径 17.3 底径 6.4 器高 31.6	95%	雲母・石英・長石	内面 にぶい橙色（7.5YR6/4） 外面 橙色（7.5YR6/6）	内面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-002	第67図 -15	土師器	壺	口径 13.8 底径 5.6 器高 19.5	100%	白色砂粒・雲母・石英	内面 明褐色（7.5YR5/6） 外面 明褐色（7.5YR5/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-002	第67図 -16	土師器	壺	口径 14.5 底径 - 器高 16	80%	白色砂粒・雲母	内面 灰褐色（7.5YR5/2） 外面 にぶい橙色（7.5YR6/3）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	外面すす付着
(3) SI-002	第67図 -17	土師器	壺	口径 (17.3) 底径 - 器高 <5.2>	口縁部～胴部	白色砂粒・雲母	内面 明褐色（7.5YR5/6） 外面 にぶい橙色（7.5YR6/4）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-002	第67図 -18	土師器	壺	口径 (15.7) 底径 - 器高 <6.6>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・雲母・石英	内面 にぶい橙色（7.5YR6/4） 外面 にぶい橙色（7.5YR6/4）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-002	第67図 -19	土師器	壺	口径 (18.5) 底径 - 器高 <10.5>	口縁部～胴部上位	雲母・石英・長石	内面 明赤褐色（10YR5/6） 外面 明褐色（7.5YR5/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-002	第67図 -20	土師器	壺	口径 (13.7) 底径 - 器高 <6.9>	口縁部～胴部上位	雲母・石英	内面 明赤褐色（5YR5/6） 外面 明赤褐色（5YR5/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-002	第68図 -21	土師器	壺	口径 (23.6) 底径 10.8 器高 -	口縁部、胴部中位～底部	緻密	内面 にぶい黄橙色（10YR5/3） 外面 にぶい黄橙色（10YR5/4）	内面 ハケナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	接合しない2個体
(3) SI-002	第68図 -22	土師器	壺	口径 - 底径 8.0 器高 <7.8>	胴部中位～底部	雲母・長石	内面 橙色（10YR6/4） 外面 橙色（7.5YR6/6）	内面 ハケナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-002	第68図 -23	土師器	壺	口径 - 底径 6.6 器高 <5.3>	胴部下位～底部	雲母・石英・長石	内面 明褐色（7.5YR5/6） 外面 明褐色（7.5YR5/6）	内面 ハケナデ 外面 ヘラ削り	
(3) SI-002	第68図 -24	土師器	甕	口径 25.2 底径 7.5 器高 25.3	85%	白色、赤色砂粒・雲母	内面 明褐色（7.5YR5/6） 外面 明褐色（7.5YR5/6）	内面 ハケナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-002	第68図 -25	土師器	甕	口径 25.0 底径 7.4 器高 23.3	80%	白色砂粒・雲母・石英	内面 明褐色（7.5YR5/6） 外面 明褐色（7.5YR5/6）	内面 ナデ ミガキ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-002	第68図 -26	土師器	鉢	口径 (20.2) 底径 - 器高 <9.9>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・雲母	内面 黒褐色（5YR3/6） 外面 黒褐色（10YR3/6）	内面 ハケナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-002	第68図 -27	土師器	鉢	口径 13.8 底径 - 器高 9.4	95%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色（10YR6/4） 外面 明赤褐色（10YR5/6）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	外面すす付着
(3) SI-002	第68図 -28	土師器	鉢	口径 (19.6) 底径 - 器高 <12.3>	25%	白色砂粒・雲母・小石	内面 赤褐色（5YR4/6） 外面 にぶい赤褐色（5YR4/4）	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(3) SI-002	第66図 -29	土師器	把手付甕	口径 10.3 底径 - 器高 20.0	70%	白色砂粒・石英	内面 黄褐色(10YR5/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	外面すす付着
(3) SI-002	第66図 -30	土師器	ミニチュア	口径 4.0 底径 4.4 器高 3.2	85%	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(3) SI-002	第66図 -31	土師器	ミニチュア	口径 4.4 底径 3.2 器高 2.4	100%	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(3) SI-002	第66図 -32	土師器	ミニチュア	口径 4.0 底径 3.7 器高 1.6	100%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	内面赤彩
(3) SI-002	第66図 -33	土師器	ミニチュア	口径 (6.0) 底径 3.6 器高 2.7	70%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(3) SI-002	第66図 -34	土師器	ミニチュア	口径 5.1 底径 4.0 器高 1.9	80%	雲母・石英	内面 褐色(7.5YR4/4) 外面 褐色(7.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(3) SI-002	第66図 -35	土師器	ミニチュア	口径 (3.2) 底径 (2.0) 器高 3.1	70%	雲母・石英	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(3) SI-003	第71図 -1	須恵器	蓋	口径 (12.8) 底径 - 器高 <3.2>	口縁部～体部中位	長石	内面 灰黄色(2.5Y6/2) 外面 黄灰色(2.5Y6/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 回転ヘラ削り	
(3) SI-003	第71図 -2	土師器	坏	口径 (14.4) 底径 - 器高 4.6	60%	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-003	第71図 -3	土師器	坏	口径 11.4 底径 - 器高 4.4	60%	雲母・長石	内面 褐色(7.5YR4/3) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り 押し圧痕	
(3) SI-003	第71図 -4	土師器	坏	口径 12.8 底径 - 器高 4.2	80%	雲母・石英・長石	内面 黒褐色(7.5YR3/2) 外面 灰褐色(7.5YR4/2) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面黒色処理
(3) SI-003	第71図 -5	土師器	坏	口径 (13.0) 底径 - 器高 4.3	70%	白色砂粒・雲母	内面 黒褐色(7.5YR3/2) 外面 黒褐色(7.5YR3/2) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面黒色処理
(3) SI-003	第71図 -6	土師器	坏	口径 12.5 底径 8.6 器高 3.2	100%	白色砂粒・雲母	内面 黄褐色(10YR5/8) 外面 黄褐色(10YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-003	第71図 -7	土師器	甕	口径 15.0 底径 - 器高 <27.8>	口縁部～胴部中位	雲母・石英・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-003	第71図 -8	土師器	甕	口径 19.2 底径 - 器高 <12.5>	口縁部～胴部中位	雲母・長石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-003	第71図 -9	土師器	甕	口径 15.2 底径 7.4 器高 17.5	75%	雲母・石英・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-003	第71図 -10	土師器	甕	口径 - 底径 7.4 器高 <3.3>	胴部下位～底部	白色、赤色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(3) SI-003	第71図 -11	土師器	甑	口径 - 底径 7.0 器高 26.7	50%	雲母・石英・長石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-003	第71図 -12	土師器	甑	口径 (19.6) 底径 - 器高 <20.6>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・雲母・石英	内面 黄褐色(10YR5/6) 外面 黄褐色(10YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-003	第71図 -13	土師器	鉢	口径 (12.1) 底径 5.4 器高 8.6	70%	白色砂粒・雲母	内面 褐色(7.5YR4/3) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-004	第72図 -1	土師器	坏	口径 (13.2) 底径 - 器高 <4.5>	口縁部～胴部中位	雲母・石英	内面 赤褐色(5YR4/8) 外面 明赤褐色(5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
(3) SI-004	第72図 -2	土師器	坏	口径 (13.4) 底径 - 器高 <4.2>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-004	第72図 -3	土師器	甕	口径 - 底径 7.1 器高 <16.7>	胴部～底部	雲母・長石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(3) SI-004	第72図 -4	土師器	鉢	口径 (19.6) 底径 8.2 器高 13.6	45%	雲母・長石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-005	第75図 -1	土師器	坏	口径 14.2 底径 - 器高 4.5	95%	白色、赤色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	
(3) SI-005	第75図 -2	土師器	坏	口径 13.2 底径 - 器高 3.7	75%	白色、赤色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面黒色処理
(3) SI-005	第75図 -3	土師器	坏	口径 (12.0) 底径 - 器高 3.7	70%	白色、赤色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
(3) SI-005	第75図 -4	土師器	坏	口径 (12.8) 底径 - 器高 4	50%	白色、赤色砂粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面黒色処理
(3) SI-005	第75図 -5	土師器	坏	口径 12.4 底径 - 器高 4.2	100%	雲母・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
(3) SI-005	第75図 -6	土師器	坏	口径 11.6 底径 - 器高 4.4	90%	赤色砂粒・石英	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面黒色処理
(3) SI-005	第75図 -7	土師器	高坏	口径 - 底径 17.6 器高 <15.5>	坏部中位～脚部	砂粒	内面 明黄褐色(10YR7/6) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ミガキ	
(3) SI-005	第75図 -8	土師器	甕	口径 - 底径 7.9 器高 <5.7>	胴部下位～底部	白色砂粒・小石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ	底部木葉痕
(3) SI-006	第76図 -1	土師器	鉢	口径 (30.3) 底径 - 器高 6.9	65%	雲母・石英・長石	内面 黒褐色(7.5YR3/2) 外面 褐色(7.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
(3) SI-006	第76図 -2	土師器	壺	口径 - 底径 6.0 器高 <6.8>	胴部中位～底部	雲母・石英・長石	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-006	第76図 -3	土師器	甕	口径 - 底径 5.0 器高 <3.2>	胴部下位～底部	雲母・石英	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-007	第77図 -1	土師器	高坏	口径 - 底径 (10.7) 器高 <8.9>	坏部中位～脚部	白色砂粒・雲母	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ミガキ	内外面赤彩

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(1) SI-007	第77図-2	土師器	高坏	口径 - 底径 10.0 器高 <6.3>	坏部下位～脚部	雲母・石英・長石	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ミガキ	外面赤彩
(1) SI-007	第77図-3	土師器	壺	口径 (15.8) 底径 - 器高 <11.7>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・雲母	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(1) SI-008	第79図-1	土師器	坏	口径 16.0 底径 - 器高 3.8	60%	白色砂粒・雲母	内面 明黄褐色(10YR7/6) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-009	第79図-1	土師器	鉢	口径 (16.0) 底径 - 器高 <5.0>	口縁部～体部中位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄褐色(10YR4/3) 外面 黒褐色(7.5YR3/2) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-010	第80図-1	土師器	坏	口径 (13.2) 底径 - 器高 <3.7>	口縁部～体部中位	雲母・石英・長石	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(1) SI-010	第80図-2	土師器	坏	口径 (13.8) 底径 - 器高 <3.6>	口縁部～体部中位	雲母・石英・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1) SI-011	第82図-1	土師器	坏	口径 (13.8) 底径 - 器高 <4.3>	口縁部～体部中位	雲母・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	内外面赤彩
(1) SI-011	第82図-2	土師器	坏	口径 (13.2) 底径 - 器高 5	口縁部～体部中位	雲母・長石	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
(1) SI-011	第82図-3	土師器	甕	口径 (30.2) 底径 9.4 器高 30.9	80%	雲母・長石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(1) SI-011	第82図-4	土師器	甕	口径 - 底径 6.6 器高 <27.7>	胴部～底部	雲母・石英・小石	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 暗赤褐色 (7.5YR3/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り	
(1) SI-011	第82図-5	土師器	甕	口径 - 底径 7.9 器高 <4.7>	胴部下位～底部	雲母・石英・長石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ	
(1) SI-011	第82図-6	土師器	ミニチュア	口径 3.8 底径 - 器高 2.6	100%	白色砂粒・雲母・石英	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(1) SI-012	第84図-1	土師器	坏	口径 11.0 底径 - 器高 3.5	100%	雲母・長石	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内面黒色処理
(1) SI-012	第84図-2	土師器	坏	口径 12.4 底径 - 器高 4.5	75%	雲母・長石	内面 赤褐色 (5YR5/8) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内面黒色処理
(1) SI-012	第84図-3	土師器	坏	口径 10.8 底径 - 器高 3.7	100%	白色砂粒・雲母	内面 褐色 (7.5YR4/6) 外面 褐色 (7.5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	内外面黒色処理
(1) SI-012	第84図-4	土師器	坏	口径 13.0 底径 - 器高 4.3	85%	雲母・石英・長石	内面 暗褐色 (7.5YR3/4) 外面 褐色 (7.5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面黒色処理
(1) SI-012	第84図-5	土師器	坏	口径 13.1 底径 - 器高 4.2	85%	雲母・長石	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第84図-6	土師器	坏	口径 10.4 底径 - 器高 3.8	100%	雲母・長石	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	外面転用砥石
(1) SI-012	第84図-7	土師器	坏	口径 10.6 底径 - 器高 3.8	100%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面黒色処理
(1) SI-012	第84図-8	土師器	坏	口径 12.4 底径 - 器高 4.2	80%	白色砂粒・雲母	内面 赤褐色(5YR4/8) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面黒色処理
(1) SI-012	第84図-9	土師器	坏	口径 11.8 底径 - 器高 5.1	95%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい赤褐色(5YR4/4) 外面 黒褐色(5YR2/1) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内面黒色処理
(1) SI-012	第84図-10	土師器	坏	口径 11.4 底径 - 器高 4.3	100%	白色砂粒・雲母・小石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第84図-11	土師器	坏	口径 10.4 底径 - 器高 4	90%	白色砂粒・雲母・石英	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第84図-12	土師器	坏	口径 11.6 底径 - 器高 4.1	100%	白色砂粒・雲母	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第84図-13	土師器	坏	口径 13.4 底径 - 器高 4.2	95%	白色、赤色砂粒・雲母	内面 褐色(7.5YR4/4) 外面 赤褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第84図-14	土師器	坏	口径 (14.3) 底径 - 器高 6.1	55%	白色、赤色砂粒・雲母	内面 赤褐色(5YR6/4) 外面 赤褐色(5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第84図-15	土師器	高坏	口径 18.0 底径 13.2 器高 13.6	80%	雲母・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 褐色(7.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	坏部内面黒色処理
(1) SI-012	第84図-16	土師器	甕	口径 18.8 底径 8.0 器高 29.2	100%	雲母・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第84図-17	土師器	甕	口径 19.3 底径 7.3 器高 27.6	100%	雲母・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 褐色(7.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第85図-18	土師器	甕	口径 (20.0) 底径 - 器高 <12.1>	口縁部～胴部上位	白色、赤色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/8) 外面 明褐色(7.5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第85図-19	土師器	鉢	口径 24.9 底径 8.0 器高 21.6	90%	雲母・石英・長石	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 にぶい赤褐色 (5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第85図-20	土師器	甕	口径 14.7 底径 7.0 器高 12	95%	雲母・長石	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第85図-21	土師器	甕	口径 (14.1) 底径 7.0 器高 10.7	80%	雲母・石英・長石	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第85図-22	土師器	甕	口径 14.1 底径 7.0 器高 12.9	100%	雲母・長石	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 黄褐色(10YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第85図-23	土師器	甕	口径 (13.6) 底径 6.2 器高 10.4	70%	雲母・石英・小石	内面 にぶい赤褐色(5YR4/4) 外面 赤褐色(5YR4/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第85図-24	土師器	壺	口径 11.3 底径 6.2 器高 9.2	100%	雲母・長石	内面 褐色(7.5YR4/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR6/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(1) SI-012	第65図 -25	土師器	甕	口径 (25.9) 底径 - 器高 <10.4>	口縁部～胴部中位	雲母・長石	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 褐灰色(7.5YR4/1) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-012	第65図 -26	土師器	甕	口径 - 底径 7.0 器高 <6.5>	胴部中位～底部	雲母・長石	内面 暗赤褐色(5YR3/6) 外面 赤褐色(5YR4/8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(1) SI-012	第65図 -27	土師器	ミニチュア	口径 (9.6) 底径 (4.0) 器高 <5.3>	60%	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(1) SI-012	第65図 -28	土師器	ミニチュア	口径 3.9 底径 2.2 器高 3	100%	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ	
(1) SI-013	第66図 -1	須恵器	壺	口径 (18.0) 底径 - 器高 <2.6>	口縁部～胴部	長石	内面 灰色(5Y5/1) 外面 灰色(5Y5/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	
(1) SI-013	第66図 -2	土師器	坏	口径 14.2 底径 - 器高 4.6	50%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1) SI-013	第66図 -3	土師器	坏	口径 13.2 底径 - 器高 5.7	90%	雲母・長石	内面 明赤褐色(5YR5/8) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	底外面砥石として使用
(1) SI-014	第68図 -1	須恵器	蓋	口径 (14.8) 底径 (7.4) 器高 4.5	30%	長石	内面 黄灰色(2.5Y4/1) 外面 黄灰色(2.5Y6/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	
(1) SI-014	第68図 -2	須恵器	坏	口径 (12.9) 底径 6.0 器高 3.7	60%	長石	内面 暗灰黄色(2.5Y5/2) 外面 黄灰色(2.5Y5/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	
(1) SI-014	第68図 -3	須恵器	壺	口径 - 底径 3.6 器高 <6.2>	胴部～底部	長石	内面 灰黄色(2.5Y6/2) 外面 黄灰色(2.5Y5/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	
(1) SI-014	第68図 -4	土師器	鉢	口径 11.8 底径 - 器高 7.2	100%	雲母・石英	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	内外面赤彩
(1) SI-014	第68図 -5	土師器	坏	口径 (14.4) 底径 - 器高 <4.7>	65%	白色砂粒・長石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(1) SI-014	第68図 -6	土師器	坏	口径 14.2 底径 - 器高 4.6	80%	白色、赤色砂粒・長石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -7	土師器	坏	口径 (14.6) 底径 - 器高 4.7	75%	雲母・長石	内面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
(1) SI-014	第68図 -8	土師器	坏	口径 (14.2) 底径 - 器高 <4.3>	口縁部～体部下位	白色砂粒・石英・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -9	土師器	坏	口径 (14.7) 底径 - 器高 <4.3>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 外面 褐灰色(7.5YR4/1) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内面黒色処理
(1) SI-014	第68図 -10	土師器	坏	口径 14.8 底径 - 器高 6	70%	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1) SI-014	第68図 -11	土師器	坏	口径 (14.4) 底径 - 器高 5.4	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	外面赤彩
(1) SI-014	第68図 -12	土師器	坏	口径 (13.8) 底径 - 器高 <5.3>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -13	土師器	坏	口径 (13.0) 底径 - 器高 <4.4>	口縁部～体部下位	白色、赤色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ミガキ	内外面赤彩
(1) SI-014	第68図 -14	土師器	坏	口径 (12.8) 底径 - 器高 <4.0>	口縁部～体部下位	白色、赤色砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -15	土師器	坏	口径 (11.5) 底径 - 器高 <4.0>	55%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -16	土師器	坏	口径 13.6 底径 - 器高 4.7	85%	雲母・長石	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -17	土師器	坏	口径 14.8 底径 - 器高 5.7	85%	雲母・石英・長石	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -18	土師器	坏	口径 (13.0) 底径 - 器高 <5.0>	口縁部～体部下位	雲母・長石	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	内外面赤彩
(1) SI-014	第68図 -19	土師器	坏	口径 (13.6) 底径 - 器高 <3.8>	口縁部～体部中位	雲母・石英・長石	内面 灰黄褐色 (10YR4/2) 外面 灰黄褐色 (10YR4/2) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面黒色処理
(1) SI-014	第68図 -20	土師器	坏	口径 13.1 底径 - 器高 3.9	65%	白色砂粒・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(1) SI-014	第68図 -21	土師器	高坏	口径 15.8 底径 10.0 器高 10	90%	白色砂粒・雲母・石英	内面 橙色 (7.5YR7/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	坏部内外面赤彩
(1) SI-014	第68図 -22	土師器	高坏	口径 14.8 底径 8.8 器高 10.5	90%	白色砂粒・雲母・石英	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
(1) SI-014	第68図 -23	土師器	高坏	口径 (14.9) 底径 - 器高 <5.0>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母・石英	内面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 外面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	内外面赤彩
(1) SI-014	第68図 -24	土師器	甕	口径 16.2 底径 - 器高 <22.0>	口縁部～胴部下位	雲母・長石	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	煤付着
(1) SI-014	第68図 -25	土師器	甕	口径 10.2 底径 9.8 器高 22.1	95%	雲母・石英・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -26	土師器	甕	口径 15.6 底径 - 器高 <7.7>	口縁部～胴部上位	雲母・長石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -27	土師器	甕	口径 (16.4) 底径 - 器高 <11.2>	口縁部～胴部下位	白色砂粒・雲母・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 にぶい赤褐色(2.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(1) SI-014	第68図 -28	土師器	甕	口径 (16.8) 底径 - 器高 <7.6>	口縁部～胴部	雲母・石英・長石	内面 褐色 (7.5YR4/6) 外面 褐色 (7.5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(1) SI-014	第68図 -29	土師器	甕	口径 (12.5) 底径 - 器高 <12.0>	口縁部～胴部下位	白色砂粒・長石	内面 にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面 明赤褐色(2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(3) SI-014	第88図 -30	土師器	甕	口径 - 底径 7.6 器高 <7.1>	胴部下位～底部	雲母・長石	内面 褐灰色 (7.5YR4/1) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラ削り 外面 ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -31	土師器	甕	口径 - 底径 7.2 器高 <4.6>	胴部下位～底部	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 灰黄褐色 (10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -32	土師器	甑	口径 20.6 底径 6.0 器高 23	45%	白色砂粒・長石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -33	土師器	甑	口径 18.2 底径 6.7 器高 17.2	90%	白色、赤色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄色(2.5Y6/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -34	土師器	甑	口径 23.1 底径 - 器高 <17.8>	口縁部～胴部下位	白色、赤色砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい橙色(5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -35	土師器	鉢	口径 (16.1) 底径 3.8 器高 10.7	50%	雲母・長石	内面 明赤褐色(5YR5/8) 外面 赤褐色(5YR4/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-014	第88図 -36	土師器	鉢	口径 (23.8) 底径 - 器高 <7.8>	口縁部～体部中位	白色砂粒・雲母	内面 黒褐色(10YR3/1) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -37	土師器	鉢	口径 16.0 底径 - 器高 <9.2>	口縁部～体部中位	白色砂粒・雲母・長石	内面 褐灰色(7.5YR5/1) 外面 灰褐色(5YR5/2) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -38	土師器	鉢	口径 10.0 底径 (4.0) 器高 5.2	65%	白色砂粒・雲母・石英	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内面黒色処理
(3) SI-014	第88図 -39	土師器	鉢	口径 (7.2) 底径 5.0 器高 5.2	60%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -40	土師器	鉢	口径 9.6 底径 - 器高 4.7	100%	雲母・長石	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -41	土師器	ミニチュア	口径 8.5 底径 (5.0) 器高 6	25%	白色砂粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ	
(3) SI-014	第88図 -42	土師器	ミニチュア	口径 5.8 底径 4.0 器高 5.3	100%	雲母・石英	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-014	第88図 -43	土師器	ミニチュア	口径 (2.6) 底径 2.0 器高 2.4	80%	白色砂粒・雲母	内面 黄褐色(10YR5/6) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(3) SI-014	第88図 -44	土師器	ミニチュア	口径 4.3 底径 4.0 器高 1.9	90%	雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(3) SI-014	第88図 -45	土師器	ミニチュア	口径 7.3 底径 4.0 器高 3.8	100%	雲母・石英	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 明黄褐色(10YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(3) SI-016	第92図 -1	土師器	坏	口径 13.1 底径 - 器高 5.2	100%	白色、赤色砂粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-016	第92図 -2	土師器	坏	口径 10.2 底径 - 器高 3.6	95%	白色、赤色砂粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-017	第94図 -1	須恵器	蓋のつまみ	口径 3.1 底径 - 器高 <1.8>	つまみの部分	砂粒	内面 灰白色(7.5YR7/1) 外面 灰色(7.5Y6/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	
(3) SI-017	第94図 -2	須恵器	甕	口径 - 底径 - 器高 -	破片	砂粒・長石	内面 灰色(N6/) 外面 にぶい赤褐色(5YR4/3) 焼成 良好	内面 叩き 外面 叩き	
(3) SI-017	第94図 -3	土師器	高坏	口径 (15.3) 底径 9.6 器高 9.5	70%	白色砂粒・長石	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内面赤彩
(3) SI-017	第94図 -4	土師器	高坏	口径 - 底径 10.1 器高 6.8	坏部下位～脚部	白色、赤色砂粒・小石	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	外面赤彩
(3) SI-017	第94図 -5	土師器	甕	口径 (22.0) 底径 - 器高 <6.2>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・雲母・長石	内面 橙色 (7.5YR7/6) 外面 橙色 (7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(3) SI-017	第94図 -6	土師器	甕	口径 - 底径 8.6 器高 <3.2>	底部80%	白色砂粒・雲母・長石	内面 灰黄褐色 (10YR4/2) 外面 にぶい赤褐色(5YR4/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ヘラ削り	底部木葉痕
(3) SI-018	第96図 -1	土師器	甕	口径 (12.0) 底径 - 器高 <6.7>	口縁部	白色砂粒・小石	内面 灰褐色 (7.5YR4/2) 外面 にぶい赤褐色(2.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-018	第96図 -2	土師器	甕	口径 - 底径 6.6 器高 <2.5>	底部45%	白色砂粒・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 褐色 (7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-019	第98図 -1	土師器	坏	口径 12.3 底径 - 器高 4.7	95%	白色砂粒・雲母・石英	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
(3) SI-019	第98図 -2	土師器	坏	口径 13.3 底径 - 器高 4.3	95%	白色砂粒・雲母	内面 明黄褐色(10YR7/6) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
(3) SI-019	第98図 -3	土師器	坏	口径 12.0 底径 - 器高 4.4	80%	白色砂粒・雲母	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
(3) SI-019	第98図 -4	土師器	坏	口径 (13.6) 底径 - 器高 5	40%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
(3) SI-019	第98図 -5	土師器	坏	口径 12.6 底径 - 器高 <4.5>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第98図 -6	土師器	坏	口径 12.6 底径 - 器高 5.2	95%	白色砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
(3) SI-019	第98図 -7	土師器	坏	口径 14.4 底径 - 器高 <4.2>	70%	白色砂粒	内面 黒褐色(2.5Y3/1) 外面 にぶい黄褐色(2.5Y5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ	
(3) SI-019	第98図 -8	土師器	坏	口径 (13.8) 底径 - 器高 <5.0>	口縁部～体部下位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	内外面赤彩
(3) SI-019	第98図 -9	土師器	坏	口径 14.3 底径 - 器高 5.1	90%	白色砂粒・雲母	内面 黒色(10YR2/1) 外面 黒色(10YR2/1) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ミガキ	内外面黒色処理
(3) SI-019	第98図 -10	土師器	坏	口径 10.4 底径 - 器高 4.1	95%	白色砂粒・雲母・石英	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 黄褐色(10YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	内面黒色処理、外面赤彩、底外ヘラ書き

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(3) SI-019	第99図 -11	土師器	高坏	口径 14.6 底径 8.7 器高 9.7	90%	白色砂粒・雲母・石英	内面 褐色 (7.5YR4/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	内外面赤彩
(3) SI-019	第99図 -12	土師器	甕	口径 15.8 底径 9.4 器高 33.2	70%	雲母・長石	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-019	第99図 -13	土師器	甕	口径 14.2 底径 - 器高 <32.6>	口縁部～胴部中位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第99図 -14	土師器	甕	口径 14.6 底径 - 器高 <21.9>	口縁部～胴部下位	白色砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-019	第99図 -15	土師器	甕	口径 (15.2) 底径 (6.0) 器高 <25.9>	40%	雲母・長石	内面 橙色 (7.5YR6/6) 外面 明褐色(7.5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第99図 -16	土師器	甕	口径 (18.6) 底径 - 器高 <18.5>	口縁部～胴部下位	雲母・石英・小石	内面 暗褐色(5YR3/2) 外面 暗褐色(5YR3/2) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面煤付着
(3) SI-019	第99図 -17	土師器	甕	口径 14.4 底径 5.6 器高 17.5	80%	雲母・石英・長石	内面 灰褐色 (7.5YR4/2) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第99図 -18	土師器	甕	口径 12.6 底径 - 器高 <11.8>	口縁部～胴部下位	白色砂粒	内面 褐灰色 (10YR4/1) 外面 黒褐色(10YR3/1) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第99図 -19	土師器	甕	口径 9.4 底径 6.0 器高 10.2	100%	雲母・石英	内面 橙色 (7.5YR6/6) 外面 橙色 (7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	外面煤付着
(3) SI-019	第100図 -20	土師器	甕	口径 (11.0) 底径 5.0 器高 4.6	70%	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第100図 -21	土師器	甕	口径 12.6 底径 7.8 器高 12.2	85%	白色砂粒・雲母	内面 灰黄褐色 (10Y4/2) 外面 灰黄褐色 (10Y4/2) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第100図 -22	土師器	甕	口径 8.0 底径 5.2 器高 9.4	95%	白色砂粒・雲母・長石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-019	第100図 -23	土師器	甕	口径 - 底径 8.0 器高 <7.2>	胴部下位～底部	白色砂粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-019	第100図 -24	土師器	甑	口径 (28.0) 底径 7.6 器高 22.5	45%	白色、赤色砂粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第100図 -25	土師器	鉢	口径 11.2 底径 7.7 器高 11.4	80%	白色砂粒・小石	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(3) SI-019	第100図 -26	土師器	鉢	口径 11.0 底径 6.2 器高 7.5	100%	白色、赤色砂粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ	内外面赤彩
(3) SI-019	第100図 -27	土師器	鉢	口径 10.9 底径 5.5 器高 6.4	95%	白色砂粒・雲母	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ組み目 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第100図 -28	土師器	鉢	口径 - 底径 6.4 器高 <7.0>	胴部下位～底部	白色砂粒・小石	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 にぶい赤褐色(2.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ	
(3) SI-019	第100図 -29	土師器	鉢	口径 - 底径 - 器高 <6.6>	70%	白色砂粒・雲母	内面 灰黄褐色(10YR5/2) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第100図 -30	土師器	[illegible]	口径 8.6 底径 (4.0) 器高 4.5	70%	白色、赤色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-019	第100図 -31	土師器	壺	口径 9.3 底径 - 器高 10.5	100%	白色砂粒・雲母・石英	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	外面煤付着
(3) SI-019	第100図 -32	土師器	鉢	口径 8.8 底径 6.0 器高 5.1	95%	白色砂粒	内面 黒色(10YR2/1) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	内面黒色処理
(3) SI-019	第100図 -33	土師器	坩	口径 (9.6) 底径 - 器高 <9.3>	35%	白色砂粒・雲母・長石	内面 灰黄色(2.5Y6/2) 外面 灰黄色(2.5Y6/2) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ	
(3) SI-019	第100図 -34	土師器	坏	口径 8.4 底径 - 器高 3.6	70%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SI-019	第100図 -35	土師器	ミニチュア	口径 7.3 底径 4.0 器高 2.8	90%	白色砂粒・雲母	内面 黒褐色(10YR3/1) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(3) SI-019	第100図 -36	土師器	ミニチュア	口径 3.2 底径 3.4 器高 3.9	100%	白色砂粒	内面 灰黄褐色(10Y4/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(3) SI-019	第100図 -37	土師器	ミニチュア	口径 (5.3) 底径 (4.5) 器高 2.9	80%	白色、赤色砂粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
(3) SI-020	第101図 -1	須恵器	坏	口径 (13.6) 底径 8.0 器高 4.1	65%	白色砂粒・雲母	内面 灰色(5Y5/1) 外面 灰色(5Y5/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ ヘラ削り	
(3) SI-020	第101図 -2	土師器	坏	口径 (12.9) 底径 (7.6) 器高 4	25%	白色、赤色砂粒	内面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ ヘラ削り	
(3) SI-021	第102図 -1	土師器	坏	口径 (10.8) 底径 - 器高 <4.3>	30%	白色砂粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 黒色(10YR2/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-021	第102図 -2	土師器	甕	口径 (11.9) 底径 - 器高 <11.0>	40%	白色砂粒・雲母	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい赤褐色(2.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SI-021	第102図 -3	土師器	鉢	口径 (9.3) 底径 (5.5) 器高 6.3	60%	白色砂粒・雲母	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
(3) SI-022	第104図 -1	土師器	甕	口径 14.0 底径 - 器高 <6.5>	口縁部～胴部上位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SI-022	第104図 -2	土師器	甕	口径 - 底径 6.8 器高 <3.1>	胴部下位～底部	白色砂粒・長石	内面 黒色(7.5YR2/1) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ	
(3) SK-002	第106図 -1	須恵器	[illegible]	口径 - 底径 - 器高 <10.1>	40%	長石・黒色砂粒	内面 灰色(7.5Y5/1) 外面 灰色(7.5Y5/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ ヘラナデ	口縁部～くびれに波状文
(3) SK-002	第106図 -2	土師器	坏	口径 12.8 底径 3.5 器高 9.2	70%	雲母・石英・長石	内面 赤褐色(5YR4/8) 外面 赤褐色(5YR4/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(3) SK-002	第106図 -3	土師器	坏	口径 (12.9) 底径 - 器高 8.8	70%	雲母・長石	内面 赤褐色 (5YR4/8) 外面 赤褐色 (5YR4/8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SK-002	第106図 -4	土師器	坏	口径 (13.4) 底径 - 器高 4.6	70%	雲母・石英・長石	内面 赤褐色 (5YR4/8) 外面 明褐色 (7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内面赤彩
(3) SK-002	第106図 -5	土師器	坏	口径 13.0 底径 - 器高 5.7	90%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 外面 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
(3) SK-002	第106図 -6	土師器	坏	口径 (12.8) 底径 - 器高 6.3	45%	雲母・石英・長石	内面 褐色 (7.5YR4/6) 外面 明赤褐色 (5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SK-003	第107図 -1	土師器	甕	口径 - 底径 6.5 器高 <3.2>	胴部下位～底部	雲母・石英・長石	内面 褐色 (7.5YR4/3) 外面 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
(3) SK-003	第107図 -2	土師器	甑	口径 20.5 底径 6.2 器高 22.3	70%	雲母・石英・長石	内面 明褐色 (7.5YR5/6) 外面 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	
(3) SD-001	第111図 -1	土師器	坏	口径 (30.0) 底径 - 器高 <5.3>	20%	白色砂粒・雲母	内面 明黄褐色 (10YR6/6) 外面 明黄褐色 (10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	内面赤彩
(3) SD-001	第111図 -2	土師器	甕	口径 - 底径 6.0 器高 <2.6>	胴部下位～底部	白色砂粒・雲母	内面 灰褐色 (7.5YR5/2) 外面 橙色 (7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り	
遺構外	第109図 -1	須恵器	坏	口径 (12.5) 底径 - 器高 <3.2>	口縁部～体部上位	白色砂粒・長石	内面 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 外面 灰色 (5Y5/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	
遺構外	第109図 -2	土師器	坏	口径 14.5 底径 - 器高 5.8	100%	白色砂粒・小石	内面 橙色 (7.5YR6/6) 外面 橙色 (7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ	内外面赤彩
遺構外	第109図 -3	土師器	坏	口径 13.4 底径 - 器高 4.5	60%	白色砂粒・長石	内面 褐灰色 (10YR4/1) 外面 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ	内外面黒色処理
遺構外	第109図 -4	土師器	坏	口径 (13.0) 底径 - 器高 <2.8>	25%	白色、赤色砂粒・雲母	内面 にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ヘラナデ ミガキ	
遺構外	第109図 -5	土師器	ミニチュア	口径 7.0 底径 - 器高 4.8	85%	白色砂粒・雲母・石英	内面 明褐色 (7.5YR5/6) 外面 明褐色 (7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ	
遺構外	第109図 -6	土師器	ミニチュア	口径 4.5 底径 1.5 器高 1.9	95%	白色砂粒・雲母	内面 明褐色 (7.5YR5/6) 外面 明褐色 (7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
遺構外	第109図 -7	土師器	ミニチュア	口径 - 底径 3.8 器高 <2.3>	50%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	

第22表　古墳時代土製品観察表

<　>現存値

遺構番号	挿図番号	種類	法量：mm g					色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量		
(3) SI-003	第71図-14	土玉	11.0	11.0	-	2.5	1.3	黒色 (2.5YR2/1)	
(3) SI-009	第79図-2	支脚	135.0	76.0	70.0	-	678.9	褐色 (7.5YR4/6)	
(3) SI-012	第85図-29	支脚	186.0	83.0	72.0	-	1122.9	褐色 (7.5YR4/6)	
(3) SI-014	第89図-46	紡錘車	48.0	50.0	22.0	8.0	59.1	明黄褐色 (10YR6/6)	
(3) SI-014	第89図-47	紡錘車	54.0	<30.0>	20.0	8.0	39.6	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	
(3) SI-014	第89図-48	土玉	27.5	32.5	-	7.0	26.3	黄褐色 (10YR5/6)	
(3) SI-014	第89図-49	土玉	30.0	31.0	-	9.0	24.8	褐色 (10YR4/4)	
(3) SI-014	第89図-50	土玉	12.0	14.0	-	3.0	2.5	黒色 (5Y2/1)	
(3) SI-014	第89図-51	土玉	6.5	7.0	-	1.5	0.3	暗褐色 (10YR3/4)	
(3) SI-016	第92図-3	支脚	<98.0>	51.0	46.0	-	253.1	明赤褐色 (5YR5/6)	
(3) SI-018	第96図-3	支脚	146.0	86.0	79.0	-	1022.2	明赤褐色 (5YR5/6)	
(3) SI-019	第100図-38	土玉	28.0	29.5	-	8.0	20.8	黄褐色 (10YR5/6)	
(3) SK-002	第106図-7	土玉	35.0	35.0	-	10.0	42.9	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	
(3) SK-002	第106図-8	土玉	32.0	34.5	-	9.0	33.6	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	

第23表　古墳時代石製品観察表

<　>現存値

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	石材	法量：mm g					備考
					最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量	
(3) SI-002	第69図-36	104	臼玉	滑石	8.0	8.0	2.5	2.5	0.2	
(3) SI-012	第85図-30	1	砥石	軽石	70.0	66.0	56.0	-	146	砥石として使用
(3) SI-014	第89図-52	1	砥石	凝灰岩	92.0	49.0	25.0	-	223.9	
(3) SI-019	第100図-39	2	紡錘車	片岩	42.0	40.0	15.0	9.0	35.8	
(3) SI-019	第100図-40	1	砥石	砂岩	10.8	8.0	2.5	-	248.5	
(3) SI-021	第103図-4	5	臼玉	滑石	<6.0>	10.0	3.5	3.0	0.7	

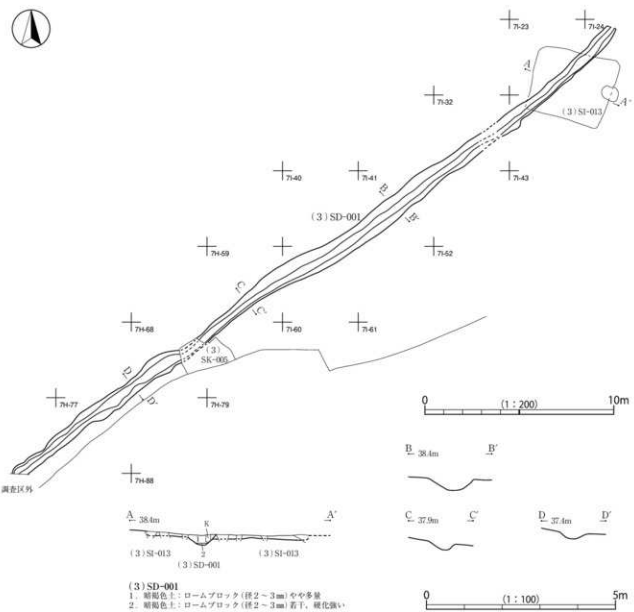
第4節　中・近世の遺構と遺物

本調査区では、溝跡3条と台地整形区画1か所が検出された。溝跡は尾根の形状に沿って、上部の平坦面と落ち際を区画する形で配されており、台地整形区画とともに、中世の砦址に関連する遺構の可能性もある。

1　溝跡

(3) SD-001（第110・111図、第19・21表、図版25・50・51）

71-23・24・31～33・40～42・50・51、7H-59・67～69・76～78グリッドに所在する。上面は後世の削平を受けており、北東側は立ち上がりが失われている。南西側は調査区外へ延びる。古墳時代の竪穴住居跡 (3) SI-013、(3) SK-005と重複する。支尾根の南東側斜面に沿って北東から南西に向かって直線



第110図　(3) SD-001（1）

的に延び、尾根上の平坦面と傾斜面の落ち際を区画する形となっている。北西側の尾根上平坦面に接する形で、台地整形区画（3）SX-001が位置する。走行方向はN-53°-Eで、検出された総延長は39.7m、幅0.6～1.2mで、深さ0.14～0.42mである。

出土遺物はわずかで、内2点を図示した。1は土師器坏である。2は土師器甕の底部破片である。2点ともに遺構の時期を示すものではなく、混入と考えられる。

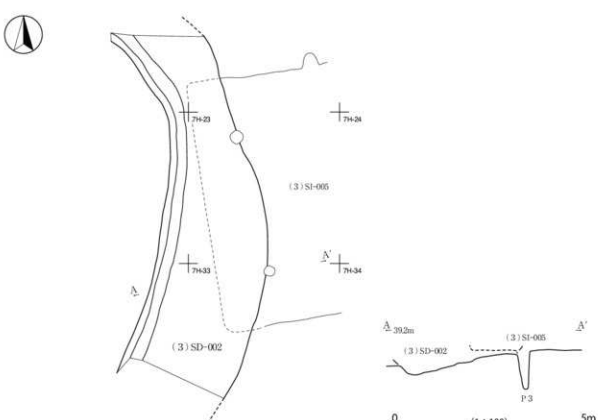
本遺構の詳細な時期は不明だが、台地整形区画との関係から中世と推定される。

第111図　(3) SD-001（2）

(3) SD-002（第112図、第19表、図版25）

7H-12・13・22・23・32・33グリッドに所在する。北側と南側については、地形の傾斜により、安全面から調査し得なかった。古墳時代の竪穴住居跡（3）SI-005と重複する。支尾根の西側斜面に切り込む谷頭に沿って北から南へ弧状に延びる。断面形状は底部が斜面側に寄ったV字形を呈する。検出された規模は、総延長9.5m、幅1.6～2.9m、深さ0.41～0.44mである。

遺物は出土しなかったため、本遺構の詳細な時期は不明だが、位置関係から中世と推定される。

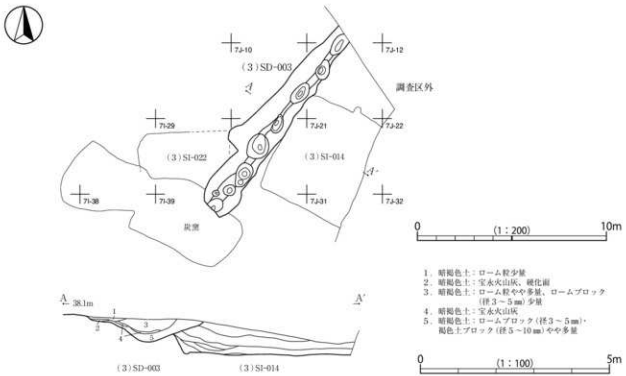


第112図　(3) SD-002

(3) SD-003 (第113図、第19表)

7I-29・39、7J-01・10・11・20・30グリッドに所在する。北側は調査区外に延び、南側は現道および近現代の炭窯により攪乱を受けている。断面はV字状で底面に柱穴が並ぶ。覆土中層から1707年の富士山の噴火に伴う宝永火山灰が検出された。検出された規模は、総延長11m、幅1～2m、深さ0.38～0.8mである。

遺物は出土しなかったが、本遺構の時期は、覆土の状況および形状から近世と推定される。



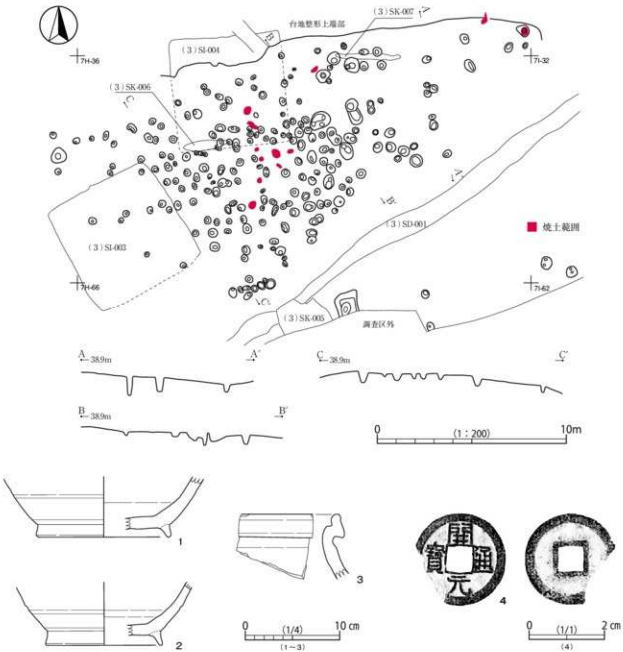
第113図　(3) SD-003

2　台地整形区画

(3) SX-001 (第114図、第24・25表、図版25・51)

7H-28・29・36～39・46～49・56～59・68・7I-20～22・30～32・40・41グリッドに所在する。規模は南北約30m、東西約60mの範囲で、北端部にはほぼ東西方向に延びる段状の土地整形の痕跡が認められ、南東側は斜面落ち際を(3) SD-001に区画される。整形上端部は大きく後世の削平を受けており、形状は明瞭ではない。縄文時代の陥穴(3) SK-006・(3) SK-007と古墳時代の竪穴住居跡である(3) SI-003・(3) SI-004と重複し、両遺構の上面を削平している。区画内からは多数のピット群が検出された。明確な組み合わせは捉えられなかったが、概ね(3) SD-001の走行方向に沿って並ぶものと、東西方向に並ぶ一群を観取できる。区画に沿った柵列、あるいは建物跡と推定される。

帰属は明らかでないが、区画内の覆土から陶器片等が出土しており、このうち特徴的なもの4点を図示した。1・2は山茶碗である。3は甕の口縁部である。4は開元通宝である。



第114図　(3) SX-001

第24表　遺構外出土土器観察表

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
(3) SX-001	第114図-1	陶器	山茶椀	口径 - 底径 (14.2) 器高 <4.4>	胴部下位～底部	石英・長石	内面 灰黄色 (2.5Y6/2) 外面 灰黄色 (2.5Y6/2) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	自然釉
	第114図-2	陶器	山茶椀	口径 - 底径 (12.2) 器高 <6.7>	胴部下位～底部	石英・長石	内面 灰白色 (5Y7/2) 外面 灰白色 (N7/) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
	第114図-3	陶器	壺	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部～胴部上位	石英・長石	内面 にぶい赤褐色 (7.5YR5/6) 外面 暗赤褐色 (5YR3/3) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	常滑窯、自然釉

第25表　銭貨観察表

遺構	挿図番号	遺物番号	銭種	外縁外径(mm)		外縁内径(mm)		内郭外径(mm)		内郭内径(mm)		外縁厚(mm)	内面厚(mm)	重量(g)	備考
				縦	横	縦	横	縦	横	縦	横				
(3) SX-001	第114図-4	1	開元通寶	24.5	-	20.0	-	7.5	7.5	6.5	6.7	1.2	0.8	2.4	一部欠損

第4章　総　括

第1節　縄文時代

今回の調査において、縄文時代の遺構は、(1・2)地点では検出されず、(3)地点で陥穴3基が検出された。遺物は、全体で天箱3箱程度出土した。多くは、古墳時代以降の竪穴住居跡をはじめとする遺構の覆土から出土し、原位置を保っているものはほとんどない。また土器片を観察すると、いずれも小破片で、後世の土地利用の影響で著しく摩耗したものが多かった。こうした状況ではあったが、(1・2)地点と(3)地点で、出土遺構、遺物の様相に差異が認められたので、ここで触れておきたい。

(1・2)地点では、遺構の検出はなかった。出土土器は、前期中葉黒浜式、前期後葉浮島式、諸磯b式、前期末葉から中期初頭の土器、後期中葉加曽利B式が認められた。これらの内、黒浜式の出土が大半を占めており、黒浜式期に活発に土地利用が行われた可能性がある。また石器では、局部磨製五角形鏃(第7図-1)が出土している。形態や製作技法から早期中葉のものと考えられ、今回の調査で最も古い時期の遺物である。他にも、磨製石斧を再加工した打製石斧、磨製石斧、磨石類、磨石類を加工したスタンプ形石器などが出土しており、狩猟具ではなく食物加工の用途と考えられる石器が認められる。また土製品として土製円盤が出土している。

(3)地点では、陥穴3基が検出された。いずれも幅が狭い構造のものである。この内、SK-006、007は台地縁辺の傾斜に対して沿うように構築されていた。出土土器は、中期末葉の加曽利E式土器から後期初頭称名寺式、後期前葉堀之内式、後期中葉加曽利B式が出土している。このうち、称名寺式期の土器が最も多く出土している。出土石器は、打製石斧、楔形石器なども出土している。

以上のことから(1・2)地点と(3)地点の土地利用の時期や性格が大きく異なることが指摘できる。(1・2)地点は前期中葉から後葉に、(3)地点では、後期初頭から中葉に活発に土地利用されたと考えられる。また(1・2)地点では、狩猟具ではなく食料加工具の用途が考えられる磨石類などの石器が出土しているのに対し、(3)では石器の種類に乏しく、石鏃製作の際に出たと考えられる微小剥片が多く出土している。(1・2)地点では、今回遺構は検出されなかったが、黒浜式土器が多く出土しており、この時期に人々が生活していた可能性が考えられ、調査地点の周囲には住居跡等の居住痕跡が検出されることも予想される。その一方で(3)地点では、陥穴3基が検出され、石鏃製作の際の微小剥片が多いことを考えると、狩猟の場として土地利用されていたと考えられる。

両地点とも加曽利B式の土器が出土しているが、この時期を最後に痕跡が認められなくなる。

第2節　古墳時代

1　概要

古墳時代の遺構は、(1・2)・(3)の調査区が位置する二つの支尾根上から、合わせて竪穴住居跡46軒、土坑3基が検出された。今回の調査において主体となる時期である。検出された竪穴住居跡46軒中32軒でカマドが確認されており、残りの16軒についても多くはカマドが設けられていたものと推定できる。(1・2)SI-005・011・013などでは、床面から炭化材・焼土等の火災の痕跡が検出された。

(1・2)の調査区では、支尾根の付け根にあたる平坦面を中心に遺構が重複して分布しており、古墳時代

の集落は、現在の春日神社境内を含む台地の主尾根上にも広く展開する可能性が高い。今回の調査で検出された遺構群は、集落の外縁部にあたるものと推定される。

出土した遺物は、古墳時代後期の所謂「鬼高式」の範疇となる5世紀末～6世紀後半ごろの土師器を中心とし、集落の造営時期も概ねこれに一致するものと考えられる。少量ではあるが須恵器が出土している。いずれも陶邑編年のTK47～TK43型式に比定され、推定される集落の年代幅に収まっている。土師器類は主に印旛地域の特徴を示し、他地域の影響としては、比企型の坏などが散見される一方、有段口縁坏や栗囲式等東北系の土師器は認められなかった。

(1・2)SI-014・(3)SI-003・004・012・019等では、カマド内や周囲から坏・甕等が集中して出土しており、カマド廃絶時に伴う祭祀とも考えられようか。また、一部の竪穴住居跡からは手捏ねによるミニチュア土器や石製模造品など祭祀に関わる遺物が出土している。特に(3)SI-019からは、ミニチュア土器の他、鏡を模倣したものや小型の壺状の器形を呈する土師器、粗雑な造りの坏、石製紡錘車など祭祀的な様相を示す遺物が集中して出土した。

その他特殊な遺物としては、(3)SI-002から出土した須恵器提瓶を模倣した土師器が挙げられる。

2　出土遺物と集落の時期区分

今回の調査では、集落の外縁部のみを調査範囲としているため全容の把握は難しいものの、古墳時代後期を通して存続した集落が、良好な形で確認されている。

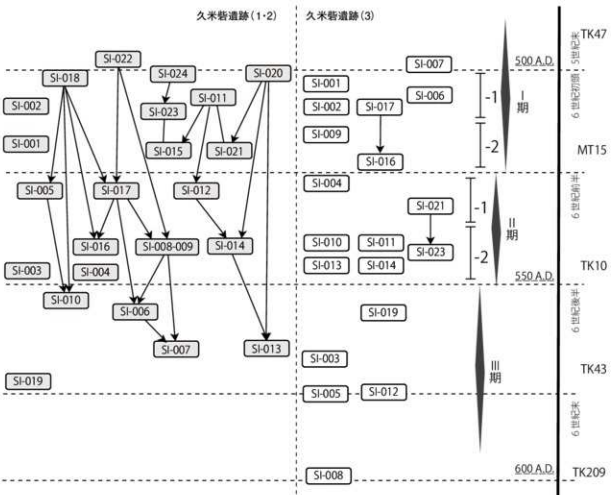
ここでは、遺構の重複関係から捉えられる集落の時期区分と、年代幅を推定するためのタイムスケールとして、出土した土師器の型式的な組列について概観したい。

(1)遺構の重複関係

竪穴住居跡の重複関係を第115図のとおり整理した。重複のある遺構間を直線でつなぎ、先行・後続が明確なものは矢印によってその関係を示した。重複がなく、単独の遺構については出土遺物の特徴から、類似する遺構に併行するものとして当てはめた。主に(1・2)の調査区でみられた遺構の重複関係と、併存可能な遺構の年代幅から、集落の変遷は大きく以下のⅠ期～Ⅲ期の3段階として時期区分を設定することができる。また、ⅠとⅡ期については、それぞれ2期に細分するものとし、重複関係から、各時期の後半に位置づけられる遺構を「-2」にあてた。各時期の遺構は以下の通りである。

Ⅰ期　-1：(1・2)SI-002・011・018・020・022・(3)SI-002・006・017・SK-002
　　-2：(1・2)SI-001・015・023・(3)SI-001・016
Ⅱ期　-1：(1・2)SI-005・012・017・(3)SI-004・010・011・013
　　-2：(1・2)SI-003・004・008-009・014・016・(3)SI-014・021・023
Ⅲ期：(1・2)SI-006・007・010・013・019・(3)SI-003・005・012・019

本来であれば竪穴住居の存続期間などを考慮に入れなければならず、この3時期および細分を含む5時期が、必ずしも同時併存や、ある時点の集落景観を表すものではないが、ここでは、集落の変遷過程を見るための指標として、この区分を用いるものとしたい。



第115図　竪穴住居跡の重複関係

（2）土師器

出土した土師器は、主体を占める器種である坏・高坏・甕・甑の４分類と鉢・その他のうち、形状が把握できる資料を集成図にまとめた(第116 ～ 118図)。全期を通して個体数が多く、また形状の変化が大きい坏については、以下のとおり細分した。

１類(椀形)　　：体部と口縁部に明確な境を持たないもの。素行口縁。椀状。または半球形。

２類(蓋模倣坏)　：体部に稜をもち、口縁部が外反または直立する。須恵器蓋を模倣したもの。

３類(坏身模倣坏)：体部に稜をもち口縁部が内傾または、段状の稜をもって口縁部が直立する。須恵器坏身を模倣したもの。

集成図では、竪穴住居跡から出土した遺物を一括性の高い資料として捉え、遺構ごとに出土遺物のセットとして図中に示した。また、遺構の重複関係から新旧関係が明らかな遺構については、古いものが上に、より新しいものが下になるよう配置した。

設定した時期区分について、それぞれ器種の構成・手法上の特徴は以下の通りとなる。

Ⅰ期

(1・2)SI-001・002・(3)SI-001・002などから出土した遺物が本期の指標となる。坏は器形に和泉式の様相を残し、全体として口径に対して器高が高くなる傾向を有している。器形は1類、2類が認められる。須恵器模倣坏の現れる段階ではあるが、坏蓋を模倣したものが主体となり、坏身を模倣した形状のものは見られない。内外面に赤彩が施されているものが多く、黒色処理されたものは認められない。

高坏は完形の資料数が少ないが、坏部は同時期の坏の形状と同様に、口径に対して器高が高く、見込みが深い形状となっている。坏部口縁部と底体部との間の稜は弱い。脚部は低く造られ、接脚部付近が中実となる。裾の広がりが弱く断面は「ハ」の字状となる。坏同様、内外面が赤彩されているものが多い。

甕は頸部が「く」の字状に屈曲して、口縁部が外傾する資料に特徴付けられる。胴部は張りが強く、球胴形となる傾向がみられる。最大径を胴部中央または、やや上部に持つものが多い。

甑は、各時期を通して変化の傾向を把みづらいが、全体的に口径に比して器高が低く、底部径に対して口径が大きい。頸部のくびれが小さく、器形は逆「ハ」の字状となる。

その他の遺物としては、坩・短頸壺がわずかに見られる。また、須恵器提瓶を模倣した土師器が(3)SI-002から出土した。

竪穴住居跡の切り合い関係から、Ⅰ期を更に2時期に細分することができる。特にⅠ期-1については、一部の遺構において5世紀末の様相を示す出土遺物の構成が認められた。

Ⅱ期

(1・2)SI-003・008-009・017・(3)SI-014などから出土した遺物を指標とする。

坏はⅠ期に比して全体にやや扁平な形状となる。器形は1類と2類に3類が加わり、須恵器模倣坏に坏身を模倣したものが現れる。内外面は赤彩されているものが多いが、一部黒色処理を施した例も認められる。数量としては僅かではあるが、比企型の形状を呈する坏((1・2)SI-008・009 4)が出土している。

高坏はⅠ期に比して坏部が浅く、口縁部と底体部との間に稜をもって外反する。脚高の高いものが多く、接脚部付近は中実である。内外面は赤彩されているものが多いが、黒色処理を施した例も認められる。

甕は、口縁部が頸部で屈曲して立ち上がり、上方が外反するものと、頸部からゆるやかに外反するものが中心となる。胴部はⅠ期同様に球胴形となる例も多いが、胴の張りが弱く長球状から卵球状を呈するものも認められる。また、器種としては性格が異なるものと考えられる小型の甕も散見される。

甑は特徴を捉えづらいものの、やや長胴となり、内面に縦位のミガキがみられる。

竪穴住居跡の切り合い関係から、Ⅱ期を更に2時期に細分した。

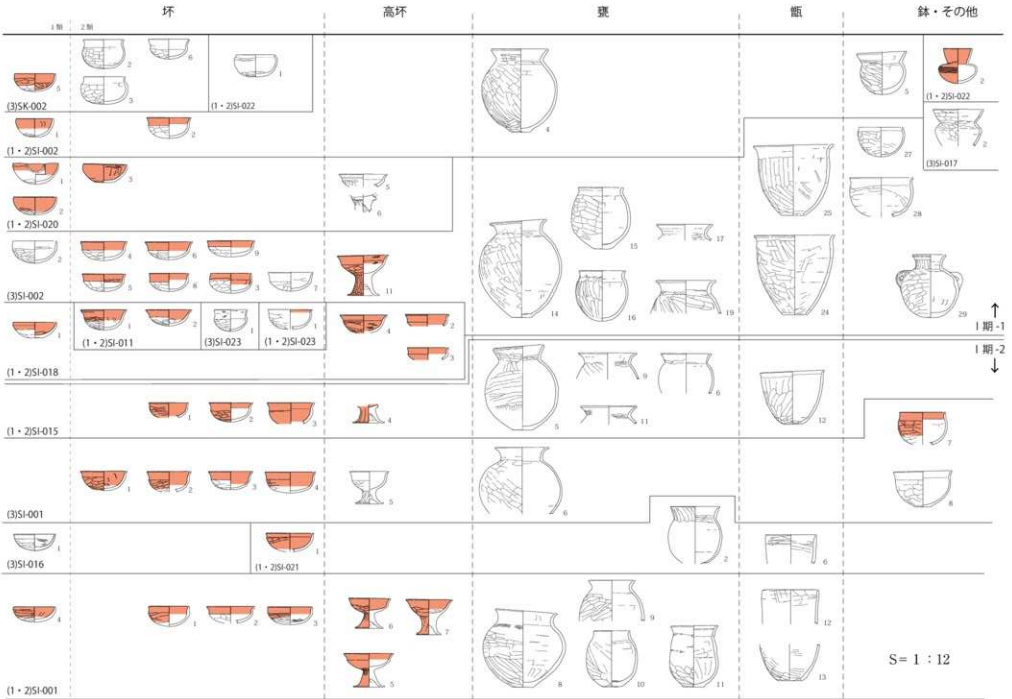
Ⅲ期

(1・2)SI-006・013・(3)SI-003・012・019などから出土した遺物が指標となる。

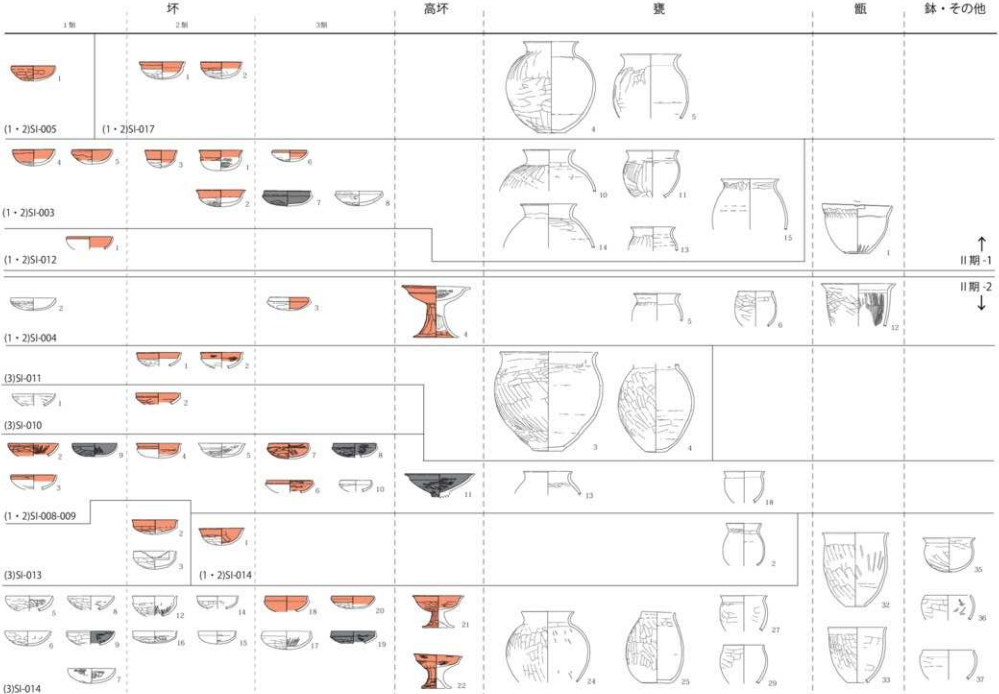
坏は扁平なものが主体となり、器形は1類と3類が主体となる。須恵器坏蓋の模倣である2類の占める比率は大きく低下し、口縁が内傾する坏身模倣坏の割合が大きくなる。器面の赤彩は大きく数を減じ、替わって黒色処理が施されるものが増える。

高坏は更に個体数が少ないものの、接脚部に中実の部分がなく、脚を直接坏部底面に貼り付ける例が認められる。

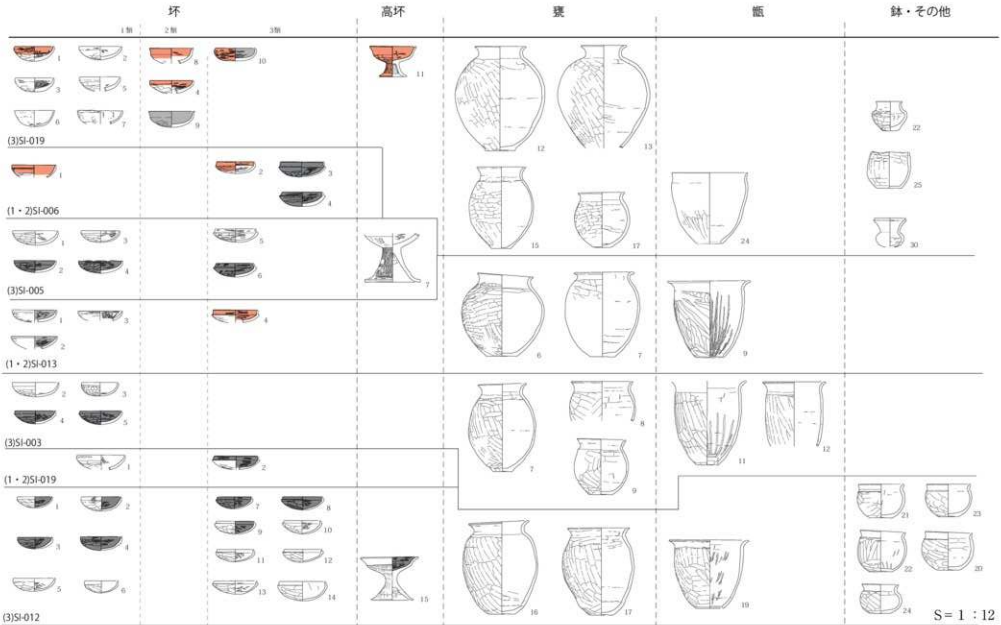
甕は頸部の屈曲が弱く、口縁部にかけてゆるやかに外反するものが多い。全体に胴部は張りが弱く、最大径を上半に持つ長球状から卵球状を呈する。



第116図　土師器集成図（1）



第117図　土師器集成図（2）



第118図　土師器集成図（3）

甑は、長胴のものが増え、内面には粗く縦位のミガキが施される。

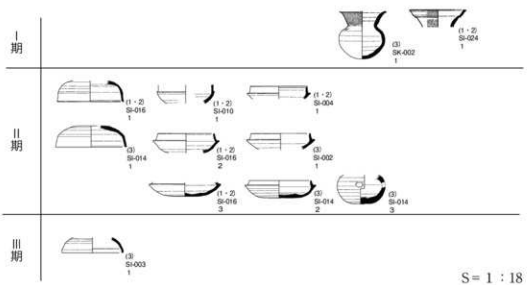
（3）須恵器

遺構から出土した須恵器について第119図に集成した。出土数量は少なく、いずれも小片である。覆土中からの出土も多く、遺構の年代を確定する要素としては必ずしも決定的ではないが、出土遺構と比定される陶邑編年における型式は以下の通りである。

Ⅰ期
(1・2)SI-024　1（鉢）　TK47型式
(3)SK-002　1（鉢）　TK47型式

Ⅱ期
(1・2)SI-004　1（坏）　TK10型式
(1・2)SI-010　1（坏）　MT15型式
(1・2)SI-016　1（坏）　MT15型式
(1・2)SI-016　1（坏蓋）TK10型式
(1・2)SI-016　2（坏身）TK10型式
(1・2)SI-016　3（坏身）TK43型式
(3)SI-002　1（坏身）TK10型式
(3)SI-014　1（坏蓋）TK10型式
(3)SI-014　2（坏身）TK43型式
(3)SI-014　3（鉢）　TK43型式

Ⅲ期
(3)SI-003　1（坏蓋）TK43型式



第119図　須恵器集成図

(4) 年代の推定

各期の年代について出土須恵器の編年および土師器の特徴から推測すると、Ⅰ期は、器高が高く、赤彩された土師器坏の特徴から概ねTK47型式に併行し、5世紀末～6世紀初頭の年代を想定できる。Ⅱ期は比較的須恵器の出土を伴う遺構が多いが、主体となるのはMT15～TK10型式であり、時期もこれに併行するものと考えられる。年代は6世紀前半と想定できる。Ⅲ期は遺構から出土した須恵器が少ないものの、扁平で黒色処理が施された土師器坏が主体となるなどの特徴とも合わせ、TK43型式に併行し、年代は6世紀後半にあたると考えることができる。

今回の調査で確認されたⅢ期以降の遺物としては、(3) SI-020で出土した新治窯産と推定される須恵器坏やロクロ土師器坏など、一部で8世紀代の遺物が認められるものの、TK209型式以降に併行する遺物はほとんど見られない。6世紀末から7世紀初頭までに集落は大きく規模を減じていることが推定される。

また、この集落の下限と関連するものとも考えられるが、6世紀後半～7世紀にかけて千葉市域等の下総地域から九十九里地域に分布する東北系の土師器坏は、近接する同時期の集落である関戸関ノ台遺跡および妙福寺裏遺跡を含めても存在が確認できなかった。

3　集落の変遷についての概観

重複関係と遺物の年代から整理した遺構の変遷を第120～122図にまとめた。集落は調査区の北側にあたる台地上平坦面にも広がる事が予想されため、全容を推測することが難しく、特に今回の調査範囲の中では、分布の変化などの傾向は見出せなかった。ただし、各時期を通して常に竪穴住居が存在する範囲が複数認められ、何らかの紐帯をもつ居住の単位と捉えることも可能であろうか。

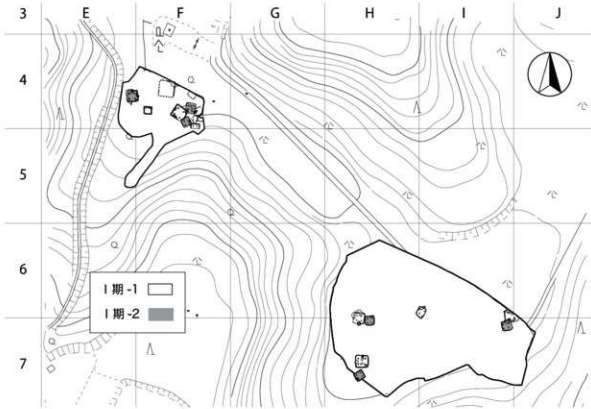
全容は把握出来ないものの、5世紀末に成立し、6世紀を通して台地上に造営された集落であり、6世紀初頭～6世紀前半が中心的な時期となる。6世紀後半から規模を減じ、6世紀末には小規模な集落が残る形になるものと考えられる。

同時期の集落としては東側の台地上に妙福寺裏遺跡、西側に関戸関ノ台遺跡が位置している。周辺の地域は、当該時期の集落群の広がりが推定され、広域的な景観の復元に向けても今後の調査の進展が期待される。

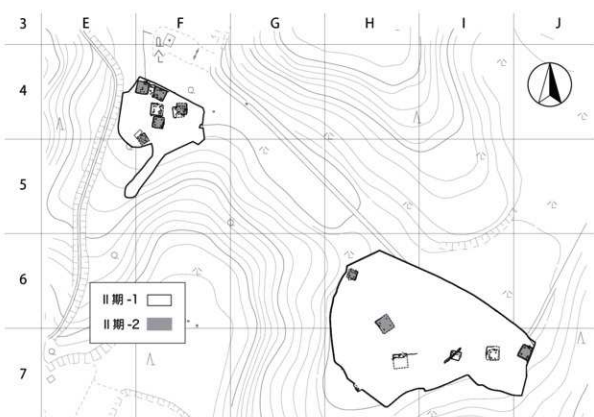
第3節　中・近世

調査区の位置する樹枝状の台地は、昭和57年に成田市史編纂に伴い、成田市中世城郭調査団による現地踏査が行われた。(1・2) 調査区の北側にあたる春日神社付近で堀が、その西側の斜面が切り落としとなっていることが確認され、また今回の調査範囲の東側の尾根上でも土塁の跡が認められたとされており、この踏査の結果を基に戦国期のものと推定される「久米砦」として報告されている。

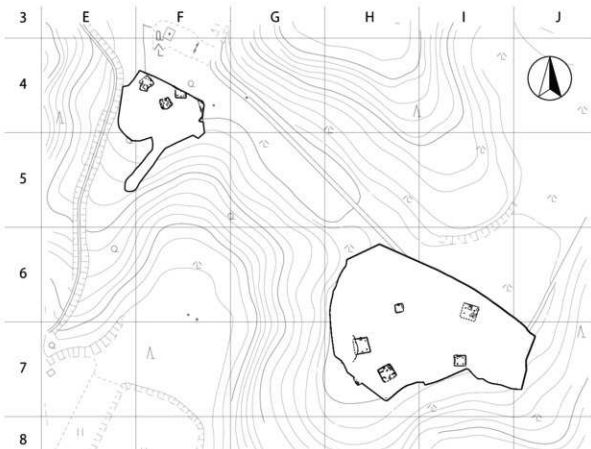
本調査においても、久米砦遺跡(3)の調査区から尾根上の平坦面にかけて、落ち際に沿う溝が確認されている。また、溝に沿う形で台地整形区画と、柵列または建物と推定されるピット群が検出されている。これらの遺構が昭和57年の踏査で確認された「久米砦」に関連する遺構の可能性もあるかもしれないが、時期的な検討も含め、周辺の調査成果を待つ必要があるのではないかと思われる。



第120図　遺構配置図（Ⅰ期）



第121図　遺構配置図（Ⅱ期）



第122図　遺構配置図（Ⅲ期）

参考文献

成田市中世城郭址調査団　1983『成田市中世城郭址調査報告書』成田市中世城郭址調査団・成田市総務部市史編さん室
(財)千葉県文化財センター　1985「妙福寺裏遺跡(No.1)」『東関東道埋蔵文化財発掘調査報告書－成田地区－』
小林清隆　1993　「〔研究ノート〕村田川流域の６～７世紀の土師器の再検討－千葉市模作遺跡の分析を中心に－」『研究紀要』14(財)千葉県文化財センター
村山好文　1988　「平賀遺跡群における古墳時代後期土器の再検討」『日本考古学研究所集報X』日本考古学研究所
金丸　誠　1992　「下総地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル』No.342　ニューサイエンス社
小沢　洋　1992　「上総地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル』No.342　ニューサイエンス社
小沢　洋　1995　「房総の古墳後期土器－坏の変遷を中心として－」『東国土器研究』４東国土器研究会
木島桂子　2004　「房総における東北系土師器について」『研究連絡誌』第66号(財)千葉県文化財センター

(公財)千葉県教育振興財団　2009『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書１－成田市松崎山ノ台遺跡－』
千葉県教育委員会　2019『成田市関戸谷津之台遺跡－一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書２－』
千葉県教育委員会　2021『成田市関戸関之台遺跡－一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書３－』

写　真　図　版

久米砦遺跡周辺航空写真

図版2

(1・2) SI-001 (南から)

(1・2) SI-001 カマド (南から)

(1・2) SI-001 断面 A ライン (南から)

(1・2) SI-001 断面 B ライン (南から)

(1・2) SI-001 遺物 (南から)

(1・2) SI-001 遺物

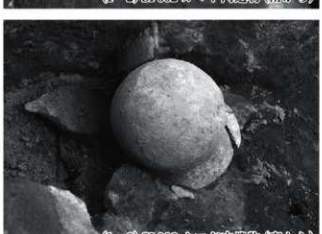
(1・2) SI-001 遺物

(1・2) SI-001 遺物 (南から)

(1・2) SI-002 (南から)

(1・2) SI-002 カマド内遺物 (南から)

(1・2) SI-002 カマド内遺物 (南から)


(1・2) SI-002 カマド内遺物 (東から)

(1・2) SI-002 カマド内遺物 (南から)

(1・2) SI-003 (西から)

(1・2) SI-003 カマド (西から)

(1・2) SI-003 断面 A-ライン (西から)

(1・2) SI-003 断面 A ライン (西から)

(1・2) SI-003 遺物 (北西から)

(1・2) SI-004 (東から)

(1・2) SI-004 断面 (南東から)

(1・2) SI-004 カマド周辺遺物 (南から)

(1・2) SI-005・010 断面 (南東から)

(1・2) SI-005 P5 断面 (南から)

(1・2) SI-006・007・008 断面 (西から)

(1・2) SI-006・007・008 断面 (西から)

(1・2) SI-006・007・008 断面 (北から)

図版6

(1・2) SI-006 (南東から)

(1・2) SI-006 遺物 (北西から)

(1・2) SI-006 遺物 (南西から)

(1・2) SI-007 (南から)

(1・2) SI-008 (北から)

(1・2) SI-008 遺物 (北から)

(1・2) SI-009 (北から)

(1・2) SI-009 (南から)

(1・2) SI-009 カマド (南から)

(1・2) SI-009 断面 (西から)

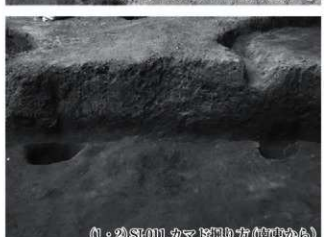
(1・2) SI-009 断面 (西から)

(1・2) SI-009 断面 (北から)

(1・2) SI-009 断面 (北から)

(1・2) SI-009 カマド断面 (東から)

(1・2) SI-009 遺物 (北から)


(1・2) SI-011 カマド掘り方 (南東から)

(1・2) SI-011 (南東から)

(1・2) SI-011 カマド (南東から)

(1・2) SI-011 カマド断面 (南東から)

(1・2) SI-011 遺物・炭化物 (東から)

(1・2) SI-012 (西から)

(1・2) SI-012 断面 (東から)

(1・2) SI-012 遺物 (西から)

(1・2) SI-013 (東から)

(1・2) SI-013 遺物・炭化物 (東から)

(1・2) SI-013 遺物 (東から)

(1・2) SI-013 遺物 (東から)

(1) SI-014 (西から)

(1・2) SI-014 カマド (西から)

(1・2) SI-014 カマド遺物 (西から)

(1・2) SI-015 (南から)

(1・2) SI-015 遺物 (南西から)

(1・2) SI-015 遺物 (北から)

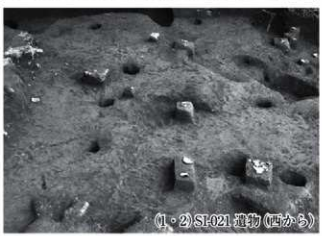
(1・2) SI-016 (南西から)

(1・2) SI-016 カマド (南から)

(1・2) SI-016・017・018 遺物 (南東から)

(1・2) SI-017 (北から)

(1・2) SI-019 (北東から)


(1・2) SI-021 遺物 (西から)

(1・2) SI-022 断面 (南西から)

(1・2) SI-022B (南西から)

(1・2) SI-022 遺物 (南から)

(1・2) SI-023 (東から)

(1・2) SI-023 断面 (東から)

(1・2) SI-024 (南東から)

(1・2) SK-001 (東から)

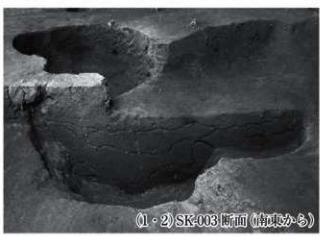
(1・2) SK-001 断面 (北から)

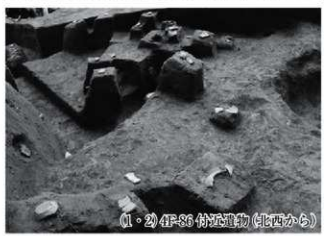
(1・2) SK-001 人骨（北西から）

(1・2) SK-001 遺物（北から）

(1・2) SK-002・003（南東から）

(1・2) SK-002 断面（北東から）


(1・2) SK-003 断面（南東から）


(1・2) 住-86 付近遺物（北西から）

(3) SK-004（南西から）

(3) SK-005（西から）

図版14

(3) SK-007 (東から)

(3) SI-001 カマド (北東から)

(3) SI-001 貯蔵穴 (南西から)

(3) SI-001 断面 (東から)

(3) SI-001 (北西から)

(3) SI-001 遺物（北東から）

(3) SI-002 カマド（南から）

(3) SI-002 断面（北から）

(3) SI-002 遺物（南西から）

(3) SI-002（南西から）

(3) SI-002 遺物（南西から）

(3) SI-002 遺物（北から）

(3) SI-002 遺物（西から）

(3) SI-002 遺物（南西から）

(3) SI-002 遺物（東から）

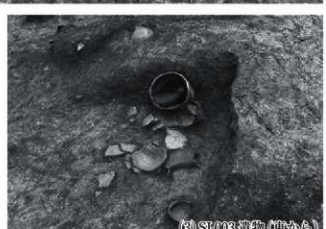
(3) SI-003 カマド（南東から）

(3) SI-003 P9 断面（南東から）

(3) SI-003 遺物・炭化物（北から）

(3) SI-003 (北西から)

(3) SI-003 断面 (西から)


(3) SI-003 遺物 (南から)

(3) SI-003 遺物 (南から)

(3) SI-004 カマド (南から)

(3) SI-004 遺物（南西から）

(3) SI-005 カマド（南から）

(3) SI-005 断面（南から）

(3) SI-005 遺物（南から）

(3) SI-005（南から）

(3) SI-003 (南から)

(3) SI-007・SK-012 (南から)

(3) SI-007 断面 (東から)

(3) SI-008 (南東から)

(3) SI-008 カマド (南西から)

(3) SI-008 断面 (西から)

(3) SI-008 (東から)

(3) SI-010 (東から)

(3) SI-011 (東から)

(3) SI-011 断面 (南西から)

(3) SI-011 遺物 (東から)

(3) SI-012 カマド (南東から)

(3) SI-012 断面 (北から)

(3) SI-012 (南から)

(3) SI-012 遺物 (南東から)

(3) SI-012 遺物 (南から)

(3) SI-012 遺物 (南東から)

(3) SI-013 (東から)

(3) SI-014 カマド（南西から）

(3) SI-014 断面（南から）

(3) SI-014 遺物（南西から）

(3) SI-014 遺物（南東から）

(3) SI-015（南東から）

(3) SI-015 カマド（南から）

(3) SI-016・017（南西から）

(3) SI-017（西から）

(3) SI-018 (南西から)

(3) SI-018 遺物 (南から)

(3) SI-019 カマド (南から)

(3) SI-019 遺物 (南から)

(3) SI-019 遺物 (南から)

(3) SI-019 遺物 (南から)

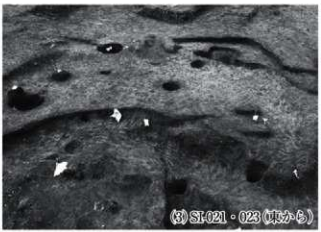
(3) SI-019 遺物 (南から)

(3) SI-019 遺物 (南から)

(3) SI-019 遺物（南から）

(3) SI-020（南東から）

(3) SI-021 貯蔵穴（南から）


(3) SI-021・023（東から）

(3) SI-022（南東から）

(3) SK-001 断面（北西から）

(3) SK-003 遺物（北から）

(3) SK-005（南西から）

(3) SD-001 (南西から)

(3) SD-002 西調 (南西から)

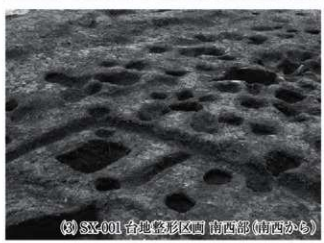
(3) SD-002 西調 (北から)

(3) SX-001 台地整形区画 中央部 (東から)

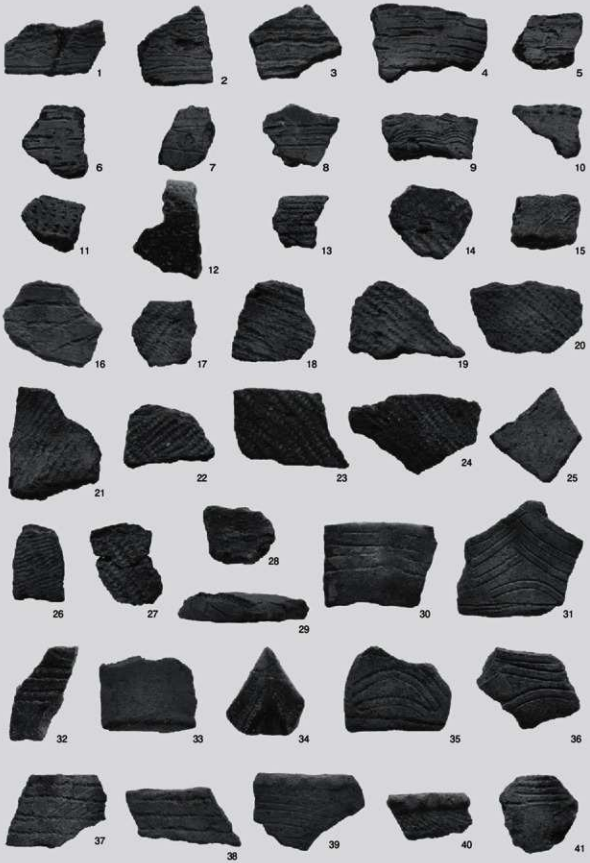
(3) SX-001 台地整形区画 中央部 (東から)

(3) SX-001 台地整形区画 東端部 (東から)

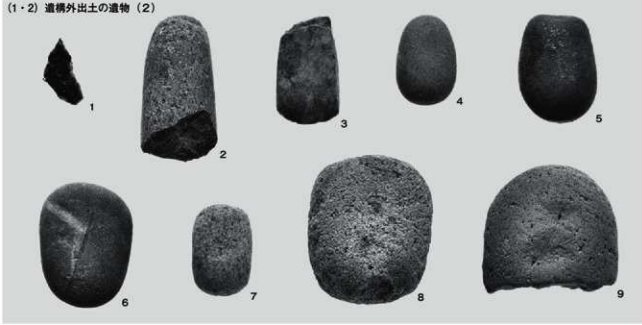
(3) SX-001 台地整形区画 南西部 (南西から)


(3) SX-001 台地整形区画 南西部 (南西から)

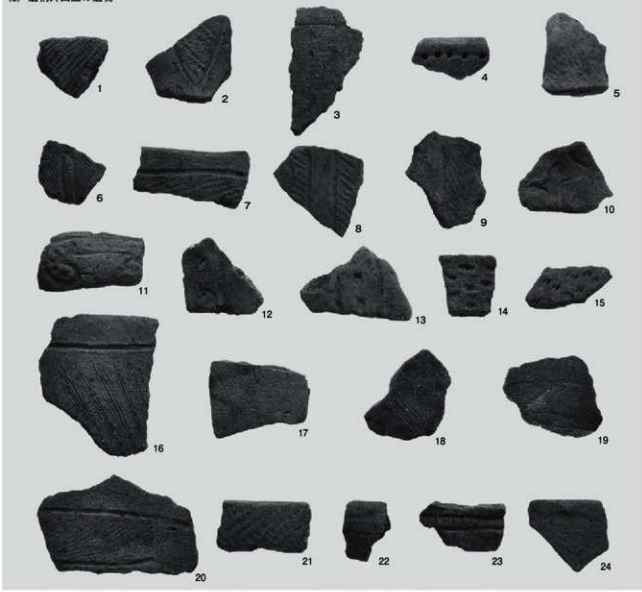
(1・2) 遺構外出土の遺物 (1)



(1・2) 遺構外出土の遺物 (2)

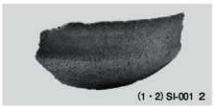


(3) 遺構外出土の遺物



図版28

(1・2) SI-001 1


(1・2) SI-001 2

(1・2) SI-001 3

(1・2) SI-001 4

(1・2) SI-001 5

(1・2) SI-001 6

(1・2) SI-001 7

(1・2) SI-001 8

(1・2) SI-001 9

(1・2) SI-001 10

(1・2) SI-001 11

(1・2) SI-001 12

(1・2) SI-001 13

(1・2) SI-002 1

(1・2) SI-002 2

(1・2) SI-002 3

(1・2) SI-002 4

(1・2) SI-002 5

(1・2) SI-002 6

(1・2) SI-002 7

(1・2) SI-003 1

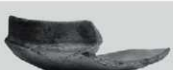
(1・2) SI-003 2

(1・2) SI-003 3

(1・2) SI-003 4

(1・2) SI-003 5

(1・2) SI-003 6


(1・2) SI-003 7

(1・2) SI-003 8

(1・2) SI-003 9

(1・2) SI-003 10

(1・2) SI-003 11

(1・2) SI-003 12

(1・2) SI-003 13

(1・2) SI-003 25

(1・2) SI-003 14

(1・2) SI-003 15

(1・2) SI-003 16

(1・2) SI-003 17

(1・2) SI-003 22

(1・2) SI-003 23

(1・2) SI-003 24

図版30

(1・2) SI-003 25

(1・2) SI-003 27

(1・2) SI-004 2

(1・2) SI-004 3

(1・2) SI-004 4

(1・2) SI-004 5

(1・2) SI-004 6

(1・2) SI-004 7

(1・2) SI-004 8

(1・2) SI-004 9

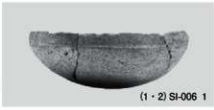
(1・2) SI-004 10

(1・2) SI-004 11

(1・2) SI-004 12

(1・2) SI-005 1

(1・2) SI-005 2

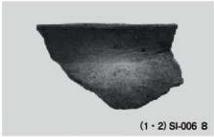

(1・2) SI-006 1

(1・2) SI-006 2

(1・2) SI-006 3

(1・2) SI-006 4

(1・2) SI-006 5


(1・2) SI-006 8

(1・2) SI-006 11

(1・2) SI-007 1

(1・2) SI-007 2

(1・2) SI-007 3

(1・2) SI-007 4

(1・2) SI-008・009 1

(1・2) SI-008・009 2

(1・2) SI-008・009 3

(1・2) SI-008・009 4

(1・2) SI-008・009 5

(1・2) SI-008・009 6

(1・2) SI-008・009 7

(1・2) SI-008・009 8

(1・2) SI-008・009 9

(1・2) SI-008・009 10

(1・2) SI-008・009 11

(1・2) SI-008・009 12

(1・2) SI-008・009 13

(1・2) SI-008・009 14

(1・2) SI-008・009 15

(1・2) SI-008・009 16

(1・2) SI-008・009 18

(1・2) SI-008・009 19

(1・2) SI-008・009 20

(1・2) SI-008・009 21

(1・2) SI-008・009 22

(1・2) SI-008・009 23

(1・2) SI-008・009 24

(1・2) SI-008・009 25

(1・2) SI-008・009 26

(1・2) SI-008・009 27

(1・2) SI-012 4

(1・2) SI-010 4

(1・2) SI-011 1

(1・2) SI-011 2

(1・2) SI-011 3

(1・2) SI-011 5

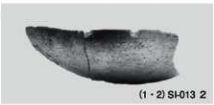
(1・2) SI-011 6

(1・2) SI-012 2

(1・2) SI-012 3

(1・2) SI-012 5

(1・2) SI-013 1


(1・2) SI-013 2

(1・2) SI-013 3

(1・2) SI-013 4

(1・2) SI-013 6

(1・2) SI-013 7

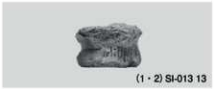
(1・2) SI-013 8

(1・2) SI-013 9

(1・2) SI-013 10

(1・2) SI-013 11

(1・2) SI-013 12


(1・2) SI-013 13

(1・2) SI-014 1

(1・2) SI-014 2

(1・2) SI-014 3

(1・2) SI-015 1

(1・2) SI-015 2

(1・2) SI-015 3

(1・2) SI-015 4

(1・2) SI-015 5

(1・2) SI-015 6

(1・2) SI-015 7

(1・2) SI-015 8

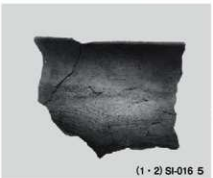
(1・2) SI-015 12

(1・2) SI-016 1

(1・2) SI-016 2

(1・2) SI-016 3

(1・2) SI-016 4


(1・2) SI-016 5

(1・2) SI-016 6

(1・2) SI-016 7

(1・2) SI-016 8

(1・2) SI-016 9

(1・2) SI-016 10

(1・2) SI-017 1

(1・2) SI-017 2

(1・2) SI-017 3

(1・2) SI-017 4

(1・2) SI-017 5

(1・2) SI-017 7

(1・2) SI-017 8

(1・2) SI-018 1

(1・2) SI-018 4

(1・2) SI-018 5

(1・2) SI-018 7

(1・2) SI-019 1

(1・2) SI-019 2

(1・2) SI-019 3

(1・2) SI-020 1

(1・2) SI-020 2

(1・2) SI-020 3

(1・2) SI-020 5

(1・2) SI-020 6

(1・2) SI-020 7

(1・2) SI-020 8

(1・2) SI-021 1

(1・2) SI-021 2

(1・2) SI-021 3

(1・2) SI-022 1

(1・2) SI-022 2

(1・2) SI-022 3

(1・2) SI-023 1

(1・2) SI-024 2

(1・2) SI-024 3

(1・2) SI-024 4

図版36

(1・2) SI-024 5
(1・2) 古墳遺構外 2
(1・2) 古墳遺構外 5
(1・2) SI-024 6
(1・2) 古墳遺構外 3
(1・2) 古墳遺構外 6
(1・2) 古墳遺構外 1
(1・2) 古墳遺構外 4
(1・2) 古墳遺構外 7
(1・2) SI-001
14
15
(1・2) SI-003
18
19
20
21
(1・2) SI-003
28
(1・2) SI-004
1
(1・2) SI-005
3
(1・2) SI-005
4
(1・2) SI-006
6
7
9
10
12
(1・2) SI-006
13
(1・2) SI-007
5
(1・2) SI-008・009
17
(1・2) SI-008・009
28
29
30
31
32
33

(1・2) SI-010

(1・2) SI-010

(1・2) SI-011

(1・2) SI-011

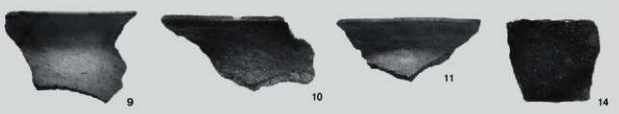
(1・2) SI-012

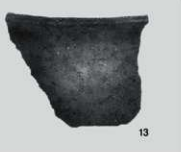
(1・2) SI-012

(1・2) SI-013

(1・2) SI-014

(1・2) SI-015





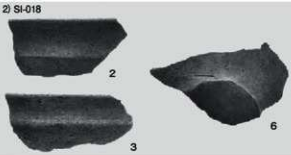
(1・2) SI-015

(1・2) SI-016

(1・2) SI-016

(1・2) SI-017

(1・2) SI-018



(1・2) SI-019

(1・2) SI-020

(1・2) SI-020

(1・2) SI-022

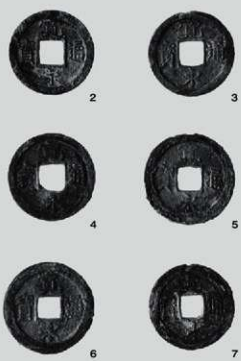
(1・2) SI-023

(1・2) SI-023

(1・2) SI-024

(1・2) SK-001

(1・2) SK-001



(1・2) 中・近世遺構外

(3) SI-001 1
(3) SI-001 2
(3) SI-001 3
(3) SI-001 4
(3) SI-001 5
(3) SI-001 6
(3) SI-001 7
(3) SI-001 8
(3) SI-002 1
(3) SI-002 2
(3) SI-002 3
(3) SI-002 4
(3) SI-002 5
(3) SI-002 6
(3) SI-002 7
(3) SI-002 8
(3) SI-002 9
(3) SI-002 10
(3) SI-002 11
(3) SI-002 12
(3) SI-002 13

(3) SI-002 14

(3) SI-002 15

(3) SI-002 16

(3) SI-002 17

(3) SI-002 18

(3) SI-002 19

(3) SI-002 20

(3) SI-002 21

(3) SI-002 22

(3) SI-002 23

(3) SI-002 24

(3) SI-002 25

(3) SI-002 26

(3) SI-002 27

(3) SI-002 28

(3) SI-002 29

(3) SI-002 30

(3) SI-002 31

(3) SI-002 32

(3) SI-002 33

(3) SI-002 34

(3) SI-002 35

(3) SI-003 2

(3) SI-003 3

(3) SI-003 4

(3) SI-003 5

(3) SI-003 6

(3) SI-003 7

(3) SI-003 8

(3) SI-003 9

(3) SI-003 11

(3) SI-003 12

(3) SI-003 13

(3) SI-004 1

(3) SI-004 2

(3) SI-004 3

(3) SI-004 4

(3) SI-005 1

(3) SI-005 2

(3) SI-005 3

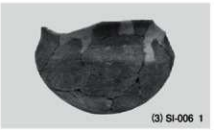
(3) SI-005 4

(3) SI-005 5

(3) SI-005 6

(3) SI-005 7

(3) SI-005 8


(3) SI-006 1

(3) SI-006 2

(3) SI-007 1

(3) SI-007 2

(3) SI-007 3

(3) SI-008 1

(3) SI-009 1

(3) SI-009 2

(3) SI-010 1

(3) SI-010 2

(3) SI-011 1

(3) SI-011 2

(3) SI-011 3

(3) SI-011 4

(3) SI-011 5

(3) SI-011 6

(3) SI-012 1

(3) SI-012 2

(3) SI-012 3

(3) SI-012 4

(3) SI-012 5

(3) SI-012 6

(3) SI-012 7

(3) SI-012 8

(3) SI-012 9

(3) SI-012 10

(3) SI-012 11

(3) SI-012 12

(3) SI-012 13

(3) SI-012 14

(3) SI-012 15

(3) SI-012 16

(3) SI-012 17

(3) SI-012 18

(3) SI-012 19

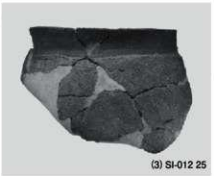
(3) SI-012 20

(3) SI-012 21

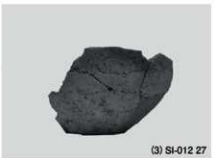
(3) SI-012 22

(3) SI-012 23

(3) SI-012 24


(3) SI-012 25

(3) SI-012 26


(3) SI-012 27

(3) SI-012 28

(3) SI-012 29

(3) SI-013 1

(3) SI-013 2

(3) SI-013 3

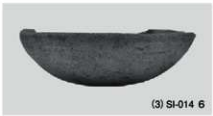
(3) SI-014 1

(3) SI-014 2

(3) SI-014 3

(3) SI-014 4

(3) SI-014 5


(3) SI-014 6

(3) SI-014 7

(3) SI-014 8

(3) SI-014 9

(3) SI-014 10

(3) SI-014 11

(3) SI-014 12

(3) SI-014 13

(3) SI-014 14

(3) SI-014 15

(3) SI-014 16

(3) SI-014 17

(3) SI-014 18

(3) SI-014 19

(3) SI-014 20

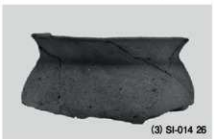
(3) SI-014 21

(3) SI-014 22

(3) SI-014 23

(3) SI-014 24

(3) SI-014 25


(3) SI-014 26

(3) SI-014 27

(3) SI-014 28

(3) SI-014 29

(3) SI-014 30

(3) SI-014 31

(3) SI-014 32

(3) SI-014 33

(3) SI-014 34

(3) SI-014 35

(3) SI-014 36

(3) SI-014 37

(3) SI-014 38

(3) SI-014 39

(3) SI-014 40

(3) SI-014 41

(3) SI-014 42

(3) SI-014 43

(3) SI-014 44

(3) SI-014 45

(3) SI-016 1

(3) SI-016 2

(3) SI-016 3

(3) SI-017 3

(3) SI-017 4

(3) SI-017 5

(3) SI-017 6

(3) SI-018 1

(3) SI-018 3

(3) SI-019 1

(3) SI-019 2

(3) SI-019 3

(3) SI-019 4

(3) SI-019 5

(3) SI-019 6

(3) SI-019 7

(3) SI-019 8

(3) SI-019 9

(3) SI-019 10

(3) SI-019 11

(3) SI-019 12

(3) SI-019 13

(3) SI-019 15

(3) SI-019 14

(3) SI-019 16

(3) SI-019 17

(3) SI-019 18

(3) SI-019 19

(3) SI-019 20

(3) SI-019 21

(3) SI-019 22

(3) SI-019 23

(3) SI-019 24

(3) SI-019 25

(3) SI-019 26

(3) SI-019 27

(3) SI-019 28

(3) SI-019 29

(3) SI-019 30

(3) SI-019 31

(3) SI-019 32

(3) SI-019 33

(3) SI-019 34

(3) SI-019 35

(3) SI-019 36

(3) SI-019 37

(3) SI-020 1

(3) SI-020 2

(3) SI-021 1

(3) SI-021 2

(3) SI-021 3

(3) SI-022 1

(3) SI-022 2

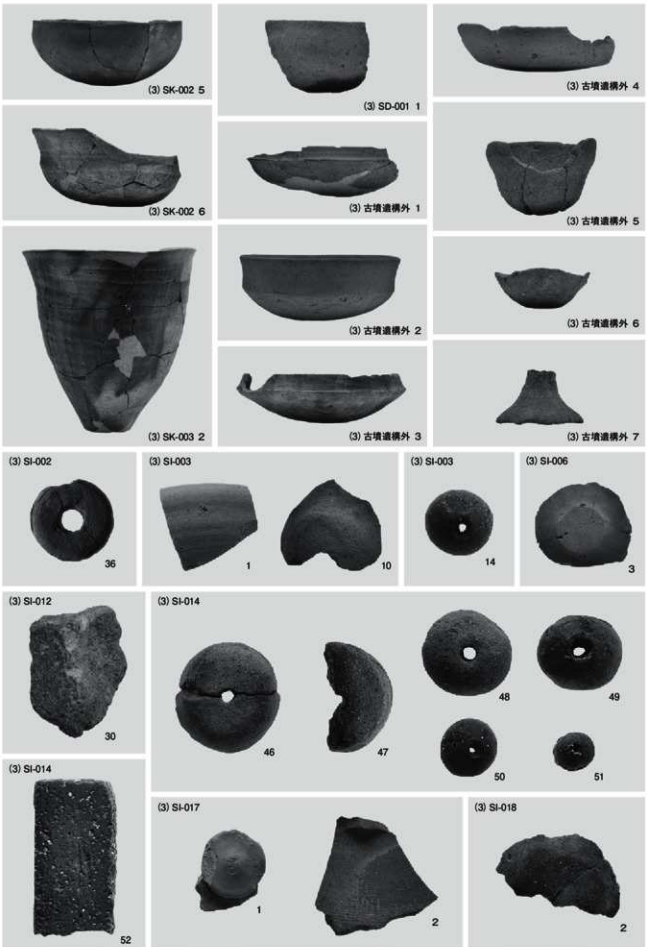
(3) SK-002 1

(3) SK-002 2

(3) SK-002 3

(3) SK-002 4

図版50


(3) SK-002 5
(3) SD-001 1
(3) 古墳遺構外 4
(3) SK-002 6
(3) 古墳遺構外 1
(3) 古墳遺構外 5
(3) SK-003 2
(3) 古墳遺構外 2
(3) 古墳遺構外 6
(3) 古墳遺構外 3
(3) 古墳遺構外 7
(3) SI-002
36
(3) SI-003
1
10
(3) SI-003
14
(3) SI-006
3
(3) SI-012
30
(3) SI-014
46
47
48
49
50
51
(3) SI-014
52
(3) SI-017
1
2
(3) SI-018
2

(3) SI-019

38

(3) SI-019

39

(3) SI-019

40

(3) SI-021

4

(3) SK-002

7 8

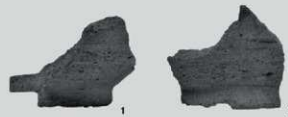
(3) SK-003

1

(3) SD-001

2

(3) SX-001



1 2 3

(3) SX-001

4

(3) 中・近世（参考）

6I-96

7I-20

6H-82

7H-76

7I-20

報告書抄録

ふりがな	なりたしくめとりでいせき
書名	成田市久米砦遺跡
巻次	
副書名	一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書4
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第42集
編著者名	武田 芳雅　小澤 政彦　村松 裕南　蜂屋 孝之
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260-8662　千葉県千葉市中央区市場町1-1　　TEL043-223-4129
発行年月日	西暦2023年2月7日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
久米砦遺跡（くめとりでいせき）	成田市久米字宮作（なりたしくめあざみやさく）194ほか 成田市久米字宮作（なりたしくめあざみやさく）200ほか	12211	100	35度47分20秒 世界測地系 WGS84	140度20分26秒	20171001～20180227 20180903～20181017 20181018～20190228	7,100㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久米砦遺跡	包蔵地 集落跡 城館跡	縄文時代	陥穴3基	縄文土器・石器	根木名川上流域の狭い台地上に、古墳時代後期を主体とする集落が展開していた点で注目される。
		古墳時代	竪穴住居跡46軒 土坑3基	土師器・須恵器・石製品・土製品・鉄製品	
		中・近世	溝状遺構3条 台地整形区画1か所 土壙墓1基	陶器・カワラケ・銭貨	

要約

本遺跡は、根木名川とその支流である取香川の合流点に挟まれた標高38ｍの台地上に位置している。縄文時代は陥穴3基が検出され、調査区内より前期中葉から後期中葉の土器が出土した。古墳時代は後期を中心に竪穴住居跡46軒、土坑3基が検出された。遺物は、5世紀末から6世紀末までの土師器を中心とし、須恵器を模倣した提瓶や坏などの土師器が出土している。中・近世は台地整形区画1か所と、溝跡3条、土壙墓1基を検出した。土壙墓からは人骨1体が出土した。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第42集

成田市久米砦遺跡

― 一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書４ ―

令和５年２月７日発行

編集・発行　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１

印　刷　株式会社白樺写真工芸
千葉市稲毛区山王町102-5